

原遺跡 第10・11次調査

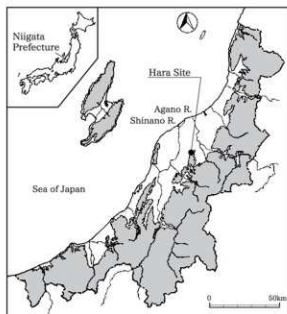
- 2018年度個人住宅建設に伴う原遺跡第2次発掘調査報告書 -
- 2020年度個人住宅建設に伴う原遺跡第1次発掘調査報告書 -

2023

新潟市教育委員会

はら 原遺跡 第10・11次調査

- 2018年度個人住宅建設に伴う原遺跡第2次発掘調査報告書 -
- 2020年度個人住宅建設に伴う原遺跡第1次発掘調査報告書 -



2023

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区程島字原 243 番地ほかに所在する原遺跡（新潟市遺跡番号 126）の発掘調査記録である。原遺跡第 10 次調査は平成 30 年度に、第 11 次調査は令和 2 年度に実施した。第 11 次調査の調査区は、第 10 次調査区の南に隣接する。
- 2 個人住宅建設に伴い、個人から新潟市が依頼を受け、新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 第 10 次調査は平成 30 年度に発掘調査と整理作業、令和元～3 年度に整理作業、第 11 次調査は令和 2 年に発掘調査と整理作業、令和 3 年度に整理作業、令和 4 年度に整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第 III 章に記した。
- 4 第 11 次調査の発掘調査、出土品ほかの整理作業の支援業務については、(株)吉田建設に、調査に伴う測量業務は、第 10・11 次調査ともに(株)オリスに委託した。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 6 本書の編集および遺構・遺物図版、遺構・遺物写真図版の作成は第 10 次調査は立木宏明（市文化財センター）が第 11 次調査は平山千尋・遠藤恭雄・高橋保雄（市文化財センター）、吉田 浩（(株)吉田建設）が行った。執筆分担は以下の通りである。
第 10 次調査の執筆は、第 VI 章第 2～8 節を除き立木が行った。なお、第 VI 章第 2～8 節については第 2 節 杉山真二氏（株）古環境研究所、第 3 節 金原正子氏（株）古環境研究所、第 4 節 高橋 敦氏（株）古環境研究所、第 5 節 金原美奈子氏（株）古環境研究所、第 6・8・9 節 竹原弘展氏・松田隆二氏（株）古環境研究所、第 7 節 松田隆二氏（株）古環境研究所による分析報告を編集して掲載した。
第 11 次調査の執筆は、第 I 章を遠藤・高橋、第 II 章を高橋・吉田、第 III 章第 1・2 節、第 IV 章第 2 節を平山、第 III 章第 3 節、第 IV 章第 1・3 節を高橋が行った。
- 7 第 II 章第 1・2 節を『中谷内遺跡発掘調査報告書 II』〔渡邊はるか 2002〕及び『菅免遺跡 第 2 次調査』〔立木はるか 2009〕、『細池寺道上遺跡 IX 第 50 次調査』〔立木・奈良・細野はるか 2019〕から引用・一部加筆した。
- 8 本書で用いた写真は、第 10 次調査遺跡写真は立木が撮影し、遺物写真は立木・山岡一貴（新潟市文化財センター）が撮影し、第 11 次調査遺跡写真は謙山えりか（歴史文化課）、吉田・長沼吉嗣（(株)吉田建設）が撮影し、遺物写真は吉田・山岡が撮影した。ただし、写真図版 1 は米軍（国土地理院発行）、写真図版 2・3 は(株)オリスが撮影したものを使用した。
- 9 遺物実測図のデジタルトレース及び DTP ソフトによる各種版下の作成は有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 10 今回の調査成果については、第 10 次調査は新潟市遺跡発掘調査速報会 2018〔立木 2019〕、第 11 次調査は同 2020〔速藤 2021〕で発表している。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 11 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。
阿部泰之・荒川隆史・石川日出志・石原正敏・伊藤秀和・小熊博史・長田友也・小澤清男・小林謙一・小林 克・酒井和男・坂井秀弥・田中耕作・寺崎裕助・土橋由理子・奈良貴史・野田豊文・古澤要史・増子正三・八木勝枝・宮尾 亨・渡邊裕之
新潟県教育庁文化行政課（令和 4 年度より観光文化スポーツ部文化課）・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は第10次(平成30年度)調査編と第11次(令和2年度)調査編からなる。章立ては調査年次ごとに行い、頁数及び図版、写真図版については通し番号とした。
- 2 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約8度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原因の作成者・作成年を示した。
- 4 本文中の注は各節の末尾に記した。本書で引用している文献については、著者名の50音順、同著者では発行年順にまとめて第11次調査第IV章の後に掲載したが、第10次調査第VI章のみに引用されている文献については、一覧の末尾に別個にまとめている。本文中では著者名と発行年(西暦)を〔 〕内に示した。
- 5 遺構番号は現場で付したものをを用いた。番号は遺構の種類ごとに付さず、調査年次ごとに通し番号とした。遺構種別は、以下の略称を用いて表した。
掘立柱建物(SB)、土坑(SK)、性格不明遺構(SX)、小土坑(Pit)
- 6 土層の土色及び遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』[小山・竹原 1967]を用いた。
- 7 遺物の注記は「原」とし、出土地点や層位を続けて記した。平成30・令和2年度出土遺物は遺跡名の前にそれぞれ層階の後半数字の「18・20」を付した。
- 8 遺構の記述は、調査年次ごとに、掘立柱建物(SB)、土坑(SK)、性格不明遺構(SX)、小土坑(Pit)の順に記し、同一調査区内の同種遺構については、想定時期の別にかかわらず、おおむね北から南へと順次記した。この順番は遺物の記述、別表、図面図版、写真図版に掲載した遺構・遺物の順番とおおむね対応する。
- 9 遺物番号は調査年次ごとに土器・陶磁器及び土製品・漆製品・アスファルトはまとめて通し番号とし、石器については1から通し番号を付し、その番号を本文及び観察表・遺物図版・写真図版に共通して用いた。
- 10 本文中の挿図に用いた地形図、遺構・遺物の縮尺は各図に示した。
- 11 遺構計測表・遺物観察表中における()付きの値は、推定値を意味する。
- 12 遺構の新旧関係を表現する際に「<」や「>」を用いた。例えば、SK1<SK2となる場合はSK1が古く、SK2が新しいことを示す。

目 次

第10次調査

第I章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	2
第II章 遺跡の位置と環境	4
第1節 遺跡の位置と地理的環境	4
第2節 周辺の遺跡	4
A 旧石器時代の遺跡	4
B 縄文時代の遺跡	6
1) 新津丘陵近隣の遺跡	6
2) 砂丘地の遺跡	6
C 弥生時代の遺跡	6
第III章 調査の概要	9
第1節 確認調査	9
第2節 本発掘調査	9
A 調査方法	9
1) グリッドの設定	9
2) 調査方法	11
B 調査経過	11
1) 平成30年度調査	11
2) 令和2年度調査	11
C 調査体制	12
第3節 整理作業	12
A 整理方法	12
1) 遺物	12
2) 遺構	12
B 整理経過	12
C 整理体制	13
第IV章 遺 跡	14
第1節 概 要	14
第2節 層 序	14
第3節 遺 構	15
A 遺構の概要	15
B 遺構各説	15

第V章 遺 物	22
第1節 土 器	22
A 概 要	22
B 記述の方法	22
C 分 類	22
D 土 器	24
第2節 土製品・漆製品・アスファルト	28
A 土 製 品	28
B アスファルト	29
C 漆 製 品	29
第3節 石器・石製品	29
A 概 要	29
B 分 類	29
C 石 器	30
第VI章 自然科学分析	34
第1節 概 要	34
第2節 プラントオパール(植物珪酸体)分析	35
A はじめに	35
B 試 料	35
C 分析 方法	35
D 分析 結果	35
1) 分 類 群	35
2) 植物珪酸体の検出状況	36
E 考 察	36
第3節 花粉分析	37
A はじめに	37
B 試 料	37
C 方 法	37
D 結 果	37
1) 分 類 群	37
2) 花粉群集の特徴	38
E 花粉分析から推定される植生と環境	38
F ま と め	38
第4節 樹種同定	39
A 試 料	39
B 方 法	39
C 結 果	39
D 考 察	39
第5節 種実同定	40
A 試 料	40
B 方 法	40
C 結 果	40
1) 分 類 群	40
2) 種実群集の特徴	41
D 考 察	43

第6節 リン・カルシウム分析	44
A はじめに	44
B 試料と方法	44
C 結 果	44
D 考 察	45
E ま と め	45
第7節 放射性炭素年代測定	45
A 試料と方法	45
B 結 果	46
1) ^{13}C 測定値	46
2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値	46
3) 暦 年 代 (Calendar Years)	46
C 所 見	46
第8節 黒曜石産地推定(蛍光X線分析法)	47
A はじめに	47
B 試料と方法	47
C 分析結果	48
D ま と め	48
第9節 原遺跡出土土器に含まれる透明鉱物の元素マッピング分析	49
A はじめに	49
B 試料と方法	49
C 分析結果	50
D 所 見	50
第七章 総 括	51
第1節 遺構について	51
第2節 遺物について	51
A 土器について	51
B 石器について	51
第3節 第10次調査の位置付け	53
別 表	54

挿 図 目 次

第1図 原遺跡周辺地形分類図	5	第10図 原遺跡の花粉	38
第2図 原遺跡周辺の遺跡分布図 (旧石器時代・縄文時代・弥生時代)	8	第11図 原遺跡の炭化材	40
第3図 原遺跡本発掘調査・確認調査位置図	10	第12図 原遺跡の炭化種実	43
第4図 第9次調査土層柱状図	10	第13図 プレス試料およびリンとカルシウムの元素 マッピング図	45
第5図 主要縄文土器分類図	23	第14図 年代測定試料写真	45
第6図 主要石器分類図	31	第15図 暦年較正結果	46
第7図 自然科学分析サンプル採取位置図	34	第16図 佐渡真光寺産黒曜石原石	47
第8図 原遺跡における植物珪酸体分析結果	36	第17図 黒曜石産地分布図(東日本)	48
第9図 原遺跡の植物珪酸体(プラント・オーバー)	36	第18図 黒曜石産地推定判別図(1)	49

第19図 黒曜石産地推定判別図(2)	49	第21図 土器に含まれる透明鉱物の 元素マッピング図	50
第20図 透明鉱物の蛍光X線スペクトル	50	第22図 第10次調査出土玉髄原石	52

表 目 次

第1表 原遺跡調査履歴	2	第10表 分析対象試料	44
第2表 原遺跡周辺の旧石器～弥生時代遺跡一覧表	7	第11表 半定量分析結果 (mass%)	44
第3表 遺物出土トレンチ	10	第12表 測定試料及び処理	45
第4表 原遺跡第10次調査自然科学分析試料一覧表	34	第13表 測定結果	46
第5表 原遺跡における植物珪酸体分析結果	36	第14表 分析対象となる黒曜石製石器	47
第6表 原遺跡における花粉分析結果	38	第15表 測定値及び産地推定結果	48
第7表 樹種同定結果	39	第16表 佐渡真光寺の黒曜石原石の測定値	48
第8表 試料一覧	40	第17表 東日本黒曜石産地の判別群	49
第9表 種実同定結果	43	第18表 分析対象	50

別 表 目 次

別表1 第10次調査 遺構計測表	54	別表6 調査別石器組成表	63
別表2 第10次調査 土器観察表	55	別表7 第10次調査 石器組成と石材組成	63
別表3 第10次調査 土製品・漆製品・アスファルト 観察表	60	別表8 第10次調査 石器実測点数表	63
別表4 第10次調査 石器観察表	61	別表9 調査別礫・焼礫点数量表	64
別表5 第10次調査 遺構出土石器器種別・ 搬入礫組成表	62	別表10 第10次調査 遺構出土石器石材組成表	64

図 版 目 次

図版1 周辺の旧地形図 (1/50,000)	図版12 出土遺物分布図 (1/300)
図版2 本発掘調査位置図 (1/25,000)	図版13 土器1
図版3 本発掘調査位置図 (1/10,000)	図版14 土器2
図版4 グリッド設定図 (1/5,000)	図版15 土器3
図版5 グリッド設定図 (1/2,500)	図版16 土器4
図版6 遺構全体図 (1/100)	図版17 土器5
図版7 基本層序 (1/40)	図版18 土器6
図版8 遺構実測図1 (1/40) SK50・2・1・4・8・ 38・51・15・SX28	図版19 土器7・土製品・漆製品・アスファルト
図版9 遺構実測図2 (1/40) SK27・49・36・34・ 42・20・10・30・43・Pit33・47・46・11	図版20 石器1
図版10 遺構実測図3 (1/40・1/80) SK44・38・49・ 45・SX28・Pit24・5・6・7・3・9・48・16・ 22・12	図版21 石器2
図版11 遺構実測図4 (1/40) Pit13・23・18・19・ 24・25・17・14・21・35・37・41・31・32・ 39・40・29・26	図版22 石器3
	図版23 石器4
	図版24 石器5
	図版25 石器6
	図版26 石器7

写真図版目次

写真図版 1	原遺跡周辺空中写真 1	写真図版 9	Pit33・SK34 土層断面② (南→北)
写真図版 2	原遺跡周辺空中写真 2		Pit33・SK34 完掘状況 (南→北)
写真図版 3	原遺跡周辺空中写真 3 (北東→南西)		SK42・Pit47・Pit46 土層断面③ (北西→南東)
	原遺跡周辺空中写真 4 (北→南)		SK42・Pit47・Pit46 完掘状況 (北西→南東)
写真図版 4	完掘空中写真 1 (北東→南西)		SK20 土層断面④ (南東→北西)
	完掘空中写真 2 (北西が上)		SK20 完掘状況 (南東→北西)
写真図版 5	基本層序 A (南東→北西)		SK10・Pit11 完掘状況⑤ (南西→北東)
	基本層序 B (南東→北西)		SK30 完掘状況⑥ (南東→北西)
	基本層序 C (南東→北西)	写真図版 10	SK43 土層断面⑦ (南東→北西)
	基本層序 D (北東→南西)		SK43 完掘状況 (南東→北西)
	基本層序 E (東→西)		SK44 土層断面⑧ (北東→南西)
	基本層序 F (南西→北東)		SK44 土層断面⑨ (北東→南西)
	SK50 土層断面① (南西→北東)		SK44 土層断面下層⑩ (北東→南西)
	SK50 完掘状況 (南西→北東)		SK44 完掘状況 (北東→南西)
写真図版 6	SK2 土層断面② (南→北)		SK45 土層断面⑪ (北西→南東)
	SK2 完掘状況 (南→北)		SK45 完掘状況 (北西→南東)
	SK1 検出状況 (北東→南西)	写真図版 11	磨製石斧出土状況 (北西→南東)
	SK1 土層断面③ (北→南)		磨製石斧出土状況 (北東→南西)
	SK1 完掘状況 (北→南)		磨製石斧出土状況 (北→南)
	SK4 土層断面④ (南東→北西)		縄文土器出土状況 (北東→南西)
	SK4 完掘状況 (南東→北西)		縄文土器出土状況 (北東→南西)
	SK8 土層断面⑤ A (南東→北西)		縄文土器出土状況 (南西→北東)
写真図版 7	SK8 土層断面⑤ B (南西→北東)		調査風景 (北西→南東)
	SK8 完掘状況 (南西→北東)		調査風景 (南東→北西)
	SK38・SX28 土層断面⑥ A (北東→南西)	写真図版 12	土器 1
	SX28・SK38 土層断面⑥ B (南東→北西)	写真図版 13	土器 2
	SK38 完掘状況 (北東→南西)	写真図版 14	土器 3
	SX28 土層断面⑥ C (南西→北東)	写真図版 15	土器 4
	SX28 完掘状況 (北東→南西)	写真図版 16	土器 5
	SK51 完掘状況⑦ (南西→北東)	写真図版 17	土製品・漆製品・アスファルト
写真図版 8	SK15 土層断面⑧ (南東→北西)	写真図版 18	石器 1
	SK15 完掘状況 (南東→北西)	写真図版 19	石器 2
	SK27 土層断面⑨ (南東→北西)	写真図版 20	石器 3
	SK27 完掘状況 (南東→北西)	写真図版 21	石器 4
	SK49 土層断面⑩ (南東→北西)	写真図版 22	石器 5
	SK49 完掘状況 (南東→北西)	写真図版 23	石器 6
	SK36 土層断面⑪ (南東→北西)		
	SK36 完掘状況 (南東→北西)		

第11次調査

第I章 調査の概要	65
第1節 はじめに	65
第2節 調査の概要	65
第II章 遺跡	66
第1節 基本層序	66
第2節 遺構	66
1) 遺構の概要	66
2) 遺構各説	66
第III章 遺物	71
第1節 縄文土器	71
1) 概要	71
2) 記述の方法	71
3) 分類	71
4) 土器各説	71
第2節 土製品	75
第3節 石器・石製品	76
1) 概要	76
2) 石器・石製品各説	76
第IV章 総括	78
第1節 遺構について	78
第2節 縄文土器について	78
第3節 石器について	79
別表	80
引用・参考文献	84
抄録・奥付	巻末

挿図目次

第23図 遺構の平面形態と断面形態の分類 …………… 66

表目次

第19表 第11次調査

遺構別・器種別 石器・石製品出土数 …………… 76

別表目次

別表11 第11次調査 遺構観察表 …………… 80

別表13 第11次調査 土製品観察表 …………… 82

別表12 第11次調査 土器観察表 …………… 81

別表14 第11次調査 石器・石製品観察表 …………… 83

図版目次

図版27 第10次(2018年度)・第11次(2020年度)調査の遺構全体図(1/150)

図版31 第11次調査遺構実測図(1/40)

図版28 第11次調査遺構全体図(1/100)

図版32 土器1

図版29 第11次調査基本層序位置図(1/500)、基本層序

図版33 土器2・土製品

図(1/40)、遺構実測図(1/40・1/50)

図版34 石器1

図版30 第11次調査遺構実測図(1/40)

図版35 石器2・石製品

写真図版目次

写真図版24 第11次調査 遠景写真・完撮全景写真

写真図版30 個別遺構写真6

写真図版25 着手前近景写真・基本層序・個別遺構写真1

写真図版31 土器1

写真図版26 個別遺構写真2

写真図版32 土器2・土製品

写真図版27 個別遺構写真3

写真図版33 石器1

写真図版28 個別遺構写真4

写真図版34 石器2・石製品

写真図版29 個別遺構写真5

原遺跡 第10次調査

第I章 序 章

第1節 遺跡概観(第1表)

原遺跡は新潟県新潟市秋葉(あきは)区程島(ほどじま)字原(はら)243番地ほかに所在する。明治29(1896)年に犬塚又兵が報告し〔犬塚1896〕、学史的にも新潟市内の先史時代の代表的な遺跡として知られるようになった。同遺跡は、当時の先史時代と考えられる遺跡を網羅した1897年(明治30年)発行の東京帝国大学人類学教室発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』に前報告を引用し掲載されている〔東京帝国大学1897〕。その後、1930年(昭和5年)発行の『日本石器時代遺物発見地名表』(増補改訂第5版)まで5回改訂されているが、遺跡名としてはすべて掲載されている〔東京帝国大学1898・1901・1918・1928・1930〕。また、1910～20年代に『越後古代史之研究』〔池田1925〕・『中蒲原郡史』〔片桐1918〕が記され、原遺跡が紹介されている。遺跡は周辺にも知られ、地元を中心に相当遺物が採集されてきた。

原遺跡を考古遺跡として取り上げたのは、関雅之氏による『新津郷土誌』上での報告である(図1979a・b)。「新津市における考古遺跡と遺物について」の題名で2回報告されている。第1回報告は、当時の新津市の考古学史を紐解かれ、低湿地遺跡の調査の不十分さを指摘されている。また、当時知られていた市内の24遺跡が紹介され、その中で原遺跡は明治時代から知られた大規模な縄文時代の遺跡として紹介されている(図1979a)。2回目の報告では、原遺跡が1975年(昭和50年)に大規模な団地造成が行われ、丘陵全体で削平されて、遺跡の一部は遺跡調査が行われず、消滅した事実が報告されている(図1979b)。また、採集された遺物の一部が掲載されている。縄文土器から導かれる時期は、縄文時代中期前半から中葉、後期初頭・中葉・後半の土器が紹介され縄文時代中期初頭から後期後半までの長期にわたる複合遺跡として紹介されている。また、「縄文を地文として沈線と列点文を組み合わせた薄手の土器が四片あったが、従来の知見に接しない一群のため、検討した上で紹介したい。この土器は古式弥生に属すると考えている。」として弥生時代の土器の存在の可能性を指摘している。関雅之氏の一連の報告は、当時の新津市の遺跡を考古学の実資料(縄文土器の実測図)で客観的に紹介し、原遺跡の重要性を広く知らしめた貴重な報文である。1989年には『新津市史』資料編第一巻が刊行され、当時知られていた新津市の遺跡が紹介されている〔川上1989〕。その中で原遺跡は、縄文時代中期(前半・中葉)・後期(前葉・前半)の土器と石器(石鏃・石錐・不定形石器)と土製品(土偶)、石製品(石棒)が実測図・写真とともに掲載された。また、1993年の『新津市史』通史編上巻に原遺跡は縄文時代中期から後期初頭にかけての大規模遺跡として紹介されている〔川上1993〕。1996年に石原正敏氏と木村祐治氏による原遺跡採集の「耳形土製品」が紹介されている〔石原・木村1996〕。「耳形土製品」は東北地方(首森・岩手・宮城県)に分布する特殊な土製品で、現状で新潟県内では唯一の出土品である。分布や用途について考察されている。2007年には新潟市秋葉区の代表的な遺跡として取り上げられた〔新潟市2007〕。

今年度までの本発掘・確認調査の調査回数は第1表のとおりである。その中で、2013・2014年度に神社建築に伴い確認調査(第7・8次調査)を実施し、その成果が報告されている〔前山2016〕。従来、縄文時代中期前葉から後期中葉の遺跡と目されてきたが、後期後葉から晩期中葉の土器が出土し、遺跡の時期幅が拡大した。また、アスファルト付着土器が複数出土したことなどが注目される。

第2節 発掘調査に至る経緯

平成29年11月13日に個人住宅建設に伴う遺跡の有無を確認する照会が市歴史文化課に対し事業者（施主・代理人）により行われた。周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するため、確認調査が必要と回答した。平成29年12月12日付で埋蔵文化財の事前調査（確認調査）について（依頼）が提出された。これを受けて、市教委教育長から新潟県教育委員会（以下、「県教委」という）教育長宛てに、平成29年12月18日付け文化財保護法第99条第1項による発掘調査の通知を提出し、確認調査（第9次調査）を実施した。調査終了後、平成29年12月25日付け新歴B第236号の3で市教委教育長から県教委教育長宛てに終了報告を提出した。確認調査の結果、地表下20～30cm前後で遺物包含層が検出され、縄文時代後・晩期の土器、石器が多数出土した。また、遺構もピット・土坑を中心に多数検出された。これを受けて、平成29年12月に事業者（施主・代理人）と協議を行い、新潟県の「発掘調査の要否の判断基準」をもとに遺跡が保護できない部分について①事前の本発掘調査が必要であること。②現況で地盤の切下げ部分は本発掘調査が必要になること。③住宅部分については狭小な布基礎であれば本発掘調査が不要で工事立会となること。等を伝えた。平成29年12月26日に文化財保護法第93条第1項の届出の提出を受け、平成30年3月7日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を事業者に対し通知し、駐車場用地については遺跡の現状保存が出来ないことから本発掘調査を行うこととし、住宅基礎工事に係る掘削は掘削幅が狭小なため工事立会とした。

駐車場用地造成に先立ち、平成30年4月27日付けで事業者から調査依頼が提出された。これを受け、平成30年5月15日付けで文化財保護法99条第1項による発掘調査の通知を市教委教育長から県教委教育長に提出し、本発掘調査（第10次調査）に着手した。調査終了後、平成30年8月29日付け新歴F第23号の3で終

第1表 原遺跡調査履歴

調査年度 調査内容 調査種別	2020年度 個人住宅建設 に伴う発掘 調査内容	調査年次	調査種別	調査理由	調査 主体	担当	調査面積 (㎡) 延 床面積	3D-Scan No.	支那	備考
1		H17 (2005) 年 2・17	確認調査	集合住宅建設	新潟市	新潟市教育委員会 成澤昭雄	9.00㎡ (383.00㎡)	1・2T		遺構・遺物は検出されなかった。
2		H21 (2009) 年 1・26	確認調査	集合住宅建設	新潟市	新潟市埋蔵文化財センター 松本幸司	2.50㎡ (290.00㎡)	1T		遺構・遺物は検出されなかった。
3		H21 (2009) 年 5・25	確認調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市埋蔵文化財センター 関口和寿	3.00㎡ (264.43㎡)	1・2T		遺構・遺物は検出されなかった。
4		H22 (2010) 年 2・19	確認調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市歴史文化課 成野祥浩	17.00㎡ (427.85)	1T		遺物包含層から縄文土器13点、石器7点、数珠の 遺物が出土した。遺構は検出されなかった。
5		H22 (2010) 年 7・13	確認調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市歴史文化課 成野祥浩	1.20㎡ (352.30㎡)	1T		遺構・遺物は検出されなかった。
6		H24 (2012) 年 8・22	確認調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市歴史文化課 成野祥浩	2.80㎡ (471.00㎡)	1・2T		遺構・遺物は検出されなかった。
7		H25 (2012) 年 11・25～11・27	確認調査	神社建築	新潟市	新潟市歴史文化課 岡田政信	23.25㎡ (1736.01㎡)		(前出2016)	遺構はピット7箇所を抽出した。遺物は縄文時代晩 期の土器がほとんどであった。原遺跡における 縄文時代晩期土器の出土は別の事例となった。
8		H26 (2014) 年 4・21～4・25	確認調査	神社維持に に伴う切土	新潟市	新潟市歴史文化課 岡田政信	67.44㎡ (1736.01㎡)		(前出2016)	土器4点、ビッド1基、地盤1層以上の遺物を抽出 した。遺物は炭素、燧石の縄文土器が主体を占め、 中絶が少量含まれる。石器は石丸末成土、磨石、 石器等が出土した。
9	1	H29 (2017) 年 12・25	確認調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市歴史文化課 藤田幸彦	38.30㎡ (429.78㎡)	1～4T		近辺に土器類が40軒すべてから遺物・遺構の発 見された。遺構は1基、ピット等が相次ぎ検出され た。遺物は縄文土器470点、石器15点、粘土陶 器1点、アズアカムシなどが出土した。
10	2	H30 (2018) 年 6・1～7・31	本発掘調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市埋蔵文化財センター 松本幸司	177.43㎡ (429.78㎡)		(本府)	土坑7基(最深10m程度)、竪穴不明遺構1基、ピット 31基の遺構を検出した。遺物は炭素を主体と する縄文土器(中期～晩期)が多数に出土した。燧 石や土器も出土した。石器は、石器、磨製石斧 等が出土した。主要品として、近畿系土器が出土 したことが特徴とされた。
11		R2 (2020) 年 5・20～7・30	本発掘調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市歴史文化課 藤田幸彦	210.00㎡ (210.00㎡)		(本府)	地盤土層より土坑、竪穴等、37基の遺構を検出した。 遺構は中絶から晩期の縄文土器が出土した。磨製 石斧を主体とする。石器類は、石器、磨製石斧等 が出土した。主要品として、近畿系土器が出土し たことが特徴とされた。
12		R2 (2020) 年 6・3	確認調査	個人住宅建設	新潟市	新潟市歴史文化課 成野祥浩	16.53㎡ (258.86㎡)	1・2T		竹器不明遺構1基、ピット1基を検出した。また、 遺物包含層等から縄文土器(中期以降)が1点出 た。
13		R3 (2021) 年 9・7～8	確認調査	土地売買	新潟市	新潟市歴史文化課 松田拓哉	25.4㎡ (637.18㎡)	1～3T		遺構は、竹器不明遺構1基、ピット1基を検出した。 遺物包含層・遺物層から縄文土器が出土した。 石器は磨製石斧、石斧、磨製石などが出土して いる。

了報告を市教委教育長から県教委教育長に提出している。最終的な調査面積は、上端面積 177.43m²、下端面積 143.20m²である。

なお、住宅の基礎工事については、本発掘調査に先立つ平成 30 年 3 月に工事立会を実施し、掘削時に生じた出土遺物の採集に努めるとともに、掘削断面の観察・図面作成、写真撮影を行い記録として保存した。

第 11 次調査は個人住宅建設に先立ち、令和 2 年 2 月 30 日付けで事業者より調査依頼が提出された。これを受け、令和 2 年 5 月 19 日付けで文化財保護法 99 条第 1 項による発掘調査の通知を市教委教育長から県教委教育長に提出し、本発掘調査（第 11 次調査）に着手した。なお、新潟市の事務分掌では、開発事前審査、試掘・確認調査を歴史文化課埋蔵文化財担当が、本発掘調査を文化財センターが行うこととしている。しかし、令和 2 年度は本調査や史跡保存目的確認調査が重複し、文化財センターから調査担当職員を出すことができなかったため、歴史文化課埋蔵文化財担当より応援を得て実施した（第 III 章第 2 節 C 調査体制参照）。調査終了後、令和 2 年 8 月 31 日付け新歴 F 第 20 号の 2 で終了報告を市教委教育長から県教委教育長に提出している。最終的な調査面積は、上端面積 213.31m²、下端面積 200.49m²である。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 (第1図、図版1)

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置している。越後平野は海岸部の砂丘地帯、南西側の角田・弥彦山塊、南東側の新津丘陵に囲まれており、阿賀野川と信濃川などの大小の河川によって形成された沖積平野である。越後平野の西側の信濃川・阿賀野川の蛇行帯や、中央部の信濃川の支流の中之口川の蛇行帯には、自然堤防が発達しており、自然堤防に囲まれた後背湿地が広く分布する。これらの後背湿地には低い部分に湛水して大潟・田潟・鰐潟・田ノ潟・乳ノ潟・六字潟・佐潟・御手洗潟などの潟湖を形成した。内陸には日本海の砂丘列が沖積世以降に形成され、内陸から新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに大別され、さらにそれぞれ4列・4列・2列に細分されている〔新潟古砂丘グループ1974〕。

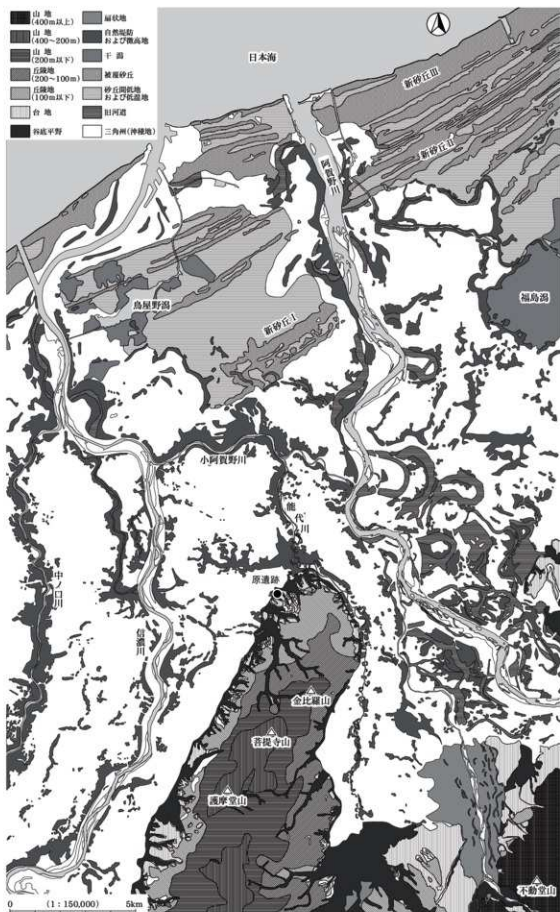
遺跡のある新津丘陵とは、南限を加茂市の加茂川とする丘陵〔鈴木郁夫1989、鈴木浩平1993〕である。新津丘陵の最高峰には高立山(標高276m)があり、全体的に南西から北東に向かって標高が低下する。北端の秋葉山付近では標高70～80mとなっている。地質的には菩提寺山から北は中新世(2,300万～500万年前)の砂岩・泥岩の互層、砂岩礫泥岩、泥岩、礫岩などの堆積岩から形成されている。一方、菩提寺南側は安山岩などの火山岩を主体としており、菩提寺山を境に地質が異なっている。また、新津丘陵は明治時代から石油産地としても知られ、「新津油田」と呼称されている。明治7(1874)年から平成8(1996)年まで操業が継続した近現代の石油資源・精製に関わる施設群は「史跡新津油田金津鉱場跡」として新規登録されている。油田に伴う天然アスファルトが産出し、縄文時代から使用されている。遺跡から5km南下した大沢谷内遺跡〔細野・伊比2012〕では、縄文時代晩期中葉のアスファルト関連資料が多数出土している。

第2節 周辺の遺跡 (第2図、第2表)

新津丘陵を中心とする、周辺の旧石器・縄文・弥生時代の遺跡分布を第2図・第2表に示す。時代別の分布をみると旧石器・縄文時代は丘陵及び段丘の縁辺、砂丘地上・沖積地の自然堤防上に分布する。近年、沖積地・砂丘地での試掘調査により、これまで深層に埋没して発見が容易ではなかった埋没砂丘上の遺跡や深い深度の遺跡の発見が相次いでいる。新津丘陵及び周辺の砂丘上の遺跡を中心に記述する。

A 旧石器時代の遺跡

旧石器時代の遺跡は新津丘陵沿いに4遺跡確認されている。丘陵北端の秋葉遺跡(60)から石刃が出土している〔前山2014〕。草水町2丁目窓跡(80)からは、いわゆる、東山型ナイフ形石器・石刃が出土している〔新潟市国際文化歴史文化課2007〕。古津八幡山遺跡からは、単発的に切出型のナイフ形石器が出土している〔渡邊・立木2001・2004、相田・渡邊2014〕。田上町塚野遺跡(102)から基部調整のナイフ形石器(金谷原型)・石器・石刃が採集されている〔田中1989〕。この中で、比較的まとまった石器群は、遺物が少量ながら東山型ナイフ形石器と石刃が出土した草水町2丁目窓跡である。新津丘陵沿いに点々と旧石器時代の遺跡が確認されている。平野部では遺跡は確認されていないが、30,000年前後の年代値の始良・丹沢テフラ(AT)の降灰層が西区黒崎の地下120m下で確認されており〔鴨井2018〕、丘陵から平野にかけて緩やかに傾斜した地形が考えられる。踏査や発掘調査深度が及ばない地下深くに遺跡が多く埋没している可能性が高い。



第1図 原遺跡周辺地形分類図

B 縄文時代の遺跡

1) 新津丘陵近隣の遺跡

縄文時代草創期の遺跡は、新津丘陵にある愛宕澤遺跡(81)から縄文時代草創期の局部磨製石斧や片刃石斧、石核、敲石が出土している〔立木・澤野ほか2004〕。古津八幡山遺跡(75)から草創期前半の柳葉型尖頭器の先端部が出土している〔渡邊・立木ほか2001〕。続く縄文時代早期の遺跡は現状では確認されていない。縄文時代前期の遺跡は、居村C遺跡E地点(78)から前期前葉の布目式の土器が確認されている〔渡邊・小田・上沼1997〕。また、草水町2丁目窯跡(80)〔新潟市国際文化部歴史文化課2007〕及び程島館跡(61)〔相澤2018〕から前期末葉の土器が出土している。丘陵東側の平遺跡(83)から中期初頭～前葉、後期初頭～中葉の土器が出土している〔川上・遠藤1983、前山ほか2023〕。丘陵東側の原遺跡(65)から中期前半から晩期後葉までの土器が出土している〔前山2016、本書〕。丘陵先端から北東に約1kmの地点に大野中遺跡(58)が所在する〔前山2018〕。中期前葉～中葉、中期終末～後期前葉の土器が出土している。丘陵先端の秋葉遺跡(60)〔前山2014、今井ほか2021〕では中期前葉～後葉、後期前葉の土器が出土している。中期中葉の火焰型系土器や東北地方北部に分布する円筒上層d式土器が出土しているのが注目される。大野中遺跡は、地下2mから確認されており、「神植地埋没型」の遺跡〔寺崎2002〕として注目される。丘陵東側の麓端から1kmの場所に五泉市巳ノ明遺跡(194)が所在する〔山崎ほか2004b〕。能代川の自然堤防に立地する遺跡である。隣接する寛下遺跡(192)〔山崎ほか2004a〕は丘陵から西に0.5kmにあり、晩期中葉後半の土器が出土している。丘陵西側の麓端から1km西側の神植地に大沢谷内北遺跡(91)〔前山・伊比ほか2014〕、大沢谷内遺跡(92)〔細野・伊比ほか2012、遠藤・澤野ほか2018、相田・八藤後ほか2020〕が所在する。大沢谷内北遺跡は晩期中葉後半、大沢谷内遺跡は晩期中葉～後葉の遺跡である。この2遺跡は隣接し、同一遺跡群とみなしてよい位置関係にある。縄文時代晩期を通じて、旧潟湖周辺の水場近隣の微高地に断続的に住み続けている。新津丘陵西麓に産出する天然アスファルトを原料とし精製し、アスファルト原産地遺跡と目される。また、トゲウオ科、サケ科などの動物骨、ヒシの実など水域動植物資源の出土など、当時の動物・植物資源の採集を目的とする集落でもあった。後述するが、同時期の丘陵上の原遺跡(65)とは密接な関係にあると考えられる。田上町保明浦遺跡(105)〔田畑1993・1996・2003・2004〕は同じく晩期後葉の大規模な遺跡である。丘陵から東に1kmの神植地の微高地上に営まれた集落遺跡である。

2) 砂丘地の遺跡

近年、丘陵先端から北に10km圏内の新砂丘1-2〔鴨井・田中・安井2006〕に相当する砂丘上(通称 亀田砂丘前列)からの遺跡の発見が相次いでいる。現在確認されている古期の遺跡は、砂崩遺跡(42)である。前期前葉の布目式の土器が出土している〔酒井・廣野2002〕。砂崩遺跡では、中期前葉の北陸の新保・新崎式併行の土器群が出土している〔前山2015〕。隣接する砂崩前遺跡(43)からは、中期前葉と後葉、後期前葉～後葉、晩期前葉～後葉の土器と石器、遮光器土偶など注目される遺物が出土しており、遺物量は各時期ともに少量であるが、断続的に遺跡が利用されている砂丘地の小規模遺跡の様相を示している〔遠藤・重留・澤野ほか2020〕。新砂丘1-2には西郷遺跡(54)があり、地下3m下から晩期末葉の遺跡が確認されている〔土橋ほか2009〕。また、近年、新砂丘1-2の北西端に近い部分に岡崎遺跡(57)が確認され、中期前半の土器が出土している〔高橋2021〕。また、隣接する道正遺跡(56)からは、中期前半、晩期中～後葉の土器が出土している〔立木2020、高橋2021〕。新津丘陵の遺跡と砂丘地の遺跡間での交流関係が考慮される。

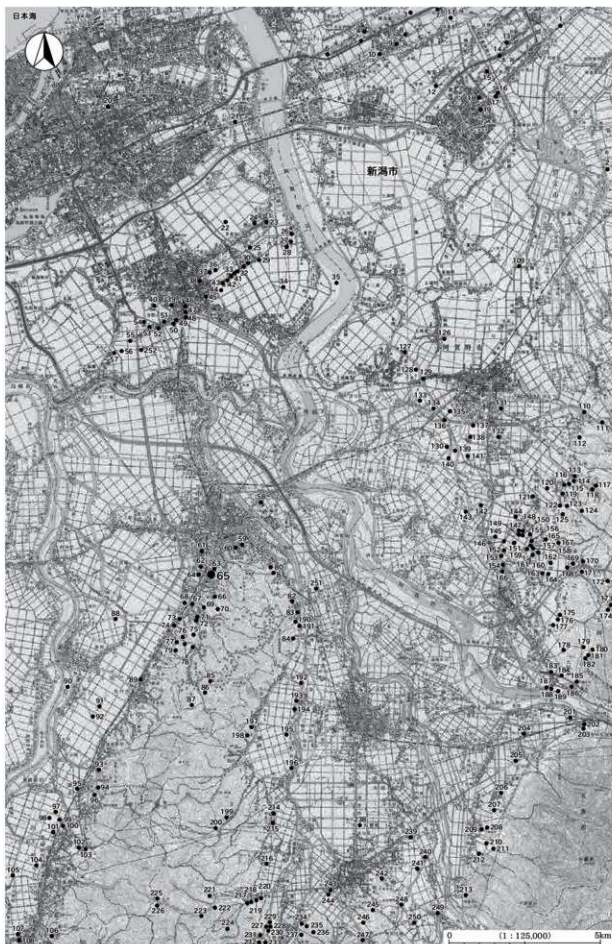
C 弥生時代の遺跡

丘陵周辺では、原遺跡(65)〔本書〕から、前期竪立式の土器が出土し、現状では新津丘陵最古の弥生時代の遺跡である。丘陵先端の秋葉遺跡(60)において、弥生時代中期前葉の土器が1点確認されている〔渡邊・立木ほか2004〕。丘陵西側では高地性集落の古津八幡山遺跡(75)が展開している〔渡邊・立木ほか2001・2004、相田・渡

遺跡は2014)。後期初頭から終末期までの土器が出土しており、後期前半では東北南部系の天王山式系土器を中心に出土し、終末期の八幡山4期の在地折衷型土器は、「八幡山式」として型式設定されている。丘陵西側の裾の沖積地にある舟戸遺跡(68)(相田2015、金田2017)からは、少量ではあるが、中期後半と後期前半、後期終末期の土器が出土している。古津八幡山遺跡との関係が着目される。砂丘地の遺跡では、新砂丘I-2の砂丘間低地に所在する西郷遺跡(54)がある。前期～中期後葉までの遺物が出土している。多数の土器は弥生土器の編年研究に寄与しただけでなく、地中深くに埋没していたため、動物・植物遺体が多数出土し、弥生時代の食性的一端が明らかになった。さらに石器・石製品・土製品など豊富な資料が検出され、足形土版など類例の少ない遺物も出土している。

第2表 原遺跡周辺の旧石器～弥生時代遺跡一覧表

No.	名称	種・時代	No.	名称	種・時代	No.	名称	種・時代	No.	名称	種・時代
1	馬場塚	縄・古墳・平	64	田山	縄	127	山田	縄	190	小宮山	縄・古墳・古
2	菅原	縄・古・古墳・古代・中世	65	田山	縄	128	大森山田	縄・平・中世・近世	191	野野山	縄
3	塚山C	縄	66	平林	縄	129	津江久保	縄・古代	192	野野山	縄・古・古墳・平・中世・近世
4	穂ノ久A	縄	67	塩平	縄・古墳・古代・中世	130	石巻石原	縄・中世・近世	193	新田	縄
5	穂ノ久B	縄	68	舟戸	縄・古墳・古代	131	下谷田	縄・古墳・中世	194	巨ノ嶋	縄
6	穂ノ久C	縄	69	森田	縄・古墳・平・中世	132	久保湯	縄・平	195	五百鳥	縄
7	引堀	縄	70	山堀	縄・古・江	133	山口	縄・古代・鎌・室	196	古田東	縄・古・古代・中世・近世
8	九やしき	縄・古墳・鎌・室	71	高友A	縄	134	山内野中	縄・平・鎌・室	197	赤坂	縄
9	本陣塚	縄	72	高友B	縄	135	二道橋野	縄・古代・中世	198	八雲山	縄
10	大田古原	縄	73	二宮崎	縄・古代	136	藤塚	縄・古・古墳・古代・中世・近世	199	八幡平	縄
11	内田古原	縄	74	下田崎	縄	137	十橋北	縄・近世	200	古津	縄
12	塩尻	縄	75	古津八幡山	縄・古・古墳・平	138	土堤	縄・平	201	馬下福崎	縄
13	船影石	縄・古墳	76	古津(打)福	縄	139	石巻石原	縄・平・鎌・室	202	馬下	縄
14	船影A	縄・古墳・平・中世	77	新田	縄・古代	140	石巻石原	縄・平・中世	203	竹林	縄
15	大田城山	縄・平	78	新井C	縄・古・古	141	村北	縄・古代・中世	204	小室山	縄
16	若山B	縄	79	新井B	縄・古代	142	藤塚	縄・中世	205	窪田	縄
17	藤C	縄・古・古墳・古代	80	9期(打)藤塚	縄・古・平	143	藤塚上内山	縄・平	206	福	縄
18	高田山田B	縄・古・古代	81	栗田	縄・平・中世	144	山本	縄	207	ノノ	縄
19	高田山田A	縄・古代	82	栗田	縄・平・中世	145	大津	縄・古・平・中世	208	藤塚	縄
20	山本戸村	古・平・中世	83	平	縄・古	146	小川崎	縄	209	藤塚	縄
21	石動	縄・古・古墳・平・中世	84	藤田	縄	147	藤塚C	縄	210	大蔵西	縄
22	栗田	縄・古・古	85	平(打)A	縄	148	藤塚B	縄・平・鎌	211	大蔵	縄
23	松山	縄・中世	86	平(打)B	縄	149	藤塚D	縄	212	藤塚	縄
24	小丸山	縄・古墳・平・中世・近世	87	坪久	縄	150	藤塚A	縄・古	213	大津平	縄
25	新野	縄・古代・古	88	江先	縄	151	野	縄	214	中ノ井北出	縄
26	中丸	縄・古・古代	89	二道橋	縄	152	中野	縄	215	新田	縄・古代
27	城山	縄・古・古・鎌	90	藤田(奥)藤田	縄・平・中世	153	藤	縄	216	新田	縄
28	藤山	縄・古・古墳・古代	91	大沢内北	縄・古・古代・中世	154	野見山	縄	217	藤田西	縄
29	上山	縄・古・平	92	大沢内南	縄・古・古・古代・中世	155	上野井I	縄	218	藤田西	縄
30	新田小丸山	縄・古・古墳・古代	93	五辻神社	縄	156	上野井II	縄・平	219	藤田西	縄
31	新田西所	縄・古代	94	藤	縄	157	上野井K	縄	220	藤田	縄
32	山ノ家	縄・古・古墳・古代	95	野野	縄	158	上野井T	縄	221	山	縄
33	新野	縄・古・古代	96	中	縄	159	上野井L	縄	222	野	縄
34	小野上田	縄・古代	97	野	縄・平・中世	160	上野井H	縄	223	平(打)	縄
35	小野中田	縄・古・古・中世	98	三	縄・平	161	上野井M	縄	224	小丸山	縄
36	金保山	縄・古代	99	古原	縄・古・古代・中世・近世	162	上野井O	縄	225	大津野	縄
37	前山	縄・古・古墳・古・平	100	下野野	縄	163	上野井N	縄	226	大津野	縄
38	資津内山	縄	101	平ノ木	縄・古代	164	上野井A	縄	227	大八戸I	縄
39	瓦本	縄・平・中世	102	野	縄	165	平野	縄	228	大八戸II	縄
40	平山	縄・古・古・鎌	103	野の下	縄	166	山ノ下	縄・古	229	大八戸III	縄・古代
41	野山	縄・古・平	104	新田	縄・平	167	平山	縄	230	上野	縄
42	野	縄	105	新田	縄・古・古代・近世	168	藤	縄	231	野	縄
43	野原	縄・古・古・平・近世	106	川田	縄・古	169	藤	縄	232	新林山	縄
44	野原	縄・古・古代・近世	107	野	縄・古代	170	石巻野	縄	233	山崎	縄
45	野	縄・平	108	藤・藤北	縄・古代	171	野山田	縄	234	野野	縄・平
46	野	縄・古代・中世・近世	109	木田	縄	172	山	縄	235	小野野	縄
47	野山	縄・古・古代	110	藤	縄	173	山	縄	236	カウノ	縄
48	野山A	縄・古・古代	111	野	縄	174	野	縄	237	野	縄
49	日本	縄・古・古・古代・室	112	野	縄	175	野	縄	238	野	縄・平
50	日本	縄・古・平	113	山	縄	176	野	縄・平	239	野	縄・古代
51	武左衛門	縄・古・古・古代	114	野	縄	177	山	縄	240	大津	縄
52	八幡	古・平	115	野	縄	178	野	縄・平	241	野	縄
53	野山	縄・古・古・平	116	大野	縄	179	野	縄	242	野	縄
54	野	縄・古・古・古代	117	野	縄	180	野	縄	243	野	縄・平
55	野	縄・古代	118	野	縄・中世	181	野	縄・古	244	野	縄
56	野	縄・古・平	119	野	縄	182	野	縄	245	野	縄
57	野	縄・古・古・平	120	野	縄・室	183	野	縄	246	野	縄・中世
58	大野	縄・平	121	野	縄	184	野	縄	247	野	縄
59	小野	縄	122	野	縄・中世	185	野	縄	248	野	縄
60	野	縄・古・古・平	123	野	縄・古	186	野	縄	249	野	縄・古代
61	野	縄・平・中世	124	野	縄	187	野	縄	250	野	縄
62	山崎	縄	125	野	縄	188	野	縄	251	野	縄・古
63	野	縄・古代・中世	126	野	縄・平・中世	189	野	縄	252	野	縄・古代



国土地理院発行2万5千分の1地形図に加重「新潟北部・松高・新潟南部・水原・白根・新津・大代田・村松・馬下・出瀨・新発田・大工」

第2図 原遺跡周辺の遺跡分布図(旧石器時代・縄文時代・弥生時代)

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 確認調査(第3・4図、第3表)

個人住宅建設に伴う確認調査(第9次調査)を平成29年度に実施した。1・3トレンチ(以下、Tとする)が東側にあり、2・4Tが細で段切りされた、一段高い部分の西側に所在する。遺物包含層は、表土直下のⅡ・Ⅲ層に存在する。1・3Tで地表下0.5～0.8mに包含層が存在し、2・4Tで地表下0.2～0.6mに包含層が存在する。いずれのトレンチでも包含層が良好に残存し、各トレンチからピット・土坑等が検出されている。以上の調査所見を基に、工事により遺跡保護層の確保が困難な区域について第10次調査の本発掘調査範囲を決定した。第11次調査については、個人住宅建設計画が知らされた時点で全域で保護層の確保が困難な状況であったため、事前の確認調査を実施していない。

第2節 本発掘調査

A 調査方法

1) グリッドの設定(図版5～7)

第10次調査は、原遺跡での初めての本調査であることから、遺跡の範囲全体をカバーできるようにグリッド設定を行った。なお、当該地域では、平成23年の東日本大震災による地殻変動に対応するため、三角点位置および水準点標高の改定が行われており(測地成果2011)、その成果を用いる。その基準点はX座標:198100.000、Y座標:54700.000、緯度:37°47'01".0253、経度139°07'15".6559)を1A-1A杭とした。基準点に対し国土地理院の第Ⅶ系座標軸を用いて100mの方眼を組み、これを大々グリッドとした。大々グリッドの名称は北西隅の杭を基点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。この大々グリッドに10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドも大々グリッド同様の表示方法とした。大グリッドをさらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「2B-9H5」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

第10次調査の2点の座標は次の通りである。

2B-9H1 測地成果2011(X座標:197920.000、Y座標:54870.000、標高:24.262m、緯度:37°46'55".1501、経度139°07'22".5546)

2B-9H1 杭で南北方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対し0度22分54秒東偏し、磁北は真北に対して8度10分00秒西偏する。

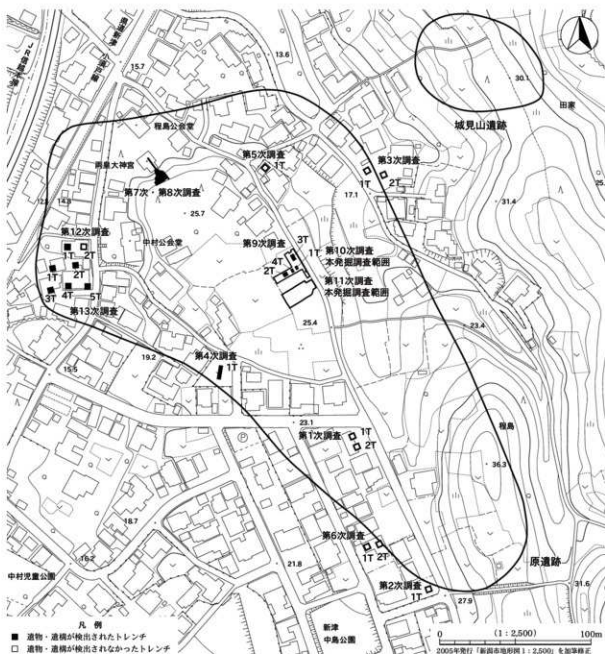
2B-10H1 測地成果2011(X座標:197910.000、Y座標:54870.000、標高:25.074m、緯度:37°46'54".8258、経度139°07'22".5519)

2B-10H1 杭で南北方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対し0度22分54秒東偏し、磁北は真北に対して8度10分00秒西偏する。

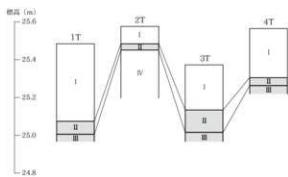
第11次調査の2点の座標は次の通りである。

2B-10I1 測地成果2011(X座標:197910.000、Y座標:54880.000、緯度:37°46'54".8236、経度139°07'22".9606)

2B-10I1 杭で南北方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対し0度22分54秒東偏し、



第3図 原道跡本発掘調査・確認調査位置図



第4図 第9次調査土層柱状図 (S=1/20)

第3表 遺物出土トレンチ

調査 次数	調査 年度	トレンチ No.	出土遺物 (数字は点数)
第4次	2009	1T	縄文土器12、石器7、鉄塊6
第7次	2013	2T	縄文土器・石器コンテナ2個 (コンテナ内径4.5×33.6×10.0cm)
第8次	2014	3T	縄文土器・石器コンテナ6個 (コンテナ内径4.5×33.6×10.0cm)
第9次	2016	1T	縄文土器54、粘土塊1
第9次	2016	2T	縄文土器3、アスファルト塊1
第9次	2016	3T	縄文土器206、石器2
第9次	2016	4T	縄文土器34
第12次	2020	1T	縄文土器14
第13次	2021	1T	縄文土器4
		2T	縄文土器2
		3T	縄文土器39
		4T	縄文土器224、石器8
		5T	縄文土器287、石器5

磁北は真北に対して8度16分00秒西偏する。

3B-111 測地成果 2011 (X座標: 197900.000, Y座標: 54880.000, 標高: 24.310m, 緯度: 37° 46' 54" .4992, 経度 139° 07' 22" .9578)

3B-111 杭で南北方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対し0度22分54秒東偏し、磁北は真北に対して8度16分00秒西偏する。

2) 調査方法

① 表土剥ぎ: 確認調査によって遺物の出土が多量であることが確認されていることから、遺物包含層(Ⅲ層)上面まで、遺物の出土に注意しながら法バケット付属の0.25級重機(バックホウ)により除去した。排土は横置きした。法面は調査区の東側が道路に面し、西側に新築住宅があるため、安全面を考慮して一分の勾配とした。また、漏水防止のために、サブトレンチを兼ねて各所に土側溝を掘り、降水時に2時のポンプで強制排水を行った。

② 包含層掘削・遺構検出・発掘: 重機で掘削後、ジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層の掘削・遺構の検出にあたった。排土は一輪車を用いて人力で調査区外へ搬出した。

③ 実測・写真撮影: 平面図及び各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、断面図は1/20で手取り及び写真実測を用いて作成した。併せて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版、6×7版のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。さらにデジタルカメラでの撮影も行った。

④ 遺物取り上げ: 包含層出土遺物は小グリッドを単位として取り上げた。遺構出土遺物は基本的に層位ごとに取り上げを行った。特殊な遺物出土状況は平面的な位置を1/20で手取り及び写真実測を用いて作成した。

⑤ 自然科学分析: 植物珪酸体分析・花粉分析・種実同定・樹種同定・土器付着物の放射性炭素年代測定(AMS法)、土坑内のリン・カルシウム分析、土器胎土内鉱物の成分分析、黒曜石原産地の推定等の科学分析を行った。

B 調査経過

1) 平成30年度調査

調査担当1名の体制で、平成30年6月1日から重機を用いて表土剥ぎを開始した。並行して機材庫を設置し機材を搬入した。6月12日に台風4号に見舞われるなど雨の多い年で作業は難航し、表土剥ぎが終了したのは6月14日であった。遺構精査や遺構掘削は表土剥ぎが終了した場所から順次実施した。6月15日に測量業者による小グリッド打設を行った。6月18日から、調査区北側から遺構精査を行い、併せて北壁際を幅20cm程度掘り下げ、層序の再確認を行った。確認調査ではⅡ層下面を遺構確認面としていたが、Ⅲ層の漸移層でも多数の遺物が出土することが判明した。遺構は小土坑・土坑が多数確認され、平面プラン確認後、順次半截し層序確認を行い、写真撮影後に完掘した。6月26日からSX28を半截して掘り下げ始めたが、整穴住居の可能性があったため、改めてクロスセクションを設けて遺構精査を行った。7月2日に南西壁の基本層序の写真撮影・断面実測を行った。7月4日に調査区南端でフラスコ状土坑(SK44)を確認した。遺構精査中に、下層覆土中から炭化物・種実・骨片が多数確認できたので、覆土を層位ごとに採取し、篩がけを行った。7月12日にほぼ完掘し、ドローンを用いて空撮を行った。7月13～18日に遺構の個別完掘写真と自然科学分析のサンプリングを行った。さらに、Ⅳ層以下の確認を一部小グリッドで行い、遺構・遺物ともに認められないことを確認した。7月19・20日に埋め戻しを行い、7月31日までに機材庫の撤収を行うすべての調査を終了した。最終的な調査面積は上端面積177.43m²・下端面積137.88m²である。

2) 令和2年度調査

調査担当1名、調査員1名の体制で、令和2年5月25日から重機を用いて表土剥ぎを開始した。並行して機材庫を設置し機材を搬入した。表土剥ぎが終了したのは6月2日であった。遺構精査や遺構掘削は表土剥ぎが終了した場所から順次実施し、6月2日から測量業者による測量業務を行った。併せて層序の確認を行った。

7月2日までにほぼ遺構掘削を完了し、7月3日にドローンを用いて調査区全体の撮影を行った。7月9日まで補足調査を行い、7月30日までに埋め戻しと機材庫等の撤収を完了して全ての調査を終了した。最終的な調査面積は上端面積 213.31m²・下端面積 200.49m²である。

C 調査体制

平成30年度 原遺跡本発掘調査の調査体制は以下の通りである。

調査期間	平成30年6月1日～平成30年7月31日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 小沢昌己、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当係長 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 渡邊朋和、主幹 天野泰伸 遠藤恭雄）
調査担当	立木宏明（主査）

令和2年度 原遺跡本発掘調査の調査体制は以下の通りである。

調査期間	令和2年5月25日～令和2年7月30日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 渡邊朋和、主幹 遠藤恭雄 吉沢範久）
調査担当	諫山えりか（歴史文化課 主査）
調査員	吉田 浩（副吉田建設）

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）にして第10次調査52箱、第11次調査28箱、（発掘調査終了時点）である。縄文・弥生時代の土器・土製品・石器・石製品・漆製品・自然遺物（種実・骨等）など各種の遺物がある。遺物の整理作業は次の手順で行った。

- ① 洗浄 ② 注記 ③ 包含層：種別ごと小グリッド別に重量計測 ④ 遺構：器器別の重量・各種計測
- ⑤ 接合 ⑥ 報告書掲載遺物の抽出 ⑦ 実測図作成 観察表・集計表作成 ⑧ トレース図作成
- ⑨ 写真撮影（デジタルカメラまたは6×7版カメラによる）⑩ 図面図版・写真図版制作 ⑪ 版下作成
- ⑫ 収納。このうち⑧と⑪は業者に委託してデジタル編集で行った。

2) 遺構

各種図面の整理にあたっては、まず測量業者に委託した1/20の遺構平面図と手取り等の断面図との校正作業を行った。報告書に掲載する1/100平面図、個別遺構の平面図と断面図を1/40縮尺で組み合わせたものは測量業者が作成し、デジタルデータとした。その後割り付を作成し業者に委託して版下を作成した。

B 整理経過

平成30・令和2年度は発掘調査終了後、遺物の洗浄・注記など基礎整理作業を年度内で終了させた。さらに、遺構写真・図面の整理を行い、併せて測量業者に委託した遺構平面図・断面図の校正作業を行った。報告書作成業務は平成30～令和4年度に各年度担当が中心に行った。行った作業は、遺物計測・遺物実測・デジタルトレー

ス、遺物写真の撮影、図版のレイアウト、報告書の執筆・編集である。当初個々に報告書を発行する予定であったが、令和3年度整理作業から平成30・令和2年度調査を合本して発行することになり、担当2名で整理作業にあたった。報告書は令和4年度に刊行した。

C 整理体制

平成30～令和4年度の原遺跡の整理体制は以下の通りである。

平成30年度

期 間	平成30年6月1日～平成31年3月29日
調 査 主 体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 小澤昌己、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当係長 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 渡邊明和、主幹 天野泰伸・遠藤恭雄）
整 理 担 当	立木宏明（主査）

令和元年度

調 査 主 体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 小澤昌己、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 渡邊明和、主幹 天野泰伸・遠藤恭雄）
整 理 担 当	立木宏明（係長）

令和2年度

調 査 主 体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 渡邊明和、主幹 遠藤恭雄・吉沢範久）
整 理 担 当	第10次調査 立木宏明（係長） 第11次調査 諫山えりか（歴史文化課主査）
調 査 員	第11次調査 吉田 浩・長沼吉嗣（㈱吉田建設）

令和3年度

調 査 主 体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 板垣正人、主幹 遠藤恭雄、係長 飯塚和美）
整 理 担 当	第10次調査 立木宏明（係長） 第11次調査 遠藤恭雄（主幹）

令和4年度

調 査 主 体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（所長 佐藤敏宏、主幹 遠藤恭雄、係長 飯塚和美）
整 理 担 当	第10次調査 立木宏明（係長） 第11次調査 遠藤恭雄（主幹）
調 査 員	第11次調査 平山千尋（主事）・高橋保雄（主事）

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

原遺跡は新津丘陵北西端部、舌状に張り出した台地状の尾根に立地する。標高は25m前後である。遺跡は尾根先端の平坦部を中心に南北400m、東西200m程の広がりを持ち、今回の調査（第10次調査）は平坦部東側の緩斜面で実施した。調査面積は177.43m²（上端）である。遺構確認面（Ⅲ層上面）の標高は23.8～24.5mを測り、尾根の形状に沿って南から北へ、または東側の谷へ向かって緩やかに低くなる。

調査区全体にわたって、お茶の木の根痕と畑の耕作による擾乱が著しかったが、土坑（SK）19基、性格不明遺構（SX）1基、小土坑（Pt）31基の総計51基の遺構を検出した。遺構の分布は調査区の北半部に集中し、標高の高い南半部では削平が深くまで及んだためか希薄である。

調査区からは、縄文時代中期から晩期、弥生時代前期、近世の遺物が出土した。出土品の帰属する主な時代は縄文時代晩期中葉から後葉である。出土遺物量は、発掘調査終了時でコンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）52箱である。その内訳は、土器29箱、土製品3箱、石器・礫17箱、焼骨・炭化物・種実等の自然遺物3箱である。

第2節 層 序（図版7、写真図版5）

基本層序はⅠ～Ⅳ層に大別される。さらに細別される場合はa・b・cを付した。Ⅰ層は旧耕作土、Ⅱ・Ⅲ層が縄文・弥生時代の遺物包含層、Ⅳ層がいわゆる地山である。長年にわたる耕作の影響で、擾乱を受けたⅠ層からは縄文時代の遺物や近世以降の陶磁器が出土する。色調や混入物の違いから3層に細分した。Ⅱ層は有機質に非常に富んだ黒色の砂質土で、調査区北側の一部にのみ残存する。Ⅲ層は主に砂質の違いによって2層に細分した。当初、確認調査結果に従いⅢ層上面を遺構確認面に設定したが、さらに下層から遺物が出土したために、調査区の広範囲にわたって土層観察用のトレンチを設定したうえで当初の遺構確認面を徐々に下げ、遺構検出に努めた。最終的な遺構確認面はⅣ層上面である。Ⅲ層は、標高が高くなる調査区南東部や、南西部では削平を受けてほとんど残存していなかった。Ⅳ層は基盤層であり、地点により土質が異なり、調査区北東部では砂質が非常に強く、標高が高く削平を受けている南東部では粘性が強くしまりが強い土層となっている。Ⅳ層以下は無遺物層である。

基本層序は以下のとおりである。

- I a 層 灰褐色（7.5YR4/2）シルト 粘性やや強 しまり弱 旧耕作土 Ⅳ層土が混じる
- I b 層 黒褐色（7.5YR3/1）シルト 粘性やや強 しまりやや強 旧耕作土
- I c 層 黒褐色（7.5YR3/1）シルト 粘性やや強 しまり強 Ⅱ～Ⅲ層土がマーブル状に混じる
- Ⅱ層 黒色（7.5YR2/1）シルト 粘性やや強 しまりやや強 黒ボク土 Ⅱ層は一部分のみ残る 砂質土 遺物包含層
- Ⅲa 層 にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト 粘性やや強 しまりやや強 炭化物が少量入る 遺物包含層
- Ⅲb 層 褐色（7.5YR4/3）シルト 粘性弱 しまりやや強 炭化物が極少量入る Ⅲa 層より砂質が強い 遺物包含層
- Ⅳ層 明褐色（7.5YR5/6）シルト 粘性やや強 しまりやや強 基盤層 下層に向かって粘性が高くなる。

第3節 遺 構

A 遺構の概要

遺構番号は、調査区を通じて遺構の種類に関わらず1から51の通し番号を付した。調査後の検討によって、遺構種別の変更はあったが、欠番は発生していない。なお、調査区南西部の斜面では、複数の溝状遺構が検出されたが、陶器（肥前系、村松焼）・銭貨（寛永通宝）などが出土しており、近世以降の所産と考えられるため、遺構番号は付さなかった。

記述は土坑（SK）、性格不明遺構（SX）、小土坑（Pit）の順に、同種遺構については、時期や検出層位の別に関わらず、おおむね北から南へと順次記す。検出された遺構は、Ⅲ～Ⅳ層にかけての層位に掘り込まれており、当初、確認面をⅢ層上面（上層）とⅣ層上面（下層）とに分けて整理しようとした。しかし、地層的に北側が砂質土主体で南側が粘質土主体となる土質のため、上下層の把握が困難であったことと、茶畑の造成をはじめとする近世以降の擾乱が予想以上に下層まで及んでおり、層位を誤認していた可能性もあったことから、上層・下層の分離は困難であると判断し、すべての遺構を同一平面上で図示した。

遺構の形態分類は和泉 A 遺跡での分類（加藤・荒川ほか1999）を参考とし、平面形は円形・楕円形の2種類に、断面形は台形状・箱状・皿状・半円状・U字状・袋状・V字状・漏斗状の8種類に分類した。遺構の計測値等は遺構計測表（別表1）に示した。一部が調査区外に及ぶもの、重複関係や擾乱、サブトレンチによって一部埋されているものなど全体形が把握できない遺構の平面形・断面形は推定表記である。そのような遺構の長軸・短軸の計測値については、遺構計測表では平面形・断面形とともに推定値として（ ）を付している。出土遺物については網羅的に記載した。出土遺物の記載がないものについては、当該遺構からの出土遺物はない。図化した遺物については、文末に図版番号・写真図版番号を提示し、その詳細は第V章に記載している。遺構からの出土遺物は少量に限られるものが多いため、記載してある時期は可能性を指摘することとする。

B 遺 構 各 説

1) 土 坑 (SK)

SK50 (図版6・8、写真図版5)

2B-8H21に位置する縄文時代晩期の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。SX28を切る。平面プランが不明瞭であったため、サブトレンチを設定し、断面観察から掘方を特定した。平面形は円形と推定され、断面形は台形状を呈す。主軸方位はN-58°-Eである。規模は推定で長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.06mである。SK2と重複するが、切り合い関係は不明である。覆土からは斜縄文の施された鉢の底部(図版13-4)がほぼ正位で出土し、土器内の土壌を1層、掘方を2層とした。鉢は埋設土器の可能性もあるが上部が削平されているため土坑とした。遺物は他に図化していない器種不明の赤彩土器、石鏃等が出土している(図版13・20 写真図版12・18)。

SK2 (図版6・8、写真図版6)。

2B-8H21に位置する縄文時代晩期の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面プランが不明瞭だったため、サブトレンチを設定し、断面観察によって掘方を特定した。平面形は円形と推定され、断面形は皿状を呈す。主軸方位はN-13°-Wである。規模は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.40mを測る。覆土は単層である。SK50と重複するが切り合い関係は不明である。網目状燃系文が施された晩期の深鉢底部(図版13-5)が正位に掘えられたように出土した。埋設土器の一部の可能性もある。遺物は他に縄文土器片、剥片が出土している(図版13、写真図版12)。

SK1 (図版6・8、写真図版6)

2B-9G10に位置する縄文時代晩期中葉の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面プランが不明瞭であったため、サブトレンチを設定し、掘方を特定した。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿状を呈す。覆土は3層に分け

られ、レンズ状の堆積である。主軸方位はN-25°-Eである。規模は長軸0.80m、短軸0.58m、深さ0.14mを測る。底面近くの3層から晩期中葉(上野原式)の浅鉢(図版13-1)が出土した。2層からは晩期の無文深鉢底部(図版13-3)が正位の位置で出土した。調査時にはこれを埋設土器の一部と認識したが、土坑内に残置されたものにとらえ直した。なお、2層から出土した中期後葉(大木10式)の深鉢(図版13-2 写真図版12)は混入遺物と考えられる。

SK4 (図版6・8、写真図版6)

2B-8G19に位置する縄文時代晩期後葉の遺構である。IV層上面で検出した。遺構の上層部分が削平されるが、その残存部での平面形は楕円形、断面形は皿状を呈し、主軸方位はN-38°-Eである。規模は長軸0.94m、短軸0.74m、深さ0.22mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状の堆積である。断面観察から立ち上がり方がIII層中に及んでいることがわかり、本来の掘り込み面は、III層上面以上と考えられる。遺物は晩期の深鉢(図版13-5)、剥片が出土した。その他、自然遺物として焼骨片(未測定)が出土している(図版13 写真図版12)。

SK8 (図版6・7・8、写真図版6・7)

2B-8H11・16に位置する縄文時代晩期中葉の遺構である。III層上面で検出した。東側の一部が調査区外に張り出すが、平面形は円形と推定され、断面形は箱状を呈す。主軸方位はN-36°-Wである。検出部における規模は、長軸1.14m、短軸1.00m、深さ0.49mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状の堆積である。

遺物の出土量が比較的多い遺構である。土器は晩期中葉(大洞C1～C2式)の土器を中心に出土した。深鉢・浅鉢・壺などが出土している。1層から出土した晩期中葉(大洞C1式)の鉢(図版13-10)内面に付着した炭化物で放射性炭素年代分析を行った結果、暦年較正年代で、cal BC 1229-1056年(紀元前1229-1056年)の年代値が得られた。石器では石鏃3点の他、剥片が出土している(図版13・14・20 写真図版12・18)。

SK38 (図版6・8・10、写真図版7)

2B-8H16・21に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。SX28を切る。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-32°-Wである。規模は長軸1.06m、短軸0.84m、深さ0.31mを測る。覆土は2層に分けられレンズ状堆積である。SX28の中央部に位置し、覆土には焼土と炭化物が混入する。当初SX28を整穴住居とし、その跡を想定したが、土坑ととらえ直した。遺物は縄文土器片(未図化)や剥片が出土している。覆土(1・2層)の水洗選別によって得られた炭化種子群の種実同定分析を行った結果、食用植物のオニグルミとトチノキが同定された(第VI章参照)。その他、自然遺物として焼骨片(未測定)が出土している。

SK51 (図版6・7・8、写真図版7)

2B-8H16・17・21・22に位置する縄文時代晩期中葉の遺構である。III層上面で検出した。東側が調査区外に張り出す。平面形は楕円形と推定され、断面形は台形状を呈す。主軸方位はN-27°-Wである。検出部における規模は長軸1.20m、短軸0.48m、深さ0.44mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状堆積である。

遺物は晩期中葉(大洞C1～C2)の深鉢(図版14-24)、浅鉢(図版14-28)、皿(未図化)などが出土した。なお、中期中葉(大木8a)の浅鉢が(図版14-23)出土しているが覆土に混入したものと考えられる。土製品では土版の小破片、石器では不定形石器・剥片・礫石が出土している(図版14・19・20 写真図版12・13・17・18)。その他、自然遺物として焼骨片(未測定)が出土している。

SK15 (図版6・8、写真図版8)

2B-8G24に位置する縄文時代の遺構である。III層上面で検出した。平面形は円形、断面形は皿状を呈し、主軸方位はN-58°-Eである。覆土は単層である。規模は長軸0.64m、短軸0.56m、深さ0.10mを測る。遺物は縄文土器片が出土しているが図化していない。

SK27 (図版6・9、写真図版8)

2B-8G24・25、9G4・5に位置する縄文時代晩期後葉の遺構である。IV層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。主軸方位はN-56°-Eである。規模は長軸1.25m、短軸1.04m、深さ0.34mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状の堆積である。遺物は晩期中葉(大洞C1式)の浅鉢(図版14-29)、晩期後葉(鳥

屋2式)の壺(図版14-30)、甕(図版14-31)などが出土している。石器は石鏃・不定形石器・剥片が出土している(図版14-20 写真図版13・18)。1・2層の覆土中には、自然遺物の炭化物、種実片、焼骨片(未測定)が確認された。そのため、1・2層から採取した土壌サンプルにより、植物珪酸体分析、花粉分析、リン・カルシウム分析を、覆土の水洗選別によって得られた炭化種実により種実同定分析を行った。その結果、土壌サンプルから花粉は全く検出されず、ササ属などの植物珪酸体がわずかに検出された。炭化種実からはオニグルミ・クリ・コナラ・トチノキ・サンショウ・ヒンなどの食用植物が同定された。リン・カルシウム分析は、覆土から完形の石鏃が出土し、墓塚の可能性があったことから実施した。分析結果から土壌内に動物の骨や歯が存在した可能性が指摘されたが、それが人骨由来かは特定には至らなかった(第VI章参照)。

SK49 (図版6・9・10、写真図版8)

2B-8H21・22に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。SX28を切る。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈す。主軸方位はN-61°-Eである。規模は長軸1.32m、短軸0.94m、深さ0.32mを測る。覆土は2層に分けられ、水平堆積である。遺物は縄文土器片が出土しているが図化していない。

SK36 (図版6・9、写真図版8)

2B-8H22、9H2に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。遺構の一部がトレンチと攪乱で残存しないが、その平面形は円形、断面形は皿状と推定される。主軸方位はN-61°-Eである。規模は推定で長軸0.94m、短軸0.84m、深さ0.08mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

SK34 (図版6・9、写真図版9)

2B-9G5・10、9H1・6に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。Pit33に切られる。平面形は円形、断面形は皿状を呈す。主軸方位はN-23°-Eである。規模は長軸0.84m、短軸0.78m、深さ0.10mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

SK42 (図版6・9、写真図版9)

2B-9H1・2・6・7に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。Pit46・47を切る。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿状を呈す。主軸方位はN-58°-Eである。規模は推定で長軸1.00m、短軸0.82m、深さ0.22mを測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片、剥片が出土しているが図化していない。

SK20 (図版6・9、写真図版9)

2B-9H2・3・7・8に位置する縄文時代晩期中葉の遺構である。IV層上面で検出した。攪乱で一部壊されるが平面形は円形、断面形は皿状を呈し、主軸方位はN-65°-Eである。規模は長軸0.90m、短軸0.78m、深さ0.22mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状堆積である。遺物は晩期前葉(大洞BC式)の注口土器(図版14-33)、晩期前葉～中葉(大洞BC～C1式)の深鉢(図版14-34)、晩期中葉(大洞C1式)の皿(図版14-35)などが出土した。また、土版2点の出土が特筆される(図版14・19 写真図版13・17)。

SK10 (図版6・9、写真図版9)

2B-9H14・19に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。Pit11に切られる。東側が調査区外に張り出すが、平面形は楕円形と推定され、断面形は皿状を呈す。主軸方位はN-37°-Wである。検出部での規模は、長軸1.00m、短軸0.42m、深さ0.16mを測る。覆土は2層に分けられ水平堆積である。遺物は縄文土器片が出土しているが図化していない。

SK30 (図版6・7・9、写真図版9)

2B-9G17・18・22・23に位置する縄文時代後期前葉の遺構である。IV層上面で検出した。北側が調査区外に張り出すが、平面形は楕円形と推定され、断面形は箱状を呈す。主軸方位はN-50°-Eである。検出部での規模は、長軸1.48m、短軸0.70m、深さ0.74mを測る。覆土は2層に分けられ、水平堆積である。遺物は後期前葉(南三十桶場式)の深鉢(図版14-38)、後期と考えられる縄文施文の深鉢(図版14-39・40)、軽石製石製品が出土している。中期前葉(新崎式)の深鉢(図版14-37)が2層から出土しているが、小破片であり混入したもの

と考えられる(図版14・20 写真図版13・18)。

SK43 (図版6・9、写真図版10)

2B-9H19に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。平面形は円形、断面形は皿状を呈す。主軸方位はN-10°-Wである。規模は長軸0.56m、短軸0.49m、深さ0.15mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状の堆積である。遺物は縄文土器片が出土しているが図化していない。

SK44 (図版6・10、写真図版10)

2B-10H5に位置する縄文時代晩期中葉の袋状土坑である。IV層上面で検出した。西側の一部が調査区外へ張り出すが、平面形は楕円形と推定され、断面形は袋状を呈す。主軸方位はN-67°-Wである。確認面での規模は推定で上端(凹口部)が長軸0.80m、短軸0.64m、くびれ部で長軸0.62m、短軸0.56m、下端で長軸0.94m、短軸0.76m、深さは0.81mを測る。下部オーバーハング部分の最大径は1.25mである。覆土は7層に分けられ、ブロック状の堆積である。5層は袋部上面壁の崩落土と考えられる。遺物は中期前葉(新崎式)～晩期中葉(大洞C1式)の土器が出土しているが、晩期中葉(大洞C1式)浅鉢(図版14-46)が下層の4～7層から出土していることから遺構の時期は晩期中葉とした。また、外面が赤彩された晩期の壺が1点出土しているが図化していない。石器は、石鏃未成品・不定形石器・剥片・磨石・敲石・敲石が出土している(図版14・20 写真図版13・18)。

覆土には有機物が多く含まれており、7層から採取した土壌サンプルを用いて植物珪酸体分析・花粉分析を、覆土から水洗選別によって抽出した炭化材(7層)、炭化種実(4・6・7層)をサンプルとして樹種同定分析・種実同定分析を実施した。その結果、土壌サンプルからは微量の花粉と、ササ属などの植物珪酸体が検出された。炭化材の樹種同定では、クリ・コナラ・マタタビが確認された。種実同定では、食用植物のオニグルミ・トチノミ・ヒシなどが確認された(第VI章参照)。その他、自然遺物として焼骨片が出土(2～4・6・7層)しているが、細片のため未同定である。

SK45 (図版6・10、写真図版10)

2B-9H25、10H5に位置する縄文時代晩期の遺構である。IV層上面で検出した。東側の一部が攪乱によって壊されるが、その平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。主軸方位はN-6°-Eである。規模は推定で長軸0.66m、短軸0.52m、深さ0.20mを測る。覆土は単層である。遺物は結節縄文が施文された晩期の深鉢(図版14-41)が出土した。石器では、石鏃・不定形石器・剥片が出土している(図版14・20 写真図版13・18)。

2) 性格不明遺跡(SX)

SX28 (図版6・8・10、写真図版7)

2B-8G15・20・25、8H16・21に位置する。自然の営力による可能性が高く時期は不明である。IV層上面で検出した。Pit9・12・48、SK50・38・49に切られるが切り合いは不明瞭である。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿状、主軸方位はN-24°-Wである。規模は推定で長軸3.56m、短軸1.74m、深さ0.24mを測る。覆土は3層に分かれ、水平堆積である。竪穴住居を想定して南北および東西の土層断面観察用の壁を設置したが、遺構東側の平面プランや立ち上がりが著しく不明瞭で、東側のプランは確認面を上層から下層に下げる際に南北に設定したトレンチによりすでに残存しないとみなした。地層が東側の地形傾斜に引張られた自然地形の落ち込み、あるいは風倒木痕の可能性が高い。遺物は晩期前葉(大洞BC式)～弥生時代前期緒式までの多時期にわたる土器が出土している。石器では、石鏃・石鏃・不定形石器・楔形石器・剥片・石核・磨石・敲石+凹石が出土している(図版14・15・20 写真図版13・18)。その他、自然遺物として、炭化物・種実片・骨片が出土している。種実については、自然科学分析の結果、オニグルミ・クリ・サンショウ・トチノミなどが同定された(第VI章参照)。

3) 小土坑(Pit)

Pit33 (図版6・9、写真図版9)

2B-9G5・10に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。SK34を切る。平面形は円形、断面

形は台形状を呈す。主軸方位はN-12°-Wである。規模は長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.24mを測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片が出土しているが、図化していない。

Pit46 (図版6・9、写真図版9)

2B-9H1・2に位置する縄文時代の遺構である。SK42に切られる。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿状を呈す。主軸方位はN-69°-Eである。残存部での規模は長軸0.37m、短軸0.28m、確認面からの深さは0.20mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit47 (図版6・9、写真図版9)

2B-9H2に位置する縄文時代の遺構である。SK42に切られる。平面形は楕円形と推定され、断面形はU字状を呈す。主軸方位はN-12°-Wである。規模は推定で長軸0.34m、短軸0.28m、確認面からの深さは0.42mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit11 (図版6・9、写真図版9)

2B-9H19に位置する縄文時代の遺構である。IV層上面で検出した。SK10を切る。東側が調査区外に張り出すが、平面形は楕円形と推定され、断面形は箱状を呈す。主軸方位はN-48°-Eである。検出部での規模は、長軸0.18m、短軸0.14m、深さ0.14mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit5 (図版6・10)

2B-8G14・15に位置する縄文時代晩期の遺構である。III層上面で検出した。視乱で一部が壊されているが平面形は楕円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-60°-Wである。規模は長軸0.38m、短軸0.28m、深さ0.26mを測る。覆土は単層である。遺物は燃糸文が施文された晩期の深鉢(図版15-64)が出土している(図版15 写真図版13)。

Pit6 (図版6・7・10)

2B-8G15に位置する縄文時代の遺構である。III層上面で検出した。Pit7を切る。北側が調査区外に張り出すが、平面形は楕円形と推定され、断面形はU字状を呈す。主軸方位はN-60°-Eである。検出部での規模は、長軸0.33m、短軸0.12m、深さ0.34mを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状の堆積である。遺物は縄文土器片が出土しているが、図化していない。

Pit7 (図版6・10)

2B-8G15に位置する縄文時代晩期の遺構である。III層上面で検出した。Pit6に切られる。平面形は円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-90°である。規模は推定で長軸0.26m、短軸0.23m、深さ0.24mを測る。覆土は単層である。遺物は0段多条の縄文が施文された晩期の深鉢(図版15-65)が出土している(図版15 写真図版13)。

Pit3 (図版6・10)

2B-8G18に位置する縄文時代の遺構である。III層上面で検出した。平面形は円形、断面形は皿状を呈し、主軸方位はN-48°-Eである。規模は長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.08mを測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片が出土しているが、図化していない。

Pit9 (図版6・10)

2B-8G20に位置する縄文時代の遺構である。III層上面で検出した。SX28を切る。平面形は円形と推定され、断面形はU字状を呈す。主軸方位はN-52°-Wである。規模は推定で長軸0.28m、短軸0.26m、深さ0.25mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit48 (図版6・10)

2B-8G20、8H16に位置する縄文時代晩期後葉の遺構である。III層上面で検出した。SX28を切る。平面形は円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-22°-Eである。規模は長軸0.20m、短軸0.18m、深さ0.18mを測る。覆土は単層である。遺物は晩期前葉～中葉の鉢(図版15-68)、条痕が施文された晩期後葉の深鉢(図版15-69)が出土している(図版15 写真図版13)。

Pit16 (図版6・10)

2B-8H16に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-20°-Eである。規模は長軸0.24m、短軸0.23m、深さ0.24mを測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片が出土しているが図化していない。

Pit22 (図版6・10)

2B-8H16・21に位置する縄文時代晩期の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は皿状と推定される。主軸方位はN-11°-Eである。規模は推定で長軸0.26m、短軸0.20m、深さ0.06mを測る。覆土は単層である。遺物は結節縄文の施文された晩期の深鉢(図版15-63)が出土している(図版15 写真図版13)。

Pit12 (図版6・10)

2B-8G25に位置する縄文時代晩期の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。SX28を切る。平面形は楕円形、断面形はV字状を呈し、主軸方位はN-27°-Wである。規模は長軸0.28m、短軸0.22m、深さ0.16mを測る。覆土は単層である。遺物は結節縄文の施文された晩期の深鉢(図版15-66)、剥片が出土している。(図版15 写真図版13)。

Pit13 (図版6・11)

2B-8G25に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形はV字状を呈し、主軸方位はN-47°-Wである。規模は長軸0.32m、短軸0.26m、深さ0.14mを測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片(未掲載)が出土している。

Pit23 (図版6・11)

2B-8H21に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-10°-Wである。規模は長軸0.38m、短軸0.26m、深さ0.12mを測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片が出土しているが図化していない。

Pit18 (図版6・11)

2B-8H21に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形と推定され、断面形はU字状を呈す。主軸方位はN-38°-Wである。規模は推定で長軸0.24m、短軸0.20m、深さ0.34mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit19 (図版6・11)

2B-8H22に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形と推定され、断面形はU字状を呈す。主軸方位はN-65°-Wである。規模は推定で長軸0.30m、短軸0.22m、深さ0.30mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit24 (図版6・11)

2B-8H21に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-4°-Wである。規模は長軸0.30m、短軸0.25m、深さ0.10mを測る。遺物は出土していない。

Pit25 (図版6・11)

2B-8H22に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-10°-Eである。規模は長軸0.21m、短軸0.20m、深さ0.13mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit17 (図版6・11)

2B-9G5に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-35°-Wである。規模は長軸0.20m、短軸0.18m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。

Pit14 (図版6・11)

2B-9G5.9H1に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈し、

主軸方位はN-10°-Eである。規模は長軸0.46m、短軸0.44m、深さ0.40mを測る。覆土は3層に分けられ柱痕が認められる。柱根は遺存していない。遺物は縄文土器片（未掲載）、剥片が出土している。

Pit21 (図版6・11)

2B-9G4・5・9・10に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、主軸方位はN-21°-Wである。規模は長軸0.45m、短軸0.44m、深さ0.21mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit35 (図版6・11)

2B-9H1に位置する縄文時代の遺構である。Ⅳ層上面で検出した。平面は円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-30°-Wである。規模は長軸0.23m、短軸0.22m、深さ0.16mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit37 (図版6・7・11)

2B-8H22、9H2に位置する縄文時代の遺構である。Ⅳ層上面で検出した。東側の一部が調査区外に張り出すが、平面形は楕円形、断面形は皿状と推定される。主軸方位はN-51°-Wである。規模は推定で長軸0.54m、短軸0.34m、深さ0.11mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit41 (図版6・11)

2B-9H6に位置する縄文時代の遺構である。Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-58°-Wである。規模は長軸0.18m、短軸0.14m、深さ0.10mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit31 (図版6・11)

2B-9H6に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-8°-Eである。規模は長軸0.21m、短軸0.16m、深さ0.10mを測る。遺物は出土していない。

Pit32 (図版6・11)

2B-9H6に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は台形状を呈し、主軸方位はN-7°-Eである。規模は長軸0.28m、短軸0.27m、深さ0.20mを測る。遺物は出土していない。

Pit39 (図版6・11)

2B-9H6に位置する縄文時代の遺構である。Ⅳ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-23°-Eである。規模は長軸0.25m、短軸0.22m、深さ0.27を測る。覆土は単層である。遺物は縄文土器片が出土しているが腐化していない。

Pit40 (図版6・11)

2B-9H6・11に位置する縄文時代の遺構である。Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は半円状を呈し、主軸方位はN-28°-Eである。規模は長軸0.17m、短軸0.16m、深さ0.08mを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit29 (図版6・11)

2B-9H6・7に位置する縄文時代の遺構である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-4°-Wである。規模は長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.20mを測る。遺物は縄文土器片が出土しているが腐化していない。

Pit26 (図版6・11)

2B-9H8に位置する縄文時代晩期の遺構である。Ⅳ層上面で検出した。東側が調査区外へ張り出すが、平面形は楕円形と推定される。断面形はU字状を呈し、主軸方位はN-28°-Wである。検出部での規模は長軸0.42、短軸0.22、深さ0.26mを測る。覆土は2層に分けられ水平堆積である。遺物は施文の無い晩期の深鉢(図版15-67)が出土している(図版15 写真図版13)。

第V章 遺 物

第10次調査の本発掘調査資料を中心に一部、確認調査・工事立会（母屋の建設に伴う布基礎部分の調査時）の出土品・表面採集遺物を土器・土製品等、石器・石製品の順に記載を行う。本発掘調査及び確認調査時の排土で後に回収された資料もほとんどがⅠ～Ⅲ層の表土及び包含層の遺物であることからそれぞれの項目で掲載した。

今回の調査によって出土した遺物量は、コンテナ（内寸54.3×33.6×10.0cm）換算で示すと、本発掘調査出土の土器が29箱、土製品が3箱、石器・石製品・礫が17箱である。確認調査出土の土器・土製品が2箱、石器・礫が1箱である。住宅部分の工事立会出土の土器・土製品が2箱、石器・礫が1箱である。

第1節 土 器（図版13～19、写真図版12～17、別表2・3）

A 概 要

本発掘調査・確認調査・工事立会では、縄文時代中期前葉から弥生時代前期までの土器が出土しており、晩期中葉から後葉の土器が主体である。本発掘調査の土器の総点数は8,755点・総重量は39,014g・口縁部資料265点・底部資料116点である。接合・復元のうち本発掘調査の土器226点、確認調査の土器23点、工事立会の土器12点、表面採集の土器6点の合計267点を掲載した。土製品は5点、漆器1点、アスファルト4点掲載した。アスファルト付着土器を3点（132・145・202）図化した。それ以外に本調査で14点、本調査の排土で1点、確認調査で1点、表面採集品で4点が出土していることを特記しておく。さらに、漆付着土器が掲載1点（53）、未図化2点出土している。

土器はⅢ層の包含層から出土している。中でも遺構が集中する調査区北側からの出土が目立つ。

B 記 述 の 方 法

資料の掲載は、遺構・包含層・確認調査・工事立会の順で行った。包含層出土物については、おおむね時期ごとに掲載している。掲載資料の提示は実測図・写真で行い、遺物個々の詳細な諸属性については観察表に記載した。なお深鉢形土器・浅鉢形土器・鉢形土器（深鉢か浅鉢か不明なもの）、壺形土器・甕形土器・皿形土器・注口土器は、それぞれ深鉢・浅鉢・鉢・壺・甕・皿・注口と略して用いる。

C 分 類（第5図）

出土した土器の時間幅は縄文時代中期から弥生時代前期と幅広い。大半が破片資料であり、全体の器形及び文様構成が判明するものは非常にわずかである。そのため、新潟県内の既存の縄文・弥生土器編年〔高橋・阿部2019、田中・古澤2019、渡邊2019a、渡邊2019bなど〕を参考に、器形及び文様構成から時期が分かるものとは下記のとおりⅠ～Ⅴ群とし、時期は特定できず装飾性の之しい地文のみ施文される粗製土器をⅤ群として分類を行った。各々の細別時期をさらに算用数字で細類した。それ以上の細々時期は、土器の事実記載の項で述べる。時代のみ判別可能なものは群のみ記載した。

Ⅰ群 縄文時代中期 1類-前葉の土器 2類-中葉の土器 3類-後葉の土器

Ⅱ群 縄文時代後期 1類-前葉の土器 2類-中葉の土器 3類-後葉の土器

Ⅲ群 縄文時代晩期 1類-前葉の土器 2類-中葉の土器 3類-後葉の土器

Ⅳ群 弥生時代前期の土器 1類-前葉の土器

Ⅴ群 装飾性の之しい地文（無文・縄文等）のみ施文される粗製土器で時期の特定が難しいもの



第5図 主要縄文土器分類図

なお、包含層・排土、確認調査、工事立会、表面採集の土器を中心に、観察表にのみ掲載し、一部記載を省略したものがあがる。

土器の胎土については観察表に含有物のみ記載し、分類は行っていない。

D 土 器

1) 遺構出土土器 (図版13～15, 写真図版12・13)

SK1 (1～3) 2はI群3類の深鉢で直立気味に立ち上がる口縁部を持ち、沈線で区画された部分は縄文LRが縦位に充填されている。大木10式に比定される。1はIII群2類の浅鉢である。口縁部内面は「く」字状に肥厚し、頸部に無文帯を持ち、眼鏡状隆帯文が施される。三角形の突起の出る沈線で区画された上向きと下向きの横位C字文が半単位ずれて描かれ、その中には無節縄文Lで充填され、区画外は磨消されている。底部は不明瞭に成形され、よく磨かれている。上野原式に比定される。3はIII群の深鉢の体～底部である。外面は無文で縦方向に削られている。

SK50 (4) 4はIII群の小形の鉢である。薄手で縄文RLが横位に施文されている。

SK2 (5) 5はIII群の網目状燃系文が施文された深鉢である。底面に網代痕が残る。

SK4 (6・7) 6はIII群の外面ナデの無文の深鉢である。7はIII群の結節縄文LRの施文された深鉢片である。

SK8 (8～22) 8はII群2類の加曾利B式の精製土器の壺である。横位の沈線で区画された中に縄文LR・RLが横位に施文され、区画の上下が磨消されている。9はIII群2類の鉢である。小波状口縁で沈線の間に点刻列が、体部に横位の縄文LRが施文されている。大洞C1式古段階に位置付けられる。10はIII群2類の鉢である。口縁部端部に点刻列がある。体部には横位の縄文LRが施文されている。大洞C1式である。11はIII群2類の浅鉢である。口縁部に2条の沈線、その下に直線的な雲形文が描かれている。大洞C2式の土器である。12～20はIII群の土器である。12は口縁部近くが無文で、体部上半なかばから下半にわたって結節縄文LRが横位に施文された壺である。13はLR縄文が横位施文された深鉢、14はRL縄文が横位施文された深鉢である。15～20は網目状燃系文が縦位施文された深鉢である。16は口縁部資料、14は底部近くの資料である。21はV群の無文の鉢底部、22はV群の無文の深鉢底部である。

SK51 (23～28) 23はI群2類の浅鉢である。内湾した口縁部を持ち、縄文LRが横位に施文されている。24は全体形が寛るIII群2類の深鉢である。小波状口縁で口縁部に平行沈線文が3条、体部に結節縄文LRが横位に施文されている。文様の特徴から大洞C1～C2式段階と考えられる。25・26はIII群の深鉢である。直立した口縁部を持つ。27はIII群の網目状燃系文が疎らに施文された深鉢である。28は浅鉢底部片である。外面は無文で丁寧に磨かれている。時期はIII群で詳細時期は不明である。

SK27 (29～32) 29はIII群2類の浅鉢である。小波状口縁で口縁部に沈線が巡る。30・31はIII群3類、30は浮線文の施文された壺の頸部である。31は裏口縁部が波状口縁となり沈線が施文されている。両者とも鳥屋2式である。32はIII群の深鉢片で縄文LRが横位に施文されている。

SK20 (33～36) 33はIII群1類の注口土器の肩部である。内外面は赤彩されている。外面は沈線によって羊歯状文が描かれる。大洞BC式に相当する。34はIII群1～2類の深鉢である。口縁部端部に刻目文、体部に縄文LRが施文されている。大洞BC～C1式の土器と考えられる。35はIII群2類の皿である。雲形文の区画と、磨消縄文LRが確認できる。大洞C1式である。36はIII群の深鉢体部片である。結節縄文LRが横位に施文されている。

SK30 (37～40) 37はI群1類の深鉢体部片である。半截竹管による爪形文が横位に施文されている。新崎式である。38はII群1類の深鉢で縦の沈線で区画された中に縄文RLが縦位に施文されている。南三十稲場式の土器と考えられる。39・40は深鉢で、直立気味の口縁部に39は縄文LRが横位に施文され、40は縄文LRが斜位に施文されている。両者とも器壁が厚手でII群の後期中～後葉に該当すると考えられるが、詳細時期は不

明である。

SK45 (41・41) 41 はⅢ群の深鉢である。直立し、口縁部が若干内湾する器形で、結節縄文LRが横位に施文されている。

SK44 (42～49) 42 はⅠ群1類の半隆起線文が縦横方向に引かれている。新崎式である。43 はⅠ群2類の深鉢で沈線文と横位の縄文RLが施文されている。大木8b式土器に比定される。44 はⅢ群1類の浅鉢体部片で、沈線文が横方向に施文されている。大洞B式に比定される。45 はⅢ群1類の精製の注口土器の体部片で、羊歯状文が施文されている。大洞BC式である。46 はⅢ群2類の浅鉢である。口縁部にB突起があり、その下に2本の沈線文が横にめぐり、結節縄文LRが横位に施文されている。大洞C1式に比定される。47 はⅢ群の甕である。屈曲部であろう。縄文LRが横位に施文されている。48 はⅢ群の鉢、49 はⅢ群の深鉢である。それぞれ結節縄文LRが横位に施文されている。48の結節部は特徴的である。

SX28 (50～62) 50 はⅢ群の深鉢で沈線文と縄文LRが施文される。51 はⅢ群1類の鉢で羊歯状文が施文されている。大洞BC式である。52 は注口土器の内傾する口縁部で、羊歯状文が施文されている。大洞BC式である。53 はⅢ群1～2類の壺の口縁部で沈線文がめぐり、器面はよく磨かれ、内外面に赤彩が施されている。54・55 はⅢ群2類の浅鉢である。54 は雲形文が施文されている。大洞C1～C2式である。55 は体部片で外面に漆塗痕が残る。刻目文がめぐり磨消縄文LRが施文されている。大洞C2式である。56 はⅢ群2～3類の浅鉢で眼鏡状隆帯文がめぐり、大洞C2～A式である。57 はⅣ群1類の甕である。変形工字文に縄文RLが横位に施文されている。58 は全体形が確認できるⅢ群の深鉢である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。結節縄文Lが横位に施文されている。59～62 はⅢ群の深鉢である。59 は結節縄文Lが横位に施文されている。60 は結節縄文LRが横位に施文されている。61 は網目状燃糸文が縦位に施文されている。62 は無文の体～底部片で、体部はナデられている。底部は上げ底状で、底面に木葉痕が残されている。

Pit22 (63) Ⅲ群の深鉢体部である。結節縄文LRが横位に施文されている。

Pit5 (64) Ⅲ群の深鉢体部である。燃糸文Rが施文されている。

Pit7 (65) Ⅲ群の深鉢体部である。縄文LR(0段多糸)が斜位に施文されている。

Pit12 (66) Ⅲ群の深鉢体部である。結節縄文LRが横位に施文されている。

Pit26 (67) Ⅲ群の深鉢底部である。無文である。非常に軽い土器で、新津丘陵と異なる場所で製作された可能性がある。

Pit48 (68・69) 68 はⅢ群1～2類の鉢口縁部である。内外面に沈線文が施文されている。69 はⅢ群3類の深鉢体部片である。桑痕文が施文されている。

2) 包含層・排土出土土器 (図版15～19、写真図版13～16)

Ⅰ群1類 (70・71) 70 は深鉢の口縁部資料で半截竹管による半隆起線文と縄文LRが横位に施文されている。71 は深鉢の体部資料で半截竹管による半隆起線文と爪形文、交互刺突文が施文されている。どちらも新崎式である。

Ⅰ群2類 (72～75) 72 は深鉢の口縁部資料で頸部に沈線が横走る。73 は浅鉢の突起部である。半隆起線文が施文されている。74 は深鉢の底部である。外面に隆起線文が縦に施文されている。馬高式の火焰型土器あるいは王冠型土器と考えられる。75 は深鉢の口縁部近くの資料である。渦巻文が施文されている。中期中葉から後葉に比定される。

Ⅰ群3類 (76・77) 76 は深鉢体部資料で磨消縄文LRが施文されている。大木9式に相当する。77 は深鉢の肥大する口縁部資料である。縄文RLが横位に施文されている。

Ⅱ群1類 (78・79) 78 は深鉢体部片で特徴的な刺突文が施文されている。三十稲場式である。79 は深鉢口縁部片で短沈線文が施文されている。南三十稲場式である。

Ⅱ群2類 (80・81) 80 は直立気味の口縁部を持つ深鉢で、羽状縄文RL・LRが施文されている。加曾利B式

の土器である。81は肥大する口縁部を持つ深鉢である。波状口縁部の一部で、口縁に沿って刻目文が施文され、沈線に区画された下半に羽状縄文 LR・RL が施文されている。加曽利 B 式である。

Ⅲ群3類 (82～89・212) 82～84は注口土器で、そのうち82・84に貼瘤が認められる。貼瘤が認められない83も含め、すべて瘤付土器の注口土器類と考えられる。82は横割長瘤が、84はブタ鼻状の横長瘤が貼付される。85は深鉢の口縁部である。浅い沈線の区画内に磨消縄文 LR が施文されている。86は深鉢の体部で、磨消縄文 LR が横位に施文されている。87は深鉢体部で沈線で区画された中に縄文 RL (0段多糸) が施文されている。88は注口土器体部片である。胎土は細粒で他の土器とは異質である。細い平行する2本の沈線が縦と横に引かれている。89は深鉢体部で羽状縄文 RL・LR が横位に施文されている。212は多孔底土器の底部破片である。径5mm程度の細かい孔が穿たれている。89は後期中葉の土器の可能性もある。

Ⅲ群1類 (90～95) 90は鉢口縁部片で玉抱三叉文が施文されている。91は深鉢口縁部で沈線文が交叉するように描かれ、縄文 LR が下半に施文されている。92は注口土器の体部片である。C字状文が施文されている。90～92は大洞 B 式である。93は鉢体部片で2列の截痕列珠文が施され、その下に縄文 LR が施文されている。94は鉢体部で羊歯状文が施文されている。95は鉢体部片で沈線間に点刻列が施文されている。93～95は大洞 BC 式土器である。

Ⅲ群2類 (96～112, 157・158・160・161・169) 96・97・99～103は雲形文の施文された浅鉢である。100の雲形文のみ彫刻が深く立体的で古い要素と考えられる。その他は沈線によるものである。97・99は口縁部に B 突起を持つ。縄文はすべて LR である。98は口縁部と底部資料から復元した皿である。口縁部に三山状突起、内面に一条の沈線、外面は沈線による雲形文が施文されている。96～103は大洞 C1 式である。104は鉢体部で、内外面に刺突文、外面の縄文は LR である。105は無文の鉢である。104・105は大洞 C1～C2 式である。106～108は浅鉢で、106の口縁部内面は「く」字状に肥厚し、頸部に無文帯を持ち、溝底の刺痕がその下位に施文されている。沈線で区画された中は磨消縄文 LR が施文され、沈線で直線及び逆 C 字の文様が描かれている。107は沈線が2条確認できる浅鉢の下半である。108は磨消縄文 LR が施文されている。109・110は鉢で、109は刺突文が、110は磨消縄文 LR が施文されている。111は長胴の壺口縁部で入組内彫文が施文されている。106～111は大洞 C2 式に併行する土器である。その中でも106の器形は1の上野原式浅鉢に似るが眼鏡状隆帯が無く、溝底の刺痕の存在から上野原式より古い大洞 C2 式中段階の土器と考えられる。112は台付鉢の脚部である。2条の沈線が施文されている。大洞 C1～2 式である。157・158・160・161・169は縄文施文の深鉢である。157・158は口縁部に刻目文が施文され、157は体部に結節縄文 LR が横位に、158は体部に縄文 RL 系が縦位に施文されている。158は器形が球胴体の形状で在土器とは異質である。東北地方南部の影響 (佐藤 1985) を受けている可能性がある。160は小形の土器で屈曲した口縁部下に縄文 LR が横位に施文されている。161は沈線で区画された上下で異なる縄文施文手法を用いており、上が結節縄文、下が羽状縄文である。169は口縁部に波状突起、口縁外面に2条の平行沈線文、その下に網目状断糸文が縦位に施文されている。

Ⅲ群3類 (113～124, 127～152, 159, 185～204) 113は浅鉢の口縁部片で屈曲した受口状の口縁を持つ。眼鏡状隆帯文の下に工字文が施文されている。114は鉢口縁部である。工字文が施文されている。115は浅鉢片で太い沈線文が施文されており、よく磨かれている。116・117は同一個体と考えられる深鉢口縁部片で、平行沈線文の間に刺突文が施文されている。113～117は鳥屋 1 式の土器と考えられる。118は、大形の身が深い浅鉢である。口縁部は直線的に立ち上がり、緩い波状である。工字文が沈線で施文され、三叉状文が対向する。眼鏡状隆帯文は完全に消失している。工字文の文様は、鳥屋 1 式の浮線文を模倣した大洞 A 式の土器で、鳥屋 2a 式の直前段階に相当する。119・120は浮線文が施文された浅鉢である。鳥屋 2 式に比定される。121は浅鉢の口縁部で、内外面亦彫され、浅い沈線が施文されている。122・123浅鉢の下半部である。無文でよく磨かれている。124は鉢口縁部である。三条の平行沈線文が、その下に縄文 LR が横位に施文されている。127・

128は壺である。127には細かい条痕が施文され、128は無文である。121～128は晩期後半で詳細時期は不明である。129～141、143～145は甕である。破片資料が多く、一部深鉢が含まれる可能性がある。129・130・141は浮線文が施文されている。130は口縁部に縄文LRが横位に施文されている。鳥屋2b式である。131・132は上半の全体形が復元できた甕である。131は口縁部に横位の縄文LR、その下に沈線が施文される。頸部の無文帯を挟み、体部には横位の結節縄文LRと6条の平行沈線が施文されている。132は口縁部下位に2条の沈線、頸部の無文帯を挟んで下位にやや崩れた綾杉文が施文されている。鳥屋2式である。内面にアスファルトが付着している。133は肥厚口縁を持ち、体部に縄文Lが横位に施文されている。134・135は内外面に沈線が施文されている。136・137は平行沈線文が外面に施文されている。138・139は深鉢口縁部資料で、オオバコの花茎など植物を回転した擬縄文(大沼1986、大沼・進藤1988、佐藤2000)が口縁部上端に施文されている。鳥屋遺跡の出土例¹⁾(第46図632・633)[関はら1988]から晩期後半とした。139は無文の口縁部片、140は体部に条痕が施文され、よく磨かれた口縁部～体部片である。143は平行沈線文と0段多条の縄文LRが横位に施文されている。144・145(表採)は同一個体、結節縄文と極細の条痕文が施文されている。145の内面にはアスファルトが付着する。142・146～152・185～204は深鉢である。破片資料が多く、一部甕が含まれる可能性がある。142は鳥屋2式の浮線文が施文された土器である。146は沈線文で施文されている。147・148は沈線間に短沈線が施文されている。149・150は同一個体で口縁外面に4条の沈線文、その下に縄文Rが横位に施文されている。151・152は沈線文の下に結節縄文LRが横位に施文されている。185は口縁外面に条痕文が施文された後、沈線文が施文されている。186は口縁外面に沈線文が1条施文されている。187・189～192は肥厚口縁で体部は無文である。188は口縁部資料で、条痕文が横位に施文されている。193は口縁部資料で外面ナデの無文土器、194は口縁部片で沈線文が施文されている。195～198、200～203は体部片で条痕文が施文されている。202の内面にはアスファルトが付着している。204は底部資料で外面には条痕文、底面には網代痕が残る。199は体部片で沈線文が施文されている。

その他Ⅲ群土器(図版19-4・5)4は小形土器の甕である。受口状の口縁部を持ち、非常に薄手の造りである。無文である。5はタコの吸盤状の形状をした小形土器の脚部と考えた。指頭圧痕が残る、無文である。4・5は詳細時期不明である。

Ⅳ群1類(213～224)213・223が深鉢、214～222が甕、224が壺である。213は口縁部に刺突文、平行沈線文が施されている。晩期終末の土器の可能性もある。214・216～221・224は変形工字文が施文されている。断面三角形に近い沈線が特徴的である。215は口縁部に沿って沈線文が施文されている。222・223は沈線文と縄文LRが施文されている。214～224は全て緒立式土器の範疇で捉えられる。

Ⅴ群(125・126、153～156、162～168、170～184、205～211)153～156・162～168は外面に縄文が施文された土器、170～182は外面に網目状懸糸文が施文された土器、183・184は懸糸文Rが施文された土器、205～210は外面無文の底部資料、211は底面に網代痕が残る底部資料である。縄文等の詳細は別表2の観察表による。大部分は晩期の土器と考えられる。

その他の土器 265は表土剥ぎ時に出土した近世末から近代初頭の村松焼(石川1976)の六角皿である。暗オリーブ色の釉薬が掛けられている。型押の陽刻で若葉文が施されている。

3) 確認調査出土土器(図版18、写真図版16)

1T(225～228)225はⅢ群3類の甕の口縁部で、沈線文が1条施されている。226はⅢ群3類の深鉢口縁部である。肥厚口縁で外面はナデ調整されている。227はⅢ群の直立気味に立ち上がる無文の深鉢である。228はⅣ群1類の甕体部片で変形工字文の下に縄文LRが施文されている。緒立式に比定される。

3T(229～240)229はⅠ群1類の深鉢口縁部の突起部である。半截竹管による爪形文が横位に施文されてい

1) 鳥屋遺跡の報告では「布目状の特殊原体による施文がみられる」と記載されている。田中耕作氏のご教示による。

る。新崎式である。230はⅡ群3類の縦長瘤が貼付された瘤付土器の注口土器類である。231～234はⅢ群2類の土器で、231・233・234は浅鉢、232は鉢の口縁部である。231は雲形文で縄文LRが施文されている。232は無文で小突起がある。両者ともに大洞C1式である。233は平行沈線文と縄文LRが施文されている。大洞C2式である。234は溝底の刺痕が施文された大洞C2式である。235はⅢ群3類の浮線文が施文された甕口縁部である。鳥屋2式である。236はⅢ群の無文深鉢口縁部である。237・238はⅢ群の深鉢体部片で網目状然糸文が縦位に施文されている。239はⅢ群3類の深鉢体部片である。糸痕文が施文されている。240はⅣ群1類の甕口縁部である。口縁外面に沈線文が施文されている。非常に薄手である。緒立式である。

確認調査時排土 (241～247)

241はⅢ群1類の入組文が施文された注口土器である。大洞B式である。242はⅢ群2類の甕体部である。浅い刺突文の下に縄文RLが横位に施文されている。大洞C1式である。243はⅢ群3類の甕口縁部である。工字文と糸痕文が施文されている。鳥屋2b式である。244はⅢ群3類の甕口縁部である。山形突起部があり糸痕文が施文された上に沈線が2条引かれている。鳥屋2式の土器である。245・246はⅢ群3類の深鉢で肥厚する口縁部である。糸痕文が施文されている。247はⅢ群の無文の鉢口縁部で詳細時期は不明である。

4) 工事立会出土土器 (図版18・19, 写真図版16)

249～250はⅠ群2類である。249は深鉢口縁部である。波状の口縁部で半截竹管による隆起線文と縄文LRが施文されている。250は深鉢の下半の資料で、半隆起線文が縦位に施文されている。馬高式である。251はⅡ群3類の注口土器、瘤付土器の類である。十字刻み瘤が貼付されている。252はⅢ群2類の浅鉢体部で雲形文が施文されている。大洞C2式に比定される。254はⅢ群3類の体部片で糸痕文が施文されている。248・253はⅢ群で詳細時期不明である。248は深鉢体部で縄文LRが斜位に施文されている。253は浅鉢体部で沈線が施文されている。255～259はⅣ群1類の緒立式である。255・256は同一個体の広口壺である。外面が赤彩され、変形工字文と縄文RR(反巻の縄)が横位に施文されている。257は壺の内傾する口縁部である。口縁には山形沈線文が、その下の文様帯には変形工字文と横位の縄文LRが施文されている。258は甕体部である。変形工字文と横位の縄文LRが施文されている。259は深鉢口縁部である。口縁外面に波状沈線文と横位の糸痕文が施文される。

5) 表面採集土器 (図版19, 写真図版16)

本発掘調査地点の調査前の採集資料である。260はⅠ群2類の深鉢体部である。半隆起線文が縦位に施文されている。261はⅡ群1類の深鉢体部である。多条沈線文が縦位に施文され、その間に刺突の縦列が2条施されている。262はⅡ群3類の深鉢体部である。磨消縄文LRが施文され、丁寧に磨かれている。263・264はⅢ群の深鉢である。263は縄文RL(横位)が、264は縄文L(横位)が施文されている。

第2節 土製品・漆製品・アスファルト (図版19, 写真図版17)

A 土製品 (1～3, 10, 11)

1・2はSK20出土の土版である。1は平面形が略楕円形の無文土版である。下面は欠損している。所々に圧痕が残る。器面が固く、二次焼成を受けているかもしれない。2は上下が欠損した有文の土版である。浅い沈線が表裏面に残り、直線状、渦巻状を表している部分もあるが、文様構成ははっきりとしない。晩期の前～中葉の土器が同土坑から出土していることから晩期の所産と考えられる。3はSK51から出土した土版の中間部分である。表面に渦巻状の沈線がある。1・2同様に晩期の所産と考えられる。

10は、工事立会で出土した土偶の胴部片である。正面上部の左右に欠落した人体の乳房表現部分があり、背面に渦巻状の沈線がある。胴部下半には多条の沈線が施される。縄文時代後期前葉の所産と考えられる。

11は採集資料の有孔球状土製品〔小島1980・1983〕の破片である。有孔球状土製品は平面形がシンメトリー

な円あるいは楕円形で、断面形が円形となり長軸中央に貫通する孔がある。破片短軸方向と長軸方向に2～3本の沈線が確認できる。短軸方向の沈線は一周するのだろう。有孔部は確認できない。縄文時代後期中葉以降と考えられる。

B アスファルト (6～9)

6～9は全て包含層から出土したアスファルトである。8は表面に管状の草の茎状の痕跡が多数残っている。遺跡に搬入された際に草等で巻かれていたとも考えられる。

C 漆 製 品 (12)

藍胎漆器の一部と考えられる。表裏面に朱漆が塗布されていた痕跡がある。上部が湾曲していたことから波状の口縁であったと考えられる。X線写真を撮影したが、藍胎の骨組構造は痕跡が確認できなかった。器面の厚みから小形の容器と推定される。

第3節 石器・石製品 (図版20～26、写真図版18～23、別表4～10)

A 概 要

石器・石製品の本発掘調査での出土数は総数589点(実測数135点)である。内訳は石鏃26点(実測数26点)、石鏃未成品9点(同9点)、石錐5点(同5点)、石鏡1点(同1点)、不定形石器36点(同18点)、楔形石器12点(同6点)、剥片422点(同12点)、石核30点(同23点)、磨製石斧6点(同6点)、磨製石斧未成品1点(同1点)、砥石6点(同2点)、石皿1点(同1点)、磨石8点(同4点)、敲石6点(同6点)、凹石5点(同2点)、磨石+敲石7点(同6点)、磨石+敲石+凹石1点(同1点)、敲石+凹石4点(同4点)、石棒1点(同1点)、軽石製石製品1点(同1点)、パステル形石製品1点である。確認調査での出土数は敲石1点で、工事立会では5点の石器が出土している。内訳は、剥片2点(実測数1点)、石核1点(同1点)、磨石2点(同2点)である。調査地点の表面採集では、7点採集した。内訳は、剥片6点、石皿1点(実測数1点)である。

石器・石製品の観察表は別表4、遺構別石器器種別組成と搬入際組成は別表5に示した。また、調査別石器組成を別表6に、全体の石器組成と石材組成は別表7に、石器実測点数は別表8に、調査別燻・焼燻点数を別表9に、遺構別石器石材組成表を別表10に示した。石器・石製品で遺構出土のものは遺構ごとに、包含層出土のものは器種ごとに、表面採集と工事立会出土のものは本発掘調査の後にまとめた。一部の石器器種で破片が多く、認定が不明確なものは図示していない。以下、別表6の石器組成順に記述する。

石器の出土地点は、図版12に示したとおり調査区北側に偏る傾向がある。出土層位はⅢ層が多い。

遺構からの出土状況は、石鏃に多い傾向がうかがえSK8で3点、SK44で2点(いずれも未成品)、SK50・27・45、SX28で各1点出土する。

別表7で石材組成をみると、剥片石器の石材は珪質頁岩、玉髄質珪質頁岩、凝灰岩、玉髄、鉄石英(赤・黄玉)など越後平野周辺で採取される在石材材が確認されている。特に玉髄が多い。また、長野県産黒曜石や糸魚川市周辺の透閃石など明らかに遠隔地の石材も用いられている。石材については第七章で詳しく説明する。磨石類は凝灰岩、花崗岩など信濃川・阿賀野川で容易に確認できる石材を用いている。

B 分 類 (第6図)

種別ごとに分類を示す。

石鏃「矢の先端につける石製の矢じり」と定義され、(鈴木1981)の分類案を参考にした。

完成品と未成品・失敗品との区別が難しいものもあるが、ある程度分類可能なものは完成品と扱った。

大きく3種類に分類し、基部に茎を持たない「無茎鎌」をA類とした。B類は基部に茎を持つ有茎鎌で、そのうち基部両側に挿入のある「凹基有茎鎌」をB-1類、基部が平行な「平基有茎鎌」をB-2類、基部が突出する「凸基有茎鎌」をB-3類、基部の片側が突出する「片凸基有茎鎌」をB-4類とした。C類は基部が尖るもので「尖基鎌」とした。

石鎌は26点¹⁾出土している。

石鎌未成品 製作途中と推定される石器であり、失敗品なども含んでいると考えられる。9点出土している。分類は行っていない。

石錐 調整剥離によって鋭利な先端部が作出された石器のうち、「石製の錐」[鈴木1981]と考えられるものを石錐とした。5点出土している。分類は行っていない。

石篋 篋形の両面あるいは片面に加工された石器である。篋状石器とも呼ばれる[鈴木1981]。両面に加工されたものが1点出土している。

不定形石器 剥片等に二次加工の施された石器で定形的な形態とならないものを不定形石器とした。36点出土している。分類は行っていない。

楔形石器 両端に両極剥離による剥離痕が認められるものを楔形石器とした。小形の石核と区別が難しいものも存在するが、最終段階に両極技法[岡村1976]が用いられたものを楔形石器とした。12点出土している。残核が用いられたものをA類、剥片が用いられたものをB類とした。

剥片 石核から打撃により採取された石片を剥片と呼称する。422点出土している。分類は行っていない。

石核 原石や礫などから剥片を採取する目的で剥離を行ったものを石核とした。30点出土している。厚みのある円礫あるいは角礫素材のものをA類、板状に薄い礫素材のものをB類とし、B類は上下の2方向からの剥離痕が残るB-1類と上下左右の4方向からの求心的な剥離痕が残るB-2類に分けた。打面転移の結果、略立方体状の形状をした石核をC類とし、大形のC-1類と小形のC-2類に分けた。素材面が残らず剥片あるいは節理面で割れた砕片を素材としたものをD類とした。

磨製石斧 側縁が平行ないしは八字状で、刃部が研磨によって両刃に作出された石器である。長さ50mm前後で、従来蛇紋岩と呼び慣わした透閃石製の磨製石斧をA類、長さ推定100mm以上の緑色岩類製の磨製石斧をB類とした。7点出土しているが、1点は未成品である。

砥石 対象物を研いだ砥面が残る石器である。6点出土し、珉化木製の2点を図示した。分類はしていない。

石皿 対象物をすり潰す台などとしての機能があると考えられ、緩やかに内面が窪む石器を石皿とした。破片資料が2点出土している。

磨石類 磨石・敲石・凹石に区別されるものと、それぞれの機能が複合した形態の石器を一括した。磨石+敲石・磨石+敲石+凹石・敲石+凹石などが複合した石器である。31点出土している。

石棒 断面形が丸く、一隅あるいは両端が肥大し、全面がほぼ研磨された石製品を石棒とした。破片資料1点のみ出土している。

軽石製石製品 軽石を用いた石器類を一括して呼称した。1点のみ出土している。

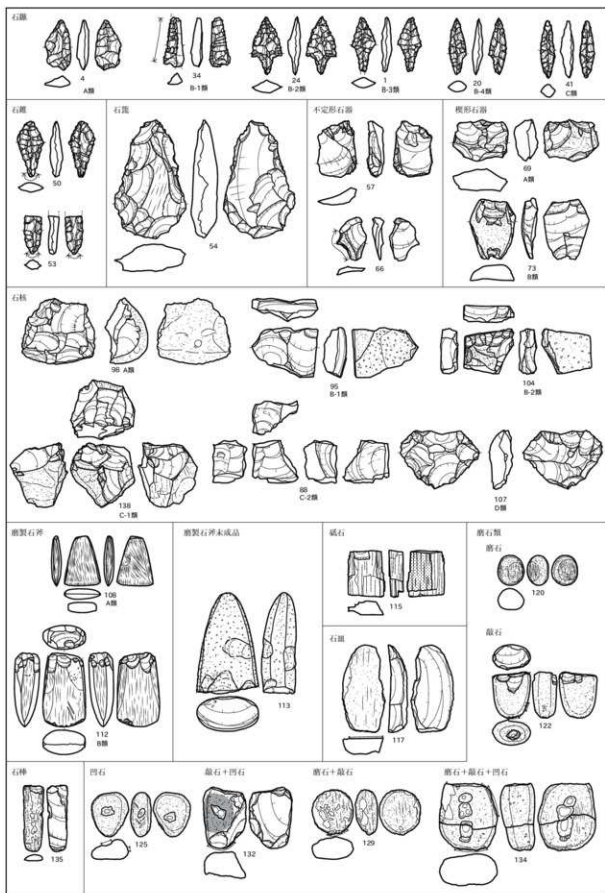
パステル形石製品 「パステル形をした石製品」[藤田1991]をパステル形石製品とした。1点のみ出土しているが小片のため図示していない。

C 石 器

1) 遺構出土石器 (図版20、写真図版18)

別表5に遺構出土石器・礫の石器器種別・搬入礫組成を提示した。剥片及び礫が少量出土したのみの遺構の

1) 以下、出土点数は本発掘調査での出土数である。



石鏟・石鏟・石鏟・不定形石器・楔形石器・石核 (138以外)・礫石 (S=1/2) 磨製石核・磨製石核未成品・石棒 (S=1/4) 石核 (138)・石鏟・礫石 (S=1/4)

第6圖 主要石器分類圖

記載は省略した。

SK50 石鏃 (1) が出土している。B-3 類である。

SK8 石鏃 (2~4)、剥片 (5)、そのほか図示していないが剥片 3 点が出土している。2 は C 類、3 は基部が欠損しているため分類不明、4 は平基の A 類である。

SK51 不定形石器 (6) と敲石 (7)、そのほか図示していないが不定形石器 1 点と剥片 5 点が出土している。6 の不定形石器は剥片の下縁に調整刻離が見られる。

SK27 石鏃 (8)、不定形石器 (9)、そのほか図示していないが剥片 3 点が出土している。8 は B-3 類、9 は表裏面に調整刻離を施している。

SK30 軽石製石製品 (10) が出土している。使用の痕跡は風化で明瞭でない。

SK44 石鏃未成品 (11・12)、不定形石器 (13・14)、敲石 (15・16)、磨石 + 敲石 (17)、そのほか図示していないが剥片 2 点が出土している。

SK45 石鏃 (18)、不定形石器 (19)、そのほか図示していないが剥片 1 点が出土している。18 は石鏃の再生品と考えられる。正面の先端から左側縁にかけては衝撃痕と思われる桶状刻離が見られ、正裏面にはわずかにアスファルトが付着する。19 は残核を用いたものと考えられる。

SX28 石鏃 (20)、石鏃 (21)、磨石 (22)、敲石 + 凹石 (23)、そのほか図示していないが不定形石器 1 点、楔形石器 1 点、剥片 19 点、石核 1 点が出土している。20 は B-4 類で、アスファルトが側面にわずかに付着している。21 は礫面が残る剥片を素材とした石鏃である。

2) 包含層・排土出土石器 (図版 21~26、写真図版 18~23)

石鏃 (24~42) 包含層から 14 点、排土から 5 点出土している。全点を図示した。24・29 が B-2 類、25~28・30・31・32・38・39 が B-3 類、35・36・40・41 が C 類、33・37・42 が先端部破片で分類不明である。24・32 は、基部近くにアスファルトが付着している。34 は正面右側縁が衝撃刻離で大きく欠損するが、片側の基部状況から B-1 類と推定できる。なお左側縁は鋸歯状に仕上げている。

石鏃未成品 (43~49) 包含層から 5 点、排土から 2 点出土している。全点図示した。すべて平坦あるいは周縁調整が施されている。玉髓製の礫表皮の残る資料 (43・45) が出土しており、礫表皮の残る玉髓の石核及び剥片類が多く出土したことに対応する。遺跡内での石鏃製作が考えられる。

石鏃 (50~53) 包含層から 3 点、攪乱から 1 点出土した。すべて図示した。先端部と基部が区別されるもの (50・51) と棒状と考えられるもの (52・53) に区別される。50・53 は回転による磨減痕が観察される。[石川 1996] の指摘があるように、縄文時代晩期の石鏃と石鏃は形態が類似し、磨減痕あるいはアスファルトの付着、機能部となる先端部の太さなどを勘案しなければ区別できないものも存在する。50 は石鏃からの転用品の可能性があらる。

石鏃 (54) 包含層から 1 点のみ出土した。緑色凝灰岩を石材とし、剥片を素材とし、パチ状に開く形態で、先端部は交互刻離で作出されている。しかし、両側縁の二次加工は粗雑で刃部の作出も不十分なことから、石鏃未成品ないしは石鏃未成品の可能性もある。

不定形石器 (55~58、60~67・80) 包含層から 19 点、攪乱から 4 点、排土から 6 点出土している。このうち 13 点を図示した。玉髓製の小形のもの (55・57・60・65~67) が多く存在し、いずれも剥片の縁部に 1・2 か所のノッチ状の刻離を入れる石器が特徴である。

楔形石器 (68・69・71~74) 包含層から 10 点、排土から 1 点出土している。このうち 6 点を図示した。69・74 が A 類、68・71~73 が B 類である。玉髓・鉄石英 (赤玉)・玉髓質珪質頁岩など比較的硬質な石材を用いている。

剥片 (59・75~79・81~85) 包含層から 288 点、攪乱から 27 点、排土から 66 点出土した。このうち 11 点を図示した。石材は、玉髓の比率が高い。84・85 に図示したように、20~50mm 程度の背面に礫面を持つ

資料が多く、石核の記載で後述する円礫素材あるいは板状礫素材の石核との対応関係があり、小形の剥片石器の製作に用いる素材としての役目も考えられる。また、黒曜石の資料が出土しており、産地分析の結果、75が金山産（新潟）、76が諏訪星ヶ台産（長野）とされている（第VI章参照）。

石核 (70・86～107) 包含層から23点、攪乱から1点、排土から5点出土している。このうち23点を図示した。90～94・96～100・102・105・106をA類、95をB-1類、70・103・104をB-2類、88をC-2類、86・87・89・101・107をD類とした。剥片と同様に玉髓製の石核が多く確認できる。また、剥片同様、礫面を残す資料が多く、小形の円あるいは角礫を用いたA類と板状礫を折断し用いているB類の資料が多用されている。

磨製石斧 (108～112、114) 包含層から5点、排土から1点出土した。すべて図示した。108・109はA類、110～112・114はB類である。108はバチ形の完形品である。109は刃部が破損しているがほぼ108と同様の小形品である。110は端部と刃部が欠損した中間部位である。研磨が全面に確認できないことから未成品の可能性もある。111は刃部が欠損している。112は刃部側の資料で両刃に成形されている。破損後に末端が上端から縦方向に剥離が入っている。敲打痕は明瞭でないが、このような形態のものは、[名久井2019]で指摘されているように「木割り楔」の可能性があり、114は逆に刃部が欠損後破損面から上に剥離を行っている。敲石等への転用品の可能性もある。

磨製石斧未成品 (113) 包含層から1点出土した。敲打段階で破損したものであろう。

砥石 (115・116) 包含層から6点出土している。そのうち珪化木製の2点を図示した。115・116ともに軟質な珪化木の表面・側縁を砥面としている。珪化木の石器への利用は新発田市中野遺跡（関本ら1997）でも確認されている。

石皿 (117) 包含層から1点出土した。117は砂岩を用いた石皿の機能部の破片である。

磨石類 (118～134) 包含層から磨石が3点、敲石が3点、凹石が5点、磨石+敲石が5点、磨石+凹石+凹石が1点、敲石+凹石が3点出土した。排土から磨石が3点、磨石+敲石が1点出土した。そのうち17点を図示した。118～120は磨石、122～124は敲石、125・126は凹石、121・127～130は磨石+敲石、131～133は敲石+凹石、134は磨石+敲石+凹石である。凝灰岩・花崗岩など新津丘陵の古段丘などの3次堆積物を含めた阿賀野川・信濃川流域に分布する河原石が使われている。

石棒 (135) 粘板岩製の石棒破片が1点出土した。入念に研磨され、粘板岩を石材としていることから縄文時代晩期の東北地方に分布の中心がある石棒の一群と考えられる（大工原ら2020）。直径30mm前後の石棒と考えたが、破片資料のため石刀の可能性もある。

バスター形石製品 包含層から1点出土しているが、小片のため図化は省略した。石材は滑石である。

(3) 確認調査出土石器

敲石が1点出土している。図示していない。

(4) 表面採集出土石器（図版26、写真図版23）

剥片6点、石皿1点が採集されている。

石皿 (136) 調査地で採集された花崗岩製の石皿片である。機能部のみで縁辺部が失われている。

(5) 工事立会出土石器（図版26、写真図版23）

剥片2点、石核1点、磨石2点が出土している。

剥片 (137) 珪質頁岩製の縦長剥片である。表面に礫面が残る。

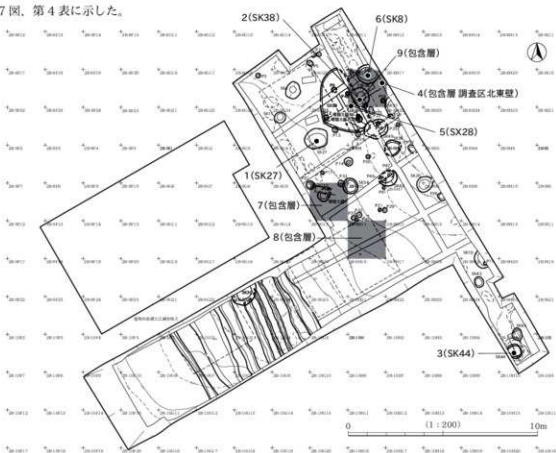
石核 (138) 珪質頁岩製の石核である。C-1類に分類される。大形の亜角礫を素材としている。

磨石 (139・140) 139・140ともに円礫を素材としている。

第VI章 自然科学分析

第1節 概要

原遺跡では、検出された遺構や出土遺物の状況に合わせ、自然科学分析を実施した。遺跡や遺構の性格、遺物の年代、遺跡周辺の自然環境や植生などを効果的に把握することを念頭に置き、内容を検討した。採取地点等は第7図、第4表に示した。



第7図 自然科学分析サンプル採取位置図

第4表 原遺跡第10次調査自然科学分析試料一覧表

凡例 1 地点番号 第7図中の番号を示した。
 2 グリッド 遺構内、又は自然環境における試料採取地点のグリッドを示した。数値的記号年代測定に用いた土層内や遺構石室地階等に用いた測位試料については2次地点のグリッドを表す。
 3 試料番号 分析報告の文号または表中に試料番号が付きされているものは、そのまま表に示した。
 4 土壌採取法 土量は40×62cmの規格の袋に7割程度採取している。

地点番号	遺構	層位	グリッド	時代	分析種別・試料番号									土量数	
					第2部 植物ミセル体	第3部 花粉	第4部 樹核	第5部 線虫	第6部 サン・カルシウム	第7部 14C	第8部 炭素質	第9部 遺明炭素			
1	SK27	1	2B-8G24・25	縄文				1							11
		2				2		2						6	
2	SK38	1	2B-8H16	縄文											2
		2						4					3		
3	SK44	4	2B-10H5	縄文											2
		6												5	
4	包含層	1	2B-8H16	縄文											8
		2													
5	SK28	1	2B-8G20・25、 8H12	縄文											68
		2												40	
6	SK8	1	2B-8H11・16	縄文											
7	包含層	1～3	2B-9H11	縄文											
8	包含層	1～2	2B-9G10	縄文											
9	包含層	1	2B-8H16	縄文											

第2節 プラント・オパール（植物珪酸体）分析

杉山 真二（(株)古環境研究所）

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあとガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山 1984）。

B 試 料

分析試料は、縄文時代とされるSK27の1層（No.1）と2層（No.2）、SK44の7層（No.3）、及び基本層のⅢa層（No.4）とⅢb層（No.5）の計5試料である。いずれも花粉分析に供された試料と同一である。

C 分析 方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原 1976）を用いて、次の手順で行った。

- (1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- (2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- (3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- (4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- (5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレバート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

D 分析 結果

1) 分類 群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第5表および第8図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）

〔イネ科一タケ亜科〕

チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

〔樹木〕 その他

2) 植物珪酸体の検出状況

a SK27

1層 (No.1) と2層 (No.2) では、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木 (その他) などが検出され、1層 (No.1) ではススキ属型、ウシクサ族Aも認められたが、いずれも少量である。

b SK44

7層 (No.3) では、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族Aなども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、量的には少ないものの、チマキザサ節型がやや優勢となっている。

c 基本層

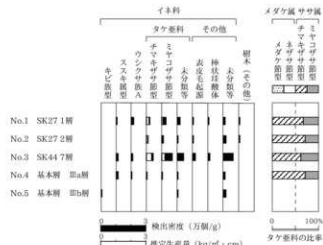
Ⅲa層 (No.4) ではススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型など、Ⅲb層 (No.5) ではキビ族型などが検出されたが、いずれも少量である。

E 考 察

SK27の覆土、SK44の覆土底部、基本層のⅢa層の堆積当時は、量的には少ないものの、ササ属 (チマキザサ節やミヤコザサ節など)、ススキ属、ウシクサ族 (チガヤ属等) などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺には部分的に何らかの樹木が生育していたと推定される。ササ属のうち、チマキザサ節・チシマザサ節は日本海側に広く分布しており、積雪に対する適応性が高いが、ミヤコザサ節は積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している。両者の分布境界はミヤコザサ線とよばれ、最大積雪約50cmの等深線とほぼ一致している (室井1960, 鈴木1996)。このことに着目して、両者の推定生産量の比率から過去の積雪量の推定が試みられている (杉山2000・2017など)。ここではチマキザサ節・チシマザサ節がやや優勢であることから、当時は最大積雪深が約50cmを超えていた可能性が考えられる。

第5表 原遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×1000個/g)		地点・試料				
分類群	学名	1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae					
キビ族型	Panicaceae type					6
ススキ属型	Miscanthus type	6		12	12	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	19		12	6	
タケ亜科	Bambusoideae					
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	25	13	48	6	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassimodi	31	13	72	6	
未分類等	Others	19	6	42	6	6
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	6	6	18		
棒状珪酸体	Rod-shaped					
未分類等	Others	13	19	66	12	18
樹木起源	Arboreal					
その他	Others	6	6			
植物珪酸体総数	Total	132	63	282	49	31
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/㎡・cm) : 試料の検出率を1.0と仮定して算出						
ススキ属型	Miscanthus type	0.08		0.15	0.15	
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.19	0.09	0.36	0.05	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassimodi	0.09	0.04	0.22	0.02	
タケ亜科の比率 (%)						
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	67	71	63	71	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassimodi	33	29	38	29	
メダケ率	Medake ratio	0	0	0	0	



第8図 原遺跡における植物珪酸体分析結果



第9図 原遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)

第3節 花粉分析

金原正子（株）古環境研究所

A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に活用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

B 試料

分析試料は、SK27 (2B-8G25) の1層 (褐色シルト)、2層 (にぶい褐色シルト)、SK44 (2B-10H5) の7層 (黒褐色シルト)、調査区北東壁 (基本層) (2B-8H16) のⅢa層 (にぶい褐色シルト)、Ⅲb層 (褐色シルト) の計5点である。いずれも時期は縄文時代である。

C 方法

花粉の分離抽出は、中村 [1967] の方法をもとに、以下の手順で行った。

- (1) 試料から 1cm³ を採量
- (2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12水) 溶液を加え 15分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.25mm の篩で裸などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- (4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30分放置
- (5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエドマン氏液を加え 1分間湯煎) を施す
- (6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- (7) 沈澱にチール炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレバート作製
- (8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉 [1973]、中村 [1980] を参照して行った。イネ属については、中村 [1974・1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

D 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、シダ植物胞子 1 形態の計 2 である。これらの学名と和名及び粒数を第 6 表に示し、顕微鏡写真に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科

[シダ植物胞子]

三条溝胞子

第6表 原遺跡における花粉分析結果

分類群	2B-8G25		2B-10H5	2B-8H16		
	SK27	SK27	SK44	基本層	基本層	
学名	和名	1層	2層	7層	Ⅲa層	Ⅲb層
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			1		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科					
Fern spore	シダ植物胞子					
Trilate type spore	三条溝胞子			1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			1		
Total pollen	花粉総数	0	0	1	0	0
Pollen frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の花粉密度			1.6×10		
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	1	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	1	0	0
Parasite eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal・woods fragments) (×10 ³)						
未分解遺体片		7.5	2.2	5.8	0.9	1.5
分解質遺体片						
炭化遺体片 (微粒炭)		0.4				

2) 花粉群集の特徴

a SK27 (2B-8G25) 1層、2層

花粉、シダ植物胞子、寄生虫卵ともに検出されなかった。微細植物遺体についても、分解質遺体片がわずかで、炭化遺体片(微粒炭)が極わずかに出現するのみである。

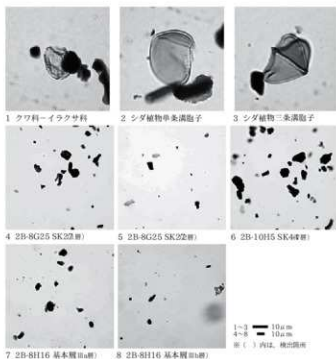
b SK44 (2B-10H5) 7層

樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科、シダ植物三条溝胞子がわずかに検出されるだけである。微細植物遺体では、分解質遺体片がわずかに検出される。

c 調査区北東壁(基本層)(2B-8H16)

Ⅲa層、Ⅲb層

花粉、シダ植物胞子、寄生虫卵ともに検出されなかった。微細植物遺体についても、分解質遺体片がわずかに出現するだけである。



第10図 原遺跡の花粉

E 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分析の結果、SK27 (2B-8G25) の1層、2層、SK44 (2B-10H5) の7層、調査区北東壁(基本層)(2B-8H16)のⅢa層、Ⅲb層のいずれの試料も花粉密度が極めて低く、花粉は検出されないか、検出されても極わずかであった。このことから、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速く花粉が集積できなかったと推定される。SK44 (2B-10H5) の7層からわずかにクワ科-イラクサ科(カナムグラなど)、シダ植物三条溝胞子が検出された。これらは、いずれも乾燥した環境に生育する植物であることから、土坑の周囲は乾燥していて、カナムグラなどの草本が生育していたとみなされる。

F まとめ

原遺跡のSK27 (2B-8G25) の1層、2層、SK44 (2B-10H5) の7層、調査区北東壁(基本層)(2B-8H16)のⅢa層、Ⅲb層において花粉分析を行った結果、花粉はほとんど検出されず、乾燥した環境が推定された。

第4節 樹種同定

高橋 敦 ((株)古環境研究所)

A 試料

試料は、SK44 から出土した炭化材 8 点 (No.1 ~ 8) である。いずれも時期は縄文時代である。

B 方法

各試料について、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を複製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。走査型電子顕微鏡(低真空)で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 [1982] や Wheeler 他 [1998] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 [1991] や伊東 [1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

C 結果

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は、広葉樹3分類群(コナラ属コナラ節・クリ・マタタビ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus*
ブナ科

環孔材。孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火災状

に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同複放射組織とがある。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火災状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高である。

・マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科

環孔材。孔圏部は1~4列、孔圏外で急激に径を減じた後、単独で散在する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~4列、1~60細胞高である。

D 考察

袋状土坑(SK44)の7層から出土した炭化材は、全て不定形の小破片である。いずれも完全に炭化しており、利用の過程で火を受けたことが推定される。これらの炭化材は、8点中5点がクリであり、他にコナラ節2点、マタタビ属1点が認められ、少なくとも3種類が混在していることが推定される。

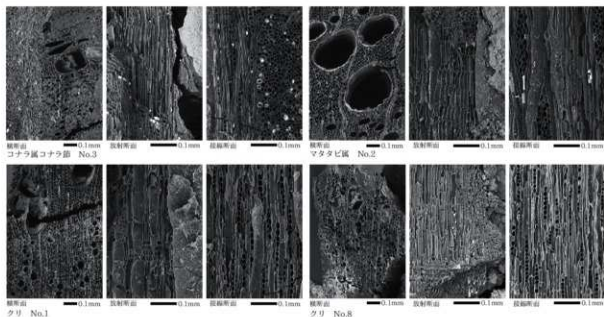
確認された種類についてみると、コナラ節とクリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。マタタビ属は、林縁部に生育するつる植物であり、木材は強靱で靱性に優れる。同定結果から、縄文時代晩期の遺跡周辺にコナラ節やクリの生育する落葉広葉樹林があり、その林縁部にはマタタビ属も生育していた

第7表 樹種同定結果

試料 No.	遺構	位置	層位	形状	分類群
1	SK44	2B-10H5	7層	小破片	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2	SK44	2B-10H5	7層	小破片	マタタビ属 <i>Actinidia</i>
3	SK44	2B-10H5	7層	小破片	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
4	SK44	2B-10H5	7層	小破片	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
5	SK44	2B-10H5	7層	小破片	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
6	SK44	2B-10H5	7層	小破片	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
7	SK44	2B-10H5	7層	小破片	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
8	SK44	2B-10H5	7層	小破片	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

ことが推定される。

伊東・山田〔2012〕のデータベースを用いて、周辺地域で縄文時代晩期の古生木や用材選択を調査した事例をみると、御井戸 A 遺跡（旧巻町）の自然木にブナ属、ヤマグワ、カツラ、クスノキ科、用途不明の炭化材にクリ、ケヤキ、木柱にカエデ属、クリ、ニレ属が確認されている。また、新田遺跡（五泉市）の自然木にコナラ節、用途不明の炭化材にトネリコ属が確認されている。いずれの遺跡でも落葉広葉樹を主体として、コナラ節やクリが混じる点は、本遺跡の結果とも整合的である。



第 11 図 原遺跡の炭化材

第5節 種実同定

A 試料

試料は、SK27, SK38, SK44, SX28 から出土した種実である。試料の詳細を第 8 表に示す。

B 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

C 結果

1) 分類群

樹木 5、草本 8 の計 13 分類群が同定された。学名、和名および粒数を第 9 表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

・オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 炭化核（破片）クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

金原美奈子（(株)古環境研究所）

第 8 表 試料一覧

試料 No.	遺構名	グリッド	層位	時期
1	SK27	2B-8G24, 25	1層	縄文
2	SK27	2B-8G24, 25	2層	縄文
3	SK38	2B-8H16	1層	縄文
4	SK38	2B-8H16	2層	縄文
5	SK44	2B-10H5	4層	縄文
6	SK44	2B-10H5	6層	縄文
7	SK44	2B-10H5	7層	縄文
8	SX28	2B-8G20	1層	縄文
9	SX28	2B-8G25	1層	縄文
10	SX28	2B-8H21	1層	縄文
11	SX28	2B-8G20	2層	縄文
12	SX28	2B-8H21	2層	縄文

・クリ *Castanea crenata* S. et Z. 炭化子葉（完形・破片）ブナ科

子葉は炭化しているため黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。完形の子葉は長さ 10.16mm×幅 12.37mm である。

・コナラ属 *Quercus* 炭化子葉（破片）ブナ科

炭化しているため黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、破片のため属レベルの同定までである。

・サンショウ属 *Zanthoxylum* 炭化種子 ミカン科

炭化しているため黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

・トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種皮（破片）・炭化種子（破片）トチノキ科

種皮は炭化しているため黒色と光沢のある黒色部分とに分かれ、種子も炭化しているため黒色を呈し、表面はぼこぼこである。

[草本]

・イネ *Oryza sativa* L. 穎（破片）イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

・イネ科 Gramineae 穎（破片）

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

・ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に 4～8 本の針状の付属物を持つ。

・スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

・タデ属サナエタデ節 *Polygonum* sect. *Persicaria* 果実 タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。

・ギンギン属 *Rumex* 果実 タデ科

茶褐色で頂端が尖る卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。翼状の花被の残るものもある。

・アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

・ヒシ *Trapa japonica* Flerov 炭化果実（破片）ヒシ科

炭化しているため黒色を呈し、ここでは側面の両肩に 1 個ずつの鋭い長刺と、先端の中央部に低い円柱状突起がある。大沢谷内通跡（2012）ではヒメヒシの可能性が指摘されているが、本試料はヒシの特徴である二つの長刺を有する大型のものであり、ヒシに同定される。オニヒシやヒメヒシは、明確に四刺を有し、特にヒメヒシは大きさが 1/2 以下であるという特徴を有することから明瞭に識別される。

2) 種実群集の特徴

a SK27 2B-8G24, 25

・1層 (No.1)

樹木種実のオニグルミ破片 81、クリ 1、破片 23、コナラ属破片 1、サンショウ属破片 1、トチノキ種皮破片 69、種子破片 17、草本種実のヒシ破片 2、未炭化であるイネ科穎 1 が同定された。その他に、炭化材破片 18、不明炭化物破片 (+)、虫齧 2、石 4 が認められた。

・2層 (No.2)

樹木種実のオニグルミ破片 4、トチノキ種皮破片 17、種子破片 4 が同定された。その他に、炭化材破片 12、

不明炭化物破片 (+)、虫瘤 12、石 4 が認められた。

b SK38 2B-8H16

・ 1 層 (No.3)

樹木種実のオニグルミ破片 16、トチノキ種皮破片 55、種子破片 15 が同定された。その他に、炭化材破片 64、不明炭化物破片 (+)、虫瘤 2、石 5 が認められた。

・ 2 層 (No.4)

樹木種実のオニグルミ破片 4、トチノキ種皮破片 13 が同定された。その他に、炭化材破片 17、不明炭化物破片 (+)、虫瘤 4、石 1 が認められた。

c SK44 2B-10H5

・ 4 層 (No.5)

樹木種実のトチノキ種皮破片 8、草本種実のヒシ破片 1 が同定された。その他に、炭化材破片 7、不明炭化物破片 (+)、石 3 が認められた。

・ 6 層 (No.6)

樹木種実のトチノキ種皮破片 8、種子破片 1、未炭化である草本種実のイネ科穎 2 が同定された。その他に、炭化材破片 18、不明炭化物破片 (+) が認められた。

・ 7 層 (No.7)

樹木種実のオニグルミ破片 1、トチノキ種皮破片 16、種子破片 2 が同定された。その他に、炭化材破片 18、不明炭化物破片 (+) が認められた。

d SX28 2B-8G20

・ 1 層 (No.8)

樹木種実のオニグルミ破片 156、クリ破片 5、トチノキ種皮破片 174、種子破片 26、草本種実のヒシ破片 11、未炭化であるホタルイ属 1、スゲ属 1、タデ属サナエタデ節 1、アカザ属 1 が同定された。その他に、炭化材破片 195、不明炭化物破片 (+++)、虫瘤 28、石 4 が認められた。

・ 2 層 (No.11)

樹木種実のオニグルミ破片 29、トチノキ種皮破片 87、種子破片 8、未炭化である草本種実のイネ科穎破片 1、ギシギシ属 1 が同定された。その他に、炭化材破片 107、不明炭化物破片 (++)、虫瘤 16、石 5 が認められた。

e SX28 2B-8G25

・ 1 層 (No.9)

樹木種実のオニグルミ破片 32、クリ破片 5、トチノキ種皮破片 272、種子破片 8、草本種実のヒシ破片 1 が同定された。その他に、不明植物片 3、炭化材破片 75、不明炭化物破片 (+++)、虫瘤 4、石 12 が認められた。

f SX28 2B-8H21

・ 1 層 (No.10)

樹木種実のオニグルミ破片 96、サンショウ属破片 1、トチノキ種皮破片 316、種子破片 15、草本種実のヒシ破片 4、未炭化であるイネ科穎 1 が同定された。その他に、炭化材破片 185、不明炭化物破片 (+++)、虫瘤 9、昆虫破片 5、石 131 が認められた。

・ 2 層 (No.12)

樹木種実のオニグルミ破片 32、トチノキ種皮破片 80、種子破片 15、草本種実のヒシ破片 1 が同定された。その他に、炭化材破片 271、不明炭化物破片 (+++)、虫瘤 5、昆虫破片 2、石 10 が認められた。

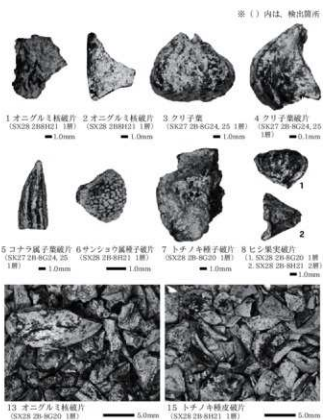
第9表 種実同定結果

分類群		部位	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	
			SK27		SK38		SK44				SK58				
			2B-8G24, 25		2B-8H16		2B-10H5		2B-10H5		2B-8G20		8G25		8H21
学名	和名	1層	2層	1層	2層	4層	6層	7層	1層	1層	1層	2層	2層		
Arbor	樹木	核 (破片) 子葉 (破片) 子葉 (破片) 種子 (破片)	81	4	16	4			1	156	32	96	29	32	
	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr		オニグルミ	1							5	5			
	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.		クリ	23											
			コナラ属	1											
<i>Quercus</i>	コナラ属	1													
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1										1			
<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	種子 (破片)	69	17	55	13	8	8	16	174	272	316	87	80	
		種子 (破片)	17	4	15			1	2	26	8	15	8	15	
Herb	草本	穎 (破片・未炭化) 穎 (未炭化) 葉実 (未炭化) 葉実 (未炭化) 葉実 (未炭化) 葉実 (未炭化) 種子 (未炭化) 葉実 (破片)													
	<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	1					2				1		1
	Gramineae		イネ科												
	<i>Scirpus</i>		ホタルイ属												
	<i>Carex</i>		スゲ属												
	<i>Polypogon</i> sect. <i>Panicaria</i>		タデ属サナエタデ節												
	<i>Bambusa</i>		ギンギン属												
	<i>Chenopodium</i>		アカザ属												
	<i>Trips japonica</i> Flörke		ヒシ	2						1					
	Total		合計	196	25	86	17	9	11	19	376	318	433	126	128
	Unknown charcoal fragments		不明植物遺体	炭化物 (破片・細片)	18	12	64	17	7	18	18	195	75	185	107
Unknown charred material	不明炭化物	炭化物 (破片・細片)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+++)	(+++)	(+++)	(++)	(+++)		
備考	虫歯	穎片・未炭化)	2	12	2	4				28	4	9	16	5	
	昆虫	(穎片・未炭化)												2	
	石		4	4	5	1	3			4	12	131	5	10	

D 考 察

原遺跡において出土した炭化種実の同定を行った。その結果、樹木種実のオニグルミ、クリ、コナラ属、サンショウ属、トチノキ、草本種実のイネ類、イネ科類、ホタルイ属、スゲ属、タデ属サナエタデ節、ギンギン属、アカザ属、ヒシが同定された。また、イネ類、イネ科類、ホタルイ属、スゲ属、タデ属サナエタデ節、ギンギン属、アカザ属は未炭化であり、新しいものと考えられるため、その他の炭化種実について記載する。

樹木種実のオニグルミ、クリ、コナラ属、トチノキは食用となる有用植物である。オニグルミ、トチノキは谷沿いの湿潤地に生育し、トチノキはアク抜きをすれば食用になる。水はけのよいところに生育するクリ、コナラ属はアク抜きなしで食用になる。草本種実のヒシは浮葉植物で水域 (1~1.5m) に生育する。前述したように、ここで同定されたヒシは側面の両側に1個ずつの鋭い長刺片を有し、先端の中央部の低い円柱状突起片の大きさからヒシに同定される。ヒシが優勢な環境では水深1.5mより浅い水域に分布するが、自然環境では抽水植物が優位であるため、1~1.5mの深さの水域に分布する。いずれも土坑からの検出であるが、食用になるものが多く、利用され投棄された残滓とみられる。



第12図 原遺跡の炭化種実

第6節 リン・カルシウム分析

竹原 弘展・松田 隆二 (株)古環境研究所

A はじめに

新潟市秋葉区に所在する原遺跡より検出された縄文時代の土坑の埋土について、蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析を行い、骨などが存在した可能性について検討した。

B 試料と方法

分析対象となった試料は、縄文時代の土坑SK27の1層と2層からそれぞれ採取された埋土2点(試料No.1, 2)である(第10表)。

分析は、藤根ほか[2008]の方法に従って行った。この方法は、リン、カルシウムを多く含む箇所を元素マッピングにより面的に検出し、直接測定できるという利点がある。測定には、試料を乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・1分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム(Na)〜ウラン(U)である。また、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン(P)のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100 μ m、測定時間6000s、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、電流自動設定、ビーム径100 μ m、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

C 結果

試料のリン及びカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各5ヶ所(a~e)の位置を示した図を第7図に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した各元素の半定量値を第11表に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを調整した。

蛍光X線分析の結果、土坑SK27の埋土1層(試料No.1)はリン(P_2O_5)が2.28~18.90%、カルシウム(CaO)が0.73~10.15%、埋土2層(試料No.2)はリン(P_2O_5)が0.81~4.31%、カルシウム(CaO)が0.20~5.72%の値を示した。

第11表 半定量分析結果 (mass%)

No.	ポイント	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
1	a	0.00	25.92	40.46	18.90	0.61	1.55	2.48	1.42	0.14	8.45	0.02	0.01	0.01	0.00
	b	0.00	24.87	55.39	2.92	0.14	1.27	10.15	0.83	0.47	3.95	0.00	0.01	0.01	0.00
	c	0.00	35.23	48.69	2.28	0.21	1.97	0.73	1.04	0.66	9.13	0.04	0.03	0.00	0.01
	d	0.00	31.87	53.78	2.60	0.18	2.14	0.73	0.63	1.04	7.02	0.00	0.00	0.01	0.00
	e	0.07	27.50	51.56	8.98	0.28	1.34	1.60	1.23	0.10	7.29	0.01	0.01	0.01	0.03
2	a	0.64	27.97	57.61	1.65	0.30	0.61	0.38	0.63	0.34	9.93	0.01	0.00	0.00	0.04
	b	0.39	10.96	82.62	0.81	0.10	2.10	0.20	0.31	0.33	2.18	0.01	0.00	0.00	0.01
	c	0.01	9.36	5.44	4.31	0.08	0.04	5.72	35.04	1.02	38.96	0.00	0.00	0.01	0.01
	d	0.65	27.60	61.64	1.41	0.14	4.27	0.32	0.34	0.14	3.44	0.02	0.02	0.00	0.01
	e	0.19	23.04	62.10	1.72	0.08	4.57	0.38	0.88	0.40	6.52	0.02	0.00	0.00	0.09

D 考 察

骨や歯は、ハイドロキシアパタイト $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3\text{OH}$ が主成分であり、蛍光 X 線分析ではリン (P) とカルシウム (Ca) がともに高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光 X 線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみを検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していても、埋没中に分解拡散が

進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からビビアナイト $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ が析出しているケースのように、骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。

分析対象である土坑 SK27 の埋土 1 層 (試料 No.1) と埋土 2 層 (試料 No.2) とともに、ポイント分析においてリンが明らかに多い箇所が検出された。カルシウムを伴っている箇所もあることから、これらは骨や歯に由来する可能性が考えられる。

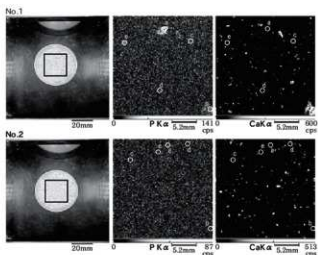
E ま と め

原遺跡で検出された縄文時代の土坑の埋土について分析を行った結果、リン、カルシウムともに明らかに多く含まれる箇所が検出され、骨や歯が存在した可能性が示された。遺構の性格については、他の自然科学分析の結果及び遺物の出土状況や類型など、考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

第 7 節 放射性炭素年代測定

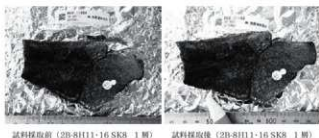
A 試 料 と 方 法

測定試料は、縄文時代とされる土器 1 点 (試料 1) である (第 14 図)。第 12 表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。年代測定は、試料の前処理・調整後、加速器質量分析計 (コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて行った。



第 13 図 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図

松田 隆二 ((株)古環境研究所)



第 14 図 年代測定試料写真

第 12 表 測定試料及び処理

試料No.	報告No.	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
1	図版13-10	2B-8111・16 SK8 1層	土器付着炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

B 結 果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代及び暦年代 (校正年代) を算出した。第 13 表にこれらの結果を示し、第 15 図に暦年校正結果 (校正曲線) を示す。

第 13 表 測定結果

試料No.	報告No.	測定No. (PED)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
						1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	図版13-10	38861	-28.32 \pm 0.24	2951 \pm 23	2950 \pm 25	1207 - 1126 cal BC (68.2%)	1229 - 1056 cal BC (95.4%)

BP: Before Physics (Present), BC: 紀元前

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1 σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年校正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年校正年代値も併記した。

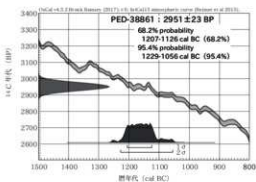
3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。校正曲線のデータは IntCal 13、校正プログラムは OxCal 4.3 である。

暦年代 (校正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1 σ (68.2% 確率) と 2 σ (95.4% 確率) で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。図中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

C 所 見

原遺跡の土層堆積年代を検討する目的で出土した土器に付着した炭化物を対象に、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、SK8 (2B-8H11・16) の 1 層で出土した土器 (試料 No.1) は 2950 \pm 25 年 BP (同 cal BC 1229 ~ 1056 年) の年代値であった。



第 15 図 暦年校正結果

第8節 黒曜石産地推定（蛍光X線分析法）

竹原弘展・松田隆二（(株)古環境研究所）

A はじめに

新潟市秋葉区に所在する原遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

B 試料と方法

産地推定対象となる試料は、第14表に示す黒曜石製石器2点である。時期は、縄文時代とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジと精製水を用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

- (1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- (2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- (3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- (4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

次に、これらの指標値を用いた2つの判別図（横軸 Rb 分率-縦軸 Mn 強度 $\times 100 / Fe$ 強度の判別図と横軸 Sr 分率-縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合は、 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の値が減少する点に注意が必要である（望月1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

第17表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第17図に各原石の採取地の分布図を示す。また、新潟県においては、新発田、新津のほか、佐渡島においても黒曜石の産出が知られている。今回分析の委託を受けた原遺跡出土黒曜石製石器とは別に、新たな比較対象原石として、佐渡島の真光寺遺跡で採集された黒曜石原石5点（第16図）のデータを得たので参考提示する（第16表）。原石の採集地については、[土橋1988]に詳しい。

第14表 分析対象となる黒曜石製石器

試料 No.	報告No.	調査年度	遺蹟名	グリッド	層位	時期
1	図版22-75	平成30年	包含層	2B-9H11	1～Ⅲ	縄文時代
2	図版22-76	平成30年	包含層	2B-9G10	1～Ⅲ	縄文時代



第16図 佐渡真光寺産黒曜石原石

C 分析結果

第15表に原遺跡出土石器の測定値及び算出した指標値を、第16表に佐渡真光寺追分産の黒曜石原石の測定値及び算出した指標値を、第18図と第19図には黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

原遺跡出土石器は、試料No.1が金津群(新潟県、新津エリア)、試料No.2が星ヶ台群(長野県、諏訪エリア)の範囲にプロットされた。第15表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

佐渡の黒曜石原石は、原石No.1と3~5の4点と、原石No.2の1点の2つの判別群に分かれた。そこで前者を真光寺1群、後者を真光寺2群とした。



第17図 黒曜石産地分布図(東日本)

第15表 測定値および産地推定結果

試料No.	販売No.	K強度	Mn強度	Fe強度	Rb強度	Sr強度	Y強度	Zr強度	Rb比率	Mn ¹⁰⁰ /Fe	Sr比率	log $\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
		(cps)	(cps)	(cps)	(cps)	(cps)	(cps)	(cps)						
1	国販25-75	191.9	62.9	1759.2	558.7	263.7	299.1	806.3	28.98	3.01	13.68	0.96	金津	新津
2	国販25-76	206.1	80.9	807.4	543.6	205.0	275.5	530.0	34.98	10.02	12.19	0.59	星ヶ台	諏訪

第16表 佐渡真光寺の黒曜石原石の測定値

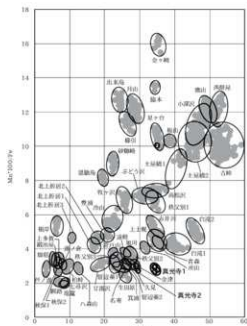
原石No.	エリア	K強度	Mn強度	Fe強度	Rb強度	Sr強度	Y強度	Zr強度	Rb比率	Mn ¹⁰⁰ /Fe	Sr比率	log $\frac{Fe}{K}$	判別群
		(cps)	(cps)	(cps)	(cps)	(cps)	(cps)	(cps)					
1	佐渡	327.6	66.7	2245.9	1043.1	387.4	431.4	1179.0	34.30	2.97	12.74	0.84	真光寺1
2		286.5	61.9	2294.5	845.9	469.4	357.6	1198.6	29.46	2.70	16.35	0.90	真光寺2
3		256.1	49.3	1782.4	810.6	292.2	334.1	883.9	34.93	2.76	12.69	0.84	真光寺1
4		252.7	49.9	1698.1	800.3	293.1	340.9	911.9	34.11	2.94	12.49	0.83	真光寺1
5		268.9	51.6	1915.5	855.5	315.2	357.8	959.4	34.39	2.69	12.67	0.85	真光寺1

D まとめ

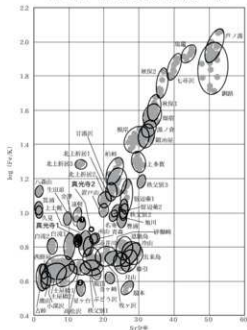
原遺跡より出土した黒曜石製石器について、蛍光 X線分析による産地推定を行った。その結果、原遺跡出土の石器2点は、それぞれ新津エリア産と諏訪エリア産の黒曜石と推定された。

第17表 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
白河	白滝1	赤石山由屈 (42), 八分沢遺跡 (15)	赤石山由屈八分沢
	白滝2	7の沢川支流 (2), 1K遺跡 (10), 十勝石沢	黒磯八分沢黒曜石
		真盛遺跡下河床 (11), アジサイの滝遺跡 (10)	沢観林道 (36)
赤井川	赤井川	曲川・土木川 (24)	
	上土籠	十勝二股 (4), タウシュベツ川右岸 (42), タウシュベツ川左岸 (10), ナニノ沢 (32)	
北海道	釧路	裏戸山	裏戸山 (5)
		高止	所山 (5)
		豊浦	豊浦 (10)
		旭川	旭川 (8), 南台 (2)
		名寄	名寄 (19)
		秩父別1	秩父別1
		秩父別2	秩父別2
		秩父別3	秩父別3
		滝軒	滝軒
		生田原	生田原
留邊摩	留邊摩1	ケショマツ川河床 (9)	
	留邊摩2		
青森	網走	網走市宮スキー場 (9), 阿寒川右岸 (2), 阿寒川左岸 (6)	
	木造	木造馬場 (15), 鶴ヶ崎 (10)	
	深川	八森山	深川 (7), 八森山公園 (8)
	吉森	吉森	太田内川 (6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)
	男鹿	臨本	臨本海岸 (4)
岩手	北上1	北上折原1	
	北上2	北上折原2	北上川 (9), 真城 (33)
	北上3	北上折原3	
宮城	宮崎	瀧ノ倉	瀧ノ倉 (40)
	色麻	板原	板原 (40)
	結城	秋保1	土蔵 (18)
		秋保2	
山形	塩竈	塩竈	塩竈 (10)
	羽黒	月山	月山前 (24), 大越沢 (10)
新潟	新潟田	藤田	たらのき代 (19)
	新潟	板山	板山牧場 (10)
栃木	新津	金津	金津 (7)
	高原山	甘溝沢	甘溝沢 (22)
		七母沢	七母沢 (3), 宮川 (3), 枝持沢 (3)
		西野原	芙蓉パーライト土砂集積場 (30)
		鷹山	鷹山 (14), 東野原 (54)
		小深沢	小深沢 (42)
		土屋橋1	土屋橋西 (10)
		土屋橋2	新和野トンネル北 (20), 土屋橋北西 (58), 土屋橋西 (1)
		古郷	和野トンネル南上 (28), 古郷 (38), 和野トンネル (28)
		ブノの沢	ブノの沢 (20)
長野	飯ヶ沢	飯ヶ沢下 (20)	
	高松沢	高松沢 (19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (35), 星ヶ塔 (20)
	豊科	冷山	冷山 (20), 変形峠 (20), 変形峠東 (20)
神奈川	戸ノ浦	戸ノ浦 (20)	
	箱根	箱根	箱根 (51)
静岡	網治原	網治原 (20)	
	上多賀	上多賀 (20)	
天城	相模	相模 (20)	
	思徳島	思徳島 (27)	
東京	砂野崎	砂野崎 (20)	
	久見	久見パーライト中 (6), 久見窪製塩場 (6)	
鳥取	隠岐	隠岐	隠岐 (13)
		笠浦	笠浦 (3), 加茂 (4), 岸浜 (3)



第18図 黒曜石産地推定判別図 (1)



第19図 黒曜石産地推定判別図 (2)

第9節 原遺跡出土土器に含まれる透明鉱物の元素マッピング分析

竹原 弘展・松田 隆二 (株) 古環境研究所

A はじめに

新潟市秋葉区に所在する原遺跡より出土した縄文土器の底部内面に、黒曜石の様にも見える透明鉱物が観察された。ここでは、観察された透明鉱物について元素マッピング分析を行い、材質を検討した。

B 試料と方法

分析対象は、縄文土器に含まれる透明鉱物である (第18表, 第21図-1, 2)。この透明鉱物は約2~3mmほ

どの大きさで、黒曜石の様にも見えたため、産地推定に先行して、材質の確認を目的に、元素マッピング分析を実施した。土器は接合済みであったが、測定の際の邪魔となるため、接合を外して非破壊で測定した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム(Na)〜ウラン(U)であるが、軽元素の感度は蛍光X線分析装置の性質上若干低く、特に定量分析におけるナトリウムの精度は低い。この装置では、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析が可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得て透明鉱物の位置を特定した上で、透明鉱物のポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100 μ m、測定時間10000sを1回走査、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、電流自動設定、ビーム径100 μ m、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定して行った。

C 分析結果

第21図-3に、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)の元素マッピング図を示す。また、第20図に、マッピング図上に白丸で示された透明鉱物のポイント分析で得られた蛍光X線スペクトルを示す。

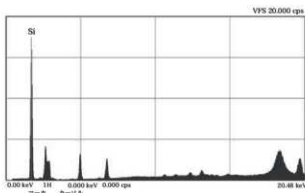
元素マッピング図では、透明鉱物の位置でケイ素が高輝度で検出される一方、その他の元素では輝度は極めて低かった。一方、ポイント分析の蛍光X線スペクトルをみると、ケイ素の極めて高いピークが検出された。ケイ素以外では、一致する元素のピークはなかった。また、石英(水晶)を測定すると頻繁に表れる、回折線とみられるピークが多数認められた。以上より、透明鉱物は石英(水晶)といえる。

D 所見

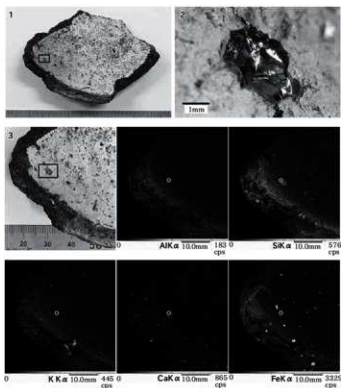
原遺跡より出土した縄文土器に含まれる透明鉱物について、元素マッピング分析及びポイント分析を行った結果、石英(水晶)と確認された。

第18表 分析対象

試料No.	報告No.	調査年度	遺構名	グリッド	層位	時期	備考
1	国版15-62	平成30年	包倉跡	2B-8H16	III	縄文時代	SX28出土土器片と接合



第20図 透明鉱物の蛍光X線スペクトル



1. 分析対象土器(内面) 2. 透明鉱物の実体顕微鏡写真
3. 透明鉱物周辺の元素マッピング図(白丸はポイント分析位置)
Al:アルミニウム Si:ケイ素 K:カリウム Ca:カルシウム Fe:鉄

第21図 土器に含まれる透明鉱物の元素マッピング図

第七章 総 括

第1節 遺構について

土坑 (SK) 19 基、性格不明遺構 (SX) 1 基、小土坑 (Pit) 31 基の遺構が検出された。遺構は北側に集中して確認され、出土遺物から南側で検出した縄文時代後期前葉の土器 (南三十稲場式) が出土した SK30 が古く、そのほかの大部分の遺構は晩期中～後葉の遺構群と考えられる。土坑のうち SK44 は、上半が削平された袋状土坑である。覆土の水洗遺物の分析では、小片のオニグルミ・トチノミ・ヒシなどが確認された。そのほかは主に直径 1m 前後の円形あるいは楕円形の土坑が確認された。SK8 で石鏃 3 点、SK27 で石鏃 1 点、SK44 で石鏃未成品 2 点、SK45 で石鏃 1 点、SK20 で土版 2 点など墓の副葬品と思われる遺物が出土していることから、SK27 の覆土を採取してリン・カルシウム分析を行った。その結果、動物の歯・骨の存在の可能性が指摘された。墓塚あるいは祭祀的な意図を持った遺構の可能性もある。また、Pit 群に関しては、小型の掘立柱建物の建物配置の想定を試みたが建てられなかった。また、SX28 に関しては当初、竪穴住居を想定したが、遺構の形状が不整形であったこと、また地形上では傾斜変換地点にあたることから、北東に傾斜して地層が引く張られた地割れあるいは古い風倒木等の自然環境の影響による窪地と推定した。

第2節 遺物について

A 土器について

本調査区では、第IV章第2節で示したとおり、縄文時代中期前葉から弥生時代前期までの土器が出土している (第V章第5図参照)。特に晩期中葉から後葉の土器群が主体を占めることが確認された。原遺跡では、従来は晩期中葉までの土器が確認されていたが (前山 2016)、晩期後葉から弥生時代前期の土器が確認された成果は、新しい知見である。また、特に晩期中葉から後葉の土器群は、原遺跡から 4～5Km 北東に位置する大沢谷内北遺跡 (前山・伊比ほか 2010)、大沢谷内遺跡 (細野・伊比ほか 2012、相田・八藤ほか 2020) との対比が明確になった点が重要である。さらに、従来、新津丘陵北部で空白の時期であった弥生時代前期の遺跡が発見されたのは、その後の弥生時代後期の環濠集落である古津八幡山遺跡の前史として、縄文から弥生時代への変遷を考える上で重要である。今回、23 点のアスファルト付着土器が確認された。図示したのは 3 個体であるが、晩期中葉から後葉の土器である。大沢谷内遺跡はアスファルト精製に関わった遺跡として評価されており、(前山 2016) で指摘したように大沢谷内遺跡成立にあたり本遺跡居住集団がこれに深く関与したものと考えられる。

B 石器について

本発掘調査では 589 点の石器が出土した。时期的には、土器群の主体を占める縄文時代晩期中～後葉の石器が大半を占めると考えられる。

このうち大部分の 422 点が剥片類である。石鏃・石鏃未成品が 35 点、磨製石斧 6 点など調査面積が狭い割に剥片石器のツールの割合が高いのが特徴的である。石鏃は有茎鏃がほとんどを占め、無茎鏃の資料が少ない。磨製石斧・磨製石斧未成品の大・中形品 (110～114) には、新潟県北東部の阿賀野川以北の緑色岩類が使用され、小形品に糸魚川市周辺産の透閃石類 (108・109) が使用されている。新潟県内を含めた北陸地方の磨製石斧の様相を俯瞰した渡邊裕之氏の論考 (渡邊 2014) によると、後期前葉より前には大形品も透閃石類 (原文では蛇紋岩)



第22図 第10次調査出土玉髄原石

を用いているが、後期前葉以降は大形の磨製石斧は在地石材を用い、小形品は透閃石類を用いる傾向にあり、木製品加工のあり方が石斧素材の変更により変化したと推測している。消費地遺跡である当遺跡はその傾向に当てはまる。

剥片石器の石材は、玉髄が卓越し、珪質頁岩・玉髄質珪質頁岩・凝灰岩・鉄石英（赤・黄玉）の使用が目立つ。2点の黒曜石の産地分析（第Ⅵ章）を行い、1点が長野県諏訪エリア（星ヶ台）産、もう1点が新津（金津）産で、遠隔地の黒曜石の利用も確認された。数量的に多い玉髄については、半透明から透明の白色玉髄が用いられている。石織（未成品含む）では35点中8点、石錐では5点中2点と両者合わせて25%の比率である。盤状や立方体の素材を用いた小形剥片を作出する石核も多数確認された。表皮が付着しているものが多く、生成された産地からほど遠くない所から採取された可能性が考えられる。第22図（1・2）に図示した遺跡出土の玉髄原石はその素材にあてはまり、盤状（11）あるいは棒状（2）の50mm前後のものが素材として遺跡に持ち込まれ、石器素材の剥片の生産・加工がなされている。玉髄は、流紋岩質の岩帯の隙間に熱水の影響で生成されるが、近隣の新津丘陵（秋葉区金津）の土採り場で黒曜石産地の調査を行った際に（渡邊・立木2001）、地層断面の三紀層の古段丘層に含まれる石器石材に利用可能な含有石材を調査した。しかし、軟質の凝灰岩とわずかに珪質頁岩と黒曜石が含まれる程度で玉髄は確認できず、玉髄は遠方からもたらされたと考えられる。近隣の産地は信濃川支流の五十嵐川流域（堀川・渋谷2010）、刈谷田川流域（中村2007）、破間川上流域（中村2007）、阿賀野川右岸の五頭山麓の阿賀野市笹神大室（土橋2003）などで確認されている。石材原産地の特定は難しい（中村2007）が、原遺跡については距離的な位置関係から阿賀野川流域あるいは五十嵐川流域の可能性がある。新潟県域の玉髄製石器の利用は、縄文時代では後・晩期に高率になる傾向がある（早瀬2007・佐藤信2013）。新津丘陵北東部では比較する遺跡が少ないが、本調査区主体の縄文時代晩期の前段階である中・後期の秋葉遺跡（今井ほか2022）、参考として後の段階である弥生時代後期の古津八幡山遺跡（渡邊・立木2002）などでは玉髄がほとんど使われていない。晩期での利用が多い遺跡として代表的な遺跡を挙げると五十嵐川流域の赤松遺跡（中村1981）、破間川流域の居平遺跡（池田2002・池田ほか2002・早勢2007・梅川2002・佐藤信2013）、信濃川流域の藤橋遺跡（駒形・寺崎1977a・b、長岡市1992）、阿賀野川流域の鳥屋遺跡（関ほか1988）、石船戸遺跡（古澤ほか2018）、六野瀬遺跡（石川ほか1992）、矢津遺跡（中島・藤塚・金子1980）などがある。特に赤松遺跡は質量ともに原産地遺跡として良い量が出しており、このような遺跡から消費遺跡である原遺跡などに原石あるいは石核の状態では玉髄は搬入された想定される。佐藤雅一氏により当該期の蒲原平野の遺跡において、玉髄製石織が広く分布することから「白い黒曜石」と形容されている（佐藤雅2010）。また近年、珪質頁岩など堆積岩の産地同定の見通しが示されており（中村2022）、玉髄も形成過程や含まれる珪酸化石などから産地同定が可能のようである。今後の研究動向では産地同定から遺跡間の比較ができる可能性がある。

第3節 第10次調査の位置付け

第10次調査の成果として、遺構の面からは土坑群及びPit群が確認され、縄文時代後期前葉及び主体となる晩期中葉から後葉の居住域の一部と考えられる。土坑の一部は墓域あるいは祭祀遺構の可能性も考えられたが明確な証拠は得られなかった。自然科学分析の成果からオニグルミ・クリ・コナラ属・サンショウ・トチノキ・ヒシなどが検出され、生業の一端が明らかとなった。ヒシの出土は、低地での生業活動の一端を明らかにした。

原遺跡は、縄文時代中期前葉から弥生時代前期までの遺物が出土しており非常に長い期間利用された拠点集落の一つと考えられる。特に縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の土器の出土は新津丘陵北東部の丘陵上の遺跡では初検出となり、今後、沖積地上の遺跡との比較検討の好材料となろう。また、アスファルト付着土器23点、アスファルト付着石礫4点及びアスファルト本体も5点（うち4点図示）出土しておりアスファルト生産に係る大沢谷内遺跡の元村としての様相が想定される。石器では、玉髄の多出が確認された。原産地の追及と他遺跡との比較によって遺跡間の交流が明確になると考える。

別表1 第10次調査 遺構計測表

図面 No.	No.	遺構 No.	遺構 No.	遺構 No.	遺構 No.	遺構 No.	距離 (m)				深さ (m)	底面 傾斜 (%)	断面		遺構状況	有 遺 物	土 石	備考	特定され る時期						
							上 長	下 長	左 幅	右 幅			平面	断面											
8	5	1	SK	50	2B	RH21	-	SX28	調査面上部	N:58°E	0.34	0.23	0.10	0.10	0.06	23.91	内形	台形状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期	
8	5	2	SK	2	2B	RH21	-	調査面上部	N:13°W	0.34	0.30	0.17	0.10	0.40	24.02	内形	扇状	単層	1	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期		
8	6	3	SK	1	2B	PG10	-	調査面上部	N:25°E	0.80	0.68	0.60	0.30	0.14	23.92	内形	扇状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期前半		
8	6	4	SK	4	2B	BG19	-	調査面上部	N:38°E	0.94	0.74	0.34	0.34	0.22	23.77	内形	扇状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期後半		
7	6	7	F-基本 群 F-5A	SK	8	2B	RH11-16	-	調査面上部	N:36°W	(1.14)	1.00	0.92	0.70	0.49	23.51	内形	扇状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期中半	
7	6	8	GAB- 19ABC	SK	20	2B	RH16-21	-	SX28	調査面上部	N:27°W	(1.06)	0.84	0.62	0.52	0.31	23.62	内形	半円状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期後半
7	6	9	基本群 F-7	SK	51	2B	RH16-17-21-22	-	調査面上部	N:27°W	(1.20)	0.83	0.64	0.39	0.44	23.54	内形	台形状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期中半	
8	8	8	SK	15	2B	BG24	-	調査面上部	N:58°E	0.64	0.56	0.36	0.32	0.10	24.10	内形	扇状	単層	1	有	○	調査土層	晩期		
8	8	9	SK	27	2B	BG24-5	-	調査面上部	N:56°E	1.25	1.04	0.94	0.70	0.34	23.56	内形	台形状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期後半		
9	8	10	SK	40	2B	RH21-22	-	SX28	調査面上部	N:61°E	(1.32)	0.94	(1.04)	(0.60)	0.32	23.65	内形	扇状	水平	2	有	○	調査土層	晩期	
9	8	11	SK	26	2B	RH22-22	-	調査面上部	N:61°E	(0.94)	0.84	(0.78)	0.64	0.68	23.74	内形	(扇状)	単層	1	無	×				
9	9	12	SK	34	2B	PG5-10	-	調査面上部	N:23°E	0.84	0.78	0.62	0.58	0.10	23.84	内形	扇状	単層	1	無	×				
9	9	13	SK	42	2B	RH1-4	-	PG46-47	調査面上部	N:58°E	1.00	0.82	(0.86)	(0.54)	0.22	23.73	内形	扇状	単層	1	無	×			
9	9	14	SK	20	2B	RH2-3	-	調査面上部	N:65°E	(0.90)	0.78	0.60	0.52	0.22	23.74	内形	扇状	レンズ状	2	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期中半		
9	9	15	SK	10	2B	RH14-19	-	PG11	調査面上部	N:37°W	1.00	0.42	0.76	(0.22)	0.16	23.96	内形	扇状	水平	2	有	○	調査土層	晩期	
7	9	基本群 E-10	SK	30	2B	PG17-18-22	-	調査面上部	N:50°E	1.48	(0.70)	0.80	(0.50)	0.74	23.82	内形	扇状	水平	2	有	○	調査土層、石器	晩期前半		
9	10	17	SK	43	2B	RH19	-	調査面上部	N:10°W	0.56	0.49	0.38	0.33	0.15	23.78	内形	扇状	レンズ状	2	有	○	調査土層	晩期		
10	10	18	SK	44	2B	10H5	-	調査面上部	N:67°W	0.80	(0.64)	0.94	0.70	0.81	22.72	内形	扇状	ブロック状	7	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期中半		
10	10	20	SK	45	2B	RH25-10H5	-	調査面上部	N:6°E	(0.66)	(0.52)	0.50	0.35	0.20	23.74	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期		
8	10	7	GAB- 19ABC	SK	28	2B	BG15-12-4R- SK50- SK28- 49	-	PG69-70	調査面上部	N:24°W	3.56	(1.74)	3.32	(1.64)	0.24	23.70	内形	扇状	水平	3	有	○	調査土層、石器、自然遺物(炭化物)	晩期
9	9	12	PG	53	2B	PG5-10	-	SX34	調査面上部	N:12°W	0.32	0.30	0.10	0.09	0.24	23.67	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層	晩期	
9	9	13	PG	46	2B	RH1-2	-	SX42	調査面上部	N:69°E	(0.27)	(0.28)	0.20	0.14	(0.20)	23.64	内形	(扇状)	単層	1	有	○	調査土層	晩期	
9	9	13	PG	47	2B	RH2	-	SX42	調査面上部	N:17°W	(0.34)	(0.33)	0.13	0.10	(0.42)	23.40	内形	(台形状)	単層	1	無	×			
9	9	15	PG	11	2B	RH19	-	SX10	調査面上部	N:48°E	0.18	0.14	0.12	(0.10)	0.14	23.58	内形	扇状	単層	1	無	×			
10	21	PG	6	2B	BG14-15	-	調査面上部	N:60°W	0.38	(0.28)	0.20	0.10	0.26	23.76	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
7	10	基本群 B-29	PG	6	2B	BG15	-	PG7	調査面上部	N:60°E	0.33	(0.12)	0.24	(0.06)	0.34	23.82	内形	台形状	レンズ状	2	有	○	調査土層	晩期	
10	23	PG	17	2B	BG15	-	PG6	調査面上部	N:90°E	(0.26)	0.23	0.12	0.10	0.24	23.80	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層	晩期		
10	24	PG	3	2B	BG18	-	調査面上部	N:48°E	0.29	0.26	0.14	0.08	0.08	23.98	内形	扇状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
10	25	PG	2	2B	BG20	-	SX28	調査面上部	N:62°W	(0.26)	(0.26)	(0.14)	(0.13)	0.25	23.80	内形	台形状	単層	1	無	×				
10	26	PG	48	2B	BG20	-	SX28	調査面上部	N:22°E	0.20	0.18	0.09	0.08	0.18	23.77	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層	晩期後半		
10	27	PG	16	2B	RH16	-	調査面上部	N:20°E	0.24	0.23	0.10	0.10	0.24	23.71	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
10	28	PG	22	2B	RH16-21	-	調査面上部	N:11°E	(0.20)	0.20	(0.16)	0.08	0.06	23.90	内形	(扇状)	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
10	29	PG	12	2B	BG25	-	SX28	調査面上部	N:27°W	0.28	0.22	0.12	0.10	0.16	23.89	内形	V字状	単層	1	有	○	調査土層、石器	晩期		
11	30	PG	13	2B	BG25	-	調査面上部	N:47°W	0.32	0.26	0.12	0.10	0.14	23.94	内形	V字状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
11	31	PG	23	2B	RH21	-	調査面上部	N:10°W	0.38	0.26	0.16	0.16	0.12	23.87	内形	半円状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
11	32	PG	18	2B	RH21	-	調査面上部	N:38°W	(0.24)	(0.20)	(0.13)	(0.12)	0.34	23.75	内形	(台形状)	単層	1	無	×					
11	33	PG	19	2B	RH21	-	調査面上部	N:63°W	(0.30)	(0.27)	(0.17)	(0.16)	0.30	23.66	内形	(台形状)	単層	1	無	×					
11	35	PG	24	2B	RH21	-	調査面上部	N:4°W	0.30	0.25	0.10	0.10	0.10	23.96	内形	半円状	単層	1	無	×					
11	34	PG	25	2B	RH22	-	調査面上部	N:10°E	0.21	0.20	0.12	0.08	0.13	23.83	内形	半円状	単層	1	無	×					
11	35	PG	17	2B	BG25	-	調査面上部	N:35°W	0.20	0.18	0.08	0.08	0.15	24.00	内形	V字状	単層	1	無	×					
11	36	PG	14	2B	BG5- OH1	-	調査面上部	N:10°E	0.46	0.44	0.10	0.10	0.40	23.68	内形	扇状	柱状	3	有	○	調査土層、石器	晩期			
11	37	PG	21	2B	BH10	-	調査面上部	N:21°W	0.45	0.44	0.34	0.30	0.21	23.88	内形	半円状	単層	1	無	×					
11	38	PG	35	2B	RH11	-	調査面上部	N:30°W	0.23	0.22	0.10	0.10	0.16	23.78	内形	半円状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
7	11	基本群 F-30	PG	37	2B	RH22	-	調査面上部	N:51°W	(0.54)	(0.34)	(0.44)	(0.20)	0.11	23.76	内形	(扇状)	単層	1	無	×				
11	40	PG	41	2B	RH96	-	調査面上部	N:58°W	0.18	0.14	0.06	0.05	0.10	23.87	内形	半円状	単層	1	無	×					
11	41	PG	31	2B	RH96	-	調査面上部	N:8°E	0.21	0.16	0.08	0.07	0.10	23.94	内形	半円状	単層	1	無	×					
11	42	PG	32	2B	RH96	-	調査面上部	N:7°E	0.28	0.27	0.08	0.07	0.20	23.91	内形	台形状	単層	1	無	×					
11	43	PG	39	2B	RH96	-	調査面上部	N:25°E	0.25	0.22	0.12	0.12	0.27	23.74	内形	台形状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
11	43	PG	40	2B	RH96-11	-	調査面上部	N:28°E	0.17	0.16	0.06	0.05	0.08	23.94	内形	半円状	単層	1	無	×					
11	44	PG	29	2B	RH96-7	-	調査面上部	N:4°W	0.26	0.24	0.10	0.10	0.20	23.84	内形	V字状	単層	1	有	○	調査土層	晩期			
11	45	PG	28	2B	RH96	-	調査面上部	N:28°W	0.42	(0.22)	0.26	(0.18)	0.26	23.73	内形	V字状	水平	2	有	○	調査土層	晩期			

別表2 第10次調査 土器観察表

凡例 1 括弧の()内数字は復元数である。

- 2 観察対象は、口縁より胴部に最大径を有するものに限るである。
 3 胎土の有無物については、「G」が有底胎、「L」が有胎心胎、「U」が全面胎あるいは高胎。「+」がヤード、「赤」が赤胎子、「白」が白胎灰胎、「黄」が黄胎、「黒」が黒胎を表す。
 4 色目は「新色標土色誌」(小山・竹野1997)の記号をとした。

発掘 No.	発掘 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	調査 No.	直径 (cm)			最大径 (cm)		胎土	胎心	胎子	胎色	付着物		文様・胎文	時期	備考
												口縁	胎心	胎子	胎色	胎心					胎子	胎色			
13	12	1	本発掘	SK3	2B-9G10 2B-9G10	3 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	16.5	17.9	4.0	7.5	3	21	27	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR4/2)	コゲ	スス	C字文、点線状 胎文、点線状 文、三角胎の 目	晩期中葉	大形集中式	
13	12	2	本発掘	SK3	2B-9G10	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底					1	23	10	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR4/2)	コゲ	スス	点線状胎文(縦 目)	中期後葉	大形集中式	
13	12	3	本発掘	SK1	2B-9G10	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底			6.4			23	10	灰・黄・ 白・黄	黄褐色 (7.5YR5/4)	スス	胎文、十字	胎文、十字	晩期中葉		
13	12	4	本発掘	SK50	2B-8H21 2B-8H21	2 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底			6.2			36	18	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR7/4)	コゲ	スス	陶文(縦目)	晩期		
13	12	5	本発掘	SK50	2B-8H21 2B-8H21	2 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底						31	15	灰・ 黄	褐色 (7.5YR5/6)	コゲ	スス	縦目状胎文、 胎文	晩期		
13	12	6	本発掘	SK4	2B-8G19 2B-8G19	1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					2	3	灰・黄・ 白・黄	赤・黄褐色 (10YR3/1) 内：灰黄褐色 (10YR5/3)				胎文(十字)	晩期後葉		
13	12	7	本発掘	SK4	2B-8G19	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/3)				胎線状胎文(縦 目)	晩期		
13	12	8	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	赤・灰黄褐色 (10YR6/2) 内：黄褐色 (10YR7/3)				胎線状胎文・ 胎文(縦目)	晩期中葉	加蓋判別式	
13	12	9	本発掘	SK8	2B-8H16 2B-8H16	1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	25.4	25.8			11	12	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (7.5YR5/4)				小笠状胎、点線 目、陶文(縦 目)	晩期中葉	A形C式	
13	12	10	本発掘	SK8	2B-8H11 2B-8H16	1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	13.1	14.4			5	3	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/4)	コゲ	スス	点線状胎文、 胎文(縦目)	晩期中葉	A形C式		
13	12	11	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	(18.3)	(18.3)			2	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR7/3)				胎文、陶文	晩期中葉	A形C式	
13	12	12	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	(10.9)	(20.1)			2	6	灰・黄・ 白・黄	赤黄褐色 (10YR6/2)	コゲ	スス	胎線状胎文(縦 目)	晩期			
13	12	13	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					3	6	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/2)	コゲ	スス	陶文(縦目)	晩期			
13	12	14	本発掘	SK8	2B-8H16 2B-8H11	1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	20.6	12.2			7	4	灰・黄・ 白・黄	褐色 (7.5YR6/8)	コゲ	スス	陶文(縦目)	晩期			
13	12	15	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	黄褐色 (10YR5/6)				十字、縦目状 胎文(縦目)	晩期		
13	12	16	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底					1	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/4)				縦目状胎文 (縦目)	晩期		
13	12	17	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/4)				縦目状胎文 (縦目)	晩期		
13	12	18	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					3	1	灰・黄・ 白・黄	褐色 (5YR6/6)	コゲ	スス	縦目状胎文 (縦目)	晩期			
14	12	19	本発掘	SK8	2B-8H11 2B-8H16	1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					3	3	灰・黄・ 白・黄	褐色 (7.5YR7/6)	コゲ	スス	縦目状胎文 (縦目)	晩期			
14	12	20	本発掘	SK8	2B-8H11	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					3	3	灰・黄・ 白・黄	褐色 (5YR6/6)	スス	胎文	縦目状胎文 (縦目)	晩期			
14	12	21	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	V形	口→底			6.2		6	2	灰・黄・ 白・黄	黄褐色 (10YR8/4)	スス	胎文	胎文(十字)	—			
14	12	22	本発掘	SK8	2B-8H16	1	陶文 土胎	深溝	V形	口→底			10.8		8	4	灰・黄・ 白・黄	褐色 (5YR6/6)				胎文	—		
14	12	23	本発掘	SK51	2B-8H22 2B-8H22	1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	褐色 (5YR6/8)				陶文(縦目)	中期中葉		
14	12	24	本発掘	SK51	2B-8H22 2B-8H16 2B-8G20	1 1 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底	(21.7)	(22.2)	7.8	(20.6)	1	36	10	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (7.5YR7/4)	コゲ	スス	小笠状胎、胎線 目、陶文(縦 目)、平文胎文	晩期中葉	A形C式 ~ C2式	
14	12	25	本発掘	SK51	2B-8H22	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口→底					4	3	灰・黄・ 白・黄	褐色 (5YR6/8)	スス	胎文	陶文(縦目)	晩期			
14	12	26	本発掘	SK51	2B-8H22	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	赤褐色 (10YR1/1)				陶文(縦目)	晩期		
14	12	27	本発掘	SK51	2B-8H11 2B-8H11	2 1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					3	3	灰・黄・ 白・黄	褐色 (7.5YR8/6)	コゲ	スス	縦目状胎文 (縦目)	晩期			
14	12	28	本発掘	SK51	2B-8H22	2	陶文 土胎	深溝	直筒	底			7.0		22	9	灰・黄・ 白・黄	灰褐色 (10YR4/1)				胎文	晩期		
14	12	29	本発掘	SK27	2B-8G25	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	黄褐色 (5YR5/6)				十字、点線	晩期中葉	A形C式	
14	12	30	本発掘	SK27	2B-8G25	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	褐色 (7.5YR7/6)				平文文	晩期後葉	鳥形2式	
14	12	31	本発掘	SK27	2B-8G25	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					2	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR7/2)				平文(縦目)	晩期後葉	鳥形2式	
14	12	32	本発掘	SK27	2B-8G25	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/2)	コゲ	スス	陶文(縦目)	晩期			
14	12	33	本発掘	SK20	2B-9H3	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	黄褐色 (10YR3/1)				十字、平文胎 文、内外面赤 胎	晩期前葉	A形D式	
14	12	34	本発掘	SK20	2B-9H2	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	褐色 (7.5YR7/6)				胎文、胎文 陶文(縦目)	晩期前葉	A形C ~ C1式	
14	12	35	本発掘	SK20	2B-9H3	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR7/3)				胎文文、十字 胎、胎線状胎 文	晩期中葉	A形C式	
14	12	36	本発掘	SK20	2B-9H8	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	褐色 (7.5YR6/6)				胎線状胎文(縦 目)	晩期		
14	12	37	本発掘	SK30	2B-9G18	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	黄褐色 (10YR8/2)				胎文	中期前葉	鳥形2式	
14	12	38	本発掘	SK30	2B-9G17	2	陶文 土胎	深溝	直筒	口					2	1	灰・黄・ 白・黄	赤・黄褐色 (10YR3/2)				陶文(縦目)、 胎文(縦目)	中期前葉	鳥二形胎 集中式	
14	12	39	本発掘	SK30	2B-9G17	1	陶文 土胎	深溝	直筒	口					1	1	灰・黄・ 白・黄	灰黄褐色 (10YR5/6)	スス	胎文	陶文(縦目)	晩期中葉	加蓋判別式 ~ 鳥形集中式		

別 表

製鋼所 No.	鋼種 No.	品名	規格	用途	形状	製法	状態	厚さ (mm)	長さ (mm)	寸法 (mm)	重量 (kg)	備註	寸法		用途	備考									
													幅	高さ											
14	13	40	本製鋼	SK30	ZH-9C17	1	鋼文 上製	深引	目形	11-1体	14.9	15.0		5	3	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR5/4)	スズ	鋼文上 (新位)	製鋼所 標準	加付印式				
14	13	41	本製鋼	SK45 SK45 SK45	ZH-9H25 1	1	鋼文 上製	深引	目形	11-1体	23.9	24.4		6	3	長	IC-61-黄褐色 (10YR4/3)	コゲ	スズ	加硫鋼文 (種 位)	焼物				
14	13	42	本製鋼	SK44	ZH-10H5	3	鋼文 上製	深引	1形	体						1	右・長 角	褐色 (7.5YR7/6)		鋼文上 (種位)	中製出	新形式			
14	13	43	本製鋼	SK44	ZH-10H5	4~7	鋼文 上製	深引	1形	体						1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)		鋼文上 (種位) 焼物	中製出	大木SIS式			
14	13	44	本製鋼	SK44	ZH-10H5	3	鋼文 上製	深引	1形	体						1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR5/3)	コゲ	スズ	鋼文	焼物出	大新式		
14	13	45	本製鋼	SK44	ZH-10H5	2	鋼文 上製	深引	目形	体						1	長・赤 角	黄褐色 (2.5YR6/1)		手取状文	焼物出	大新式			
14	13	46	本製鋼	SK44	ZH-10H5	4~7	鋼文 上製	深引	目形	11-1体						1	右・長 角	褐色 (5YR6/3)	コゲ		手取状文 (種 位) 手取状文 文、吹取	焼物出	大新式		
14	13	47	本製鋼	SK44	ZH-10H5	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	灰白色 (10YR8/2)		鋼文上 (種位)	焼物			
14	13	48	本製鋼	SK44	ZH-10H5	2	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)		加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	49	本製鋼	SK44	ZH-10H5	2	鋼文 上製	深引	目形	体							1	右・長 角	褐色 (5YR5/3)		加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	50	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)		鋼文上、種文 上	焼物			
14	13	51	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	赤・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)		手取状文	焼物出	大新式		
14	13	52	本製鋼	SK28	ZH-8H21	1	鋼文 上製	深引	目形	11-1体						1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/3)		手取状文	焼物出	大新式			
14	13	53	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	11-1体	11 (12.4)					1	長・赤 角	褐色 (7.5YR6/6)		1字・吹取	焼物出 内外両面	中製			
14	13	54	本製鋼	SK28	ZH-8H17	1	鋼文 上製	深引	目形	口						2	長・赤 角	黄褐色 (10YR3/1)		吹取	焼物出	大新式 ~C2式			
14	13	55	本製鋼	SK28	ZH-8G20	1	鋼文 上製	深引	目形	体						2	長・赤 角	黄褐色 (10YR4/3)		吹取	加硫鋼文 (種 位)	焼物出	大新式 ~A式		
14	13	56	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/3)		加硫鋼文 (種 位)	焼物出	大新式 ~A式			
14	13	57	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR5/3)		吹取	焼物出	大新式 ~B2式		
14	13	58	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	口	19.3	19.3	8.2 (16.1)	12	34	12	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	コゲ	スズ	加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	59	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体						3	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/3)			加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	60	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体						1	長・赤 角	褐色 (7.5YR6/6)			加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	61	本製鋼	SK28 SK28	ZH-8H10 ZH-8H10	1 1	鋼文 上製	深引	目形	体						2	長・赤 角	赤・黄褐色 (7.5YR7/3) 内・褐色 (5YR6/3)		スズ	加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	62	本製鋼	SK28	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体	11.0					17	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/3)			加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	63	本製鋼	PI22	ZH-8C18 ZH-8C18	1 1	鋼文 上製	深引	目形	体						2	右・長 角	褐色 (7.5YR6/6)	コゲ	スズ	加硫鋼文 (種 位)	焼物			
14	13	64	本製鋼	P95	ZH-8C15 ZH-8C15	1 1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	赤褐色 (7.5Y5/6)			赤文	焼物		
14	13	65	本製鋼	P17	ZH-8C15	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR4/3)			鋼文上 (旧手 取)	焼物		
14	13	66	本製鋼	P912	ZH-8G25	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)		スズ	加硫鋼文 (種 位)	焼物		
14	13	67	本製鋼	P126	ZH-9H5	2	鋼文 上製	深引	目形	底						1	2	長 角	洗灰褐色 (10YR8/3)			焼物			
14	13	68	本製鋼	P148	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	右・長 角	IC-61-黄褐色 赤・赤 (7.5YR6/4)			吹取	焼物出 ~中製		
14	13	69	本製鋼	P148	ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	灰白色 (10YR8/2)		スズ	手取	焼物出		
14	13	70	本製鋼		ZH-9H11	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	右・長 角	IC-61-黄褐色 (7.5YR7/4)			鋼文上 (種位) 手取	加硫鋼文 (手 取)	中製出	新形式
14	13	71	本製鋼		ZH-9G23	1	鋼文 上製	深引	目形	体						2	右・赤 角	褐色 (7.5YR6/6)			手取	加硫鋼文、手 取	加硫鋼文 (種 位)	中製出	新形式
14	13	72	本製鋼		ZH-9H22	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR5/4)			手取	加硫鋼文	中製出	
14	13	73	本製鋼		ZH-9H6	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	褐色 (7.5YR7/6)			手取	加硫鋼文	中製出	
14	13	74	本製鋼		ZH-9H11	1	鋼文 上製	深引	目形	底	18.0					6	3	右・長 角	褐色 (2.5YR8/3)			手取	加硫鋼文	中製出	低式
14	13	75	本製鋼		ZH-10G2	1	鋼文 上製	深引	目形	体						1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/3)			吹取	中製出	大新式 ~9 ~手取		
14	13	76	本製鋼		ZH-9H9	1	鋼文 上製	深引	目形	体							1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/3)			吹取	加硫鋼文	中製出	大新式
14	13	77	本製鋼		ZH-9H2	1	鋼文 上製	深引	目形	口						2	1	右・長 角	褐色 (7.5YR7/6)			鋼文上 (種位)	中製出		
14	13	78	本製鋼		ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	体						1	1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (7.5YR7/4)			吹取	加硫鋼文	中製出	三輪橋式
14	13	79	本製鋼		ZH-9G5	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	右・長 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/3)			吹取	加硫鋼文	中製出	三輪橋式
14	13	80	本製鋼		ZH-9H2	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/3)			吹取	加硫鋼文 (種 位)	中製出	加付印式
14	13	81	本製鋼		ZH-8H22	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR7/3)			吹取	加硫鋼文 (種 位)	中製出	加付印式
14	13	82	本製鋼		ZH-9G5	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)			吹取	加硫鋼文 (種 位)	焼物出	種行上製
14	13	83	本製鋼		ZH-9G24	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	灰白色 (10YR5/2)			吹取	加硫鋼文	種行上製	
14	13	84	本製鋼		ZH-9H2	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	黄褐色 (2.5Y5/3)			吹取	加硫鋼文	種行上製	
14	13	85	本製鋼		ZH-8H10	1	鋼文 上製	深引	目形	口						1	1	長・赤 角	IC-61-黄褐色 (7.5YR5/4)			吹取	加硫鋼文	種行上製	
14	13	86	本製鋼		ZH-9C18	1	鋼文 上製	深引	目形	体						1	1	長・赤 角	黄褐色 (7.5YR5/3)		スズ	吹取	加硫鋼文 (種 位)	種行上製	

別冊 No.	写真 No.	品名 No.	高さ mm	奥行 mm	重量 g	素材	加工	用途	分類	区分	法線 (cm)			通存率 (%)	加工 状態	備考	材質	文種・漢文	時期	備考	
											口幅	口高さ	口深さ								
17	15	182	本装	28-8116	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	6.0	4	2	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR7/2)	体	緋・紺(緋)	漢文	前期	
17	15	183	本装	28-8116	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	石・兵・雷	靑灰褐色 (10YR7/6)	体	赤文	漢文	前期	
17	15	184	本装	28-8111	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	黒褐色 (2.5YR6/1)	体	赤文	漢文	前期	
17	15	185	本装	28-8G19	6→9	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	雷・白	黒褐色 (10YR3/2)	体	赤文・平反	漢文	前期	
17	15	186	本装	28-8H21	8→	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文・平反	漢文	前期	
17	15	187	本装	28-8116	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
17	15	188	本装	28-9G5	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR4/2)	体	赤文(緋)	漢文	前期	
17	15	189	本装	28-9H16	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	190	本装	28-9H11	8→	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	兵・雷	靑灰褐色 (10YR5/2)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	191	本装	28-9G5	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	192	本装	28-9G10	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (2.5YR6/6)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	193	本装	28-9G4	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	194	本装	28-10H5	8→	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	兵・雷・赤・白	褐色 (5YR6/6)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	195	本装	28-8116	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	石・兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	196	本装	28-8G19	6→9	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	石・兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
17	16	197	本装	28-9H6	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		4	4	兵・雷	靑灰褐色 (10YR4/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	198	本装	28-9H2	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	兵・雷	褐色 (2.5YR4/3)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	199	本装	28-8G18	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR4/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	200	本装	28-9G15	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	石・兵・雷	靑灰褐色 (10YR4/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	201	本装	28-9H2	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	兵・雷	靑灰褐色 (10YR4/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	202	本装	28-9G10	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		3	3	兵・雷	黒褐色 (10YR3/1)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	203	本装	28-9G10	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		9	9	兵・雷・赤・白	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	204	本装	28-9H11	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	11.0	5	2	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文・平反・緋	漢文	前期	
18	16	205	本装	28-9H8	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	11.0	3	2	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	206	本装	28-9G5	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	8.2	4	2	石・兵・雷	靑灰褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	207	本装	28-9H11	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	8.0	8	3	兵・雷・白	IC-61-黄褐色 (2.5Y6/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	208	本装	28-8G25	8→	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	6.5	6	6	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	209	本装	28-9H8	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	8.0	4	1	石・兵・雷	靑灰褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	210	本装	28-8G15	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底	6.6	5	4	兵・雷	靑灰褐色 (10YR7/6)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	211	本装	28-9H21	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		6	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	212	本装	28-8G25	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	褐色 (2.5YR6/6)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	213	本装	28-9G19	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)	体	赤文・平反	漢文	前期	
18	16	214	本装	28-8G19	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR3/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	215	本装	28-9G10	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR5/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	216	本装	28-9H17	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	兵・兵	IC-61-黄褐色 (10YR7/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	217	本装	28-9H17	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	218	本装	28-9H12	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	219	本装	28-9H21 28-9H21	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (2.5YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	220	本装	28-9H11	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	2	石・兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR5/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	221	本装	28-9H11	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	褐色 (2.5YR6/6)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	222	本装	28-8G23	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑色 (2.5YR4/3)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	223	本装	28-8G20	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR5/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	224	本装	28-9H17	1→1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		3	3	兵・雷	靑褐色 (10YR3/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	225	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	226	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	227	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		2	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR7/4)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	228	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR7/6)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	229	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR7/6)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	230	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	IC-61-黄褐色 (10YR6/2)	体	赤文	漢文	前期	
18	16	231	繻	IT	1	絹文 土部	深緑	深緑	V群	体	底		1	1	兵・雷	靑灰褐色 (10YR5/2)	体	赤文	漢文	前期	

別 表

別表 No.	写真 No.	品名	加工位置		単位	種類	分類	適用 部位	法線 (cm)			単位 長さ	動土 含有物	色調	打撃物		文様・高さ	時期	備考			
			道端 縁側	グランド					長さ	幅	高さ				内面	外面						
18	16	232	横溝	3T	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/2)	無文、突起	地盤中盤	大堀C1式				
18	16	233	横溝	3T	1	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/2)	横文H、平行 短溝文	地盤中盤	大堀C2式				
18	16	234	横溝	3T	1	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/4)	溝底の突起	地盤中盤	大堀C2式				
18	16	235	横溝	3T	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	黄褐色 (10YR4/2)	浮文	地盤後盤	鳥居2式				
18	16	236	横溝	3T	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/4)	無文(十字)	地盤					
18	16	237	横溝	3T	1	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/2)	横文状突起文 (縦位)	地盤					
18	16	238	横溝	3T	並	縦文	並	目				2	長・黄	黄褐色 (10YR7/4)	コゲ	無文	地盤					
18	16	239	横溝	3T	1	縦文	並	目				1	石・長・黄	黄褐色 (10YR6/2)	スス	無文	地盤後盤					
18	16	240	横溝	3T	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/2)	浮文	地盤中盤	横立式				
18	16	241	横溝	並	並	縦文	並	目				1	長・黄	黄褐色 (10YR8/2)	人組文	地盤前盤	大堀1式					
18	16	242	横溝	並	並	縦文	並	目				2	石・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/2)	前文文、横文 短、(縦位)	地盤中盤	大堀C1式					
18	16	243	横溝	並	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	黄褐色 (10YR3/2)	縦文、工字文	地盤後盤	鳥居2式				
18	16	244	横溝	並	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・褐色 (10YR7/4)	スス	山形突起、突起 十字	地盤後盤	鳥居2式			
18	16	245	横溝	並	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	黄褐色 (10YR6/2)	スス	彫り目縁、突起 短	地盤後盤				
18	16	246	横溝	並	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/2)	彫り目縁、突起 短、十字	地盤後盤					
18	16	247	横溝	並	並	縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/4)	無文	地盤					
18	16	248	立石			縦文	並	目				2	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/2)		横文H(前位)	地盤					
18	16	249	立石			縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/4)		横文L(前位)、 竹文、陸起縁	中盤中盤				
18	16	250	立石			縦文	並	目				1	長・黄	黄褐色 (10YR7/6)		竹縁起縁	中盤中盤	瓦兵式				
18	16	251	立石			縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/4)		1字形内縁	地盤後盤	横材1層			
18	16	252	立石			縦文	並	目				1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/4)		前文文、横文 L、十字	地盤中盤	大堀C3式				
18	16	253	立石			縦文	並	目				1	長・黄	黄褐色 (10YR5/4)		浮文	地盤					
18	16	254	立石			縦文	並	目				1	長・黄	褐色 (7.5YR6/5)	コゲ	横文L(前位)、 前文文	地盤後盤	横立式				
18	16	255	立石			縦文	並	目				1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR5/2)		工字文、横文 RR(前位)、舟 形赤点	地盤前盤	No.256と 同一層				
18	16	256	立石			縦文	並	目				2	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR5/3)		工字文、横文 RR(前位)、舟 形赤点	地盤前盤	No.255と 同一層				
18	16	257	立石			縦文	並	目	側	側	側	2	1	長・黄	黄褐色 (10YR4/2)		山形突起文、突 起工字文、横文 L、R(前位)	地盤前盤	横立式			
18	16	258	立石			縦文	並	目				1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/2)		突起工字文、横 文L、R(前位)	地盤前盤	横立式				
18	16	259	立石			縦文	並	目				1	1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/4)		縦文文、波状突 起	地盤前盤	横立式			
18	16	260	高塚			縦文	並	目				1	長・黄	褐色 (7.5YR6/4)		竹縁起縁	中盤中盤					
18	16	261	高塚			縦文	並	目				1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR7/4)		前文文、多葉突 起	地盤前盤	鳥居3層高 式				
18	16	262	高塚			縦文	並	目				1	長・黄	にがい・黄褐色 (10YR6/4)		前文文、横文 L、舟形	地盤前盤					
18	16	263	高塚			縦文	並	目				3	3	長・赤	褐色 (7.5YR2/6)		横文L、(前位)	地盤				
18	16	264	高塚			縦文	並	目				1	長・黄	褐色 (7.5YR7/6)		横文L、(前位)	地盤					
18	16	265	本塚			打石	並	目	側	側	側	0.0	0.0	(3.0)	2.1	8	1	4	右	横オリー7色 (10Y4/3)	右赤文、海緑紋	打石→ 古代陶器

別表3 第10次調査 土製品・漆製品・アスファルト観察表

別表 No.	写真 No.	品名	加工位置		単位	種類	分類	法線 (cm)			単位 長さ	動土 含有物	色調	打撃物		文様・高さ	時期	備考		
			道端 縁側	グランド				長さ	幅	高さ				内面	外面					
19	17	1	本塚	SK20	2B-9H2	1	土版				78.29	65.05	31.39	130.44	長・赤・赤	褐色 (7.5YR6/6)	無文	地盤後盤		
19	17	2	本塚	SK20	2B-9H1	1	土版				70.02	61.17	20.01	74.77	長・赤	褐色 (7.5YR6/6)	無文	地盤後盤		
19	17	3	本塚	SK31	2B-9H22	1	土版				28.73	19.29	19.80	8.45	長・赤	褐色 (5YR6/6)	無文	地盤後盤		
19	17	4	本塚	SK31	2B-9H23	1	土版				-	-	-	-	1.74	石・長	浅黄褐色 (10YR8/3)	無文	地盤後盤	
19	17	5	本塚	SK31	2B-9H21	1	土版				-	-	-	58.81	石・長	にがい・黄褐色 (10YR7/3)	彫り目縁	地盤後盤		
19	17	6	本塚	SK31	2B-9G10	1	土版				45.47	40.47	20.90	24.17	長・赤	黄褐色 (10YR6/4)	無文	地盤後盤		
19	17	7	本塚	SK31	2B-9H21	1	土版				39.75	45.46	21.80	21.85	長・赤	黄褐色 (10YR7/2)	無文	地盤後盤	空前	
19	17	8	本塚	SK31	2B-9G11	1	土版				23.68	25.89	14.10	4.25	長・赤	褐色 (10YR6/3)	無文	地盤後盤		
19	17	9	横塚	SK2	2T	1	土版				26.58	31.43	21.00	6.99	長・赤	黄褐色 (7.5YR2/2)	無文	地盤後盤		
19	17	10	立石			立石					59.08	35.41	19.41	49.68	石・長・赤・赤	灰白 (10YR8/2)	無文	地盤前盤		
19	17	11	表塚			表塚					45.20	44.19	23.97	47.80	石・長・赤	灰白 (5YR6/6)	無文	地盤前盤		
19	17	12	本塚			打石					15.27	21.12	0.79	0.61		褐色 (10Y8/4)		内面赤点	地盤後盤	小形打石

別表4 第10次調査 石器観察表

図版No.	発掘No.	調査種別	グリッド	層位	遺構名	器種	石材	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	
20	18	1	本発掘調査(20-8012)	2	SK30	石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	28.54	12.53	5.27	1.09	
20	18	3	本発掘調査(20-8011)	1	SK8	石鏃	珉	珉質角閃岩	C	26	12	13.09	9.27	1.65
20	18	3	本発掘調査(20-8016)	3	SK8	石鏃	珉	珉質角閃岩	不明	31.48	6.10	5.94	2.59	
20	18	4	本発掘調査(20-8016)	3	SK8	石鏃	珉	珉質角閃岩	A	26.22	13.35	6.07	1.05	
20	18	5	本発掘調査(20-8016)	3	SK6	石鏃	珉	珉石(赤玉)		20.87	21.46	7.85	4.63	
20	18	4	本発掘調査(20-8012)	1-2	SK53	不定形石器	珉	珉質角閃岩		20.23	25.08	8.90	3.98	熟焼
20	18	7	本発掘調査(20-8012)	2	SK31	石鏃	珉	チャート		71.60	69.47	31.29	254.62	
20	18	8	本発掘調査(20-8025)	2	SK27	石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	19.89	9.89	7.25	1.06	
20	18	9	本発掘調査(20-8025)	3	SK27	不定形石器	珉			24.45	37.00	8.03	7.70	熟焼
20	18	10	本発掘調査(20-9017)	3	SK30	軸石(赤玉)	珉			43.57	35.51	18.60	7.04	
20	18	11	本発掘調査(20-10015)	2	SK44	石鏃	珉(赤玉)	珉質角閃岩		23.82	19.72	9.76	3.28	
20	18	12	本発掘調査(20-10015)	4-7	SK44	石鏃(赤玉)	珉	珉質角閃岩		30.10	31.17	7.76	6.71	
20	18	13	本発掘調査(20-10015)	3	SK44	不定形石器	珉	珉質角閃岩		22.57	25.96	9.99	6.14	珉石(赤玉)の可能性あり
20	18	14	本発掘調査(20-10015)	4-7	SK44	不定形石器	珉	珉質角閃岩		61.80	31.92	21.38	23.62	
20	18	15	本発掘調査(20-10015)	1-2	SK44	石鏃	珉	珉質角閃岩		37.67	23.59	17.10	21.66	
20	18	16	本発掘調査(20-10015)	1-2	SK44	石鏃	珉	チャート		58.38	40.45	27.92	92.07	
20	18	17	本発掘調査(20-10015)	3	SK44	磨石+石鏃	珉	珉質角閃岩		71.56	69.81	25.20	163.35	
20	18	18	本発掘調査(20-10015)	3	SK45	石鏃	珉	珉質角閃岩	不明	17.00	9.25	3.89	0.56	フタマツ村産
20	18	19	本発掘調査(20-8025)	3	SK45	不定形石器	珉	珉質角閃岩		29.13	29.52	16.43	21.66	
20	18	20	本発掘調査(20-8020)	3	SK28	石鏃	珉	珉質角閃岩	第4	29.80	9.49	5.19	1.02	フタマツ村産
20	18	21	本発掘調査(20-8025)	3	SK28	石鏃	珉			32.32	15.35	8.30	2.32	熟焼
20	18	22	本発掘調査(20-8025)	3	SK28	磨石	珉	珉質角閃岩		112.27	85.18	43.69	305.82	熟焼
20	18	23	本発掘調査(20-8012)	1	SK28	石鏃	珉	珉質角閃岩		94.60	80.11	40.60	318.13	
20	18	24	本発掘調査(20-8010)	1-4	SK28	石鏃	珉	珉質角閃岩	第2	35.22	15.70	9.79	1.74	フタマツ村産
21	18	25	本発掘調査(20-9012)	田		石鏃	珉		第3	22.21	15.52	6.39	1.42	熟焼
21	18	26	本発掘調査(20-9012)	田		石鏃	珉		第3	23.05	10.13	5.17	0.88	熟焼
21	18	27	本発掘調査(20-9015)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	20.43	11.71	4.18	0.63	
21	18	28	本発掘調査(20-9012)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	24.11	14.63	5.42	1.05	
21	18	29	本発掘調査(20-8012)	田		石鏃	珉		第2	19.83	13.82	4.69	0.80	熟焼
21	18	30	本発掘調査(20-10015)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	23.19	12.62	5.61	1.40	
21	18	31	本発掘調査(20-9015)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	29.32	16.30	5.77	2.55	
21	18	32	本発掘調査(20-9016)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	20.47	16.88	8.30	3.68	フタマツ村産
21	18	33	本発掘調査(20-8025)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	不明	18.70	9.43	4.11	0.69	
21	18	34	本発掘調査(20-8010)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第1	25.60	10.71	5.91	1.27	
21	18	35	本発掘調査(20-8012)	田		石鏃	珉石(赤玉)		C	27.84	11.08	6.87	2.18	
21	18	36	本発掘調査(20-8010)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩	C	26.14	11.96	4.83	1.27	
21	18	37	本発掘調査(20-9012)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩	不明	9.38	6.72	4.44	0.18	5角部
21	18	38	本発掘調査(20-9012)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	24.41	10.74	3.90	0.72	
21	18	39	本発掘調査(20-9015)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	第3	26.57	13.69	4.21	1.10	
21	18	40	本発掘調査(20-9015)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩	C	20.69	9.53	5.50	1.51	
21	18	41	本発掘調査(20-9015)	田		石鏃	珉		C	29.47	7.15	6.40	1.37	熟焼
21	18	42	本発掘調査(20-9015)	田		石鏃	珉	不明		6.80	6.88	4.22	0.16	熟焼 先端部
21	18	43	本発掘調査(20-8012)	1-田		石鏃(赤玉)	珉			22.59	11.85	3.73	1.25	
21	18	44	本発掘調査(20-8016)	田		石鏃(赤玉)	珉			21.31	18.84	7.43	2.38	
21	18	45	本発掘調査(20-8012)	1-田		石鏃	珉			20.80	18.79	4.67	1.80	
21	18	46	本発掘調査(20-8014)	田		石鏃(赤玉)	珉	珉質角閃岩		27.40	15.62	5.11	2.42	熟焼
21	18	47	本発掘調査(20-8012)	1-田		石鏃(赤玉)	珉	珉質角閃岩		17.66	17.60	5.50	1.33	熟焼
21	18	48	本発掘調査(20-8016)	田		石鏃(赤玉)	珉	珉質角閃岩		18.78	12.63	4.20	0.94	
21	18	49	本発掘調査(20-8016)	田		石鏃	珉	珉質角閃岩		22.60	19.88	3.50	1.88	
21	18	50	本発掘調査(20-8010)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩		29.13	13.92	6.85	3.84	
21	18	51	本発掘調査(20-8016)	カクラン		石鏃	珉	珉質角閃岩		19.01	10.20	3.90	1.20	熟焼
21	18	52	本発掘調査(20-8016)	田		石鏃	珉			21.23	10.17	5.15	1.29	熟焼
21	18	53	本発掘調査(20-8012)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩		19.64	9.40	5.31	0.77	
21	18	54	本発掘調査(20-8024)	1-田		石鏃	珉	珉質角閃岩		62.29	36.94	14.09	30.91	
21	18	55	本発掘調査(20-9025)	田		不定形石器	珉			19.78	16.46	9.20	2.44	
21	18	56	本発掘調査(20-8020)	1-田		不定形石器	珉	珉質角閃岩		22.18	26.23	9.18	3.53	
21	18	57	本発掘調査(20-9018)	1-田		不定形石器	珉			29.45	20.08	8.79	4.84	熟焼
21	18	58	本発掘調査(20-9016)	田		不定形石器	珉	珉石(赤玉)		27.03	29.30	9.08	8.59	
21	18	59	本発掘調査(20-8019)	1-田		銅片	珉			32.50	23.28	10.67	7.65	熟焼
21	18	60	本発掘調査(20-9017)	田		不定形石器	珉			33.31	27.95	7.07	3.92	
21	18	61	本発掘調査(20-8025)	田		不定形石器	珉	珉質角閃岩		32.22	31.18	8.87	8.92	
21	18	62	本発掘調査(20-9017)	カクラン		不定形石器	珉			46.50	35.07	11.28	13.72	
21	18	63	本発掘調査(20-9018)	1-田		不定形石器	珉			68.93	31.30	19.09	26.71	
21	18	64	本発掘調査(20-8019)	田		不定形石器	珉	珉質角閃岩		58.10	52.17	12.21	29.07	
21	18	65	本発掘調査(20-9016)	田		不定形石器	珉			18.30	15.79	4.90	1.56	
21	18	66	本発掘調査(20-9016)	田		不定形石器	珉			22.71	15.19	5.99	1.24	
21	18	67	本発掘調査(20-9016)	田		不定形石器	珉			15.98	23.27	5.85	1.73	熟焼
21	18	68	本発掘調査(20-8015)	1-田		磨石	珉			22.88	18.43	9.05	4.29	
21	18	69	本発掘調査(20-8016)	1-田		磨石	珉石(赤玉)	A		21.50	29.51	11.82	7.22	熟焼
21	18	70	本発掘調査(20-8016)	田		磨石	珉石(赤玉)	第2		34.83	28.22	24.11	11.98	
21	18	71	本発掘調査(20-9024)	田		磨石	珉			29.98	20.51	13.68	6.48	熟焼
21	18	72	本発掘調査(20-9011)	1-田		磨石	珉			29.00	26.37	8.90	8.17	熟焼
21	18	73	本発掘調査(20-8015)	1-田		磨石	珉	珉質角閃岩		31.65	23.87	8.19	6.48	
21	18	74	本発掘調査(20-8011)	1-田		磨石	珉	A		27.25	36.66	16.68	11.58	熟焼
21	18	75	本発掘調査(20-9011)	1-田		磨石	珉	珉質角閃岩		12.30	8.71	1.80	0.19	産出層不明(産出層No.1)
21	18	76	本発掘調査(20-8010)	1-田		銅片	珉			11.59	9.10	3.79	0.22	産出層不明(産出層No.2)
21	18	77	本発掘調査(20-9017)	1-田		銅片	珉			14.78	15.30	4.02	0.98	熟焼
21	18	78	本発掘調査(20-8016)	田		銅片	珉	珉質角閃岩		23.73	16.38	11.40	4.12	
21	18	79	本発掘調査(20-10022)	カクラン		銅片	珉	珉質角閃岩		19.13	27.94	9.23	3.86	
21	18	80	本発掘調査(20-8025)	田		不定形石器	珉	珉質角閃岩		28.71	25.30	8.00	5.48	
21	18	81	本発掘調査(20-8023)	1-田		銅片	珉			28.87	26.35	10.47	5.91	
21	18	82	本発掘調査(20-8012)	田		銅片	珉	珉質角閃岩		28.96	32.04	10.02	4.40	
21	18	83	本発掘調査(20-8016)	田		銅片	珉			24.15	34.51	3.50	4.93	
21	18	84	本発掘調査(20-8018)	1-田		銅片	珉			49.21	42.40	19.21	40.18	
21	18	85	本発掘調査(20-9016)	田		銅片	珉			18.10	18.95	6.25	1.94	熟焼
21	18	86	本発掘調査(20-9010)	田		銅片	珉	D		18.39	22.21	13.03	4.69	熟焼
21	18	87	本発掘調査(20-8016)	田		銅片	珉	E		16.69	22.70	11.40	2.56	熟焼
21	18	88	本発掘調査(20-8025)	田		銅片	珉	C2		22.17	24.10	17.45	9.70	熟焼
21	18	89	本発掘調査(20-9011)	1-田		銅片	珉	D		21.05	34.36	18.57	10.53	
21	18	90	本発掘調査(20-8012)	カクラン		銅片	珉	A		35.54	20.80	20.88	11.44	熟焼
21	18	91	本発掘調査(20-9016)	田		銅片	珉	A		28.98	29.30	14.01	23.66	熟焼
21	18	92	本発掘調査(20-9016)	田		銅片	珉	A		31.18	24.05	20.30	15.00	熟焼
21	18	93	本発掘調査(20-9016)	1-田		銅片	珉	A		29.62	8.01	19.83	17.83	熟焼

別 表

調査 No.	写真 No.	品名	調査種別	グリッド	層位	通称名	種類	石種	分類	寸法				備考
										長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
22	20	94	本発掘調査(2B)	8625	面	石核	3面	A	24.72	40.80	15.12	11.93	9.44	焼熱
22	20	95	本発掘調査(2B)	9811	面	石核	3面	B-1	26.01	34.74	12.12	9.44	9.44	焼熱
22	20	96	本発掘調査(2B)	9816	面	石核	1面	A	30.12	36.47	26.29	19.63		
22	20	97	本発掘調査(2B)	9813	1面	石核	1面	A	38.42	40.62	21.31	28.20	9.44	焼熱
22	20	98	本発掘調査(2B)	9816	1面	石核	1面	A	35.08	38.35	23.04	32.43		
22	20	99	本発掘調査(2B)	9812	1面	石核	3面	A	40.45	34.21	20.50	18.13		
22	20	100	本発掘調査(2B)	9810	面	石核	1面	A	47.21	34.50	34.98	48.22	9.44	焼熱
22	20	101	本発掘調査(2B)	9816	1面	石核	梨皮片	D	48.40	73.82	29.50	76.13		
22	20	102	本発掘調査(2B)	9816	1面	石核	梨皮片	A	61.53	66.15	44.30	183.95		
22	20	103	本発掘調査(2B)	9810	縁上	石核	1面	部-2	17.78	28.60	8.69	4.61	9.44	焼熱
22	20	104	本発掘調査(2B)	9810	縁上	石核	1面	部-2	23.41	25.84	6.65	7.56	9.44	焼熱
22	20	105	本発掘調査(2B)	9810	縁上	石核	1面	A	20.71	27.42	17.44	9.79	9.44	焼熱
22	20	106	本発掘調査(2B)	9810	縁上	石核	梨皮片	A	19.21	38.60	13.67	15.49		
22	20	107	本発掘調査(2B)	9810	縁上	石核	1面	D	51.00	41.07	32.20	151.10		
22	21	1088	本発掘調査(2B)	8618	1面	磨製石斧	遠辺石	A	52.29	37.83	10.63	31.67		
22	21	1099	本発掘調査(2B)	8625	1面	磨製石斧	遠辺石	A	44.69	34.79	8.97	18.30		
22	21	1103	本発掘調査(2B)	9816	面	磨製石斧	梨皮片	B	22.75	37.56	25.78	71.04		
22	21	1111	本発掘調査(2B)	9620	面	磨製石斧	梨皮片	B	64.58	45.99	29.83	121.17		
22	21	1121	本発掘調査(2B)	8619	面	磨製石斧	梨皮片	B	77.81	45.05	26.22	141.97		
22	21	1133	本発掘調査(2B)	8615	1面	磨製石斧	梨皮片	B	106.68	65.20	36.09	343.77		
22	21	1144	本発掘調査(2B)	9810	縁上	磨製石斧	梨皮片	B	111.88	46.21	35.96	273.89		
22	21	1155	本発掘調査(2B)	8618	1面	石核	梨皮片	A	36.42	29.20	10.98	16.71		
22	21	1161	本発掘調査(2B)	8912	1面	石核	片状石	A	43.83	25.13	19.81	33.21		
22	22	117	本発掘調査(2B)	8620	1面	石核	碎石		138.81	68.21	31.48	350.62		
22	22	118	本発掘調査(2B)	8615	1面	磨石	1面		42.13	37.19	20.71	45.00		
22	22	119	本発掘調査(2B)	9811	1面	磨石	1面		46.41	34.62	25.76	53.81		
22	22	120	本発掘調査(2B)	8618	1面	磨石	梨皮片		47.09	41.13	33.50	84.34		
22	22	121	本発掘調査(2B)	8610	面	磨石+磨石	梨皮片		58.60	45.41	31.33	106.91		
22	22	122	本発掘調査(2B)	8619	1面	磨石	片状石		71.75	66.29	38.70	250.65		
22	22	123	本発掘調査(2B)	8624	1面	磨石	片状石		85.45	73.91	41.89	338.09		
22	22	124	本発掘調査(2B)	8619	1面	磨石	ホムフエリス		115.30	64.10	65.92	855.30		
22	22	125	本発掘調査(2B)	8623	1面	磨石	ホムフエリス		71.09	58.73	33.59	156.75		
22	22	126	本発掘調査(2B)	8625	1面	磨石	梨皮片		108.03	71.02	50.92	291.08		
22	22	127	本発掘調査(2B)	9812	1面	磨石+磨石	碎石		62.30	58.56	28.17	123.00		
22	22	128	本発掘調査(2B)	8619	1面	磨石+磨石	片状石		66.53	59.40	30.80	151.90		
22	22	129	本発掘調査(2B)	9812	1面	磨石+磨石	片状石		71.59	65.02	35.28	226.48		
22	22	130	本発掘調査(2B)	9810	縁上	磨石+磨石	時置片		92.71	83.80	55.69	608.24		
22	22	131	本発掘調査(2B)	9818	1面	磨石+磨石	碎石		60.90	60.87	44.67	261.98		
22	22	132	本発掘調査(2B)	9816	1面	磨石+磨石	時置片		97.79	67.94	42.90	411.94	ペンタゴン磨	
22	22	133	本発掘調査(2B)	8614	面	磨石+磨石	梨皮片		105.19	89.45	50.79	406.10		
22	22	134	本発掘調査(2B)	8614	面	磨石+磨石+磨石	梨皮片		107.15	91.18	50.25	386.04		
22	22	135	本発掘調査(2B)	9819	骨ナシ	石核	梨皮片		69.41	21.78	6.35	15.26	東北系	
22	22	136	高松住居		高松	石核	片状石		62.01	56.83	66.77	295.11		
22	22	137	上季立会		赤松ソ	梨皮片	時置片		53.01	22.02	7.92	3.15		
22	22	138	上季立会		赤松ソ	石核	時置片	C1	101.28	102.62	89.42	3608.51		
22	22	139	上季立会		赤松ソ	磨石	片状石		55.42	51.29	42.11	170.36		
22	22	140	上季立会		赤松ソ	磨石	梨皮片(焼熱)		63.82	76.69	72.14	650.27		

別表5 第10次調査 遺構出土石器種別・搬入種組成表

遺構名	種別	製石石種											磨石	磨石+磨石	磨石+磨石+磨石	石核	骨ナシ	備考				
		石核	石核	石核	石核	石核	石核	石核	石核	石核	石核	石核										
		点数	比率	高松比率	点数	比率	高松比率	点数	比率	高松比率	点数	比率	高松比率	点数	比率	高松比率	点数	比率	高松比率	点数	比率	高松比率
河原池	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK2	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK3	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK4	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK8	総点数(点)	0	0.0%																			
	総重量(g)	0	0.0%																			
	搬入率(%)	0	0.0%																			
SK28	総点数(点)	2	100.0%																			
	総重量(g)	2	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK31	総点数(点)	2	100.0%																			
	総重量(g)	2	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK27	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK42	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK20	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK30	総点数(点)	1	100.0%																			
	総重量(g)	1	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			
SK44	総点数(点)	2	100.0%																			
	総重量(g)	2	100.0%																			
	搬入率(%)	100	100.0%																			

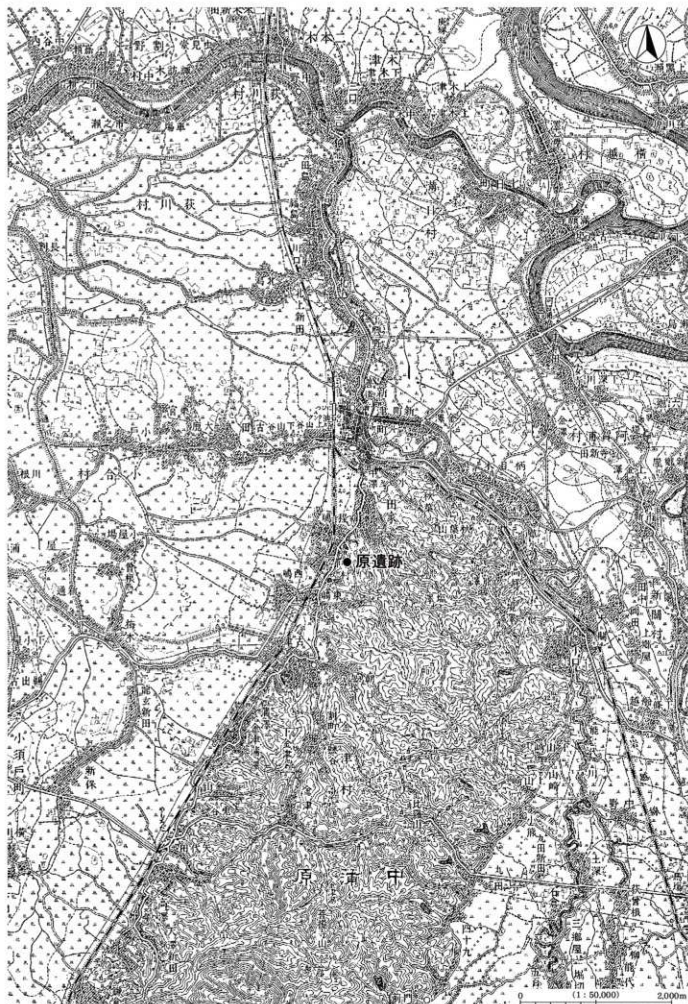
別表9 調査別種・焼礫点数重量表

調査年度	調査種別	種・焼礫	点数			重量 (g)		
			包含層	表層	小計	包含層	小計	
2018	本発掘調査	礫	193	12	205	55704.88	2633.02	58339.90
		砂礫	10	1	11	2522.73	543.26	3065.99
		合計	203	13	216	58227.61	3176.28	61403.89
2017	埋蔵調査	礫	1	0	1	426.95	0.00	426.95
		砂礫	0	0	0	0.00	0.00	0.00
		合計	1	0	1	426.95	0.00	426.95
2017	工事立会	礫	2	0	2	351.36	0.00	351.36
		砂礫	0	0	0	0.00	0.00	0.00
		合計	2	0	2	351.36	0.00	351.36

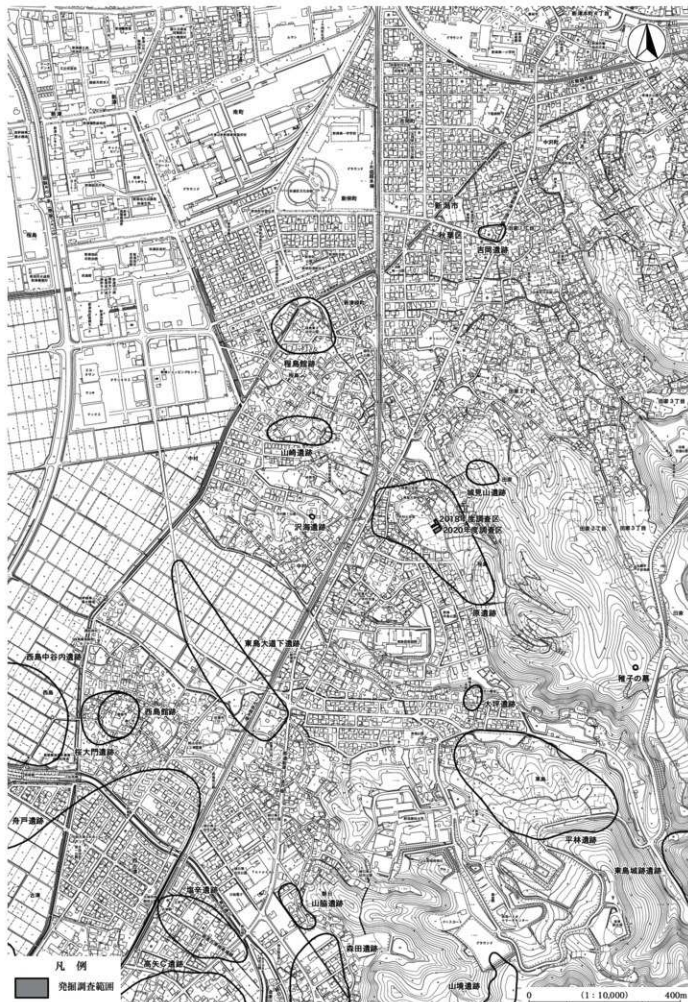
別表10 第10次調査 遺構出土石器石材組成表

遺構名	種別 出土地	珪質頁岩	玉髄質珪質頁岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	チャート	黒石炭 (燧石)	赤石炭 (燧石)	玉髄	珪質凝灰岩	花崗岩	軽石	合計
SK30	出敷 (点)									1			1
	重量 (g)									1.09			1.09
SK2	出敷 (点)								1				1
	重量 (g)								2.39				2.39
SK4	出敷 (点)	1											1
	重量 (g)	0.25											0.25
SK8	出敷 (点)	1		2			1		2	1			7
	重量 (g)	0.82		2.60			4.63		1.86	2.99			12.90
SK28	出敷 (点)		1						1				2
	重量 (g)		0.11						0.05				0.16
SK31	出敷 (点)	1	4			1			2				8
	重量 (g)	12.46	8.03			254.52			1.17				276.18
SK27	出敷 (点)		2						3				5
	重量 (g)		1.34						7.96				9.30
SK42	出敷 (点)						1						1
	重量 (g)						2.93						2.93
SK30	出敷 (点)											1	1
	重量 (g)											7.04	7.04
SK44	出敷 (点)	4		1	1	1	1				1		9
	重量 (g)	42.76		6.14	163.35	92.07	2.96				21.56		328.44
SK45	出敷 (点)		1										1
	重量 (g)		0.55	0.46									1.01
SK28	出敷 (点)	4	5	5			1	1	11				27
	重量 (g)	5.41	5.15	826.82			3.16	0.44	18.50				859.48
PH12	出敷 (点)									1			1
	重量 (g)									9.29			9.29
PH14	出敷 (点)												1
	重量 (g)									4.31			4.31
総合計 (点)		11	13	9	1	2	4	3	20	3	1	1	68
総合計 (g)		61.71	15.18	836.02	163.35	346.59	13.28	14.04	81.93	16.76	21.56	7.04	1527.40

图 版

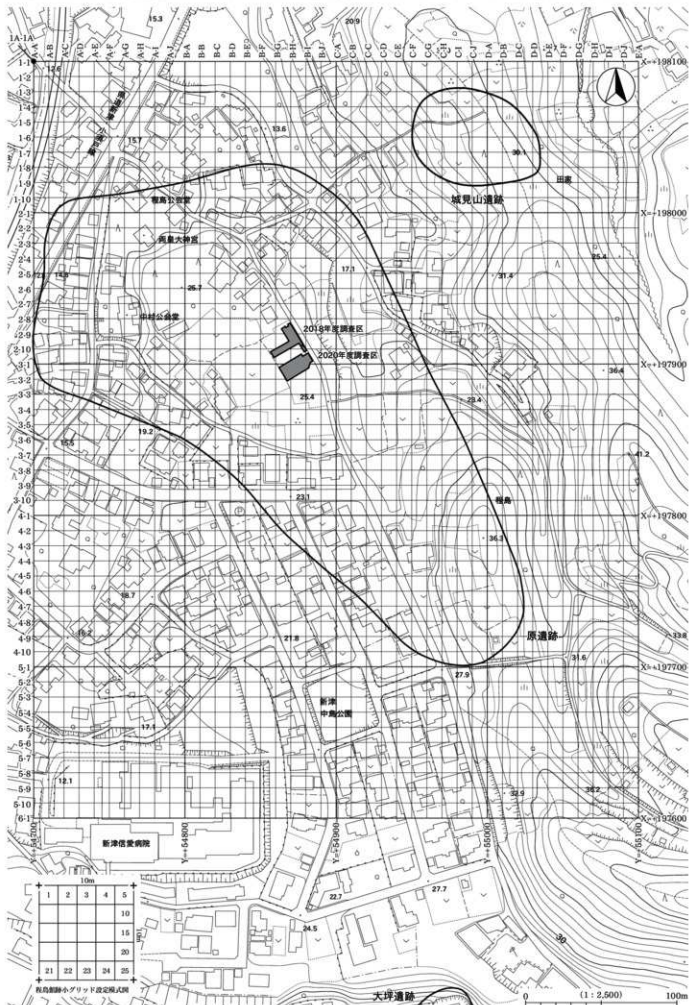




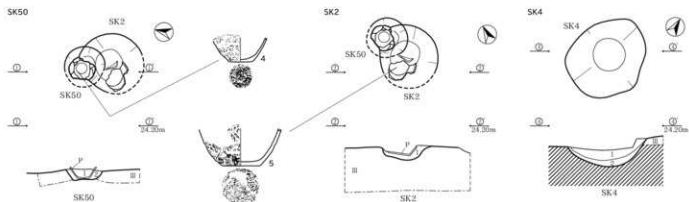




平福丸内原標高は世界測地系(国土地院2011)による。2005年発行「新潟市地形図 1:2,500」を基算用正-1.5,000



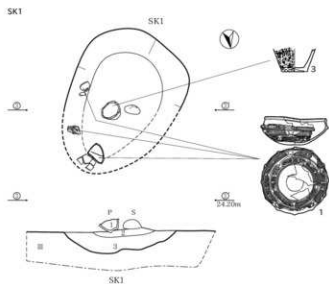




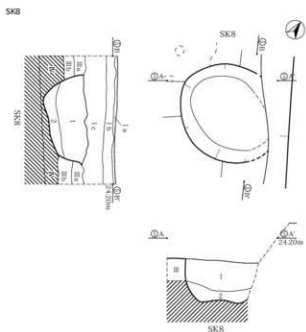
SK50
 1 灰褐色 (7.0YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 砂質土
 2 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 3 灰褐色 (7.0YR4/2) シルト

SK2
 1 灰褐色 (7.0YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 2 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る

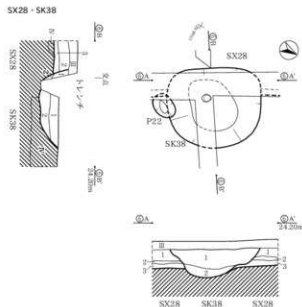
SK4
 1 褐色 (7.0YR4/3) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 2 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 3 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る



SK1
 1 褐色 (7.0YR4/4) シルト 粘粒質 しまりや中粒 砂質土
 2 黒い褐色 (7.0YR5/3) シルト 粘粒質 しまり強 炭化物が少量入る
 3 灰褐色 (7.0YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る

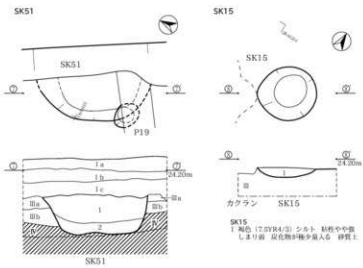


SK8
 1 灰褐色 (7.0YR4/1) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 2 黒い褐色 (7.0YR5/3) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る
 3 灰褐色 (7.0YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る



SX28
 1 黒褐色 (7.0YR3/3) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る
 2 褐色 (7.0YR4/4) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る
 3 明褐色 (7.0YR5/6) シルト 粘粒質 しまり強 砂質土 東方側の可能性あり

SK38
 1 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る
 2 黒褐色 (7.0YR3/3) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る 方層上が埋入平る



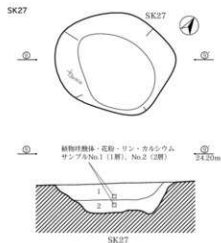
SK51
 1 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る
 2 褐色 (7.0YR4/3) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る
 3 黒褐色 (7.0YR3/3) シルト 粘粒や中粒 しまり強 炭化物が少量入る 方層上が埋入平る

SK15
 1 褐色 (7.0YR4/3) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 2 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る
 3 黒褐色 (7.0YR3/2) シルト 粘粒質 しまりや中粒 炭化物が少量入る

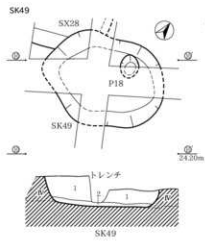
(遺物層) 0 (1:10) 20cm

(SK1・2・50) 0 (1:20) 1m

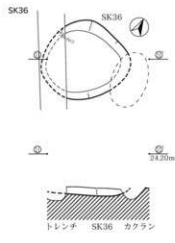
(遺構層) 0 (1:40) 2m



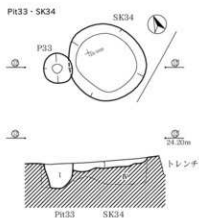
SK27
1 黒色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒 しまり層
炭化物が少量入る。砂質土
2 黒色 (7.5YR5/4) シルト 粘粒や中粒 しまり層
片層上部がマーズ状に入る。炭化物が入る。砂質土



SK49
1 黒色 (7.5YR5/3) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒
炭化物が少量入る
2 黒色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒
1層より若干土層が厚い

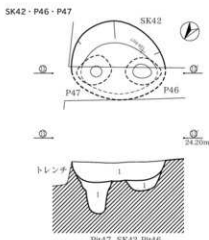


SK36
1 黒褐色 (7.5YR5/6) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒
炭化物が少量入る



Pit33
1 褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒
炭化物が少量入る

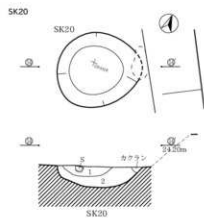
SK34
1 黒色 (7.5YR5/3) シルト 粘粒や中粒
片層上部がマーズ状に入る



SK42
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る

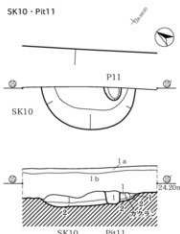
P46
1 黒色 (7.5YR5/3) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る

P47
1 黒色 (7.5YR5/3) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る



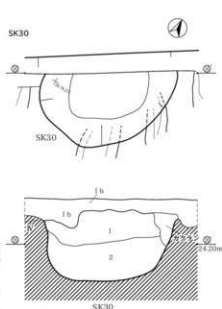
SK20
1 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘粒や中粒
炭化物が少量入る

2 黒色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒
炭化物が少量入る

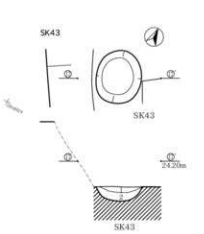


SK10
1 黒褐色 (7.5YR5/2) シルト 粘粒や中粒 しまり層 炭化物が少量入る
2 褐色 (7.5YR4/4) シルト 粘粒や中粒 しまり層 片層上部がマーズ状に入る

Pit11
1 暗褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまり層 炭化物が少量入る



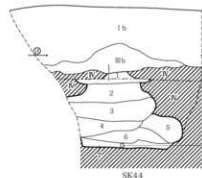
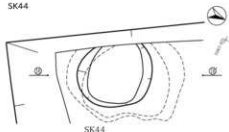
SK30
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る。砂質土
2 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒 炭化物が少量入る
片層上部がマーズ状に入る



SK43
1 黒色 (7.5YR5/4) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒
炭化物が少量入る
2 褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒 しまりや中粒
片層上部が入る

0 (1:40) 2m

SK44



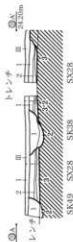
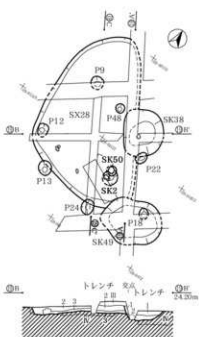
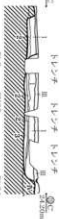
SK44

SK44

- | | | | |
|------------------------|-----|--------|----------|
| 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 2 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が多く入る |
| 3 にごり褐色 (7.5YR5/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 4 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 5 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 6 明褐色 (7.5YR5/4) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 7 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |

植物性残体・花粉サンプル No.3

SX28・SK38・SK49
Pt5・24



SX28

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/2) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 2 褐色 (7.5YR4/4) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 3 明褐色 (7.5YR5/6) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |

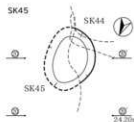
SK38

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/2) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 2 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |

SK49

- | | | | |
|------------------------|-----|--------|----------|
| 1 にごり褐色 (7.5YR5/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 2 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |

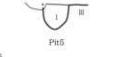
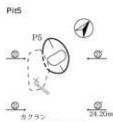
SK45



SK45

- | | | | |
|---------------------|-----|--------|----------|
| 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
|---------------------|-----|--------|----------|

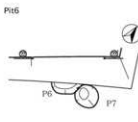
Pt5



Pt5

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/1) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が多く入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

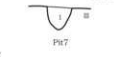
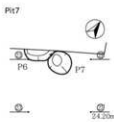
Pt6



Pt6

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 赤褐色 (7.5YR3/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
| 2 濃褐色 (7.5YR3/1) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が多く入る |

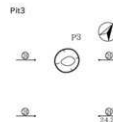
Pt7



Pt7

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/1) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

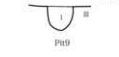
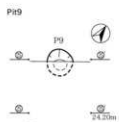
Pt3



Pt3

- | | | | |
|---------------------|-----|--------|----------|
| 1 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
|---------------------|-----|--------|----------|

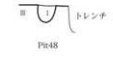
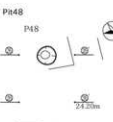
Pt9



Pt9

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/1) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が多く入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

Pt48



Pt48

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/2) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が多く入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

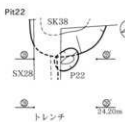
Pt16



Pt16

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/2) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

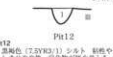
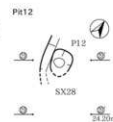
Pt22



Pt22

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/2) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

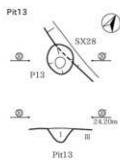
Pt12



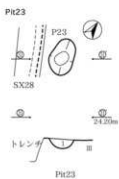
Pt12

- | | | | |
|----------------------|-----|--------|----------|
| 1 濃褐色 (7.5YR3/1) シルト | 粘状面 | しまりや中盤 | 炭化物が少量入る |
|----------------------|-----|--------|----------|

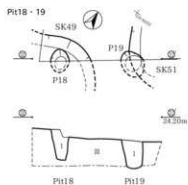




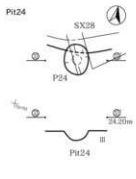
Pit13
1 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



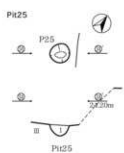
Pit23
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒
しまり層 炭化物が少量入る 砂質土



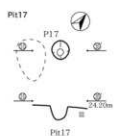
Pit18
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒削 しまりや中盤 炭化物が少量入る 砂質土
Pit19
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒削 しまりや中盤 炭化物が少量入る 砂質土



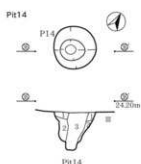
Pit24
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒削 しまりや中盤 炭化物が少量入る 砂質土



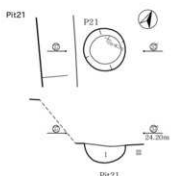
Pit25
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒
しまり層 炭化物が極少量入る 砂質土



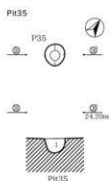
Pit17
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が少量入る
2 褐色 (7.5YR4/2) シルト
粘粒や中粒 炭化物が極少量入る
3 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
粘粒や中粒 しまり層 炭化物が多く入る



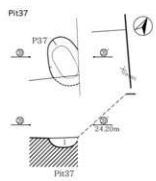
Pit14
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒
しまり層 炭化物が少量入る
2 褐色 (7.5YR4/2) シルト
粘粒や中粒 炭化物が極少量入る
3 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
粘粒や中粒 しまり層 炭化物が多く入る



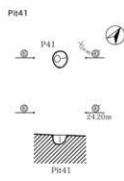
Pit21
1 褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒削
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



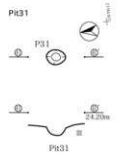
Pit35
1 褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



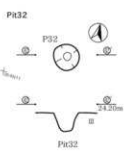
Pit37
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



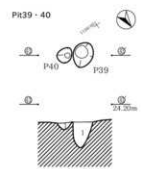
Pit41
1 褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



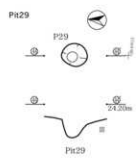
Pit31
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



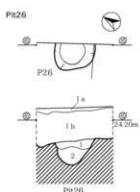
Pit32
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒
しまり層 炭化物が極少量入る



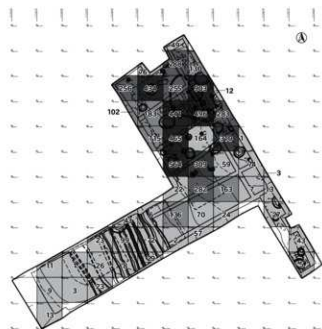
Pit39
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘粒や中粒 しまり層 炭化物が多く入る
Pit40
1 黒褐色 (7.5YR4/1) シルト 粘粒や中粒 しまり層 炭化物が少量入る



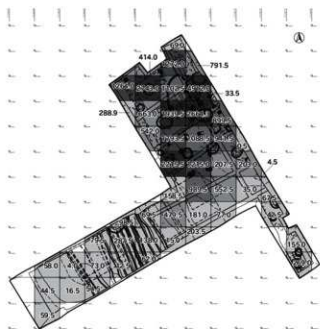
Pit29
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒
しまり層 炭化物が少量入る



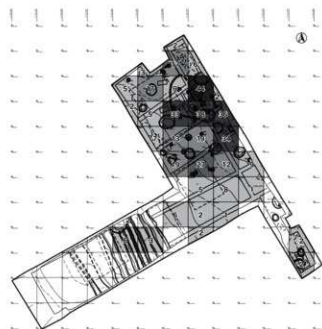
Pit26
1 褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が少量入る
2 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘粒や中粒
しまりや中盤 炭化物が極少量入る



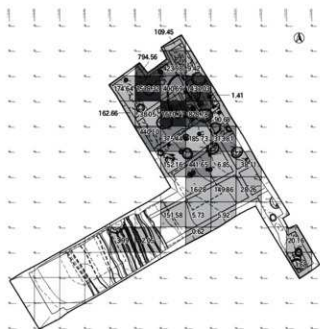
包含層の小グリッド別縄文土器出土点数分布図



包含層の小グリッド別縄文土器出土重量分布図



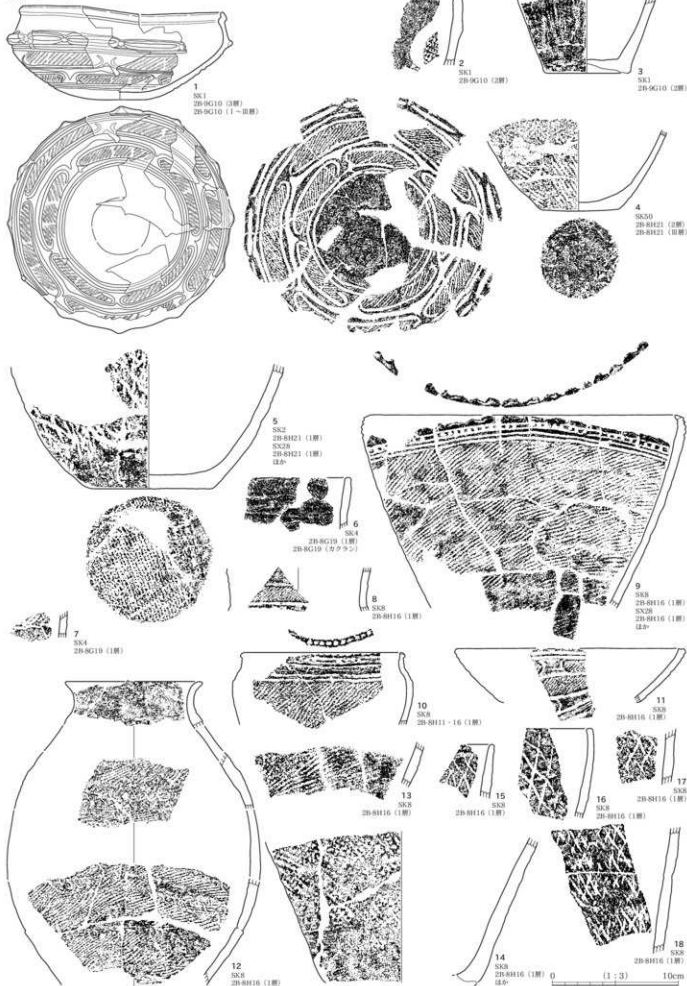
包含層の小グリッド別石器・石製品点数分布図



包含層の小グリッド別石器・石製品重量分布図



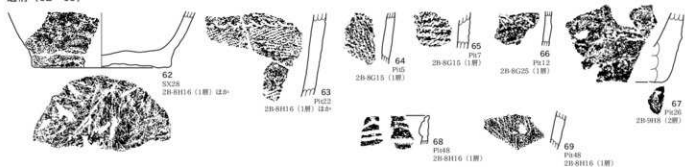
透構 (1~18)



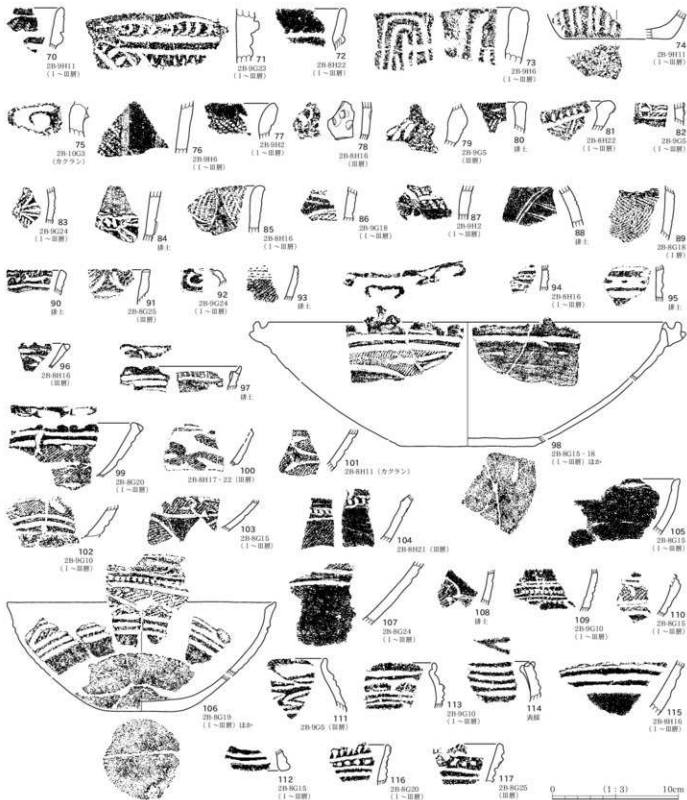
遺構 (19~61)



遺構 (62~69)



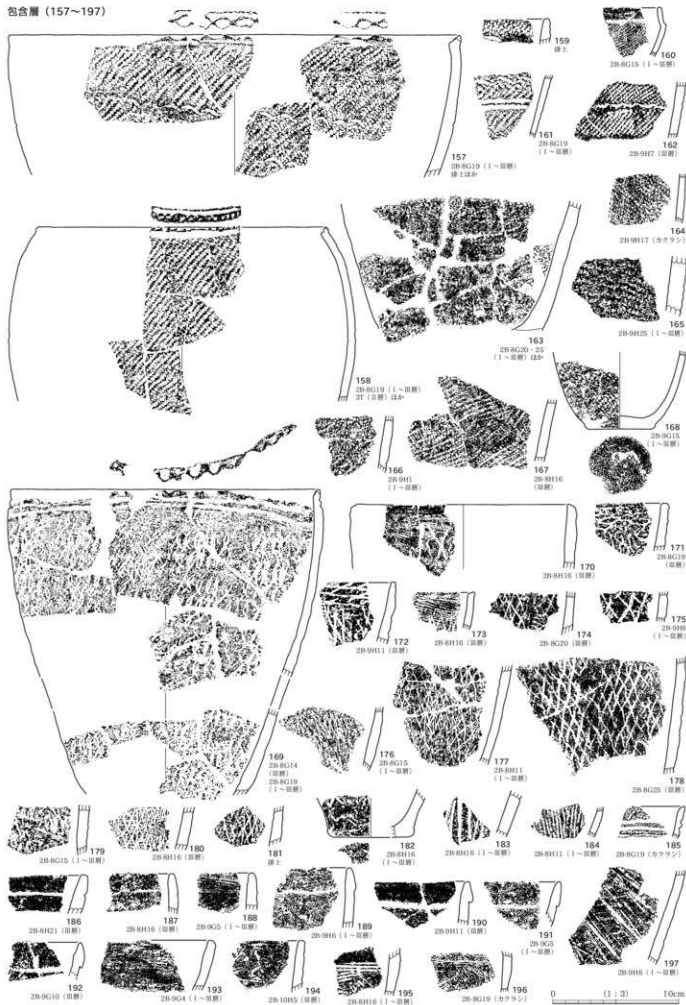
包含層 (70~117)



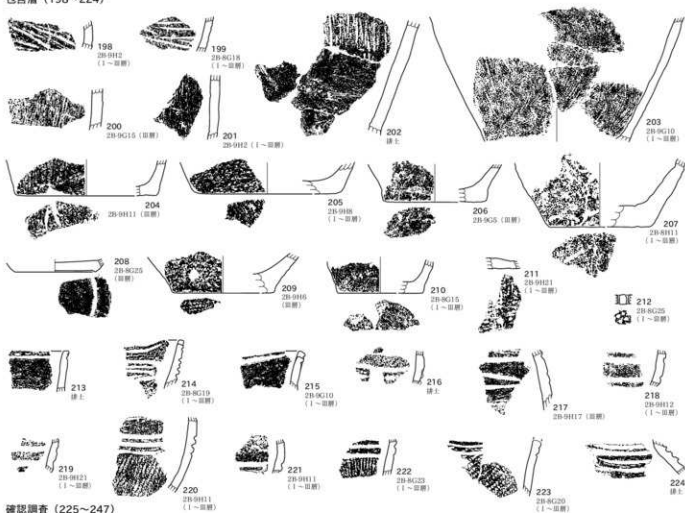
包含層 (118~156)



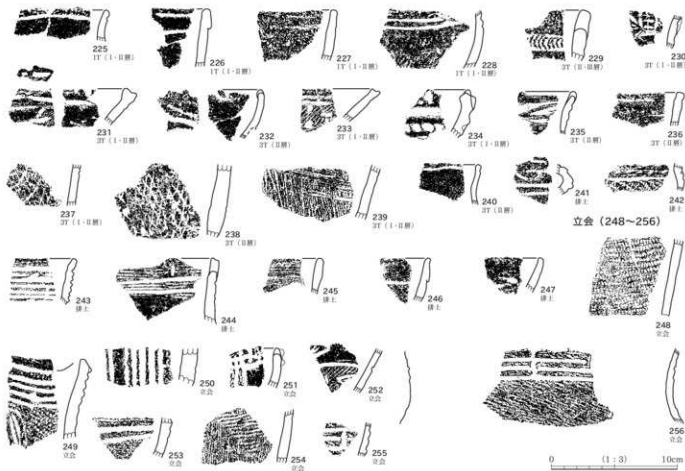
包含層 (157~197)



包含層 (198~224)



確認調査 (225~247)



立倉 (248~256)

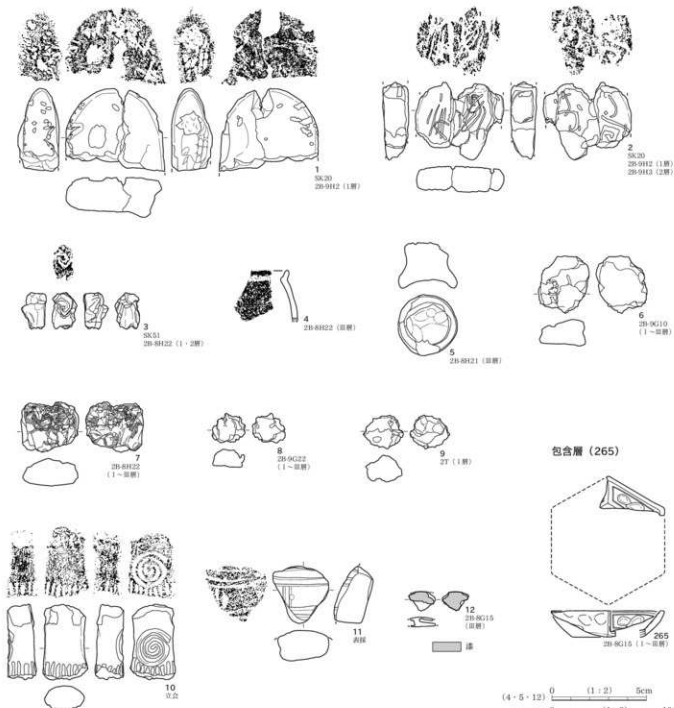
立会 (257~259)



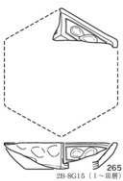
表探 (260~264)



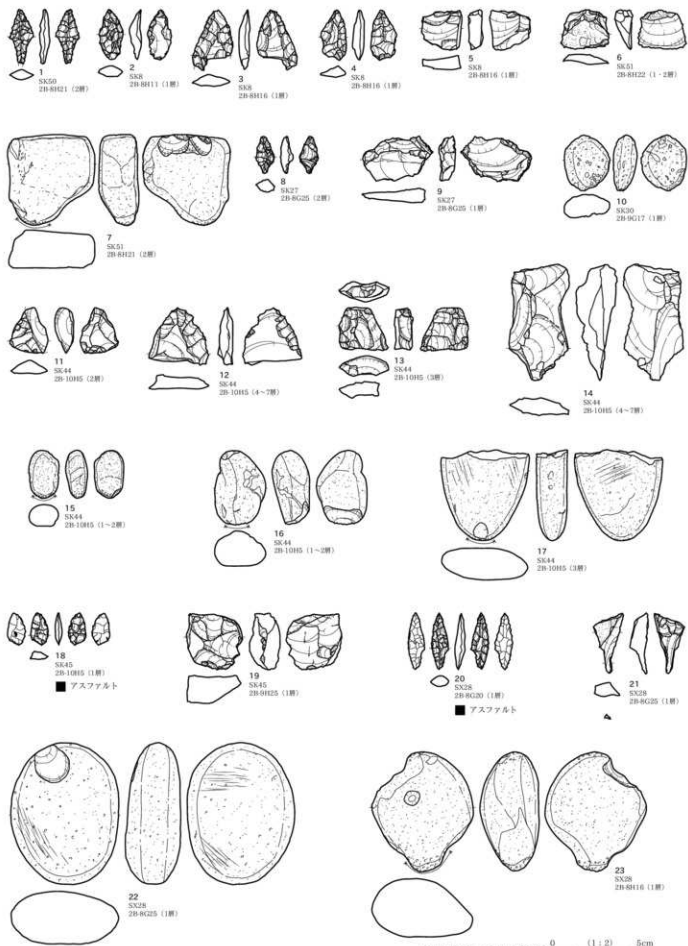
土製品・漆製品・アスファルト (1~14)



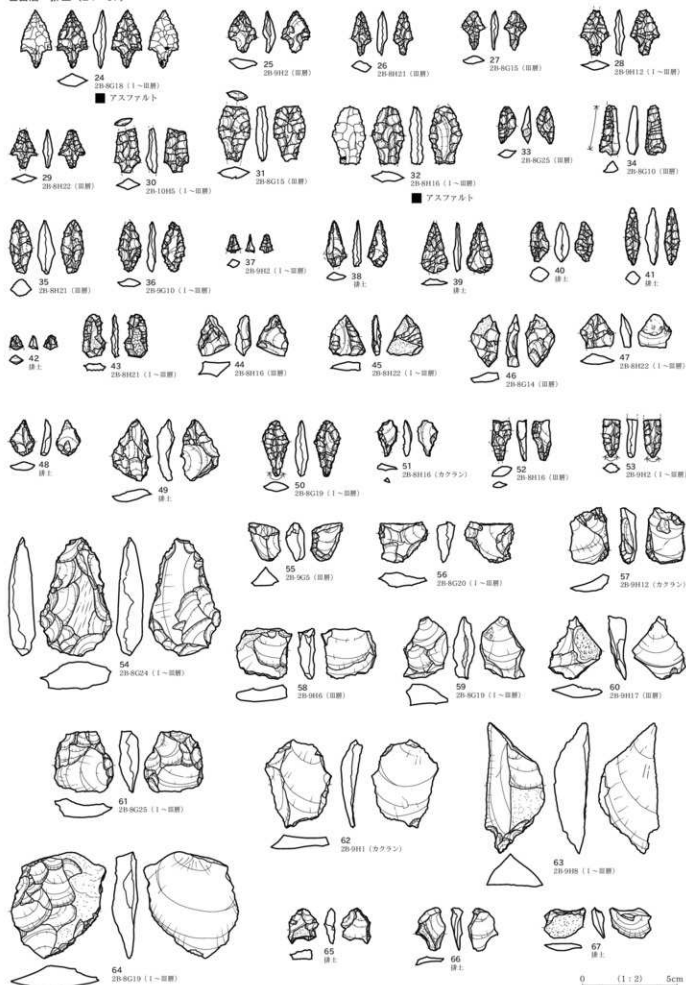
包含層 (265)



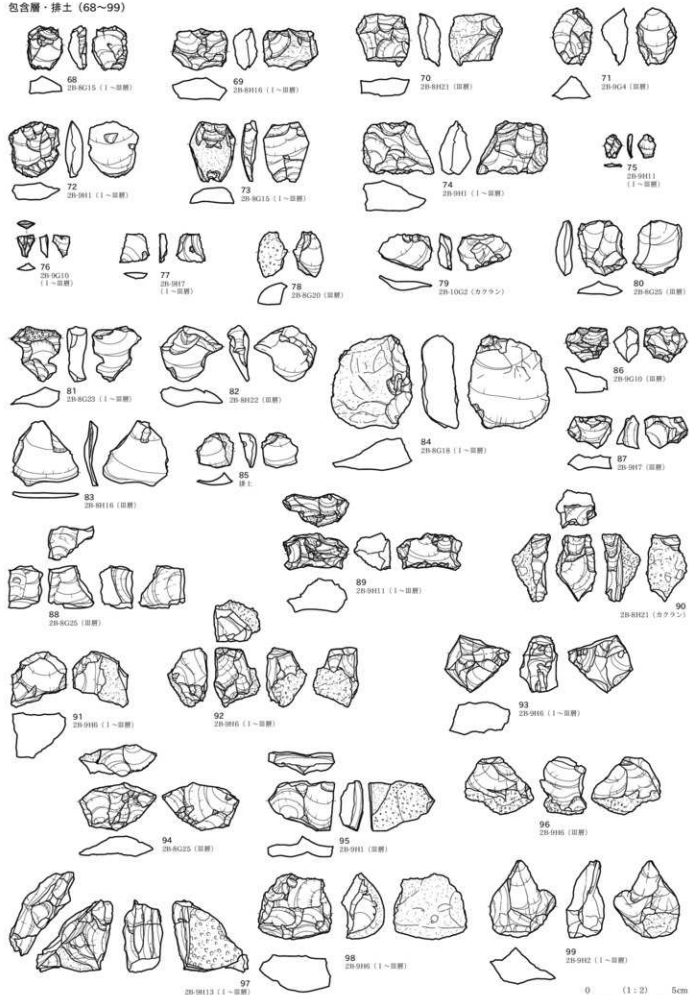
遺構 (1~23)



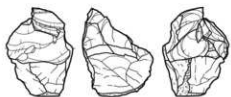
包含層・排土 (24~67)



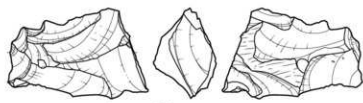
包含層・排土 (68~99)



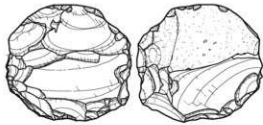
包含層・排土 (100~112)



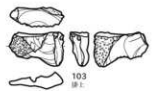
100
2B-9G10 (原形)



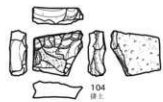
101
2B-8H16 (1~面觀)



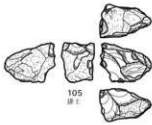
102
2B-9H6 (1~面觀)



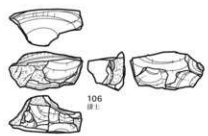
103
排土



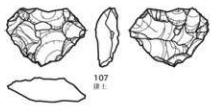
104
排土



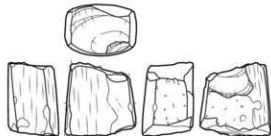
105
排土



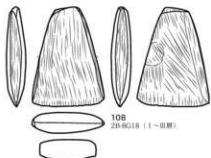
106
排土



107
排土



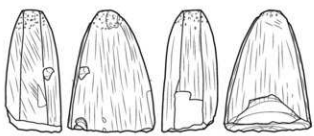
110
2B-9H6 (原形)



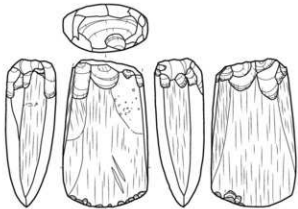
108
2B-9G18 (1~面觀)



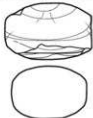
109
2B-9G25 (1~面觀)



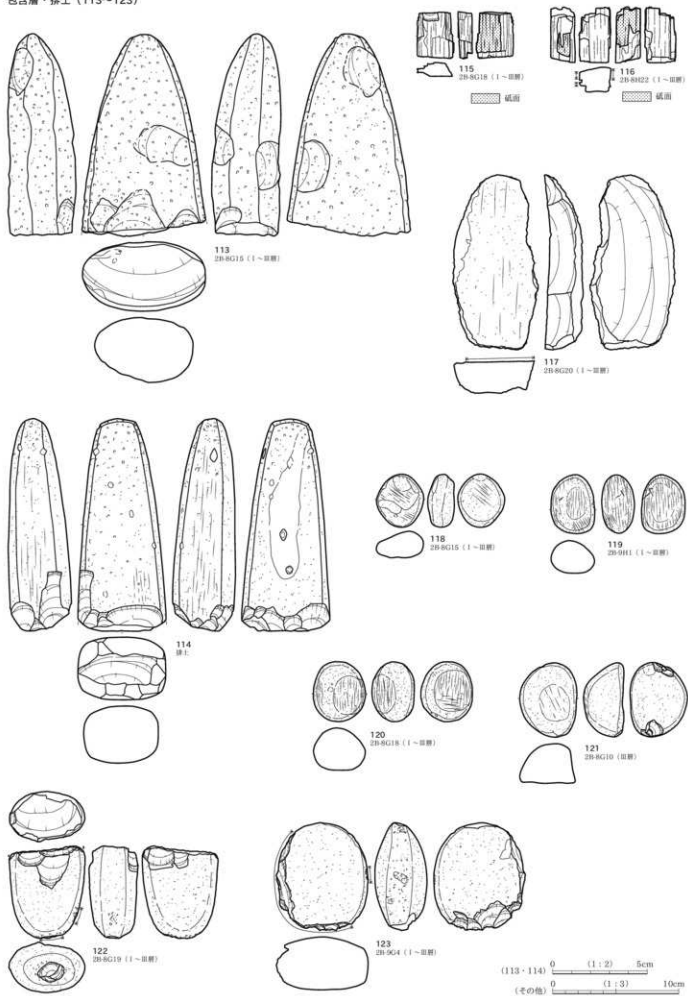
111
2B-9G20 (1~面觀)



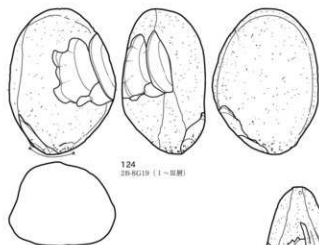
112
2B-9G19 (原形)



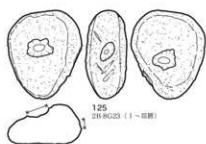
包含層・排土 (113~123)



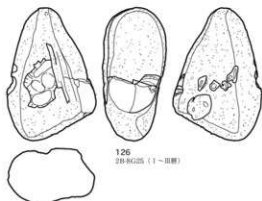
包含層・排土 (124~132)



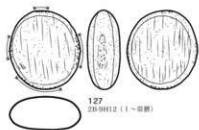
124
20-9G119 (1~面群)



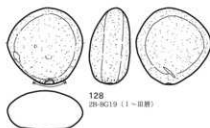
125
20-9G223 (1~面群)



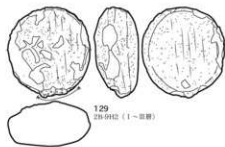
126
20-9G205 (1~面群)



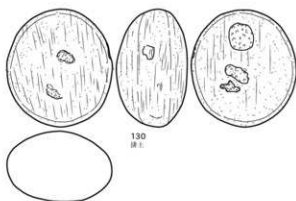
127
20-9H12 (1~面群)



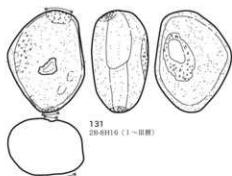
128
20-9G119 (1~面群)



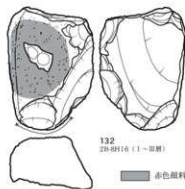
129
20-9H12 (1~面群)



130
排土



131
20-9H16 (1~面群)

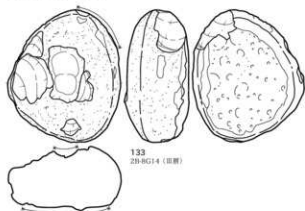


132
20-9H16 (1~面群)

赤色顔料

0 (1:3) 10cm

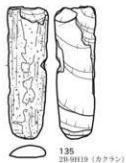
包含層 (133~135)



133
2B-RG14 (田原)

134
2B-RG14 (田原)

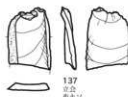
表面採集 (136)



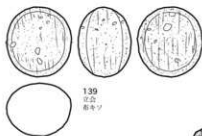
135
2B-GR119 (カケラン)

136
R6

立会調査 (137~140)

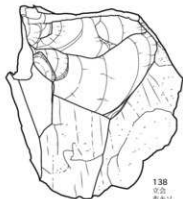
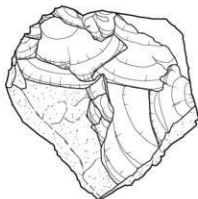
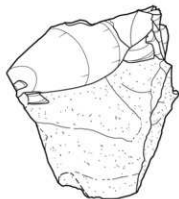
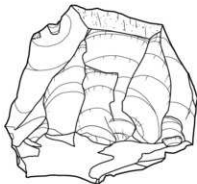


137
立会
赤キツ



139
立会
赤キツ

140
立会
赤キツ



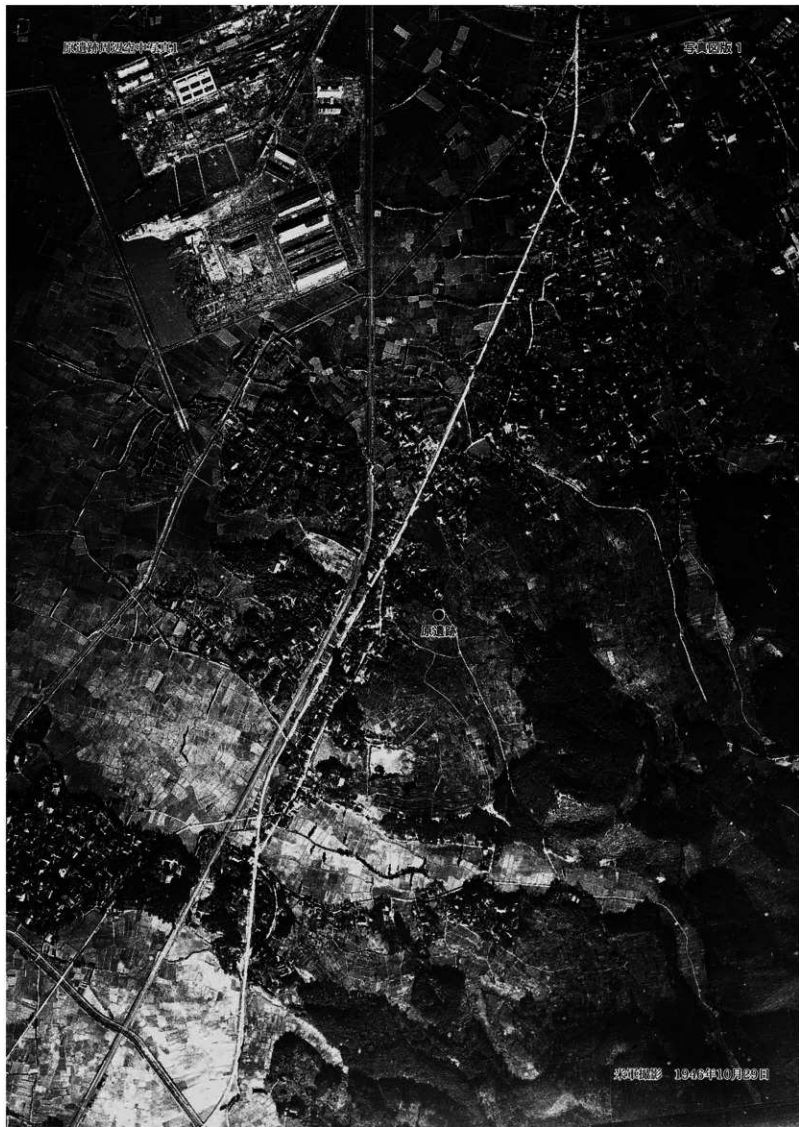
138
立会
赤キツ

1946年10月29日撮影

写真第1

1946年

写真第1 1946年10月29日撮影



本免鑑査査範圍





原遺跡周辺空中写真3(北東→南西)



原遺跡周辺空中写真4(北→南)



完掘空中写真1 (北東→南西)



完掘空中写真2 (北西が上)



基本層序 A (南東→北西)



基本層序 B (南東→北西)



基本層序 C (南東→北西)



基本層序 D (北東→南西)



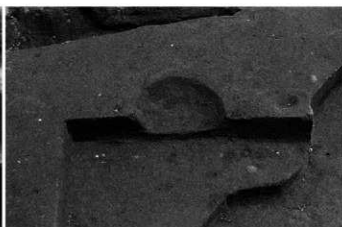
基本層序 E (東→西)



基本層序 F (南西→北東)



SK50 土層断面① (南西→北東)



SK50 完掘状況 (南西→北東)



SK2 土層断面②(南→北)



SK2 完掘状況(南→北)



SK1 検出状況(北東→南西)



SK1 土層断面③(北→南)



SK1 完掘状況(北→南)



SK4 土層断面④(南東→北西)



SK4 完掘状況(南東→北西)



SK8 土層断面⑤A(南東→北西)



SK8 土層断面⑥B (南西→北東)



SK8 完掘状況 (南西→北東)



SK38・SX28 土層断面④A (北東→南西)



SX28・SK38 土層断面⑥B (南東→北西)



SK38 完掘状況 (北東→南西)



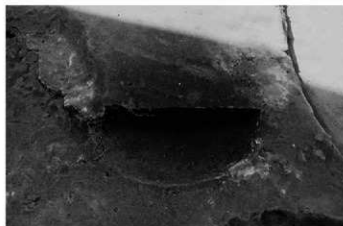
SX28 土層断面④C (南西→北東)



SX28 完掘状況 (北東→南西)



SK51 完掘状況⑦(南西→北東)



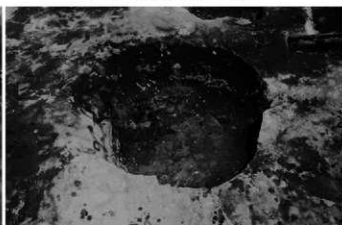
SK15 土層断面⑥(南東→北西)



SK15 完掘状況(南東→北西)



SK27 土層断面⑥(南東→北西)



SK27 完掘状況(南東→北西)



SK49 土層断面⑥(南東→北西)



SK49 完掘状況(南東→北西)



SK36 土層断面⑥(南東→北西)



SK36 完掘状況(南東→北西)



Pit33 · SK34 土層断面②(南→北)



Pit33 · SK34 完掘状況(南→北)



SK42 · Pit47 · Pit46 土層断面③(北西→南東)



SK42 · Pit47 · Pit46 完掘状況(北西→南東)



SK20 土層断面④(南東→北西)



SK20 完掘状況(南東→北西)



SK10 · Pit11 完掘状況⑤(南西→北東)



SK30 完掘状況⑥(南東→北西)



SK43 土層断面㊶(南東→北西)



SK43 完掘状況(南東→北西)



SK44 土層断面㊶(北東→南西)



SK44 土層断面㊷(北東→南西)



SK44 土層断面下層㊶(北東→南西)



SK44 完掘状況(北東→南西)



SK45 土層断面㊶(北西→南東)



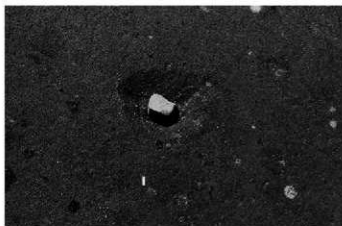
SK45 完掘状況(北西→南東)



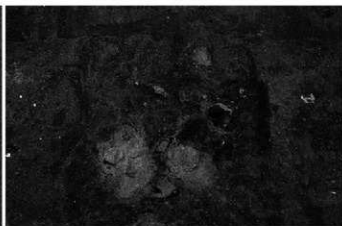
磨製石斧出土状況(北西→南東)



磨製石斧出土状況(北東→南西)



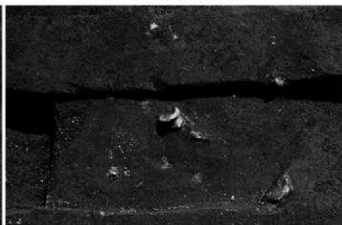
磨製石斧出土状況(北→南)



縄文土器出土状況(北東→南西)



縄文土器出土状況(北東→南西)



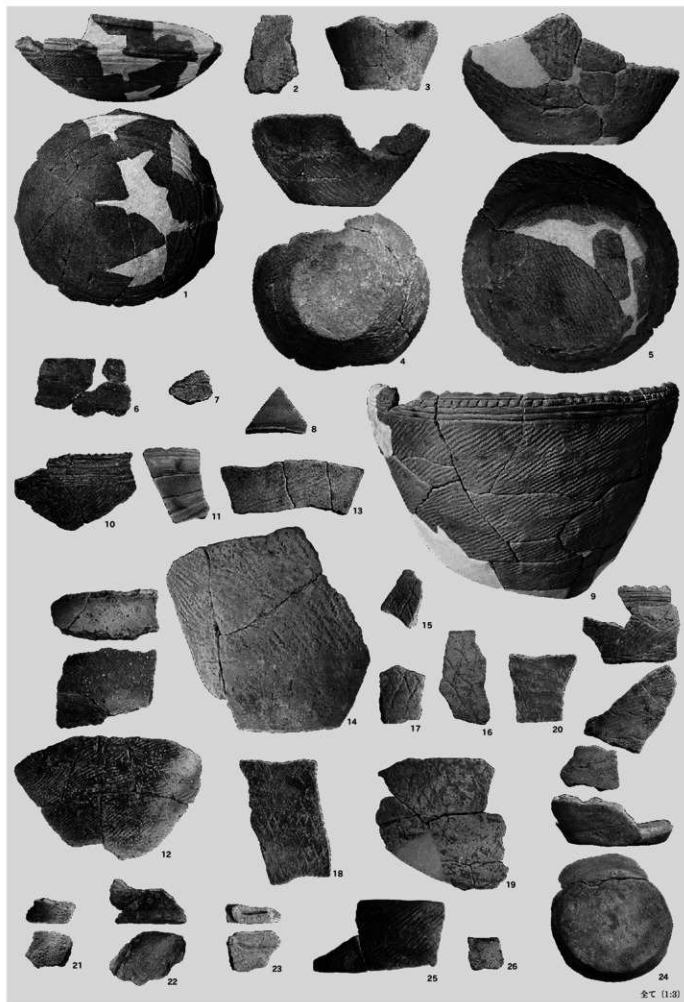
縄文土器出土状況(南西→北東)

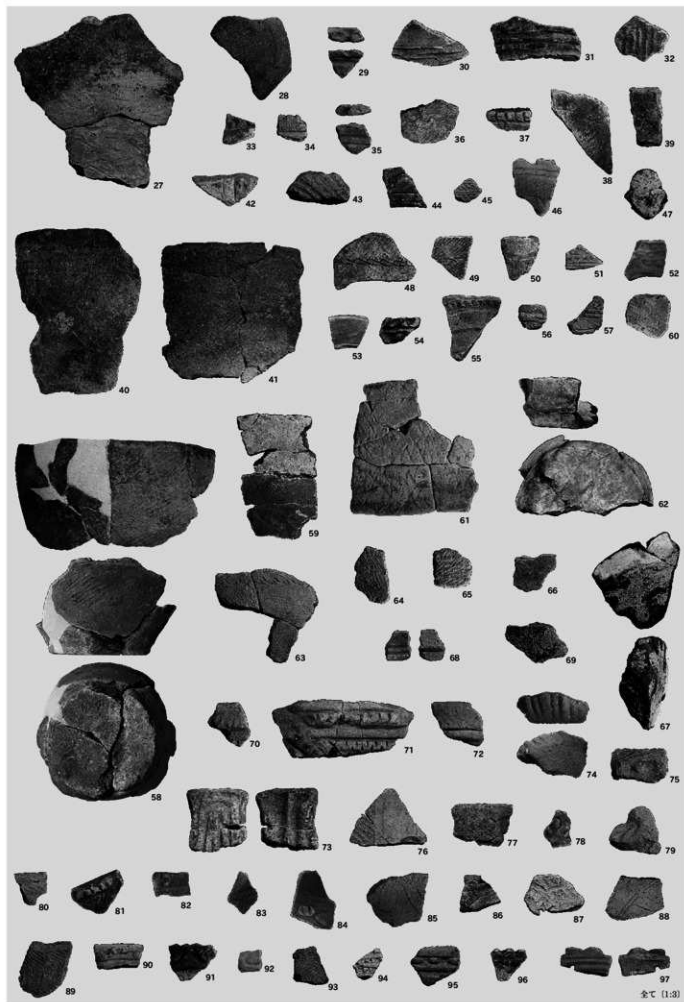


調査風景(北西→南東)

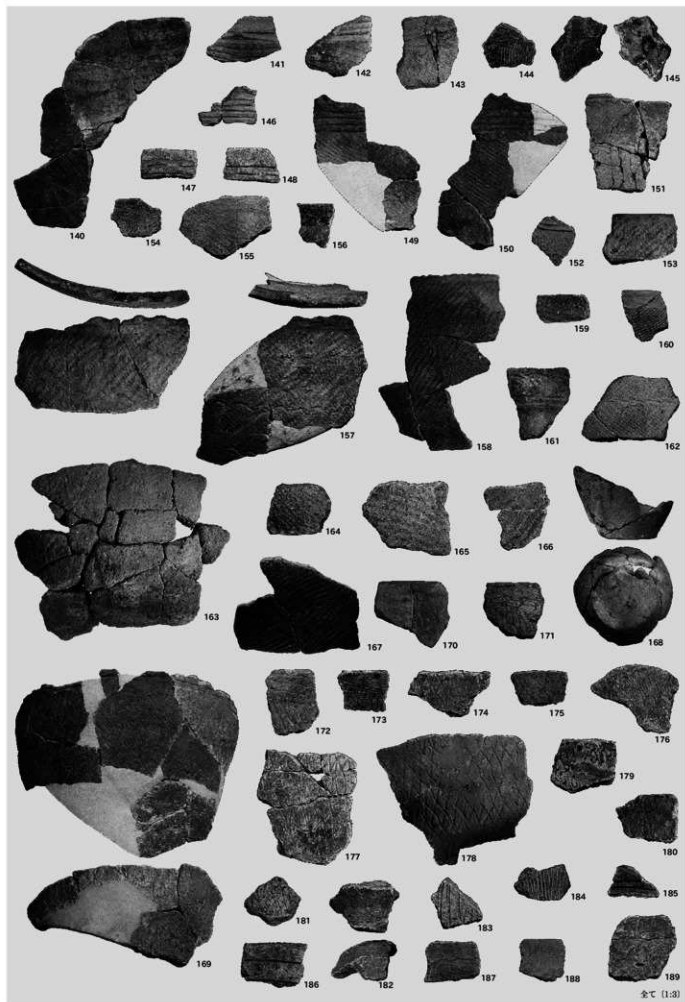


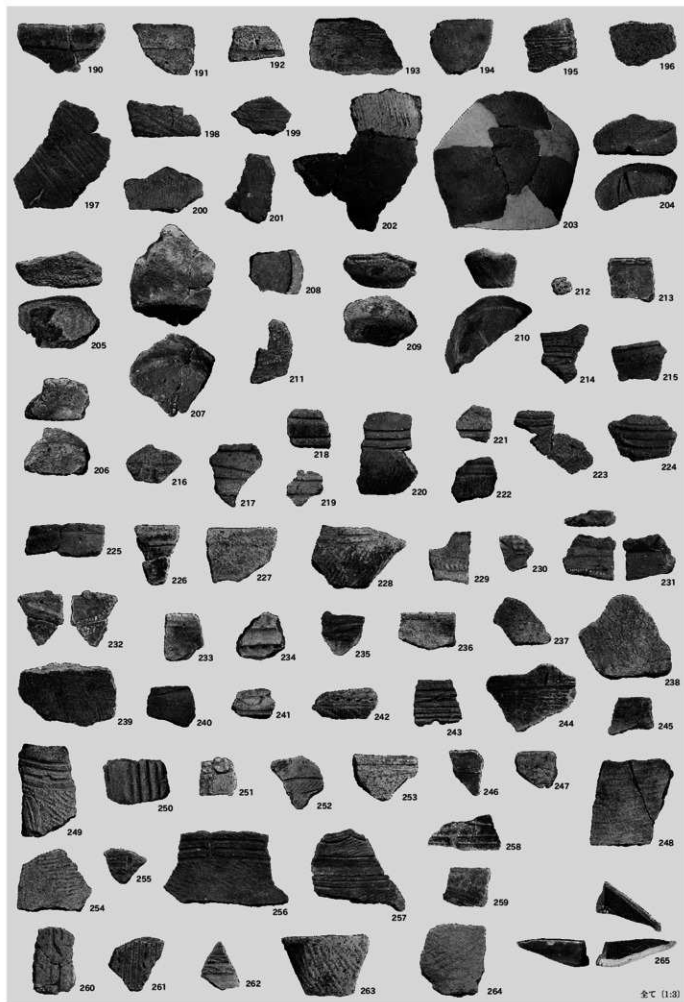
調査風景(南東→北西)

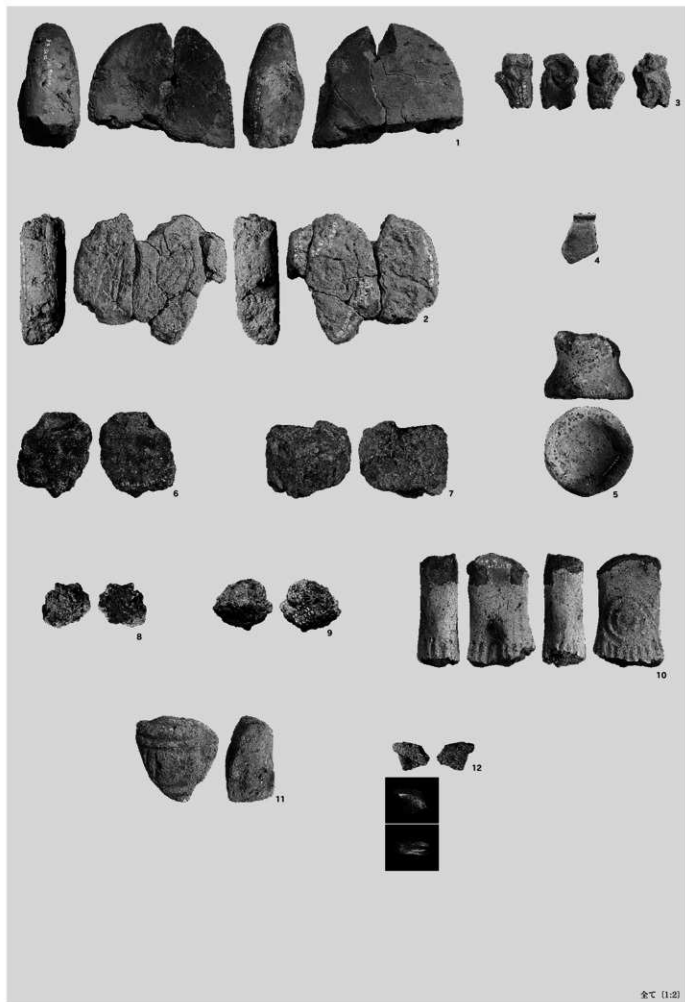


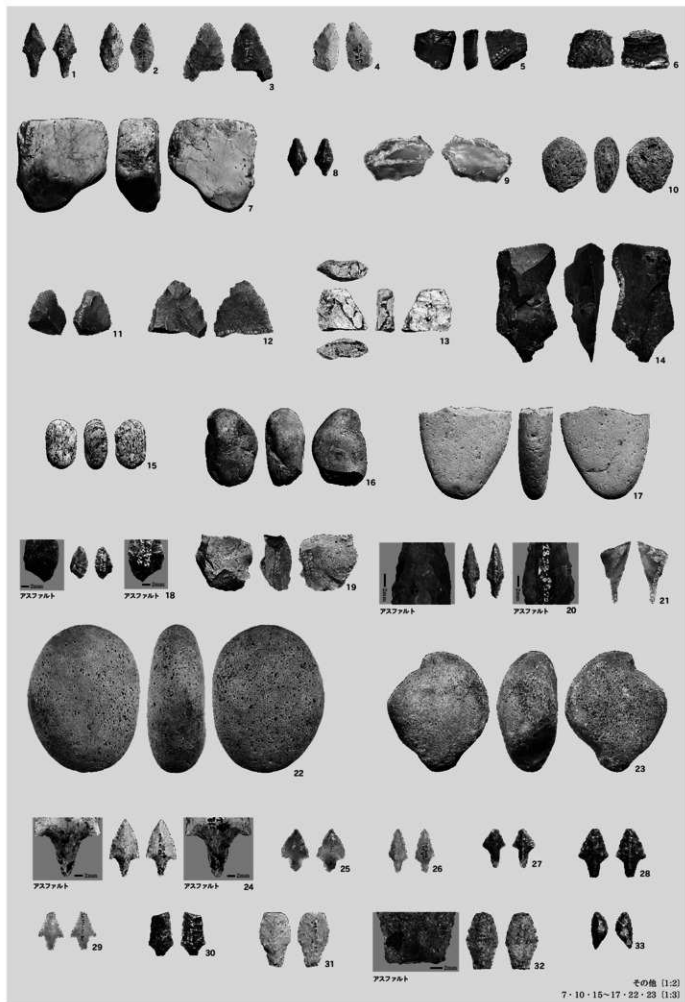


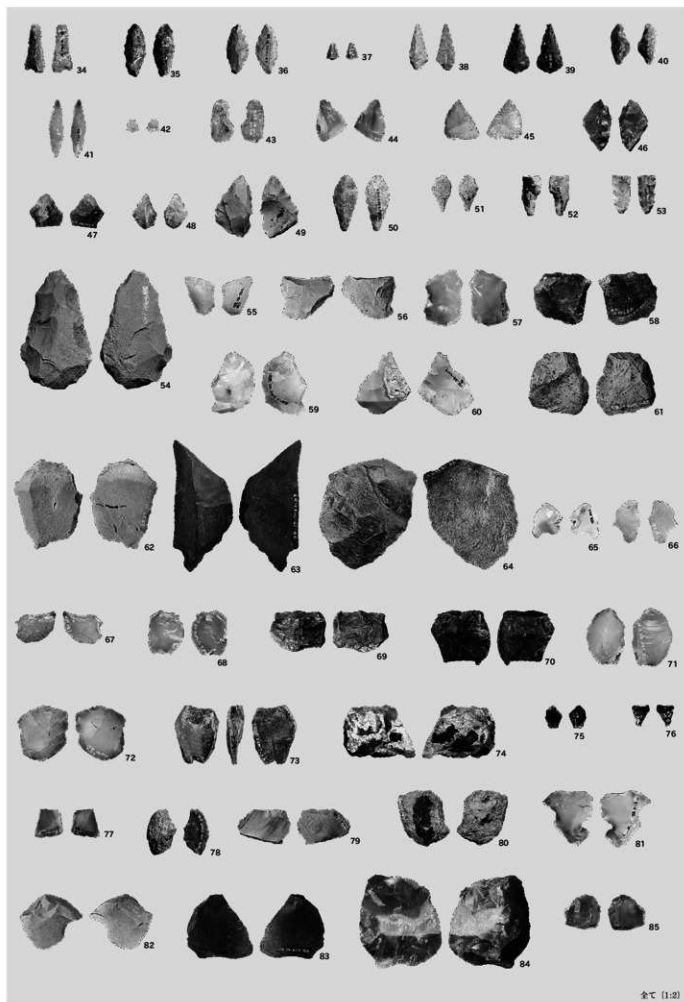


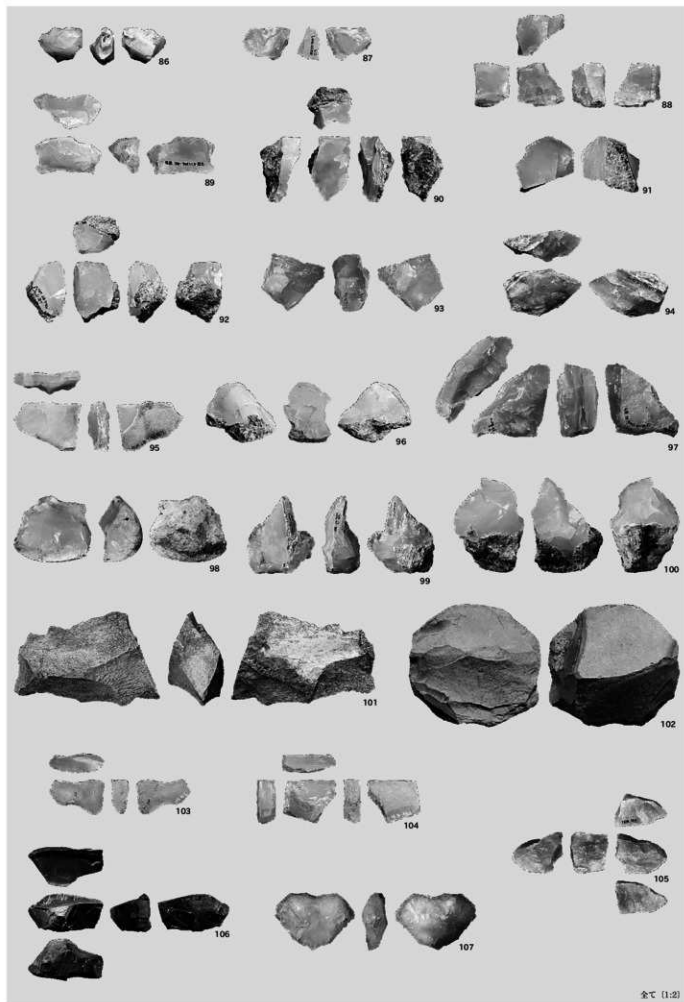


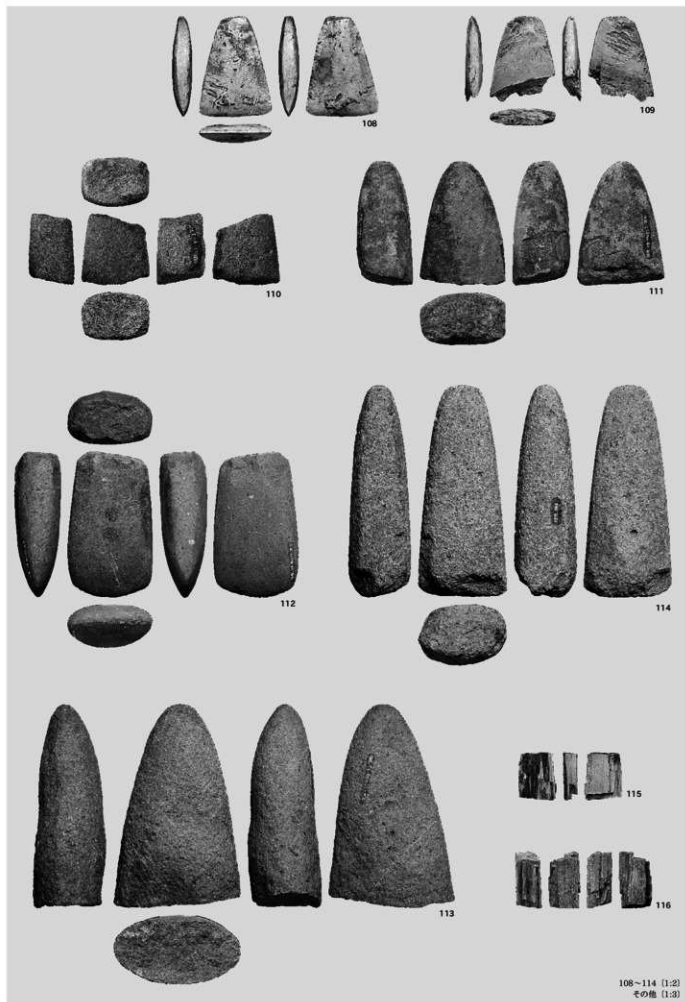














117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



133



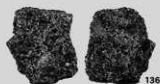
132



134



135



136



139



137



140



138

135・137・138 (1:2)
その他 (1:3)

原遺跡 第 11 次調査

第I章 調査の概要

第1節 はじめに

巻頭例言で述べたように原遺跡第11次調査の調査区は、第10次調査区の南に隣接する。また、調査結果の本報告を第10次調査と合冊して刊行することにした。章立ては調査年次ごとに行い、頁数及び図版・写真図版については通し番号とした。以下の項目については、第10次調査の本報告の第1～III章に記述してある。

- ・発掘調査に至る経緯
- ・遺跡の位置と地理的環境
- ・周辺の遺跡
- ・グリッドの設定
- ・調査方法
- ・調査経過
- ・調査体制
- ・整理方法
- ・整理経過
- ・整理体制

なお、本発掘調査位置図・グリッド設定図についても第10次調査図版2～5に記載した。

第11次調査の本報告では、調査で明らかになった基本層序、遺構、遺物を図面、写真、観察表などであらわし、本文でこれを説明した。

第2節 調査の概要

第11次調査の調査区は第10次調査区の約6～7mほど南に位置(図版27)する。したがって、調査区周辺の微地形は第10次調査の調査区とほぼ同じである。繰り返しになるが原遺跡は新津丘陵北西部、樹枝状にのびた丘陵上の先端に立地し、標高は25m前後である。遺跡はこの先端部の平坦地を中心に南北350m、東西250mほどの広がり(新潟県埋蔵文化財センター)を持つ。第11次調査の調査地点は、遺跡のほぼ中央付近から北東方向へ広がる緩斜面上で、調査面積は213.3m²を測る。検出された遺構は、掘立柱建物1棟、土坑14基、ピット21基¹⁾(図版28)である。このほか図示していないが、調査区西側の3B-1G23壁面に性格不明遺構1基を確認した。遺構の所属時期は、遺構確認面、覆土、出土遺物の状況からすべて縄文時代と推定される。

出土遺物量はコンテナ(内径54.5×33.6×10.0cm)換算で28箱となる。出土遺物は縄文時代中期～晩期の土器・土製品や石器が多数出土している。主体は後期前半と晩期前半であり、その他に中期と後期後半の遺物が少量見られた。



発掘調査の状況

1) 調査時は24基としたが、整理作業の過程で3基はSB65の柱穴になった。したがって、小土坑(pit)としたものは21基である。

第Ⅱ章 遺 跡

第1節 基本層序 (図版29、写真図版25)

これまで10次にわたる調査成果によってⅠ～Ⅳ層が確認されている。遺物包含層はⅢ層だが、今回の調査では畑耕作や整地などの削平を受け残存していなかった。Ⅳ層は遺構確認面となる黄褐色粘質土で、微高地となる西側はシルト質で、緩く標高を下げる東側は粘土質となる傾向がある。なお遺構確認面の標高は、西側で24.85m、東側24.10mを測り、西から東に向かって緩く下がる。

Ⅰ層 表土、耕作土。層厚17～70cm程度。

Ⅱ層 暗褐色粘土(10YR3/3)粘性強く、しまりやや強い。層厚16cm。

Ⅳ層 黄褐色粘土(10YR5/8)粘性強く、しまりやや強い。調査では層厚14～30cmほど確認した。遺構確認面である。

第2節 遺 構 (図版28～31、写真図版24～30)

1) 遺構の概要

遺構番号は遺構の種類に関わらず1～55の通し番号を付した。これを調査時の遺構の形状、覆土、出土遺物等の検討から遺構の認定を行った。遺構でないとは判断したものについては欠番とした。検出した遺構は掘立柱建物(SB)1棟、土坑(SK)14基、小土坑(Pit)21基、性格不明遺構(SX)1基であり、この種別ごとに記述する。欠番としたものはすべて近代以降の擾乱と推定される。

遺構(SK・Pit)の形態分類は第10次調査の記述とほぼ同じく和泉A遺跡[加藤・荒川1999]に準拠した(第23図)。なお、調査区外へ延びる遺構の形態分類は、推定できる遺構はその範囲で記した。また、遺構の詳細な計測値・属性等は別表に示した。

2) 遺構各説

a 掘立柱建物(SB)

部分的ではあるが、調査区外に延びる1棟を検出した。

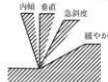
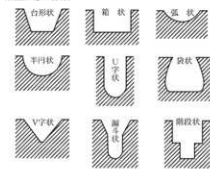
SB55 (図版29、写真図版25・26)

調査区南側のほぼ中央部、3B-1H8・12・13・17に位置する。調査時に柱痕跡を伴うピットを3基検出していたが、柱並びが不明で掘立柱建物と認定していなかった。調査後の整理作業を通して、亀甲形の掘立柱建物で、棟持柱の1基、梁間を構成するピット2基と判断した。大部分は南側の調査区外に延びるため詳細は不明であるものの梁間3.3m、棟持柱は梁間から約1.7m外側に構築されている。主軸方位はN-59°-Wと推測され、集落の中心方向を示すものと思われる。建物を構成するピットの規模は大きく、確認面で長軸0.90～1.03m前後、短軸0.76～0.89m、深さ0.28～0.84mを測る。平面は円形・楕円形、断面は柱痕跡が上屋の重みからか沈んでおり、階段状を呈する。SB55-Pit28の柱痕跡の底面が著しく硬化しており、ほかのPitも底面が締まっていた。底面は

平面形態の分類



断面形態の分類



第23図 遺構の平面形態と断面形態の分類 [加藤1999から転載]

棟持柱が径0.15m、梁間柱が径0.16～0.23mを測り、径0.15～0.20m前後の柱が立てられていたものと想定される。遺物はSB55-Pit25から南三十稲場式の深鉢(1)、LR縄文の深鉢(2)、土製円盤(3)、削器(10)、磨石類(15・16)、剥片(20)、SB55-Pit28から中期の深鉢(3)、南三十稲場式の深鉢(4・5)、剥片2点(21)、SB55-Pit32から浅鉢(9)、三十稲場式の深鉢(6)、深鉢4点(7・8・10・11)、剥片が出土している。掘立柱建物の時期は、南三十稲場式土器から後期前葉に所属すると考える。

b 土 坑 (SK)

14基検出した。通常の土坑、フラスコ状土坑、埋設土器の可能性のある土坑などがあるが、ここではまとめて土坑と分類した。

SK2 (図版29、写真図版26)

調査区南西部の3B-1G13に位置する。規模は長軸0.35m・短軸0.29m・深さ0.14mを測る。平面楕円形、断面台形状である。覆土は2層に識別され、1層にはφ3mm程の炭化粒が微量に含まれる。遺物は縄文土器の深鉢胴部下半(12)が確認面から斜めに傾いた状態で出土した。当初、埋設土器の可能性を考慮して調査を進めたが、土器が遺構の底面から10cmほど浮いた状態で検出されている。したがって、埋設土器遺構の可能性のあるものの、断定できなかった。時期は伴出土器から晩期前葉である。

SK3 (図版29、写真図版26・27)

調査区南西部の3B-1G8に位置する。規模は、長軸0.94m・短軸0.80m・深さ0.47mを測る。平面楕円形、断面箱状である。側壁は垂直ないしは一部内傾気味に立ち上がる。覆土は単層で、φ1～3mmの炭化粒、φ5～10mmの焼土が微量に含まれる。遺物は縄代痕の残る深鉢の底部(13)破片が、遺構確認面付近で出土している。調査当初は埋設土器として調査したが、覆土内に浮いていたことから埋設土器遺構として認められなかった。時期は不明である。

SK15 (図版30、写真図版27)

調査区南東部の調査区外に接する3B-1H21に位置する。調査区外に大きく延びるため詳細は明らかでない。長軸1.34m・短軸0.72m以上・深さ0.40mを測る。平面形不明、断面台形状である。覆土は4層に識別され、堆積状況から自然堆積と推定した。後期初頭と思われる深鉢(14)が出土している。

SK22 (図版30、写真図版27)

調査区南西部の3B-1G3・4に位置する。遺構の東側と西側の上部は攪乱で破壊されるが、おおよその形状は推定できた。規模は長軸1.10m・短軸0.95m・深さ0.65mを測る。平面はやや不整形な円形、断面半円状である。覆土は5層に識別され、褐色～暗褐色砂質土を主体に炭化粒、焼土、粘土塊を微量～少量含む。遺物は深鉢の小破片(15～25)や磨石類(18)、剥片2点が出土した。時期は伴出土器の南三十稲場式(17～21)から後期前葉と推定した。

SK23 (図版30、写真図版27)

調査区西部の3B-1G15に位置する。遺構の東南側でPit20と重複し、これを切っている。規模は長軸1.28m・短軸0.80m・深さ0.58mを測る。平面は不整形、断面はやや不整形な半円状である。覆土は4層に識別され、最下層の4層には炭化粒や焼土粒が少量含まれる。堆積状況から自然堆積と推定した。遺物は後期前半と推定される深鉢口縁部破片(26)、剥片1点が出土している。

SK31 (図版30、写真図版27)

調査区ほぼ中央部の2B-10H23に位置する。長軸1.02m・短軸0.90m・深さ0.11mを測る。平面円形、断面弧状である。覆土は単層で、底面近くに炭化粒が多く見られた。また、底面中央の地山(IV層)が焼けていた。遺物は微小な土器片が出土しているが、時期不詳である。

SK35 (図版30、写真図版27・28)

調査区南側のほぼ中央、調査区外に接する3B-1H14に位置する。調査区外に延びているために内容は明らか

でない。Pit34に重複し、これに切られている。規模は長軸0.54m・短軸0.48m・深さ0.18mを測る。平面楕円形と思われ、断面半円状である。覆土は2層に識別されるが、上面に大きさ25cm前後の扁平礫(台石)が見られた。遺物は後期の所産と推定される深鉢(27)と台石類(19)が出土している。

SK38 (図版30、写真図版28)

調査区東側から調査区外にほぼ接する2B-10I11・12・16・17に位置する。規模は長軸1.85m・短軸1.20m・深さ0.30mを測る。平面やや不整気味の楕円形、断面弧状である。覆土は3層に識別され、2・3層には炭化粒が少量含まれる。堆積状況から自然堆積と思われる。遺構底部の北寄りの2・3層には、赤色土や炭化粒の混入が多くみられる地点があり、中には焼骨片が微量認められた。SK50の上部にあり、これにすっぽりと取まる形で存在する。したがって、SK38はSK50の上部の可能性が高い(詳しくはSK50の記述を参照)。遺物は後期前半・晩期前半を主体とする縄文土器の深鉢、鉢、壺、蓋、筒形土器など多様な器種(28～42)、中空土器の肩から腕にかけての破片(1)が出土している。石器では石織未成品(3)、砥石、剥片5点が出土している。中でも、筒形土器(34)はほぼ完形品で、底面付近で口縁部を上やや斜めに傾いた状態で出土した。後期前葉から晩期前半の多時期の遺物が認められるが、最も新しい土器(36～38・40)から晩期前半の土坑とした。

SK39 (図版30、写真図版28)

調査区東部の2B-10H25に位置する。上面は規乱で削平されているが、おおよその形状は推定できる。規模は長軸0.78m・短軸0.43m・深さ0.22mを測る。平面はやや不整な楕円形、断面弧状である。覆土は2層に識別され、堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は後期前半と思われる深鉢(43)、晩期前葉の鉢(45)、晩期前葉の深鉢(44)が出土している。遺構の時期は最も新しい土器から晩期前葉と推定される。

SK46 (図版30、写真図版28)

調査区西側の調査区外に接する3B-1G12・13に位置する。遺構は調査区外へ延びており、詳細は明らかでない。規模は残存部分で長軸0.84m・短軸0.36m、深さは0.28mを測る。平面楕円形と思われ、断面半円状である。覆土は3層に識別され、1層はφ20mmの粘土塊を少量、φ2mm大の炭化粒を微量、2層はφ1～2mmの炭化粒を微量に含み、3層はφ20mmの粘土塊が少量含まれる。遺物は深鉢(48～52)、鉢(47)が出土している。中でも、深鉢胴上半(50)が、底面付近の壁面に沿って、口縁を上にして斜めに傾いた状態で出土するが、土器埋設遺構としては認められなかった。所属時期は大洞C1～C2式(49)の土器から晩期中葉と推定される。

SK50 (図版31、写真図版29)

調査区東側から調査区外に接する2B-10I11・12・16・17に位置し、SK38の真下にあたる。長軸2.15m・短軸1.49m以上・深さ0.85mを測る。東側は調査区外に延びるため、平面形は不明であるが、本来は円形と推定される。断面は台形状であるが側壁が崩落した結果であり、本来は袋状と推定できる。覆土は22層に識別されるが、各土層とも褐色土ブロックを多く含むことから1～19層までは側壁の崩落による堆積と判断した。このうち、21層にはφ0.2～0.3mmの炭化粒、φ0.2～0.3mmの焼骨片が少量混入していた。上部をSK38に切られている。遺物は注口土器(53)、鉢(54・56)・浅鉢(55)・深鉢(57)などの多様な土器や石織(1・2)、石錐(4)、削器4点(9・11)・磨石類(17)、剥片55点、石核2点、石製具(23)が出土している。特に石器の出土が多く、全出土石器の55%(66点)を占める。所属時期は後期後半から晩期前半の遺物が出土するが、最も新しい大洞C1式土器(55)から晩期中葉と推定した。

SK38とSK50は間層を挟まず上下で重なり、SK38はSK50の範囲にすっぽり取まる。時期も晩期中葉で同じく、出土遺物の多さ、炭化粒や焼骨片¹⁾の混入など共通点が多い。しかし、覆土はSK38が自然堆積、SK50が側壁崩壊によるブロック状の堆積で大きく異なる。これについて調査時は別遺構として調査したが、整理報告の過程で、SK50の側壁崩壊のち窪んだ中央部に周囲から土が流れ込みSK38の覆土になったものと解

1) 出土焼骨片は小破片のため、種同定等の分析は不可能であった。

積した。したがって、SK38はSK50の上部の可能性が高いものと思われる。

SK51 (図版31、写真図版29)

調査区南西部の3B-1G4・9に位置する。南側はSK52と重複し、これに大きく切られている。したがって遺構の詳細は明らかでない。規模は、長軸0.86m・短軸0.46m以上・深さ0.22m以上を測る。平面円形ないしは楕円形、断面皿状と推定される。覆土は焼土を多く含む褐色粘土混砂の単層である。遺物は縄文土器の小破片、削器が出土している。

SK52 (図版31、写真図版29)

調査区南西部の3B-1G9に位置する。北側はSK51と重複し、これを切っている。規模は、残存部分で長軸0.66m・短軸0.57m・深さ0.26mを測る。平面円形、断面箱状である。覆土は2層に識別され、1層には炭化粒が多く、2層には炭化粒・焼土がごくわずかに含まれる。遺物は中期後葉の深鉢の突起(58)が出土している。

c 小 土 坑 (Pit)

掘立柱建物の柱穴になった3基を除き、14基検出されている。分布に偏りがなく、調査区全体に散布する。

Pit5 (図版31、写真図版29)

調査区西部の3B-1G19に位置する。規模は、長軸0.51m・短軸0.46m・深さ0.40mを測る。平面円形、断面台形状である。覆土は2層に識別され、1層には炭化粒が多量に、2層には炭化粒・焼土がごくわずかに含まれていた。遺物は後期前葉の深鉢(59)、剥片が出土している。

Pit7 (図版31、写真図版29・30)

調査区南東部の3B-1G20・25に位置する。規模は長軸0.41m・短軸0.40m・深さ0.31mを測る。平面円形、断面台形状である。覆土は褐色砂の単層である。遺物は縄文土器の深鉢(60・61)と削器(8)が出土した。

Pit9 (図版31、写真図版30)

調査区西隅部の3B-2G4・5に位置する。規模は長軸0.35m・短軸0.32m・深さ0.19mを測る。平面円形、断面台形である。覆土は単層である。遺物は出土していない。

Pit20 (図版30、写真図版27・30)

調査区西部の3B-1G15に位置する。北側はSK23と重複し、これに切られている。規模は長軸0.44m・短軸0.33m・深さ0.25mを測る。平面楕円形と推定され、断面V字状である。覆土は2層に識別され、いずれも炭化粒がごくわずかに含まれる。遺物は出土していない。

Pit34 (図版30、写真図版27・28)

調査区中央部の南側3B-1H14に位置する。南西側でSK35と重複しこれを切っている。規模は長軸0.40m・短軸0.35m・深さ0.13mを測る。平面円形、断面台形状である。覆土は褐色砂質粘土を主体とする2層に識別される。遺物は出土していない。

Pit36 (図版31、写真図版30)

調査区ほぼ中央やや東寄りの3B-1H8に位置する。規模は長軸0.42m・短軸0.34m・深さ0.23mを測る。平面楕円形、断面台形状である。覆土は褐色砂質土で、炭化粒を微量に含んでいる。遺物は深鉢底部(62)が出土している。

Pit45 (図版31、写真図版30)

調査区東側の調査区外に接する2B-1016・11・12に位置する。遺構は調査区外に延びるため全容は明らかでない。規模は残存部分で長軸0.48m・短軸0.24m・深さ0.16mを測る。平面は楕円形と推定され、断面台形状である。覆土は暗褐色砂質粘土の単層で、炭化粒・焼土がごく少量含まれる。遺物は後期の所産と推定される深鉢底部破片(63)が出土している。

f 性格不明遺構 (SX)

SX54 (写真図版 25)

既述のように調査区西側 3B-1G23 の壁面で確認した。平面形状が不明なため平面図がなく、遺構観察表及び断面写真を掲載した。壁面の残存部分で長さ 1.64m・深さ 0.28m を測る。平面形不明、断面弧状を呈する。覆土は 1 層灰黄褐色砂、2 層暗褐色砂の 2 層に識別され、堆積状況から自然堆積と推定される。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

第三章 遺 物

第1節 縄 文 土 器 (図版32・33、写真図版31・32)

1) 概 要

第11次調査で出土した土器は、縄文時代中期前葉～晩期後葉に属する土器群であり、中でも縄文時代後期前葉と晩期の土器群が主体である。本発掘調査の土器はコンテナ(内寸54.3×33.6×10.0cm)換算で15箱分が出土している。接合・復元ののち、85点を掲載した。

2) 記 述 の 方 法

遺構出土・表土層から取り上げた資料の順で掲載を行った。表土層取り上げ資料については、おおむね時期ごとに掲載している。掲載資料の提示は実測図・写真で行い、遺物個々の詳細な諸属性については観察表に記載した。なお、深鉢形土器・浅鉢形土器・鉢形土器(浅鉢か深鉢か判別できないもの)・台付鉢形土器・壺形土器・蓋形土器・注口土器は、それぞれ深鉢・浅鉢・鉢・台付鉢・壺・蓋・注口と略して用いる。

3) 分 類

本調査で出土した資料は大半が破片資料であり、全体の器形・文様構成が判明するものは僅かである。そのため、新潟県内の既存の縄文土器編年(高橋・阿部2019、田中・古澤2019、渡邊2019a)を参考に、器形・文様構成から時期が分かるものについては下記のとおりⅠ～Ⅲ群、時期が特定できず装飾性の乏しい地文のみ施文される組製土器をⅤ群として分類を行った。また、Ⅰ～Ⅲ群については各時期を前葉・中葉・後葉で細別した。詳細な時期が判別できない資料は群のみ記載した。

Ⅰ群 縄文時代中期 1類-前葉の土器 2類-中葉の土器 3類-後葉の土器

Ⅱ群 縄文時代後期 1類-前葉の土器 2類-中葉の土器 3類-後葉の土器

Ⅲ群 縄文時代晩期 1類-前葉の土器 2類-中葉の土器 3類-後葉の土器

Ⅴ群 装飾性の乏しい地文(無文・縄文等)のみ施文される組製土器で時期の特定が難しいもの

なお、土器の胎土については観察表に含有物を記載し、分析は行っていない。特殊な含有物を含むもの、量が顕著なものについては土器各説において記載した。

4) 土 器 各 説

Pit25 (1・2)

1・2は深鉢の体部である。1は並走沈線が施された南三十稲場式土器で、Ⅱ群1類に属する。2は縄文LRが施文された粗製深鉢で、胎土には海綿骨針が多く含まれる。Ⅱ群に属する。

Pit28 (3～5)

3は深鉢の口縁部で、外面には半截竹管によって付けられた沈線とそれに沿うように刺突文が施される。内面は磨かれて滑らかである。1群に属する。4・5は南三十稲場式の深鉢でⅡ群1類に属する。4は頸部で、並走沈線と縄文LRが施される。5は「く」字状に内折する波状口縁で短沈線が施される。

Pit32 (6～11)

6は三十稲場式の深鉢体部で花卉状刺突文が施される。7は加曾利B2式期の深鉢で、大波状口縁に付随する突起であると考えられる。8は深鉢の口縁部で縄文LかLRが施文される。口端は内削ぎ状である。胎土にガラ

ス状粒子（高温石英または黒曜石と考えられるもの）が多量に含まれる。9は浅鉢の体部で縄文LRが施文される。10・11は深鉢体部である。10は細いRの縄を用いた短軸絡状体によって施文されている。11は無節縄文Rが施文される。外面は磨減が顕著である。割れ口の形状から9・11の下端は粘土紐の積み上げ箇所と判離したと考えられる。6はⅡ群1類、7はⅡ群2類、8・10・11はⅡ群、9はV群に属する。

SK2 (12)

外面が磨かれた深鉢の体部～底部である。体部には縄文LRとZ字状の結節回転文が横走する。底部にはケズリによる砂粒移動の痕跡が、底面には指でナデたような調整痕が残る。長石を多量に含む胎土で、特に内面が顕著である。Ⅲ群1類に属する。

SK3 (13)

深鉢の底部で、底面にくっきりと網代圧痕が残る。また底部には、判然とはしないがRの燃糸文のようなくぼみが横走している。V群に属する。

SK15 (14)

深鉢の体部で口縁部付近の破片と想定される。内面は内削ぎ状に調整されている。粒の大きいRの燃糸文が横走する。Ⅱ群1類に属する。

SK22 (15～25)

15～21はⅡ群1類に属する。15は後期初頭の三十稲場式土器で「く」字状に屈曲する蓋受状口縁部、口縁は小波状を呈す。屈曲部の内面側は磨かれて丸みを帯びている。ナデ・ケズリといった調整痕が顕著である。16は深鉢の直立する口縁部で、口端面は内削ぎ状になっている。外面には羽状縄文LRが施される。口縁部付近にヘラ状の工具で削った痕がある。ガラス状粒子が器面全体に多く含まれる。三十稲場式期に比定される。17～21は南三十稲場式の深鉢である。17は直立する口縁部で、内外から棒状の工具で穿孔したのち、円孔の周囲を面取り状に調整している。口端面及び、円孔の上下に短沈線が施される。18～21は体部である。18は沈線と縄文LRが施文され、胎土には雲母が多く混じる。19～21は並走沈線が施される。19のみ、2本の沈線の間にキザミが施されている箇所がある。22～25は無文または縄文のみ施文されたⅡ群の深鉢片である。22・23は内削ぎ状口縁部である。22の外面は摩耗しており、はっきりとした施文の痕跡は確認できない。内面はよく磨かれており、ケズリによる砂粒の動きが確認できる。23はやや内湾する口縁部で磨減気味の外面には縄文LRが施文されている。24・25は体部である。24の外面には0段多条の縄文LRが施文され、内面全体に横方向にナデ調整が施される。25には縄文LRが施文され、破片上部には波状の沈線が施されるようである。24・25ともにガラス状粒子が多量に含まれる胎土である。

SK23 (26)

深鉢の内削ぎ状口縁部である。摩耗により施文・調整痕は判然としない。V群に属する。

SK35 (27)

深鉢の体部で、上端は粘土紐の積み上げ箇所と判離したと考えられる。沈線と縄文LRが施文され、内面はナデ調整される。Ⅱ群に属する。

SK38 (28～42)

28は三十稲場式の蓋。沈線とそれに沿うように刺突列が施され、端部の接地面にも沈線が巡らされる。Ⅱ群1類に属する。29～33はⅡ群の深鉢である。29は体部下半と考えられ、0段多条の縄文RLが施文されている。30は体部中位の破片で、Rの縄を用いた網目状燃文が施文される。棒状工具で外面から穿孔されており、補修孔の可能性が考えられる。31は深鉢の底部と考えられる。外面は丁寧に整形されており、粘土紐の積み上げ箇所と判離している。32は体部で、破片上部が厚いことから口縁直下と考えられる。間隔の開いた櫛歯状条線が施される。上端部は粘土紐の積み上げ箇所と判離しており、偽口縁となっている。大粒の鉱物を大量に含んだ胎土である。33は軸に粗く巻いたRの燃糸文が重なって施文されている。34は筒形土器。頭部でやや括れ、口

縁部が外湾するコップ状の器形で、内面からは輪積み痕が確認できる。外面は黒色処理とミガキ調整が施されている。底面と口縁部に一部破損はあるものの、ほぼ完形の状態出土した。後期の所産と考えられる。35～42は晩期の土器である。36～38はⅢ群1類、40はⅢ群2類、35・39・41・42はⅢ群とした。35は深鉢の体部でZ字状の結節回転文と縄文LRが施文されている。36～38は大洞BC式の口縁部である。36の口縁はやや内湾し、口端にはB字状の小突起が付けられる。沈線で区画された幅の狭い文様帯には、半歯状文が施され、文様帯以下には粒の細かい縄文LRが施文されている。胎土精良で外面にアスファルト、内面に炭化物が付着する。37は外傾する口縁部で、沈線で区画された中に末端が噛み合わない半歯状文が施される。雲母が多く混じる胎土である。38は胎土精良な浅鉢の口縁部である。B字状の小突起が付随する口縁には、粒の細かい縄文LRが施文されている。そこから一段下がった内面側に、沈線と刻みで構成された文様帯が作られる。外面は、内面と同様の縄文LRが一部施文されているのみである。39は「く」字状に屈曲する口縁部～体部で小型の平底壺と考えられる。内面と頸部にナデ調整が施され、口端は面取りされている。体部には緩く巻かれた縄文LRが施文される。40は壺形土器の頸部～体部と考えられ、断面形からやや外傾する口縁になるようである。内外面ともに摩耗が著しい。頸部にはナデ調整が確認できる。大洞C1式である。41は鉢の底部で外面の摩耗が著しい。42は外傾する口縁部で、形状から小型壺とした。内外面ともに摩耗しており、外面の一部にミガキ表現があるほか、調整痕は確認できない。

SK39 (43～46)

43は深鉢の体部中位に位置する。Rの縄をZ字状に巻き付けた短軸絡条で施文している。Ⅱ群に属する。44・45はⅢ群1類に属する土器である。44は深鉢の体部で、横方向の縄文LRとZ字状の結節回転文が施される。45は鉢の口縁部で太めの沈線で区画された中に縄文LRと結節回転文が施される。大洞BC式に比定される。46は深鉢底部で網代を撫で消した痕跡が残る。V群に属する。

SK46 (47～52)

47・48はⅡ群2類に属する後期中葉の土器である。47は薄手の鉢の体部で、破片上部は粒の小さい縄文LRが施文され、下部は一段削りこまれた無文部となっている。加曾利B3式期である。48は緩やかに内折する深鉢の口縁部で、口端は面取りされている。はっきりとした沈線が施される。内面は横方向にミガキ調整が施される。加曾利B2～B3式期と考えられ、Ⅱ群2類に属する。49は深鉢の口縁部で口端にB字状突起が、その直下に沈線が施される。体部には磨消縄文LRによって雲形文が描かれると予想される。大洞C1～C2式期と考えられる。50は深鉢の口縁部～体部でZ字状の結節回転文が縦横方向に施文される。横走る結節回転を境にして上部は縄文LRが横走、下部は縦走している。海綿骨針が多量に含まれる胎土である。51・52はV類に属する。51は深鉢底部で底外面に網代の圧痕が残る。52は深鉢の体部～底部でよく磨かれた器面に被熱痕・アスファルトの付着が確認できる。括れ部分は横方向にナデ調整され、底外面には敷物圧痕のようなものがかすかに見える。

SK50 (53～57)

53は注口土器の口縁部～体部である。注口部の下には瘤が付けられ、器面との接着箇所はナデ調整が施されている。器面は摩滅気味で、沈線と磨消縄文LRによる横帯状の文様帯が施されている。Ⅱ群3類に属する。54は丸底と想定される鉢の口縁部で、口端はナデにより面取り加工されている。沈線が横走るほかは無文で、器面全体は丁寧に磨かれている。内外面ともに赤彩されており、特に沈線部分によく残っている。大洞B～C1式でⅢ群に属する。55は浅鉢の口縁部で内外面ともに赤彩の痕が残る。丁寧に磨かれ光沢のある外面である。Ⅲ群2類に属する。56は鉢の口縁部で、口縁には細かな刻みが施される。2条の沈線の下に撚紋と、後Rの縄を用いた結節回転文(綾線文)が施される。Ⅲ群に属する。57は深鉢体部～底部で胎土に多量の粒子が含まれる。外面は被熱で艶くなっているほか、内面のコゲが顕著である。底部の内面側には指圧痕が残る。V群に属する。

SK52 (58)

柄杓式期の深鉢の口縁部柱状突起であると考えられる。上面には棒状工具による渦巻状の沈線が施され、側

面は幅が狭い半載竹管状の工具と幅広の工具によってえぐられている。胎土の金雲母が顕著である。I群3類に属する。

Pit5 (59)

II群1類に属する深鉢体部で並走沈線が施される。南三十稲場式である。

Pit7 (60・61)

60・61はII群1類に属する南三十稲場式の深鉢口縁部である。60は小波状口縁で、沈線が施される。61は半載竹管状の工具で短沈線が施される。大粒の粒子が多量に含まれる胎土である。

Pit36 (62)

深鉢体部～底部である。被熱による劣化が著しく、内外面には炭化物が付着している。ガラス状粒子などの大粒の粒子が混じる胎土である。V群に属する。

Pit45 (63)

深鉢底部で、器面全体が被熱しており脆い。底面に指オサエ痕、外面には横・斜め方向にナデ調整を施した痕跡がある。V群に属する。

表土 (64～85)

I群1類 (64・65)

64は深鉢の体部で、半載竹管による半隆起線文と沈線によって区画されている。区画内には、C字状の連続爪形文や縄文LRが充填される。65は口縁部付近の破片で、半載竹管による半隆起線文で構成されており、一方には細かな刻みが施されている。どちらも新崎式である。

I群2類 (66・67)

66は馬高式の深鉢の体部下半である。半載竹管による隆起線文と沈線が縦位に施される。隆起線文の頂部はナデで平らにされており、一部刻みが充填されている箇所もある。67は深鉢の口縁部～体部である。口縁部内面は横方向にナデ調整され、内削ぎ状になっている。器面全体に無節縄文Rを施文している。大木8b式と考えられる。

I群3類 (68)

外反する深鉢の口縁部～体部である。口頸部には縦方向に短沈線が、体部には沈線と縄文LRが施されている。大粒の金雲母が混じる胎土で大木8b新式と考えられる。

II群1類 (69)

南三十稲場式の深鉢の直立する口縁部で、口端がとがり気味に整形されている。口縁部・頸部・体部と3つの文様帯に分かれており、それぞれ縦あるいは斜め方向に短沈線が施されている。外面に比べ内面の調整が粗い。

II群2類 (70～73)

70はわずかに内湾する深鉢の口縁部で、外面口縁付近が丁寧にナデ調整されている。縄文LRを施文した後、数条の沈線を施している。海綿骨針と多量の雲母・ガラス状粒子を含んだ胎土である。加曾利B2～B3式に属する。71は深鉢の口縁部で、口端面は丁寧にナデ調整が加えられた平口縁である。微細な雲母が多く混じる胎土で加曾利B2・3式以降の所産であると考えられる。72は深鉢の体部片で、0段多条のRL・LRを用いた羽状縄文が施される。ガラス状粒子・雲母のほか、海綿骨針が多く含まれる胎土である。加曾利B2～B3式に属する。73は注口土器の体部と考えられる。器形は上下にやや潰れた球状で、楕円状の瘤が貼付けられているあたりが最大径になると予想される。0段多条のRL・LRを用いた羽状縄文を器面全体に施した後、沈線で区画した箇所は磨り消し、無文にしている。瘤には、短沈線と刻みが施されるほか、側面には貼付時に工具でつけたナデの痕が残る。加曾利B3式である。

II群3類 (74・75)

74は注口土器に付随する裝飾部と考えられる。ボタン状の粘土に、中心で交わるよう棒状工具で4条の沈線

を施したのち、中心に盲孔をあけている。海綿骨針を含む胎土である。75は深鉢の体部で、磨消縄文RLが施される。浅めの沈線により縄文充填部と無文部が区画されている。無文部は縄文が施された箇所よりも削り込まれ、若干の段差が生じている。外面の無文部と内面はよく磨かれ、胎土にはガラス状粒子が混じる。西ノ浜式である。

Ⅱ群 (76・77)

76・77ともに後期後半の所産と考えられる。76は深鉢の体部で、結節縄文LRが施文される。77は注口土器の体部片。器面には縄文LRと沈線が施されているほか、十字に沈線が施された瘤が貼り付けられている。瘤の側面に縄文の圧痕が残っていることから、突起→縄文→沈線の順で施文されたことが予想される。破片下部は粘土が削り取られて1段低くなっている。

Ⅲ群2類 (78・79・81)

78は壺か注口土器の体部と考えられる。器面はナデ調整され、中央にB字状突起が付いた眼鏡状の隆起線文と沈線が施される。隆起線文と器面の境目や沈線内部はよく磨かれている。雲母など多量の粒子が含まれる胎土である。大洞C2式と考えられる。79は浅鉢体部上半の屈曲箇所位置する。破片上端は直立する口縁部に続くと考えられる。屈曲部に横走する隆体には刺突が施され、隆体以下は沈線が横走する。文様構成と形から上野原式～鳥屋1a式の所産と考えられる。81は内折する口縁部～体部で、口縁部は後から貼り付けられている。破片上端には刻みが、その下には沈線が施されており、沈線以下は縄文LRが充填される。器面はよく磨かれており、内面にはコゲが付着している。大洞C1式である。

Ⅲ群3類 (82)

折り返し状に肥厚した口縁部で縄文LRが施文される。鳥屋式の所産と考えられる。

Ⅳ群 (80・83～85)

80・83は深鉢体部。80は縄文RLとZ字状の結節回転文が施文されている。83は櫛歯状条線が施され、内面にはナデ調整の痕が残る。84は多孔底土器の底部である。内面側の孔の周りに粘土が盛り上がり、外側から穿孔したことが想定される。

85は台付鉢の頸部で、屈曲部分は工具で粗くナデ調整される。微細な金雲母が多量に含まれる胎土である。

第2節 土製品 (図版33、写真図版32)

土偶 (1・2)

1はSK38から出土した遮光器土偶の腕部で、先端が刺落している。断面は環状で中空になっている。肩の部分に細長い楕円状の隆帯が施され、その周りに、浅めの刺突帯が作られる。ところどころに赤色顔料の付着が見られる。大洞BC式かC1式期に属すると考えられる。

2は表土層から出土した土偶の頭部で、顔面と後頭部に欠損が見られる。円形状の輪郭に、目・口は細い沈線で、眉・鼻はT字状の隆帯で表現されている。頭部下端が凹状に窪んでいることから、頸部とはソケット状に接合していたと推測される。縄文時代後期の所産か。

土製円盤 (3)

Pit25から出土した円形状の土製品で、縄文LRが施文される。図版向かって上側の無文部のみ指ナデが施されており、緩やかに傾斜している。

第3節 石器・石製品 (図版34・35、写真図版33・34)

1) 概要

第11次調査で出土した石器・石製品(以下、石器類とする)は第19表のとおり、合計120点である。このうち遺構に伴うものが95点で、全石器類の79%を占める。したがって、遺構に伴う石器が極めて多いことが出土石器の特徴と思われる。遺構に伴うものではSK38とSK50に伴うものが多い。特にSK50に伴うものは66点を数え、全出土類の55%を占める。

一方、表土層として取上げたもの25点で、極めて少ない。表土層としたものは耕作土と削平土、整地に伴う攪乱であり、包含層が皆無であったことが出土数に反映していると推定される。

石器類の時期は、土器に照らし合わせれば後期前半と晩期前半に多くが所属するものと思われる。以下、石器の掲載順に記述する。

2) 石器・石製品各説

石鏃(1・2) 2点出土している。1は基部が尖り、側縁が外湾状の尖基族である。長さ26.0mm、幅11.4mmの小型品である。薄手の縦長剥片の側縁に片面から二次調整を加えただけのもので、表面は無加工である。2は1と同じく基部が尖り、側縁が外湾状の尖基族である。長さ26.0mm、幅13.0mmの小型品であるが、1に比べると幾分幅広である。二次調整は丁寧に行われ、全面に調整が施される。1・2はともに後期以降の石鏃の特徴をよく表している。石材は1が珪質頁岩、2が黄色系の鉄石英である。いずれもSK50から出土した。

石鏃未成品(3) 1点出土している。横長剥片を素材とし正面はほぼ全面に、表面は周縁に二次調整が施されている。長さ25.7mm、幅21.0mmを測り、石鏃としてはまだ大きすぎることや基部側が欠損したために廃棄したものと推定し石鏃未成品としたが、尖頭部の破損品の可能性もある。石材は流紋岩で、SK38の上層から出土している。

石鏃(4) 棒状で厚みのある横長剥片と思われる素材の正裏面に粗雑な二次調整を加えている。長さ30.0mm、幅13.0mm、厚さ8.0mmの小型品である。錐部断面は素材を反映し厚みのある菱形である。石材は珪質頁岩で、SK50から出土している。

筈状石器(5~7) 5は6・7が接合したもので、東北地方で多出する筈状石器である。正裏面ともに自然断面が見られることから剥片状の扁平礫が素材と思われる。正裏面ともに周縁からいねいな二次調整が加えられている。刃部平面は円く仕上げられ、断面は片刃である。長さ87.0mm、幅33.0mmを測り、石材は良質な赤色系の鉄石英である。

6は5の上部破片であり、破損後に二次調整は加えられていない。

7は5の下部破片であり、破損後に正面左側縁の上部と、裏面上部の先端部に二次調整が加えられ、嘴状の刃部が作出されている。したがって、削器として再利用したものと思われる。

削器(8~11) 8点出土している。このうち4点図示した。8は縦長剥片の正面右側縁を刃部とするもので、刃部の正裏面には、使用による微細な剝離が見られ、刃縁は鈍くなっている。石材はメノウで、長さ47.5mm、幅24.5mmを測る。Pit5から出土している。

第19表 第11次調査 遺構別・器種別 石器・石製品出土数

遺構	石 鏃	石 鏃 未 成 品	石 筈	筈 状 石 器	両 面 削 製 石 器	多 面 体 削 製 石 器	砥 石	白 利 石	石 片	石 核	石 冠	分 類 不 明 石 製 品
Pit 5									1			
Pit 7				1								
SK 15				1								
Pit 18							1	1				
SK 22							1		2			
SK 23									1			
Pit 25				1				2	1			
Pit 27									2			
Pit 28									2			
Pit 32									1			
SK 35									1			
SK 38	1								1	5		
SK 39										1		
SK 46										1		
SK 50	2	1		4			1		55	2	1	
SK 51				1								
表土			1	1	2	1	1			17		1
合計	2	1	1	8	3	1	5	1	2	89	2	1

9は縦長剥片の下部を切断で除去し、裏面左側縁に浅角度の二次調整を加え刃部としている。石材は硬質頁岩で、SK50の19層から出土している。10は横長剥片の底縁の両面に二次調整が見られ刃部としている。石材は凝灰岩で、SB55-Pit25から出土している。12は剥片の両面から粗雑な剥離が加えられ、いわゆる両面加工石器ともいわれる。側面観はジグザグ状を呈する。石材はメノウで、SK50から出土している。

尖頭器(12) 1点のみの出土である。薄手の縦長剥片の下部と推定されるもので、正裏面ともに周縁から浅角度で浅い剥離が丁寧に施されている。尖頭部と推定される上部は破損により欠損しており、遺存部は尖頭器の基部と推定した。石材は黄色系の鉄石英である。

磨製石斧(13) 1点のみの出土である。大きさが長さ72.0mm、幅36.0mmの丁寧に研磨された定角式磨製石斧である。大きさを小型磨製石斧¹⁾の分類に入る。被熱しほば全面に煤の付着が見られる。付着の濃淡で柄の装着痕を想定したが断定できなかった。石材が透閃石であることから、富山県東部から糸魚川方面で製作されたものの搬入品と推定される。刃部の破損は煤の付着が見られないことから被熱後の破損である。

多面体敲石(14) 1点のみの出土である。ヒスイの垂角礫と推定される素材に剥離を加えたのち、敲石として使用された敲打痕が見られる。破損品のため厚さ29.5mmしかないが長さ57.0mm、幅71.5mmを測り、破損する以前は片手で保持できる手ごろな大きさの多面体敲石だったものと思われる。なお破損面を観察すると敲打面からの剥離であり、使用時の破損と推定できる。

磨石類(15～18) 5点出土し、4点図示した。15は破損であるものの正面と両側面に磨痕が、正面に敲打に伴う凹痕が見られる。破損のため裏面の状況は不明確であるが、正面と同じような磨面があったものと推定され、全体形はいわゆる石鏡状の形をしていたものと思われる。Pit25から出土している。凝灰岩製。16は平面形がやや不整な安山岩の扁平礫の正裏面に磨痕、正面・下縁に敲打痕が認められるが、使用の痕跡は極めて弱い。完形品で長さ85.0mm、幅71.0mm、厚さ36.6mm、重さ237.3g測る。Pit25から出土している。17は安山岩の厚さがやや不整な扁平礫の正裏面に磨痕が認められるが、裏面の磨面は磨痕が良く残り、正面の磨痕は極めて弱い。素材の形状から1/2の遺存と推定される。SK50の覆土中層から出土している。18は磨石類としたが、厚さが49.0mmもある素材の破片のため台石類になる可能性もある。両面に磨痕と敲打痕による荒れ面が認められる。SK22から出土している。石材は花崗岩であり、風化が著しい。

台石類(19) 2点出土し、1点図示した。19はSK35の確認時に出土したものである。ほぼ完形品で長さ257.0mm、幅245.0mm、厚さ90.5mm、重さ6813.0gの大型品である。正面が使用されており、ほぼ全面がよく摩滅している。礫岩製。

剥片類(20・21) おおむね長さ・幅が15mm以上のものを剥片類とし、これより小さいものはチップ類とした。剥片類としたものは89点出土し、2点図示した。20は石材が黄色系鉄石英で長さ41.0mm、幅18.5mm、厚さ6.0mmの剥片である。長さが幅の2倍以上あり石刃状を呈する。「石刃状剥片は山形県最上川中流域の頁岩原産地遺跡で中期中葉から後期前葉まで生産された地域・時期の限定された石器素材」(倉田2000)であり、搬入品の検討をしたが、石材が異なることからその可能性はない。Pit25から出土している。21は凝灰岩製の縦長剥片で、長さ40.5mm、幅40.5mm、厚さ8.0mmを測る。Pit28から出土している。

石冠(22) 1点のみ出土している。23は風化が激しく加工の有無が判別できないが、形状から加工されたものと判断した。輝緑岩製で長さ28.5mm、幅31.0mm、厚さ27.5mmの小破片であるが、石冠の基底部の端部破片と推定できる。SK50の覆土下層(19層)から出土している。

分類不明石製品(23) 1点のみ出土している。22は凝灰岩製で長さ33.5mm、幅27.0mm、厚さ5.0mmを測る。正裏面に擦痕があり、平面形が台形状を呈す。擦痕のある石製品または小型磨製石斧と推定したが、器種の特定には至っていない。

1) [山本1990]は長さ84mm・幅38mm、[高橋2018]は長さ85mm・幅38mmを大型磨製石斧、小型磨製石斧の分類基準としている。

第IV章 総 括

第11次調査は個人住宅建設に伴う発掘調査であり、調査面積は213.3㎡とわずかであった。しかも、畑耕作による削平や整地による擾乱が多いにもかかわらず、遺構・遺物が比較的多く見つかった。見つかった遺構は土坑や掘立柱建物の柱穴など深い掘り込みの遺構が多く、土器の時期も多時期で、土製品・石器・石製品の多様さから見れば、かつては遺構・遺物が多く包蔵されていたものと推定される。以下、調査成果からわかったことを述べ統括したい。

第1節 遺構について

既述のように検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑14基、小土坑21基、性格不明遺構1基である。原遺跡は古くから知られていた遺跡で南北350m、東西250mの範囲（新潟県埋蔵文化財包蔵地カード）に広がる市内最大級の縄文遺跡の一つである。しかし、これまでの発掘調査は断片的で、遺物から中期前葉～晩期中葉の長期わたる遺跡（前山2016）ということは明らかになってきたが、遺跡そのものの実態は不明な部分が多かった。

掘立柱建物の検出の意義 今回の調査で最大の成果は集落を構成する掘立柱建物を検出できたことである。SB55は調査区外に広がるため全容は明らかでないが、亀甲形の掘立柱建物で短辺（梁間）3.3m、長辺（桁行）3.3m以上と推定され、主軸方位はN-59°-Wと推測されるものである。所属時期は伴出土器から後期前葉と推定される。掘立柱建物は魚沼地域では後期初頭～前葉にかけて亀甲形の掘立柱建物が顕在化していく（阿部2019）と指摘している。県北部でも亀甲形を含めた掘立柱建物は後期前葉の村上市長割遺跡〔滝沢ほか2011〕や中期末葉～後期前葉のアチャ平遺跡〔宮原ほか2002〕で多く見られる。新潟市周辺では該期の集落遺跡の調査例が少ないものの、五泉市巳ノ明遺跡で亀甲形の掘立柱建物が1棟〔山崎ほか2004b〕、原遺跡から東に約3.3kmの地点に所在する平遺跡では、亀甲形の掘立柱建物が2棟検出〔前山ほか2023〕されている。このように見てくると後期前葉の原遺跡では亀甲形の掘立柱建物が集落を構成する主要な建物であった可能性が高い。

次にSB55の遺跡内での位置を推定してみたい。新潟県においては中期前葉に環状集落の形成が普遍化（阿部2019）し、掘立柱建物は少なくとも後期初頭には出現し6本ないしは9本主柱の亀甲形配置が主流（阿部2010）を占めると思われている。環状集落を構築するにはそれなりの広大な平坦地が必要である。原遺跡の図版27の遺構全体図と図版5の地形図に照らし合わせると、第10・11次調査区の西から北にかけて広大な平坦地が広がっている。この部分に原遺跡の後期前葉の環状集落が構築されたものと容易に推測できる。これを裏づけるかのようには丘陵北西端部に所在する向皇大神宮の建て替えに伴う確認調査で、わずかではあるが後期初頭～前葉の土器が出土〔前山2016〕している。しかも後期～晩期の掘立柱建物の多くは、上越市籠峰遺跡（後期前葉～晩期初頭）〔小林・北村ほか1996〕、津南町正面ヶ原A遺跡（後期後葉～晩期前葉）〔阿部2010〕、村上市元屋敷遺跡（後期前葉～晩期末葉）〔滝沢ほか2002〕のように弧状または環状集落の中央に位置する広場に向かって主軸方向を向けていることを考えると、SB55の主軸方位N-59°-Wの先には環状集落の中心部がある可能性が高い。

第2節 縄文土器について

第11次調査では、後期前葉と晩期を中心に、中期前葉から晩期後葉までの土器が出土した。ここでは、過去の調査成果〔立木2020b・前山2016・新都市史編さん委員会1989〕を踏まえた上で推測される本調査区出土土器の様相を述べまとめたい。

本調査区において、中期の資料は数が乏しいものの、前葉から後葉までの破片が確認されている。前葉は北陸色の強い新崎式に該当する土器が確認されている。中葉になると東北方面の特徴を持つ土器に在地系土器である馬高式が混じる。その後、大木 8b 式が変容した柄倉式が見られる。本調査では柄倉式に特徴的な満巻き文を持つ柱状突起 (58) が 1 点確認されている。後葉に属する資料は確認できず、後期になると、初葉は三十稲場式、前葉は南三十稲場式と在地系の土器が見られるようになる。中葉は加曾利式が多くを占める。後期後半になると、東北の楯付土器段階に見られる特徴を持つ破片が出土している。晩期前葉から後葉までは東北の大洞式土器が大半を占め、そこに在地系土器である鳥屋式が混じる。

このような東北系の土器を中心に在地系の土器が一定量混じる傾向は、信濃川流域において一般的な様相であり、同じく新津丘陵上に立地する秋葉遺跡においてもおおむね同様の出土傾向が認められている(今井 2021 ほか)。一方で、完形かつほぼ直立の状態で出土した筒形土器 (34) や、他遺跡に類例のない、縦走する結節回転文が施された晩期深鉢 (50) からは本調査区出土土器の特殊性が認められるといえよう。

第3節 石器について

第 19 表に示した石器・石製品は 120 点であり、縄文時代の通常遺跡の発掘調査で出土する石器をほぼ網羅している。さまざまな器種や形状の石器・石製品が含まれている。個々の石器の所属時期を明らかにするのは石器の性質上難しいが、土器の主体が後期前半、晩期前半であることを考えれば、石器・石製品の多くは土器の時期に所属すると推定できる。ここでは事実記載で分かったことを補足し記述する。

石材について 遺跡周辺の新津丘陵北部の地質は、金津層を標識とし主に泥岩・砂岩で構成(新潟県 2000)される。したがって石器に利用される石材は、砂岩中に含まれる黒曜石の小礫程度で、石材環境は極めて良くないと思われる。加えて遺跡の西の信濃川及び東の能代川では、下流のため間近に岩石さえも採取できない。したがって礫石器を含めた石器の石材の多くは、早出川及び阿賀野川以北の地域で採取されたものを搬入したものと思われる。

最も速からの搬入石材は磨製石斧 (13) の石材の透閃石岩とヒスイ製多面体砥石 (14) である。いずれも富山県東部から糸魚川方面で採取できる石材である。磨製石斧はいねいな研磨で仕上げられていることから成品の状態では、ヒスイは成形した剥離層が見られるが未加工の状態で搬入されたものと考えられる。多面体砥石は主に磨製石斧の製作に際して用いられる(阿部 1984)ものとされている。下越地方の磨製石斧製作は「中期初頭の新発田市孤森 B 遺跡に始まり、中期中葉の上車野 E 遺跡で本格化」(高橋 2019)する。中期後葉から末葉には、主に輝緑岩系の石材¹⁾を採取できる遺跡に拡散する。石材の採取できない遺跡では磨製石斧の石材を搬入し、小規模に大型磨製石斧の生産を行っている。大集落と思われる原遺跡においては輝緑岩系の石材をはじめとする磨製石斧の石材を搬入し、小規模生産が行われた可能性がある。ただし下越地方で生産された磨製石斧は大型磨製石斧であり、(13)のような小型磨製石斧は富山県東部から糸魚川方面で生産されたものがほぼ独占的に流通している。

また比較的遠隔地からの搬入品として半透明頁岩(阿部 1997a)、珪質頁岩がある。図示していないが剥片類とした中で 3 点認められた。半透明頁岩は関川村上関の荒川左岸に露頭(秦 2001)が見られ、後期後葉以降に各地流通する(阿部 1997b)としている。珪質頁岩は硬質頁岩とは区別が難しいが、半透明頁岩を除いて光沢のある頁岩を珪質頁岩とした。新潟県北部地域の石器材料の調査を行った結果(阿部 1995)から、荒川上流の横川、加治川上流の夏井川で採取されることからこの方面からの搬入を推定している。

このほか剥片石器の石材は、(硬質)頁岩、黄色系鉄石英、赤色系鉄石英、流紋岩、メノウ、凝灰岩などが認められるが、荒川、加治川、阿賀野川及び同支流(阿部 1995・村上 2021)や背後の丘陵・山地で採取できることからこのように多種類の石材が搬入されたものと推定できる。

1) 新発田地域を中心に粗粒安山岩としているが、同質の石材と考えられる。

別表 11 第 11 次調査 遺構観察表

掘立柱建物 (5B)

5B55

図版 No. の写しは、写真図版 No.

図版 No. (25-28)	グリッド	3B-11B5-12・13・17				布石 (m)	-	築方 (m)	3.3	床面高 (cF)	-	時代	掘立柱 位置	構造	電灯	土曜方位	N-S/E-W	備考
		間隔 (m)																
P10等号	間隔 (m)				断面	床面 高さ (m)	平面	断面	分層	柱間	基礎	分層	構造	分層	計測法 (m)	計測法 (m)	備考	
	上層	間隔	下層	深さ														間隔
5B55-P1025	0.91	0.78	0.71	0.4	0.08	34.2	内前	階段	6	あり	なし	計測	P1025-P1028	2.2			表層調査区外に延びる。	
5B55-P128	0.90	0.76	0.67	0.62	0.28	34.5	格内前	階段	5	あり	なし	計測	P128-P1632	5.3				
5B55-P1632	1.03	0.89	0.98	0.97	0.84	34.5	内前	階段	4	あり	なし	計測	P1632-P1635	2.0				

土坑 (5K)

遺物図版 No. の写しは、遺物写真図版 No.

図版 No.	写真図版 No.	遺物 No.	グリッド	時代	土曜方位	間隔 (m)				断面 高さ (m)	断面		分層	発露深さ (目-脚)	遺物 図版 No.	備考		
						上層	間隔	下層	深さ		平面	断面						
29	26	SK2	3B-1G13	漢前期	N-60° E	0.25	0.29	0.20	0.16	14.1	24.7	内前	台形	2	-	-		
																	間隔	間隔
29	26	SK2	3B-1G18	漢前期	N-50° E	0.94	0.83	0.75	0.63	0.47	24.8	内前	台形	1	-	-		
30	27	SK11	3B-1G25・1H21	漢前期	N-57° E	0.87	0.70	0.72	0.55	0.22	24.7	格内前	高状	1	-	-		
30	27	SK15	3B-1H21	漢前期	-	1.34	0.72	0.91	0.86	0.40	24.4	-	平円状	4	-	-		
30	27	SK22	3B-1G27・4	漢前期	N-35° W	1.10	0.95	0.60	0.60	0.65	24.2	内前	平円状	0	-	カラタンが貫入し、		
30	27	SK23	3B-1G15	漢前期	N-43° W	1.28	0.80	0.92	0.51	0.58	24.3	格内前	平円状	4	P1020-SK23	-		
30	27	SK31	3B-10H22・3B-1H3	漢前期	N-15° E	1.02	0.90	0.42	0.40	0.11	24.3	内前	高状	1	-	-		
27	28	SK35	3B-1H14	漢前期	N-36° W	0.54	0.48	0.41	0.28	0.18	24.4	格内前	-	2	SK35-3P134 35, 34	-		
30	28	SK38	3B-10H11・12・16・17	漢前期	N-18° W	1.85	1.20	1.43	1.01	0.30	25.3	格内前	台形	3	SK50-5K38 34, 35	-		
30	28	SK39	3B-10H12	漢前期	N-72° W	0.74	0.48	0.50	0.30	0.22	25.9	格内前	高状	2	-	-		
30	28	SK46	3B-1G12・13	漢前期	N-31° W	0.89	0.36	0.40	0.14	0.28	24.2	-	台形	2	-	-		
31	29	SK50	3B-10H11・12・16・17	漢前期	N-22° W	2.15	1.49	1.82	1.32	0.85	23.3	(内前)	台形	27	SK50-5K38 34, 35	34	35	断面は本表参照。
31	29	SK51	3B-1G4・169	中前期	-	0.69	0.46	0.59	0.30	0.18	24.0	-	1	SK51-5K52	-	-		
31	29	SK52	3B-1G4・9	中前期	N-78° E	0.66	0.57	0.48	0.44	0.26	24.5	内前	台形	2	SK51-5K52	-	-	

小土坑 (P1)

遺物図版 No. の写しは、遺物写真図版 No.

図版 No.	写真図版 No.	遺物 No.	グリッド	時代	土曜方位	間隔 (m)				断面 高さ (m)	断面		分層	発露深さ (目-脚)	遺物 図版 No.	備考	
						上層	間隔	下層	深さ		平面	断面					
31	29	P18	3B-1A28	漢前期	N-57° E	0.36	0.26	0.20	0.18	0.15	24.0	内前	高状	1	-	-	
																	間隔
31	29	P16	3B-1G19	漢前期	N-10° W	0.51	0.46	0.27	0.26	0.40	24.3	内前	平円状	2	-	-	
31	29	P17	3B-1G20・25	漢前期	N-63° W	0.41	0.40	0.28	0.28	0.31	24.6	内前	台形	1	-	34, 35	
31	30	P19	3B-2G4・9	漢前期	N-36° W	0.35	0.32	0.26	0.20	0.27	24.0	内	台形	1	-	-	
31	30	P14	2B-1G23・3B-1G4	漢前期	N-60° E	0.38	0.30	0.30	0.18	0.33	24.3	格内前	V字状	2	-	-	
31	30	P18	3B-1H11	漢前期	N-5° W	0.37	0.32	0.22	0.20	0.38	24.5	内前	V字状	3	-	-	
31	30	P19	3B-1H11	漢前期	N-72° E	0.36	0.34	0.22	0.16	0.22	24.7	内前	高状	1	-	-	
30	27	30	P10	3B-1G15	N-27° W	0.44	0.33	0.32	0.14	0.25	24.4	格内前	V字状	2	P1030-SK23	-	
		P12	3B-1H6・11・12	漢前期	N-2° W	0.44	0.40	0.40	0.28	0.23	24.6	格内前	高状	2	-	-	
29	25	26	P15	3B-1H12	漢前期	N-70° E	0.91	0.79	0.71	0.60	0.60	24.2	内前	階段	6	-	34・35 35, 34
		P17	3B-1H13	漢前期	N-37° W	0.43	0.35	0.32	0.25	0.17	24.7	格内前	台形	1	-	-	
29	26	P16	3B-1H8・13	漢前期	N-73° W	0.90	0.76	0.71	0.62	0.28	24.8	内前	階段	5	-	35, 34	
		P10	3B-1G21	漢前期	N-26° W	0.56	0.53	0.37	0.32	0.30	24.5	内前	平円状	2	-	-	
29	26	P16	3B-1H17	漢前期	N-8° E	1.06	1.01	0.92	0.84	0.36	24.6	内前	階段	4	-	SK55	
30	27	28	P14	3B-1H14	漢前期	N-48° W	0.40	0.35	0.22	0.17	0.13	24.4	内前	台形	2	SK35-P14	-
31	30	P16	3B-1H8	漢前期	N-61° E	0.42	0.34	0.24	0.21	0.23	24.4	格内前	台形	1	-	-	
		P17	3B-1H19	漢前期	N-40° E	0.43	0.38	0.28	0.24	0.35	23.8	格内前	台形	3	-	-	
		P13	3B-10H25	漢前期	N-59° E	0.38	0.36	0.24	0.24	0.15	24.0	内前	高状	1	-	-	
		P14	2B-10H20・25	漢前期	N-16° W	0.40	0.35	0.30	0.16	0.20	24.0	格内前	台形	1	-	-	
31	30	P15	2B-10H25	漢前期	N-58° W	0.48	0.24	0.31	0.13	0.16	23.7	(内前)	台形	1	-	-	
		P17	3B-10H16	漢前期	N-61° E	0.28	0.27	0.17	0.17	0.28	24.4	内前	台形	2	-	-	
		P19	3B-1G14	漢前期	N-2° W	0.30	0.25	0.23	0.17	0.25	24.6	内前	高状	2	-	-	
		P15	2B-10H23	漢前期	N-5° W	0.55	0.53	0.37	0.33	0.07	24.8	内前	高状	1	-	-	

性格不明遺構 (5X)

図版 No.	写真図版 No.	遺物 No.	グリッド	時代	土曜方位	間隔 (m)				断面 高さ (m)	断面		分層	発露深さ (目-脚)	遺物 図版 No.	備考
						上層	間隔	下層	深さ		平面	断面				
25	SK34	3B-1G23	-	(1.64)	(0.88)	-	-	(0.28)	25.0	-	高状	2	-	-	調査区の外壁で確認	

別表 No.	写真 No.	出土位置		形制	分類	遺存部位	胎土	色澤	目録物		文様・施文	時期	備考			
		遺積	グラッド						西面	東面						
32	32	40	SK46	3B-1G12	3群	深鉢	口群2群	口	G・長・黄・赤・ 白・黄	比叡・黄埴 (10YR6/4)	コゲ	スス	笠形文 (山形副文) 沈線	前期中葉	大瓶C1～C2式	
32	31	50	SK46	3B-1G12	2群	深鉢	口群1	口・体	G・長・赤・白・ 黄・黄	比叡・黄埴 (7.5YR6/3)		スス	文字状副文 1組線・横出筋	前期中		
32	32	51	SK46	3B-1G12		深鉢	V群	底	G・長・赤・赤・ 黄	比叡・黄埴 (7.5YR6/3)		コゲ	スス	底外面スグミ状副文筋		
32	32	52	SK46	3B-1G12		深鉢	V群	体～底	G・長・赤・白	比叡・黄埴 (10YR6/4)	アスフア アスフア	アスフア アスフア	スグミ スグミ	前期中		
32	32	53	SK50	2B-10H12	7群	深鉢	口群1	口・体	G・長・赤・白・ 黄・黄	比叡・黄埴 (10YR6/3)			山形副文 沈線 滑り沈線	前期後半		
32	32	54	SK50	2B-10H12	7群	深鉢	口群1	口	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (10YR6/3)	赤影	赤影	沈線	前期後半	大瓶D～E1式	
32	32	55	SK50	2B-10H12	7群	深鉢	口群2群	口	G・長・白	比叡・黄埴 (10YR6/3)	赤影	赤影		前期後半	大瓶C1式	
32	32	56	SK50	2B-10H12	12群	深鉢	口群1	口	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (10YR6/3)	コゲ	スス	帯赤文が 結節副文 沈線	前期		
32	32	57	SK50	2B-10H12	7群	深鉢	V群	体～底	G・長・赤・赤・ 黄	比叡・黄埴 (10YR6/3)	コゲ	スス	底外面副文(子子による滑り)			
32	32	58	SK52	3B-1G9	一級灰 Q1.17	深鉢	口群2群	口(突起)	G・長・赤・赤・ 赤・白	比叡・黄埴 (10YR7/3)		コゲ	スス	縁赤き状の沈線	中期後半	新形式
32	32	59	Pw5	3B-1G19		深鉢	口群1群	体	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (10YR7/4)			縁文 (帯赤不明) 赤止沈線	前期後半	底二十組形式	
32	32	60	Pw7	3B-1G20	1群	深鉢	口群1群	口	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (7.5YR6/2)			沈線	前期後半	底二十組形式	
32	32	61	Pw7	3B-1G20	一級	深鉢	口群1群	口	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (7.5YR7/0)	コゲ		短沈線	前期後半	底二十組形式	
32	32	62	Pw30	3B-1H8	1群	深鉢	V群	体～底	G・長・白・黄	比叡・黄埴 (7.5YR6/0)	コゲ	スス				
32	32	63	Pw45	2B-10H20	1群	深鉢	V群	底	G・長・黄・赤・ 白・黄	比叡・黄埴 (10YR6/4)	コゲ			前期中		
32	32	64	表土			深鉢	口群1群	体	G・長・黄・赤・ 白・黄	比叡・黄埴 (10YR7/3)		スス	山形副文 平縁起縁文	中期前半	新形式	
32	32	65	表土			深鉢	口群1群	体	G・長・黄・赤・ 白	比叡・黄埴 (10YR6/3)			平縁起縁文	中期前半	新形式	
32	32	66	表土			深鉢	口群2群	体	G・長・黄・赤	比叡・黄埴 (7.5YR7/0)			縁起縁文 沈線	中期中葉	舊形式	
32	32	67	表土			深鉢	口群2群	口～体	G・長・白・黄	比叡・黄埴 (7.5YR6/0)			縁起縁副文付	中期中葉	大木85式か	
32	32	68	表土			深鉢	口群2群	口～体	G・長・黄・赤・ 白	比叡・黄埴 (10YR7/3)			短沈線 山形副文	中期後半	大木85式(新)か	
32	32	69	3B-10H22	粗灰		深鉢	口群1群	口	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (7.5YR7/0)			短沈線	前期後半		
32	32	70	表土			深鉢	口群2群	口	G・長・黄・白・ 黄	比叡・黄埴 (10YR5/1)			山形副文 沈線	前期中葉	加群別B2～B3式	
32	32	71	表土			深鉢	口群2群	口	G・長・赤・白・ 白・黄	比叡・黄埴 (10YR5/2)		スス		前期中葉～ 後半	加群別B2式以降	
32	32	72	表土			深鉢	口群2群	体	G・長・黄・白・ 黄・黄	比叡・黄埴 (10YR5/1)		スス	5段多色帯色の目録文	前期中葉	加群別B2～B3式	
32	32	73	表土			深鉢	口群2群	体	G・長・赤・白	比叡・黄埴 (10YR7/1)			山形副文・短沈線付	前期中葉	加群別B3式	
32	32	74	表土			深鉢	口群3群	縁部	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (7.5YR7/4)			縁赤文 沈線	前期後半		
32	32	75	表土			深鉢	口群2群	体	G・長・赤・白・ 黄・黄	比叡・黄埴 (7.5YR6/4)			山形副文 沈線	前期後半	西ノ原式	
32	32	76	表土			深鉢	口群1	体	G・長・赤・赤・ 白・黄	比叡・黄埴 (10YR7/3)			山形副文 縁部	前期後半		
32	32	77	表土			深鉢	口群1	体	G・長・黄・赤・ 白	比叡・黄埴 (10YR6/4)			山形副文 沈線 縁 縁の付付帯の上から縁文	前期後半		
32	32	78	表土			深鉢	口群2群	体	G・長・赤・赤・ 白	比叡・黄埴 (7.5YR7/0)			沈線 縁部付縁起縁文	前期中葉	大瓶C2式	
32	32	79	表土			深鉢	口群2群	体	G・長・赤	比叡・黄埴 (10YR6/4)			沈線 縁赤文	前期後半	上野式～高野1式 大瓶C3式併行	
32	32	80	表土			深鉢	口群1	体	G・長	比叡・黄埴 (10YR6/4)	コゲ	スス	山形副文 縁部	前期後半		
32	32	81	表土			小型鉢	口群2群	体	G・長・赤・白	黄 (10YR4/1)	コゲ	スス	山形副文	前期中葉	大瓶C1式	
32	32	82	表土			深鉢	口群2群	口	G・長・赤・白	比叡・黄埴 (10YR6/3)			山形副文	前期後半	盆状か	
32	32	83	表土			深鉢	口群1	体	G・長・赤・白・ 黄	比叡・黄埴 (10YR4/1)			縁赤黄縁部	前期後半		
32	32	84	表土			多孔土器	口群1	底	G・長・黄・黄	比叡・黄埴 (7.5YR7/4)			字孔	前期中		
32	32	85	表土			台形鉢	口群1	蓋	G・長・黄・赤	比叡・黄埴 (10YR5/2)				前期中		

別表 13 第 11 次調査 土製品観察表

凡例 1 胎土 胎土中に含まれる副文について記した。「石」は石黄砂、「瓦」は瓦石粉、「瓦」は瓦片砕き、「赤」はチャート、「赤」は赤色胎土、
「白」は白色胎土、「角」は角石粉、「陶」は陶粉砕き、「砂」は砂やスズ粉砕物(高尾石または山形石と考えられるもの)を表す。
2 色澤 表面の色澤も記した。「新飯塚土色類」(小山・竹原 1967)の記号を記した。

別表 No.	写真 No.	出土位置		形制	大きさ (cm)		色澤	胎土		備考				
		遺積	グラッド		長さ	幅					厚さ			
32	32	1	SK38	2B-10H12	3群	土盤	5.1	4.5	1.6	10YR6/4C:赤・黄埴	G・長・赤・白	縁部	赤影	大瓶C10C1式
32	32	2	表土			土盤	4.2	4.7	3.3	10YR6/4C:赤・黄埴	G・長・赤・角	平縁部	縁部	
32	32	3	Pw25	3B-1H12		土盤(副文)	4.1	4.1	3.1	10YR6/4C:赤・黄埴	G・赤・白・黄	山形副文		

別表 14 第 11 次調査 石器・石製品観察表

石錐

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	遺存状態	磨削形態 (主要部)	素材	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						幅 (mm)
34	32	1	2B-1012	SK50	7層	尖形錐	26.0	11.4	2.6	0.9	持貫直削	完形	再洗滌	両面両端加工。
34	33	2	2B-1012	SK50	19層	尖形錐	26.0	13.0	5.0	1.4	磨石(直)	完形	再洗滌	—

石錐未成品

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	備考		
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)				幅 (mm)	厚さ (mm)
34	33	3	2B-1012	SK38	1層		25.7	21.0	5.0	2.4	浅削直	縦長削片	基部削れが大きく欠陥する。

石錐

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)					幅 (mm)
34	33	4	2B-1012	SK50	11		30.0	13.0	8.0	2.9	持貫直削	縦長削片	先期欠陥 ほぼ完全に削り一次洗滌が入る。

鹿状石器

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	厚部 平削	刃部 差込削	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						幅 (mm)
34	33	5	不明		表土		67.0	33.0	14.0	30.0	鹿石(直)	片削	片削 接合部 No.6と7が接合したもの。	
34	33	6	不明		表土		40.0	30.0	16.0	13.7	—	—	—	両面 両面No.6の破断品。
34	33	7	不明		表土		44.5	33.0	11.0	16.3	—	—	—	両面 No.6破断品。基部磨。正面を磨削した後に二次洗滌が見られる。

削器

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	一次洗滌 部位	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						幅 (mm)
34	33	8	3B-1G20	Pt67	1層		47.5	24.5	14.0	12.2	メノウ	縦長削片	石磨削	完形 正面を磨削した後に基部を削削が見られる。
34	33	9	2B-1012	SK50	19層		36.5	23.8	17.7	10.7	両削	縦長削片	両側磨	完形 下部は両削された。表面両側磨に一次洗滌が見られる。
34	32	10	3B-1H12	Pt25	2層		38.6	31.6	10.0	9.9	鹿石(直)	縦長削片	片削	正面を磨削した。基部は両削からの一次洗滌あり。
34	33	11	2B-1012	SK50	19層		31.0	27.5	11.0	7.7	メノウ	—	両削	完形 上部を磨削した後に削削が見られる。基部はメノウで洗滌あり。

尖頭器

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)					幅 (mm)
34	33	12	不明		表土		22.0	25.5	6.0	3.0	鹿石(直)	縦長削片	上半部欠陥 基部削れと磨かれ、両面から削削がない。一次洗滌が見られる。

磨製石斧

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	厚部 平削	刃部 差込削	遺存状態	基端削打	備考
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						
34	33	13	不明		表土		72.0	36.0	14.0	52.4	鹿石(直)	片削	両削	両削 基部の一部欠陥 あり? 厚部平削、磨削、両側の差込削あり。

多面体石

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	厚部平削	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						幅 (mm)
35	34	14	不明		表土		57.0	71.5	29.5	159.5	七スズ	厚内磨	正面	両削 削打時の破断と推定される。成形時の跡が見られる。

磨石類

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	磨削部位	削打部位	遺存状態	備考
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						
35	34	15	3B-1H12	Pt26	1層		106.0	73.5	36.0	312.7	鹿石(直)	縦平削	正面、両側磨	正面 両面欠陥 磨削、両削あり。
35	34	16	3B-1H12	Pt25	2層		63.0	71.0	38.6	237.5	鹿石(直)	縦平削	両削	下部 両面 両面を磨削した。
35	34	17	2B-1012	SK50	12層		63.5	93.6	49.2	256.5	鹿石(直)	縦平削	両削	— 1/2欠陥 正面の磨削は削削。
35	34	18	3B-1G3	SK22	1層		60.0	79.6	49.0	342.6	鹿石(直)	縦平削	両削	3/4欠陥が 両削あり。

台石類

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	使用部位	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)						幅 (mm)
35	34	19	3B-1H14	SK35	1層		257.0	245.0	90.5	6813.0	磨石	厚部平削	正面	ほぼ完全磨削。

削片類

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	備考		
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)				幅 (mm)	厚さ (mm)
35	34	20	3B-1H12	Pt25	1層		41.0	17.5	6.0	2.5	持貫直削	縦長削片	石皮状を呈する。
35	34	21	3B-1H13	Pt28	1層		40.5	40.5	8.0	5.9	鹿石(直)	縦長削片	—

石冠

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	素材	遺存状態	備考	
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)					幅 (mm)
35	34	22	2B-1012	SK50	19層		28.5	31.0	27.5	50.1	薄削直	—	両削 両削が著しく、加工の痕跡を両削が削削あり、形状から下部と判断した基部の両削片を推定した。

分類不明石製品

図録 No.	写真 No.	No.	期分	出土地点		大きさ			石材	遺存状態	備考		
				No.	No.	No.	No.	長さ (mm)				幅 (mm)	厚さ (mm)
35	34	23	不明		表土		33.5	27.0	5.0	4.8	鹿石(直)	—	両面に磨削が見られる。鹿石の削削の可能性もあり。

引用・参考文献

- ア 相澤裕子 2018 『程島館跡—新津丘陵末端に立地する縄文時代・平安時代・中世の遺跡—』『最新調査成果が語る新潟市の歴史 平成29年度新潟市遺跡発掘調査速報会』新潟市文化財センター
- 相田泰臣 2015 『V3 新潟市舟戸遺跡出土土物』『新潟市文化財センター年報第2号—平成25(2013)年度版—』新潟市文化財センター
- 相田泰臣・渡邊朋和ほか 2014 『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書—第15・16・17・18・19次調査—』新潟市教育委員会
- 相田泰臣・金田拓也・八藤後智人ほか 2015 『大沢谷内遺跡Ⅳ 第19・20・21次調査—一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第12・13・14次調査—』新潟市教育委員会
- 相田泰臣・八藤後智人ほか 2020 『大沢谷内遺跡Ⅵ 第15・17・19次調査—一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第12・13・14次調査—』新潟市教育委員会
- 会田容弘 2000 『縄文時代の頁岩製石刃製作と流通—東北地方南部のありかた—』『山形考古』第6巻 第4号 山形県考古学会
- 浅井芳伸 1989 『巻町新谷遺跡における磨製石斧製作工程の復元』『巻町史研究』V 巻町
- 阿部朝隆 1984 『多面体を呈する敲石について』『豊栄市史研究第2号』新潟県豊栄市
- 阿部朝隆 1985 『縄文時代石器研究の視点と方法』『法政考古学』第10集記念論文集 法政考古学会
- 阿部朝隆 1990 『多面体を呈する敲石 再論』『帝京史学』第5号 帝京大学文学部史学科
- 阿部朝隆 1995 『新潟県北部地域における石器材料の調査』『帝京史学』第10号
- 阿部朝隆 1997a 『新潟県北部地域における縄文時代の石材利用とその背景』『帝京史学』第12号 帝京史学会
- 阿部朝隆 1997b 『(2) 石材の獲得と磨製石斧の生産』『北越考古学』第8号 新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究 北越考古学研究会
- 阿部朝隆 1999 『第1章 旧石器時代 第3節 環境と遺跡 第3項 石材』『新潟県の考古学』高志書院
- 阿部朝隆 2013 『半透明の頁岩』『石器石材のついで 第2回 シンポジウム「富山の石材と玉髄・碧玉」予稿集』石器石材のついで世話人会
- 阿部昭典 2010 『新潟県における縄文後・晩期の集落構造の複雑化』『津南学叢書第13輯・津南シンポジウムⅥ』正面ヶ原A遺跡から垣間見る縄文社会 津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 阿部昭典ほか 2012 『津南シンポジウムⅦ 予稿集 三十稲場式土器文化の世界—4・3Kaイベントに関する考古学現象②—』津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 阿部昭典 2019a 『第2項 集落構造と遺跡群』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 阿部昭典 2019b 『第3項 建物跡』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 甘粕 健・古川知明ほか 1981 『大沢遺跡B'・B地区の調査概報』巻町・湯東村教育委員会
- 甘粕 健・小野 昭ほか 1993 『越後山谷古墳』巻町教育委員会
- 甘粕 健 1994 『Ⅱ 考古資料 2 各時代の概観 3 弥生時代・古墳時代』『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 荒川隆史 1998 『新潟県南蒲原郡栄町長畑遺跡出土の土器について』『研究紀要』第2号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2009 『新潟県矢津遺跡出土土器の再検討』『新潟県立歴史博物館研究紀要』第10号 新潟県立歴史博物館
- 安藤正美 2018 『見附市埋蔵文化財報告 第38集 2016年度における耳取遺跡確認調査報告 耳取遺跡』みつけ伝承館(見附市教育委員会)
- 安藤正美・今井秀樹 2015 『見附市埋蔵文化財報告 第37集 2011～2014年度における耳取遺跡確認調査報告 耳取遺跡』みつけ伝承館(見附市教育委員会)
- イ 家田順一郎 1990 『長畑遺跡確認調査報告書』栄町教育委員会
- 家田順一郎ほか 1986 『藤平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』下田村教育委員会
- 池田雨工 1925 『古津と新津』『越語古代史の研究』萬松堂新潟支店
- 池田 亨 2002 『小出町埋蔵文化財調査報告書 第2集 小出町立佐架保所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 居平遺跡(一次調査)』小出町教育委員会

- 池田 享はか 2002 『小出町埋蔵文化財調査報告書 第1集 小出町立佐梨保存所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 居平遺跡』 小出町教育委員会
- 石川秀雄 1976 『陶磁遺書 6 越後の陶磁』 雄山閣
- 石川日出志 1988 『第一節 土器・第二節 鳥屋式土器の構成と意義』『豊栄市史』資料編1 考古編 豊栄市
- 石川日出志 1991 『縄文時代晩期浮線土器出現期の編年と諸様相』『北越考古学』第4号 北越考古学研究会
- 石川日出志 1996 『安田町六野瀬遺跡の縄文時代晩期末石器群の検討から』『北越考古学』第7号 北越考古学研究会
- 石川日出志はか 1992 『六野瀬遺跡 1990年調査報告書 立川プラインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書』 安田町教育委員会
- 石原正敏・木村祐治 1996 『新潟県新津市原遺跡出土の耳形土製品』『縄文時代』第7号 縄文時代文化研究会
- 磯崎正彦 1964 『縄文土器・各論V 晩期の土器』『日本原始美術 1 縄文式土器』 講談社
- 磯崎正彦・上原甲子郎 1969 『亀ヶ岡式文化の外郭圏における終末期の土器型式』『石器時代』第9号 石器時代研究会
- 伊藤秀和 1996 『田上町文化財調査報告書 第7集 川船河遺跡 -新潟経営大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』 田上町教育委員会
- 伊藤秀和 2000 『加茂市文化財調査報告(11)平成11年度 加茂市内遺跡確認調査報告書』 加茂市教育委員会
- 稲葉 明はか 1976 『津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について』『新潟県立教育センター研究報告』第9号 新潟県立教育センター
- 犬塚又兵 1896 『越後国中蒲原郡番生ヶ原石器時代の遺跡発見に付きて』『東京人類学会雑誌』第11巻119号 東京人類学会
- 今井さやかはか 2021 『秋葉遺跡 第13次調査 -個人住宅建設に伴う秋葉遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- ウ 上原甲子郎 1963 『分水町文化財調査報告第一集 幕島 -新潟県分水町幕島遺跡調査報告-』 分水町教育委員会
- 上原甲子郎 1973 『矢津遺跡発掘調査概要』 村松町教育委員会
- 上原甲子郎・中島栄一 1966 『上野原遺跡概要』 三条市教育委員会・三条市文化財調査審議会
- 上峯篤史 2018 『縄文石器：その視角と方法』 京都大学学術出版会
- 梅川勝史 2002 『小出町埋蔵文化財調査報告書 第1集 小出町立佐梨保存所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(別冊) 居平遺跡』
- エ 江坂輝弥 1960 『土偶』 板倉書房
- 江坂輝弥・野口義麿 1975 『古代史発掘 3 土偶芸術と信仰』 講談社
- 遠藤恭雄 2021 『原遺跡 -新津丘陵に営まれた縄文時代集落-』『新潟市遺跡発掘調査速報会 2020』 新潟市文化財センター
- 遠藤恭雄 2022 『Ⅲ 2 (4) 原遺跡 第11次調査』『新潟市文化財センター年報 第9号 一令和2(2020)年度版-』 新潟市文化財センター
- 遠藤恭雄・澤野慶子はか 2018 『大沢谷内遺跡V 第25次調査 -一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第17次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 遠藤恭雄・重留康宏・澤野慶子はか 2020 『砂原前郷遺跡 第3次調査 -市道砂原南線建設事業に伴う砂原前郷遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- オ 大川 清はか 1996 『日本土器事典』 雄山閣
- 大沼忠春 1986 『本古内町建川1・新道4遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 大沼忠春・遠藤香澄 1988 『本古内町新道4遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 岡村道雄 1976 『ピエス・エスキューについて -岩手県大船渡市基石遺跡出土資料を中心として-』『東北考古学の諸問題』 東出版事業社
- 小熊博史 1994 『布目遺跡』『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 小熊博史 2002 『沖積地の遺跡(5) 東山丘陵周辺』『新潟考古』第13号 新潟県考古学会
- 小熊博史・立木宏明 2001 『加茂市七谷地区で発見された縄文・弥生時代の遺物 -横山彰太郎資料の紹介-』『レポート加茂市史』創刊号 加茂市
- 長田友也・石川智紀 2019 『第2章 縄文時代 第7節 精神文化 第3項 まつりの道具』『新潟県の考古学Ⅲ』 新潟県考古学会
- 小野 昭はか 1982 『大沢遺跡Ⅱ 第3次調査概報』 新潟大学考古学研究室

- 小野 昭・小熊博史 1987 「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅲ 巻町
- 小野 昭・前山精明 1994 「豊原遺跡」『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 小野 昭・前山精明ほか 1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ 巻町
- カ 片桐道宇 1918 「金津村誌」『中蒲原郡誌』上巻 新潟県中蒲原郡役所
- 加藤 学・荒川隆史 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子ほか 2009 『五千石遺跡 - 3区発掘調査概報-』長岡市教育委員会
- 加藤由美子ほか 2011a 『五千石遺跡 1区・3区・4区東地区・5区 - 特定構造物改築事業（大河津可動堰改築）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』長岡市教育委員会
- 加藤由美子ほか 2011b 『草薙遺跡 経営体育成基盤整備事業（湯1期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書』新潟県長岡市教育委員会
- 金内 元ほか 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第222集 一般国道49号線湯川改良関係発掘調査報告書Ⅳ 向大浦遺跡 上空野中丸遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金山嘉明・鈴木正男・前山精明 1995 「(4) 縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 金子正典・田村浩司 1994 「磯ノ前・葛浦沢遺跡 県道バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書」三条市教育委員会
- 金田拓也ほか 2017 『舟戸遺跡Ⅱ 第25次調査 - 宅地造成工事に伴う舟戸遺跡第2次発掘調査報告書-』新潟市文化財センター
- 鴨井幸彦 2018 『越後平野の地盤と防災 - 腐食土層（軟弱地盤）の厚さ分布と平野のなりたちをめぐるなぞ-』一般社団法人北陸地域づくり協会
- 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢 2006 「新潟平野における砂丘列の形成年代と発達史」『第四紀研究』第45号第2号 日本第四紀学会
- 加茂市史編集委員会 2016 『加茂市史』資料編4 考古 加茂市
- 川上貞雄 1989 「第二編 考古」『新津市史』資料編 第1巻 原始・古代・中世 新津市
- 川上貞雄 1993 「第一章 第二節 二 新津丘陵における遺跡分布」『新津市史』通史編 上巻 新津市
- 川上貞雄 1996 『金津丘陵製鉄遺跡群 居村B・D地区』新津市教育委員会
- 川上貞雄ほか 1987 『加茂市文化財調査報告（3）東部地区遺跡詳細分布調査報告書』加茂市教育委員会
- 川上貞雄・速藤孝司 1983 『平造遺跡緊急発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川船河道跡団体研究グループ 1963 「川船河道跡について」『地球科学』第67号
- コ 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡の場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 小出義治・寺村光晴 1961 『鳥原遺跡発掘調査報告書』財団法人 北方文化博物館
- 小島俊彰 1980 「有孔球状土製品」『考古学研究』第27巻第1号 考古学研究会
- 小島俊彰 1983 「有孔球状土製品」『縄文文化の研究』第9巻 縄文人の精神文化』雄山閣
- 小滝利意 1961 「会津盆地に於ける縄文式晩期より弥生式土器について」『会津史談会誌』第37号 会津史談会
- 小林達雄ほか 1981 『長者ヶ平遺跡』小木町教育委員会
- 小林達雄ほか 1982 『長者ヶ平遺跡 -Ⅱ-』小木町教育委員会
- 小林達雄ほか 1983 『長者ヶ平遺跡 -Ⅲ-』小木町教育委員会
- 小林達雄ほか 1984 『長者ヶ平遺跡 -Ⅳ-』小木町教育委員会
- 小林達雄・北村 亮ほか 1996 『龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編』中郷村教育委員会
- 小林正史 1991 「縄文時代終末期における東北地方中・南部間の地域差」『北越考古学』第4号 北越考古学会
- 駒形敏朗 1995 『中道遺跡 - 第1次発掘調査概報-』長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1996 『中道遺跡 - 第2次発掘調査概報-』長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1997 『中道遺跡 - 第3次発掘調査概報-』長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1977a 『埋蔵文化財調査報告書 藤橋遺跡』長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1977b 『藤橋遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書 藤橋遺跡 尾上遺跡 旧富岡農学校跡遺跡』長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会
- 駒形敏朗・小熊博史 1990 『藤橋遺跡における掘立柱建物跡の調査』『長岡市立科学博物館研究報告』第25号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏朗・鳥居美栄・小熊博史・広井 造 1998 『中道遺跡 - 農業基盤整備事業に伴う発掘調査-』長岡市教育委員会

- 駒形敏朗・加藤由美子ほか 2007 『五千石遺跡 - 1区発掘調査概報 -』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・加藤由美子ほか 2008 『五千石遺跡 - 4区・5区発掘調査概報 -』 長岡市教育委員会
- 小山正志・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修
- サ 酒井和男・廣野耕造 2002 『新潟砂丘における居住の起源』 『新潟考古』 第13号 新潟県考古学会
- 佐藤信之 2010 『正面ヶ原 A 遺跡と周辺地域の石器の在り方』 『津南学叢書 第13輯 <津南シンポジウムVI> 正面ヶ原 A 遺跡から垣間見る縄文社会』 津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会
- 佐藤信之 2013 『新潟県内における鉄石英・玉髓系石材の様相』 『石器石材のついで』 第2回 シンポジウム「富山の石材と玉髓・碧玉」予稿集』 石器石材のついで世話人会
- 佐藤典邦 2000 『弥生時代中期の縄文』 『民俗と考古の世界』 和田文夫先生頌寿記念論文集刊行会
- 佐藤広志 1985 『型式の空間分布から見た土器型式 - 東北地方大洞 C2期を中心として -』 『赤い木』 第2号 赤い木同人会
- 佐藤雅一 2010 『正面ヶ原 A 遺跡の意義』 『津南学叢書 第13輯 <津南シンポジウムVI> 正面ヶ原 A 遺跡から垣間見る縄文社会』 津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会
- シ 縄文セミナーの会 1992 『第5回縄文セミナー 縄文晩期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 2004 『第17回縄文セミナー 縄文晩期中葉の再検討 - 資料集 -』 縄文セミナーの会
- ス 杉原荘介 1968 『新潟県・六野瀬遺跡の調査』 『考古学集刊』 第4巻第一号 東京考古学会
- 鈴木 峻 2003 『第VI章 まとめ C. 石器と石製品』 『新発田市埋蔵文化財調査報告書 第26 二太子沢 A 遺跡発掘調査報告書 県営農村活性化住環境整備事業（菅谷地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田』 新発田市教育委員会
- 鈴木佑夫 1989 『第一編 自然』 『新津市史』 資料編第一巻 原始・古代・中世 新津市
- 鈴木加津子 1991 『安行式文化の終焉（2）』 『古代』 第91号 早稲田大学考古学会
- 鈴木公雄 1988 『古代史復元 2 縄文人の生活と文化』 講談社
- 鈴木浩平 1993 『第一編 原始・古代・中世の新津 序章 郷土の自然 第一節 地形の概観』 『新津市史』 通史編上巻 新津市
- 鈴木俊成 1996 『A 新潟県の石器組成の概要と清水上遺跡』 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡II』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成 1998 『新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について - 縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に -』 『研究紀要』 第2号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成 1999 『第2章 縄文時代 第5節 道具と技術 第2項 早期から晩期の石器組成』 『新潟県の考古学』 高志書院
- 鈴木俊成 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第231集 上道下西遺跡 北陸自動車道栄スマートインターチェンジ関係発掘調査報告書』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・渡邊裕之・富岡直人 2004 『第二章 縄文時代 第二節 主な遺跡 3 幕島遺跡』 『分水町史』 分水町
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識III 縄文』 柏書房
- セ 関 雅之 1968 『耳取山発掘調査略報 - 縄文時代の耳取山』 見附市教育委員会
- 関 雅之 1971 『耳取遺跡 新潟県見附市耳取遺跡発掘調査報告』 見附市教育委員会
- 関 雅之 1979a 『新津市における考古遺跡と遺物について（一）』 『新津郷土誌』 第3号 新津郷土誌料研究会
- 関 雅之 1979b 『新津市における考古遺跡と遺物について（二）』 『新津郷土誌』 第6号 新津郷土誌料研究会
- 関 雅之ほか 1987 『史跡寺地遺跡』 青海町教育委員会
- 関 雅之ほか 1988 『鳥屋遺跡 I・II - 新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告 -』 豊栄市史編纂委員会・豊栄市教育委員会・鳥屋遺跡発掘調査団
- 関 雅之ほか 1997 『新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究 - 新発田市中野遺跡の共同資料調査 -』 『北越考古学』 第8号 北越考古学研究会
- 関 雅之・田中耕作・阿部朝南・石川日出志ほか 1982 『新発田市埋蔵文化財調査報告4 村尻遺跡 I』 新発田市教育委員会
- タ 大工原豊・長田友也・建石 徹 2020 『縄文石器提要』 ニューサイエンス社
- 高橋 保・阿部昭典 2019 『第2章 縄文時代 第2節 土器 第4項 中期』 『新潟県の考古学田』 新潟県考古学会
- 高橋保雄 1992 『第IV章 五丁歩遺跡 4 遺物 B 石器類』 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡 十二木遺跡』 新潟県教育委員会

- 高橋保雄 1999 『阿賀野川以北の磨製石斧生産の様相』『新潟考古学談話会報』第20号 新潟考古学談話会
- 高橋保雄 2018 『B 磨製石斧製作工程の特徴』『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第271集 六反田南遺跡VI 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2019 『第4項 磨製石斧』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 高橋保雄 2021 『道正・岡崎遺跡』『最新調査成果が語る新潟市の歴史 新潟市遺跡発掘調査速報会 2020』新潟市文化財センター
- 高橋龍三郎 1981 『亀ヶ岡式土器の研究』『北奥古代文化』第12号 北奥古代文化研究会
- 滝沢規朗 1999 『奥三面遺跡群の石器組成 一遺跡類型別に見た石器組成比較一』『新潟考古学談話会報』第20号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗ほか 2002 『朝日村文化財報告書 第22集 元塚敷遺跡Ⅱ(上段)』新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 滝沢規朗ほか 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第224集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXVI 長割遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中耕作 1999 『第2章 縄文時代 第5項 後期 2 編年と地域性 後期前葉』『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 田中耕作 2007 『新発田市埋蔵文化財調査報告書第34 狐森B遺跡 発掘調査報告書 県営ほ場整備事業(加治川右岸地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』新発田市教育委員会
- 田中耕作・鶴巻康志 1992 『新発田市埋蔵文化財調査報告14 箱ノ内遺跡D地点の調査』新発田市教育委員会
- 田中耕作・鈴木 暁 2003 『新発田市埋蔵文化財調査報告26 ニタ子沢A遺跡 発掘調査報告書 県営農村活性化住環境整備事業(菅谷地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』新発田市教育委員会
- 田中耕作・古澤安史 2019 『第2章 縄文時代 第2節 土器 第5項 後期』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 田中耕作 2022 『三十稲場式土器生成期の一視点』『宮城考古学』第24号 宮城考古学会
- 田中 靖 1982 『黒坂遺跡出土の遺物について若干の紹介』『見附市史研究』第7号 見附市史編集委員会
- 田中 靖 1988 『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』見附市教育委員会
- 田中 靖 1989 『新潟県田上町塚野遺跡採集の石器』『新潟考古学談話会報』第3号 新潟考古学談話会
- 田辺早苗・大賀 健 2002 『神林村埋蔵文化財報告第18 樋渡遺跡・堀下遺跡』神林村教育委員会
- 谷藤保彦・関根慎二 2013 『縄文中期中葉土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
- 田畑 弘 1993 『田上町文化財調査報告書 第3集 新潟県高生産性大区画ほ場整備事業(田上郷地区)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡』田上町教育委員会
- 田畑 弘 2003 『田上町文化財調査報告書 第20集 新潟県高生産性大区画事業(田上郷地区)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡Ⅲ』田上町教育委員会
- 田畑 弘 2004 『田上町文化財調査報告書 第21集 新潟県営湛水防除事業(田上郷地区)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡Ⅳ』田上町教育委員会
- 田畑 弘・渡邊裕之・鎌山えりか 1996 『田上町文化財調査報告書 第8集 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡Ⅱ』田上町教育委員会
- ツ 立木宏明 2019 『原道跡 一新津丘陵に営まれた縄文時代の拠点集落一』『最新調査成果が語る新潟市の歴史 新潟市遺跡発掘調査速報会2018』新潟市文化財センター
- 立木宏明 2020a 『道正遺跡～砂丘上に新しく発見された古代・古墳・縄文時代の遺跡～』『最新調査成果が語る新潟市の歴史 新潟市遺跡発掘調査速報会2019』新潟市文化財センター
- 立木宏明 2020b 『Ⅲ2(3)原道跡 第10次調査』『新潟市文化財センター年報 第7号 一平成30(2018)年度版一』新潟市文化財センター
- 立木宏明ほか 2009 『萱免遺跡 第2次調査』新潟市教育委員会
- 立木宏明・小熊博史 2012 『信濃川中流域における縄文時代草創期の石斧 一長岡市立科学博物館所蔵資料を中心に一』『長岡市立科学博物館研究報告』第47号 長岡市立科学博物館
- 立木宏明・伊比博和 2013 『峰岡城山遺跡 第2次調査 一城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山遺跡第2次発掘調査報告書一』新潟市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2004 『愛宕遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 立木宏明・奈良佳子・細野高伯ほか 2019 『細池寺道上遺跡Ⅸ 第50次調査 一県営ほ場整備事業(担い手育成型)岡新地区に伴う細池寺道上遺跡25次発掘調査報告書一』新潟市教育委員会
- テ 寺崎裕助 1994 『新潟県における縄文・弥生時代の拠点集落跡 一中期を中心として一』『新潟考古学談話会報』第14号 新潟考古学談話会

- 寺崎裕助 2002 『新潟平野の遺跡』『新潟考古学談話会会報』第24号 新潟考古学談話会
- 寺泊町 1991 『寺泊町史』寺泊町
- ト 東京帝国大学 1897 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第一版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1898 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(増訂第二版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1901 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(増訂第三版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1918 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(増訂第四版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1928 『日本石器時代遺物発見地名表』(増訂第五版) 同書院
- 東京帝国大学 1930 『日本石器時代遺物発見地名表』(追補1) 同書院
- 宮裡秀之^{ほか} 2002 『朝日村文化財報告書第21集 アチャ平遺跡上段』新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 土橋由理子 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第121集 北陸自動車道安田土取場関係発掘調査報告書 円山遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子^{ほか} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第200集 一般国道49号亀田バイパス関係発掘調査報告書 西郷遺跡 大蔵遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古 長岡市
- 中島栄一 1969 『新潟県三条市上野原遺跡出土土器について』『信濃』第21巻第4号 信濃史学会
- 中島栄一 1979 『栄村文化財調査報告書 第1輯 長畑遺跡 新潟県南蒲原郡栄村長畑遺跡調査概略報告』栄村教育委員会
- 中島栄一 1981 『田2上野原遺跡』『三条市史』資料編第1巻 考古・文化 三条市
- 中島栄一 2009 『矢津遺跡と落合清志』『新潟県立歴史博物館研究紀要』第10号 新潟県立歴史博物館
- 中島栄一^{ほか} 1976 『古屋敷遺跡 新潟県南蒲原郡田上町古屋敷遺跡調査報告』田上町教育委員会
- 中島栄一・藤塚明 1978 『矢津の縄文文化遺跡 - 矢津遺跡予報 -』『村松郷土誌』第4号 村松町史編さん委員会
- 中島栄一・藤塚明・金子正典 1980 『日矢津遺跡』『村松町史』資料編第1巻 村松町史編さん委員会
- 中村孝三郎 1979 『下田村文化財報告書第9 新潟県南蒲原郡下田村 埋蔵文化財詳細分布調査報告書』下田村教育委員会
- 中村孝三郎 1981 『下田村文化財調査報告書 第十 赤松遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 中村孝三郎^{ほか} 1972 『新潟県文化財調査年報 第十二 嵐北 - 文化財総合調査報告書 -』新潟県教育委員会
- 中村由克 2007 『石器石材としての玉髓の原産地とその調査方法 - 長岡市柳尾における玉髓原産地を例として -』『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 中村由克 2008 『神子柴遺跡出土石器の石材とその原産地推定』『神子柴』信海書籍出版センター
- 中村由克 2022 『東北地方の珪質頁岩(東北頁岩)について』『東北頁岩と北関東地方 予稿集』岩宿博物館
- 名久井文明 2019 『木割り櫓の時空間的展開』『生活道具の民俗考古学 籠・履物・木割り櫓・土器』吉川弘文館
- ニ 新潟県 1983 『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 1983 『矢津遺跡』『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 1983 『赤松遺跡』『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 1983 『長畑遺跡』『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 1983 『黒坂遺跡』『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 1983 『耳取遺跡』『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 1983 『川船河遺跡』『新潟県史』資料編1 原始・古代1 考古編 新潟県
- 新潟県 2000 『新潟県地質図(2000年版)・新潟県地質図説明書(2000年版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 新潟県地盤図編集委員会 2002 『新潟県地盤図説明書』社団法人新潟県地質調査業協会
- 新潟県農地部農地計画課 1974 下越開発地域土地分類基本調査(国土調査)弥彦・内野5万分の1
- 新潟県立三条商業高等学校社会科学科考古班 1968 『三条 上野原 縄文晩期』
- 新潟古砂丘グループ 1974 『新潟砂丘と人類遺跡 - 新潟砂丘の形成史1』『第四紀研究』13(2) 日本第四紀学会
- 新潟市国際文化部歴史文化課 2007 『新潟歴史双書2 新潟市の遺跡』新潟市
- 新潟市史編さん委員会 1989 『新潟市史』資料編 第一巻 原子・古代・中世 新潟市
- ハ 方賀英一 1989 『荒波A遺跡』『国営会津農業水利事業開地遺跡調査報告IV』福島県教育委員会
- 方賀英一・藤谷誠^{ほか} 1986 『下谷地ヶ平遺跡B・C遺跡』『国営会津農業水利事業開地遺跡調査報告IV』福島県教育委員会
- 秦 昭繁 2001 『新潟県北部地域の石器石材環境(2)』『北越考古学 第12号』北越考古学研究会

- 林 謙作・鈴木公雄 1981 『縄文土器大成4 晩期』 講談社
- 早瀬加業 2007 『縄文時代における加熱処理石器製作技術の研究 -新潟県域の玉輪製石器の観察を通して-』 『新潟考古』 第18号 新潟県考古学会
- フ 藤田富士夫 1991 『バステル形石製品について』 『考古学論究』 創刊号 立正大学考古学会
- 藤沼邦彦 1989 『亀ヶ岡式土器様式』 『縄文土器大観4』 小学館
- 藤村東男 1980 『大洞窟型式設定に関する二、三の問題』 『考古風土記』 第5号 鈴木克彦
- 古澤安史^{ほか} 2018 『阿賀野市埋蔵文化財 第11集 県営湛水防除事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 石船戸遺跡』 阿賀野市教育委員会
- 古澤安史^{ほか} 2021 『阿賀野市埋蔵文化財 第13集 県営湛水防除事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 土橋北遺跡・石船戸北遺跡』 阿賀野市教育委員会
- ホ 細野高伯・伊比博和^{ほか} 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査 -一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第2・4・6・7・9次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 堀川正美・洪木宏人 2010 『五十嵐川流域の石器石材について』 『三桑考古学研究会機関誌』 三桑考古学研究会
- マ 前山精明 1994 『第1編 第3章 角田山麓の縄文文化 -成熟した特異・漁撈・採集社会-』 『巻町史』 通史編 上巻町
- 前山精明 1996 『新潟県西蒲原郡巻町御井戸遺跡』 『日本考古学年報』 47(1994年度版) 日本考古学協会
- 前山精明 1997 『有馬崎遺跡』 分水町教育委員会
- 前山精明 2000 『第4章 吉田町周辺の遺跡 第2節 旧石器時代から古墳時代遺跡各節 蒲田遺跡』 『吉田町史』 資料編1 考古・古代・中世 吉田町
- 前山精明 2009 『豊原遺跡Ⅵ群3類土器再考』 『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会
- 前山精明 2014 『Ⅱ2(3) 秋葉遺跡 第9・10次調査』 『新潟市文化財センター年報 第1号 -平成23(2011)年度・平成24(2012)年度-』 新潟市文化財センター
- 前山精明 2015 『Ⅴ6新潟市江南区砂崩遺跡の縄文時代遺物 -神林慎一氏採集資料から-』 『新潟市文化財センター年報 第2号 -平成25(2013)年度版-』 新潟市文化財センター
- 前山精明 2016 『Ⅱ2(1) 原遺跡 第7・8次調査』 『新潟市文化財センター年報 第3号 -平成26(2014)年度版-』 新潟市文化財センター
- 前山精明 2018 『Ⅴ1秋葉区大野中遺跡出土の縄文時代遺物 -阿賀野川低地に形成された遺跡の性格をめぐって-』 『新潟市文化財センター年報』 第5号 新潟市文化財センター
- 前山精明 2021 『平遺跡 -河岸段丘に営まれた縄文時代中・後期の集落跡-』 『新潟市遺跡発掘調査速報会2020』 新潟市文化財センター
- 前山精明^{ほか} 2012 『大沢谷内遺跡Ⅲ 第8次調査 -市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 前山精明^{ほか} 2023 『平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 新潟市教育委員会
- 前山精明・滝沢規明 2000 『第4章 吉田町周辺の遺跡 第1節時代概観』 『吉田町史』 資料編1 考古・古代・中世 吉田町
- 前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡 -縄文時代前期~中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査-』 巻町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2003 『御井戸遺跡Ⅰ -2002年度確認調査の概要-』 巻町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2004 『御井戸遺跡Ⅱ -2003年度確認調査の概要-』 巻町教育委員会
- 前山精明・伊比博和^{ほか} 2010 『大沢谷内北遺跡 第3次調査 - (仮称) 国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内北遺跡第3次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 松島悦子・山下 研^{ほか} 2007 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 新潟県燕市 五千石遺跡2区 発掘調査概要報告書』 燕市教育委員会
- 松島悦子・山下 研^{ほか} 2008 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集 新潟県燕市 五千石遺跡4区 発掘調査概要報告書』 燕市教育委員会
- 馬目順一・古川 猛 1970 『福島県郡山市一人子遺跡の研究 -所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味-』 南奥考古学研究会書1 南奥考古学研究会刊行会
- ミ 見附市史編集委員会 1981 『見附市史』 上巻(一) 見附市役所
- 御堂島正 1991 『石鏝と有舌尖頭器の衝撃刺離』 『古代』 第92号 早稲田大学考古学会

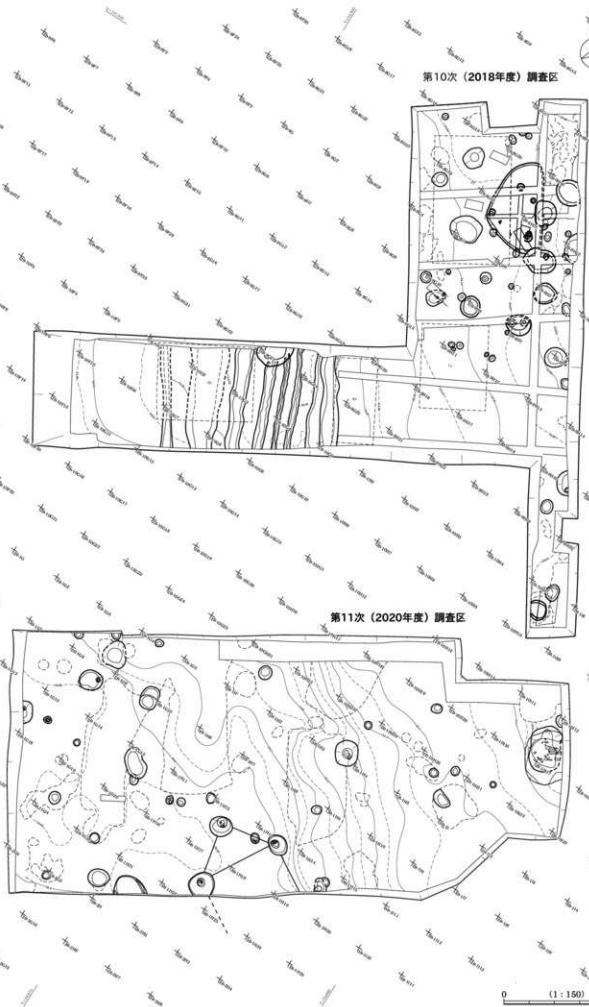
- 御堂島正 1993 『加熱処理による石器製作』『考古学雑誌』第79号 日本考古学会
- △ 村上章久 2021 『阿賀野市土橋遺跡の調査成果』『新潟県考古学会 第33回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- ヤ 八百枝茂 1975 『第2編 考古』旧版『加茂市史』上巻 加茂市
- 山内幹夫 1986 『一斗内遺跡出土縄文晩期土器の再検討』『しのみ考古』9 しのみ考古学会
- 山崎 天ほか 2004a 『五泉市文化財報告(12) 能代川関係発掘調査報告書V 寛下遺跡』五泉市教育委員会
- 山崎 天ほか 2004b 『五泉市文化財報告(14) 能代川関係発掘調査報告書VII 巴ノ明遺跡』五泉市教育委員会
- 山内清男 1930 『所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末』『考古学』第1巻第3号 東京考古学会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 山本正敏 1990 『北陸自動車道遺跡調査報告 一朝日町編5-1境A遺跡 石器編』富山県教育委員会
- ワ 渡辺一雄ほか 1983 『沢口遺跡』山都町教育委員会
- 渡邊明和 1992 『新潟県における縄文時代晩期初頭～中葉の土器群』『第5回縄文セミナー 縄文晩期の諸問題』縄文セミナーの会
- 渡邊明和ほか 2002 『中谷内遺跡発掘調査報告書II』新津市教育委員会
- 渡邊明和・小田由美子・上沼茂 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書II 居村遺跡E・A・C地点、大入遺跡A地点』新津市教育委員会
- 渡邊明和・立木宏明ほか 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊明和・立木宏明ほか 2004 『八幡山遺跡発掘調査報告書 第11・12・13・14次調査』新津市教育委員会
- 渡邊裕之 2002 『「朝日式土器」の再検討 - 延命寺が原遺跡出土土器の検討をとおして -』『新潟県立歴史博物館研究紀要』第3号 新潟県立歴史博物館
- 渡邊裕之 2004 『新潟県における晩期中葉の塚相』『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 渡邊裕之 2009 『矢津遺跡から出土した縄文晩期前半の土器』『新潟県立歴史博物館研究紀要』第10号 新潟県立歴史博物館
- 渡邊裕之 2014 『異なる生産過程をもつ道具・磨製石斧の製作と利用 - 北陸地方における磨製石斧生産の様相 -』『縄文の資源利用と社会』季刊考古学別冊21 雄山閣出版
- 渡邊裕之 2019a 『第2章 縄文時代 第2節 土器 第6項 晩期』『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 渡邊裕之 2019b 『第3章 弥生時代 第2節 土器 第1項 前期』『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 渡邊裕之 2020 『土器から見た御井戸遺跡』『最新調査成果が語る新潟市の歴史 新潟市遺跡発掘調査速報2019』新潟市文化財センター
- 渡邊明和・荒川隆史 1998 『第2章 原始・古代 - 緒立遺跡 - 第3節 出土遺物 第一項 縄文時代晩期～弥生時代前・中期の遺物』『黒崎町史 資料編一 原始・古代・中世』黒崎町

第10次調査 第Ⅴ章 自然科学分析参考文献

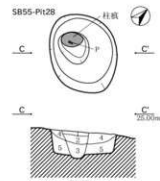
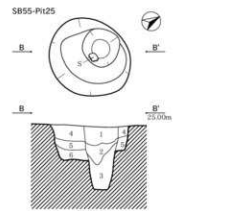
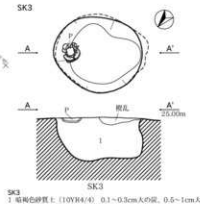
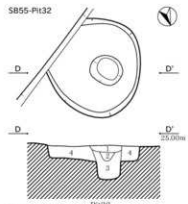
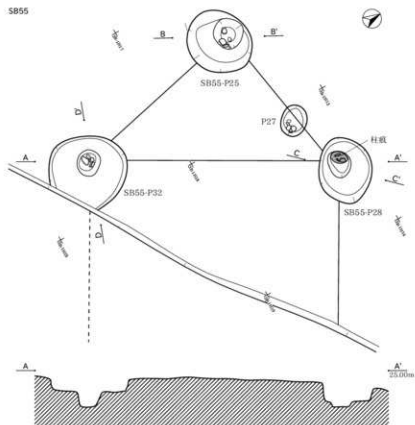
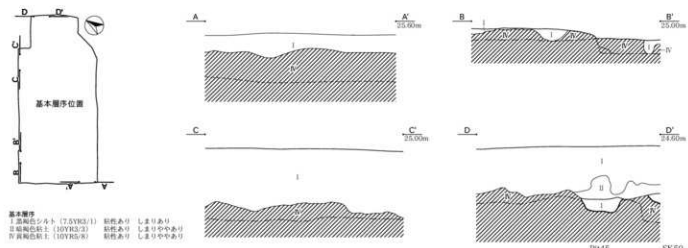
- イ 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』『木材研究・資料』31 京大木質科学研究所 pp.81-181.
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ』『木材研究・資料』32 京大木質科学研究所 pp.66-176.
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ』『木材研究・資料』33 京大木質科学研究所 pp.83-201.
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ』『木材研究・資料』34 京大木質科学研究所 pp.30-166.
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ』『木材研究・資料』35 京大木質科学研究所 pp.47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 p.444
- カ 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂 p.494
- 金原正明 1993 『花粉分析法による古墳墳場復原』『新版古代の日本』第10巻 古代資料研究の方法 角川書店 pp.248-262.
- 金原正明・金原正子 2013 『植生と農耕における土壌層分析の実証的研究』『日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集』日本文化財科学会 pp.112-113.
- 金原正明・金原正子 2015 『堆積物と植物遺体の総合的研究』『日本文化財科学会第32回大会研究発表会要旨集』日本文化財科学会 pp.146-147.
- シ 島倉巳三郎 1973 『日本植物の花粉形態』『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 大阪市自然科学博物館 p.60
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『因説木材組織』地球社 p.176

- ス 杉山真二 2000 「植物珪酸体 (プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 pp.189-213.
- 杉山真二 2009 「植物珪酸体と古生態」『縄文時代の考古学Ⅲ 大地と森の中で -縄文時代の古生態系-』小杉康
ほか編 同成社 pp.105-114.
- 杉山真二 2017 「植物珪酸体分析による古環境推定 -タケ亜科の植生変遷と気候および積雪量の変動-」『文化財
学研究』2 文化財技術研究会 pp.1-14.
- 杉山真二・藤原宏志 1986 「機軸細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 -古環境推定の基礎資料として-」『考
古学と自然科学』No.19 日本文化財科学会 pp.69-84.
- 鈴木貞雄 1996 「タケ科植物の概説」『日本タケ科植物図鑑』集海書林 pp.8-27.
- ツ 辻誠一郎 1984 「栃木県南部、二ノ宮町における立川期の植物遺体群集」『第四紀研究』23 日本第四紀学会
pp.21-29.
- ト 土質工学会編 1979 『土質試験法』土質工学会 pp.2-5-1 ~ 2-5-23, 4-2-1 ~ 4-3-11.
- 土橋由理子 1998 「新潟県における縄文時代の黒曜石利用について」『研究紀要』2 新潟県埋蔵文化財調査事業団
pp.43-69.
- ナ 中井 泉編 2005 『蛍光X線分析の実際』朝倉書店 p.242
- 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 pp.82-102.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の概説」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 大阪市立自然科学博物館 p.91
- 中村俊夫 2000 「放射線炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』日本先史時代の14C年代編集委員会
編 日本第四紀学会 pp.3-20.
- 中村俊夫 2003 「放射線炭素年代測定法と暦年代校正」『環境考古学マニュアル』同成社 pp.301-322.
- ハ 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- フ 藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎 2008 「蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析」『日
本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp.108-109.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考
古学と自然科学』No.9 日本文化財科学会 pp.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の
探査-」『考古学と自然科学』No.17 日本文化財科学会 pp.73-85
- ミ 南木勝彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究 第4巻 生産と流通I』雄山閣 pp.165-174.
- 南木勝彦 1993 「粟・粟実・種子」『第四紀試料分析法』日本第四紀学会編 東京大学出版会 pp.276-283.
- △ 室井 幹 1960 「竹筴の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』5 富士竹類植物園 pp.103-121.
- モ 望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書
2 -上和田城山遺跡篇-』大和市教育委員会 pp.172-179
- ワ 渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』雄山閣 p.187
- B Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), pp.337-360.
- R Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0 - 50,000 Years cal
BP. Radiocarbon, 55 (4), pp.1869-1887.
- W Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東
隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 海青社 p.122 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson
P.E. 1989 IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

圖 版







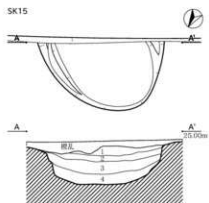
SB55-Pi32
 1 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 0.2~0.3cm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりあり
 2 暗褐色シルト (10YR3/4) 0.3~3cm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりあり
 3 暗褐色シルト (10YR3/4) 暗褐色砂質シルトのブロックを含む 粘性ややあり しまりあり
 4 暗褐色シルト (7.5YR5/8) 粘性あり しまりあり

SK3
 1 暗褐色砂質土 (10YR4/0) 0.1~0.3cm大の礫、0.5~1cm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりややあり

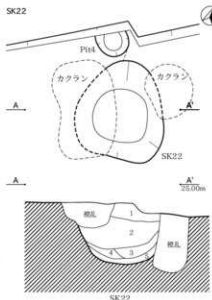
SK2
 1 暗褐色砂 (10YR3/3) 0.3cm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりあり
 2 暗褐色土 (10YR4/4) 粘性ややあり しまりややあり

基本層序位置図 (1:500) 20m
 SB55 (1:50) 2m
 基本層序図、Pi32-SK (1:40) 2m

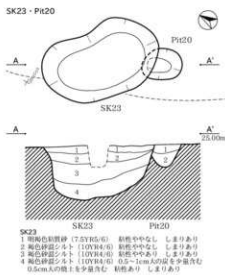
S: 石函・溝
 P: 柱杭



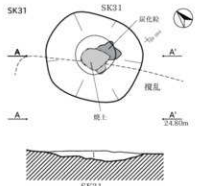
SK15
1 褐色粘土層 (10YR4/6) 0.5cm以上の厚を調査含む 粘性中やあり
2 褐色砂質粘土 (10YR4/6) 粘性あり しまりあり
3 褐色砂質粘土 (10YR4/6) 明瞭褐色粘土を少量含む 粘性 しまりあり
4 褐色粘土層 (10YR4/6) 明瞭褐色粘土を調査含む 粘性あり しまりあり



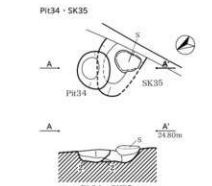
SK22
1 褐色砂質土 (10YR4/4) 0.1~0.5cmの厚を少量、0.2~0.4cmの厚土を調査。0.5cm以上の粘土層を調査含む 粘性中やあり しまりあり 層状
2 褐色砂質土 (10YR4/4) 0.3~0.5cmの厚を調査。0.1~0.3cmの厚土を調査。0.1~0.5cmの粘土層を調査含む 粘性中やあり しまりあり
3 褐色砂質土 (10YR4/4) 0.1cmの厚を調査含む 粘性中やあり しまりあり
4 褐色砂質土 (10YR4/3) 0.2~0.3cmの厚を、3cm以上の粘土層を少量含む 粘性中やあり しまりあり
5 褐色砂質土 (10YR4/6) 0.1~0.2cmの厚を調査。5cmの粘土層を少量含む 粘性あり しまりあり



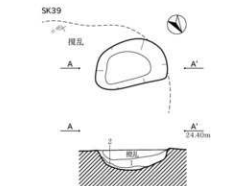
SK23
1 褐色粘質砂 (7.5YR5/6) 粘性中やなし しまりあり
2 褐色砂質シルト (10YR4/6) 粘性中やなし しまりあり
3 褐色砂質シルト (10YR4/6) 粘性中やなし しまりあり
4 褐色砂質シルト (10YR4/6) 0.5~1cmの厚を少量含む 0.5cm以上の粘土を少量含む 粘性あり しまりあり
Pit20
1 褐色砂質土 (10YR4/6) 0.1~0.3cmの厚を調査含む 粘性あり しまりあり
2 褐色粘質土 (10YR5/6) 0.1~0.3cmの厚を調査含む 粘性中やあり しまりあり



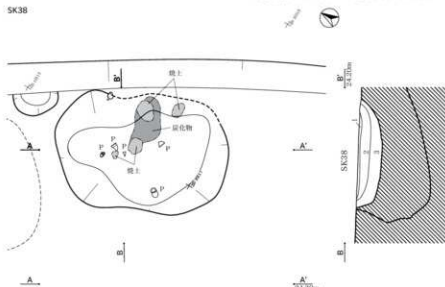
SK31
1 褐色粘質粘土 (10YR4/4) 粘性あり しまりあり



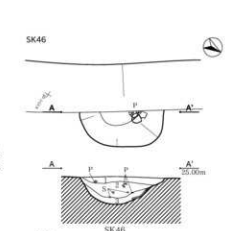
Pit34
1 褐色粘質粘土 (10YR4/4) 粘性中やあり しまりあり
2 褐色粘質粘土 (10YR4/6) 粘性あり しまりあり
SK35
1 褐色粘質粘土 (7.5YR4/4) 粘性あり しまりあり
2 褐色粘質砂 (7.5YR4/6) 粘性中やあり しまりあり



SK39
1 二色一相褐色粘質粘土 (10YR5/4) 0.2~0.3cmの厚を調査含む 粘性 しまりあり
2 明瞭褐色粘質シルト (10YR6/6) 粘性あり しまりあり



SK38
1 褐色粘質土 (10YR4/4) 明瞭褐色粘土を少量含む 粘性中やあり しまりあり
2 褐色粘質土 (10YR4/4) 0.5cmの厚を少量含む 粘性中やあり しまりあり
3 褐色粘質土 (10YR4/6) 1.0cmの厚を少量含む 粘性中やあり しまりあり
S: 石函・礎
P: 土器



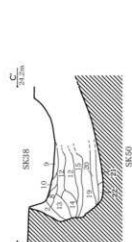
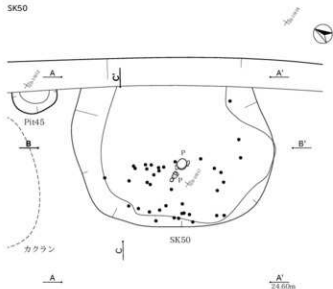
SK46
1 褐色粘質土層 (10YR3/4) 2cmの粘土層を少量、0.2cm以上の厚を調査含む 粘性 しまりあり
2 褐色粘質土層 (10YR3/3) 0.1~0.3cmの厚を調査含む 粘性 しまりあり
3 褐色粘質土層 (10YR4/6) 2cmの粘土層を少量含む 粘性あり しまり中やあり

SK38 (詳細)

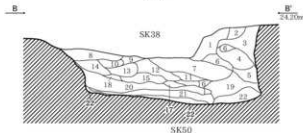
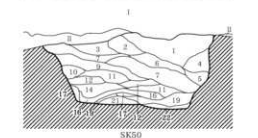
1 褐色粘質土 (10YR4/4) 明瞭褐色カクラン土層 粘性中やあり しまりあり
2 褐色粘質土 (10YR4/4) 0.5cmの厚を少量含む 粘性中やあり しまりあり
3 褐色粘質土 (10YR4/6) 1.0cmの厚を少量含む 粘性中やあり しまり中やあり

S: 石函・礎
P: 土器

SK50

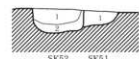
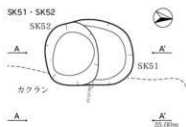


●: 遺物
P: 土函



SK50

- | | |
|---------------------|--------------------------------------------|
| 2 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性あり しまりややあり |
| 3 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性非常にあり しまりややあり |
| 4 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性あり しまりややあり |
| 5 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性非常にあり しまりややあり |
| 6 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性非常にあり しまりややあり |
| 7 黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 0.5~1.0cmの硬多量含む 軟性あり しまりややあり |
| 8 黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 軟性あり しまりややあり ST2層上の硬多量含む |
| 9 黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 軟性非常にあり しまりややあり ST2層上の硬多量含む |
| 10 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 14層より砂・粘土多い 軟性あり しまりややあり |
| 11 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 0.5~1.0cmの硬多量含む 軟性あり しまりややあり |
| 12 黄褐色砂質土 (10YR4/4) | 0.5~1.0cmの硬 硬多量含む 軟性非常にあり しまりややあり |
| 13 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性・しまりややあり |
| 14 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する (10層より砂・粘土少ない) 軟性・しまりややあり |
| 15 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性非常にあり しまりややあり |
| 16 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性非常にあり しまりややあり |
| 17 黄褐色砂質土 (10YR4/4) | 軟性非常にあり しまりややあり |
| 18 黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性あり しまりややあり |
| 19 黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 黄褐色砂・粘土混入する 軟性非常にあり しまりややあり |
| 20 黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 0.5~1.0cmのチップ (珪石貝殻等) 多量を含む 軟性あり しまりややあり |
| 21 黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 0.2~0.5mmの硬多量含む 0.5~0.2mmの硬多量含む 軟性・しまりややあり |
| 22 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 0.2~0.5mmの硬多量含む 軟性非常にあり しまりややあり |

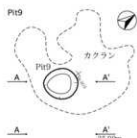


SK51

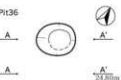
- SK51
1 黄褐色土層砂 (10YR4/6) 0.1~0.3cmの硬多量を含む 軟性・しまりあり

SK52

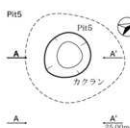
- SK52
1 黄褐色土層砂 (10YR4/6) 0.2~0.5cmの硬多量を含む 0.5cmの粘土塊を散見含む 軟性あり しまりあり
2 黄褐色土層砂 (10YR4/6) 0.2~0.5cmの硬多量を含む 0.5cmの粘土塊を散見含む 軟性あり しまりあり



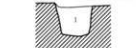
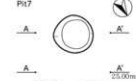
- Pit9
1 黄褐色砂土 (10YR4/6) 0.3cmの硬多量を含む 軟性あり しまりあり



- Pit36
1 黄褐色砂土 (10YR4/6) 0.2~0.4cmの硬多量を含む 軟性あり しまりあり



- Pit5
1 黄褐色砂質土 (10YR3/4) 0.2~0.5cmの硬多量を含む 0.5cmの硬多量を含む 軟性・しまりあり
2 黄褐色砂土 (10YR4/6) 0.2~0.3cmの硬多量を含む 軟性あり しまりややあり



- Pit7
1 黄褐色土 (10YR4/6) 0.3~1.0cmの硬多量を含む 軟性あり しまりあり

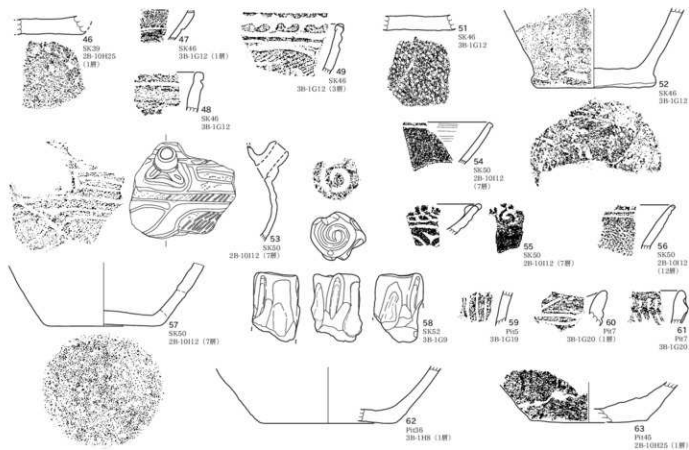


- Pit45
1 黄褐色砂質土 (10YR3/3) 0.1~0.2cmの硬多量を含む 軟性あり しまりあり

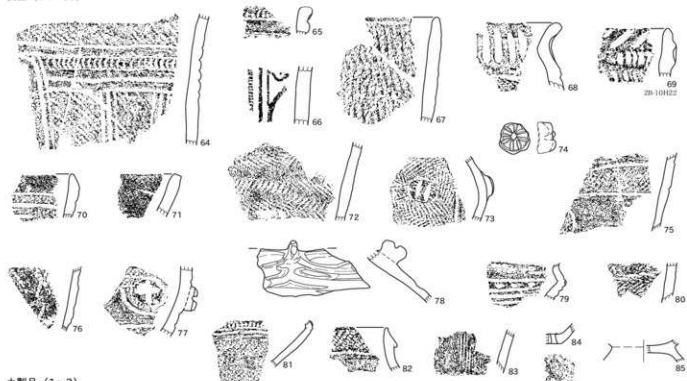
0 (1:40) 2m

遺構 (1~63)

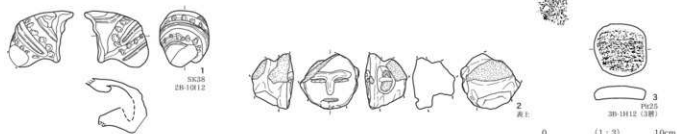


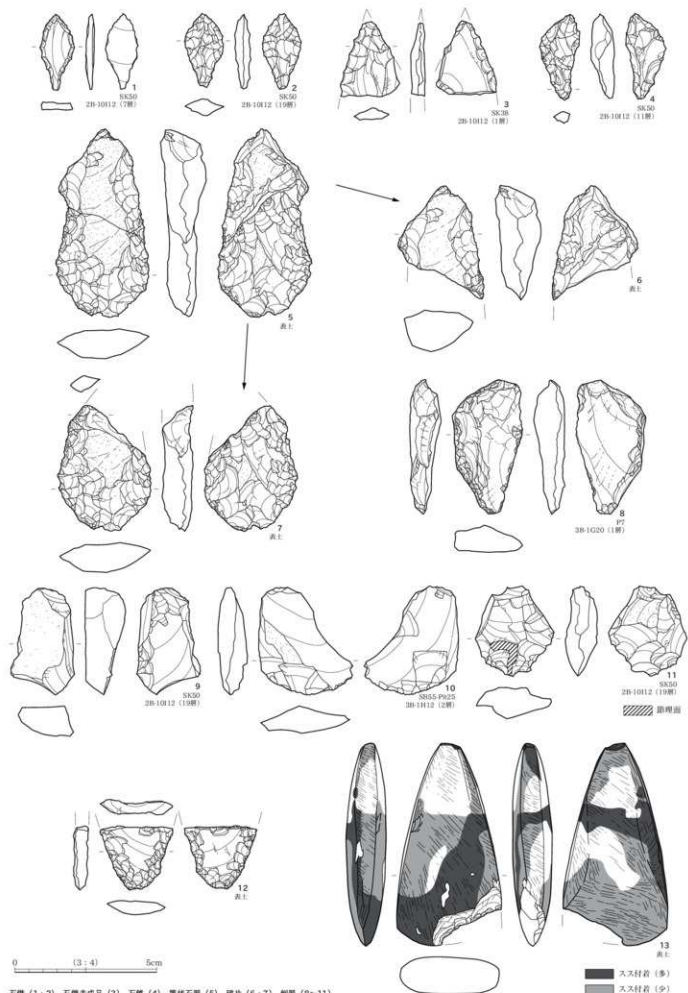


表土 (64~85)

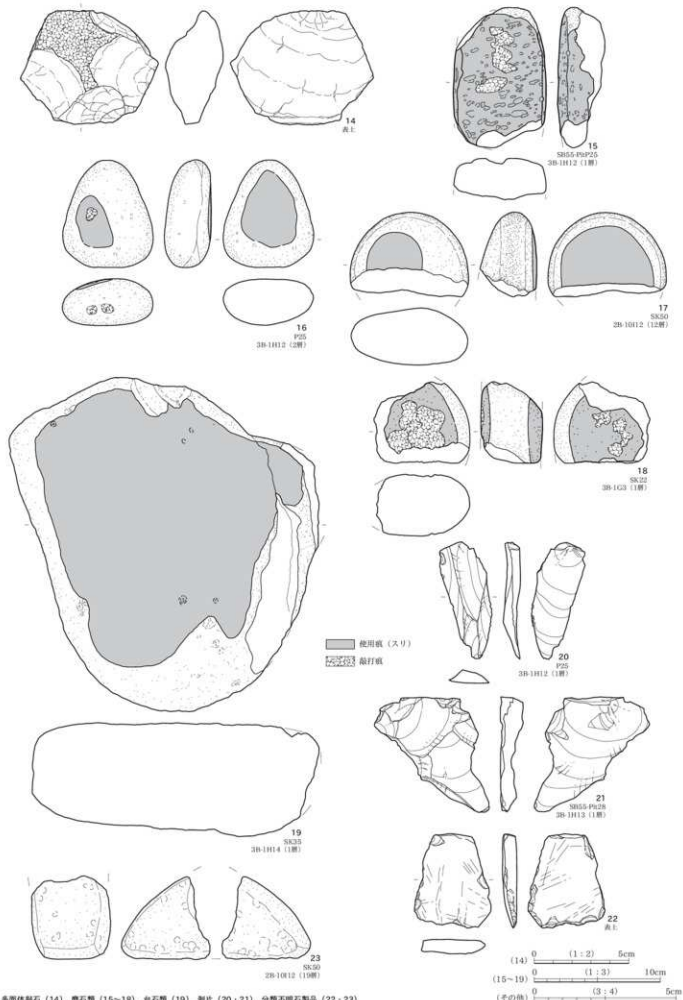


土製品 (1~3)





石鏢 (1・2)、石鏢未成品 (3)、石鏢 (4)、鏟状石器 (5)、破片 (6・7)、削器 (8~11)、尖頭器 (12)、磨製石器 (13)



多面体緑石 (14)、磨石類 (15~18)、岩石類 (19)、製片 (20・21)、分類不明石製品 (22・23)



調査区遠景(東→西)



完掘全景(上が北西)



着手前 (北東→南西)



着手前 (南東→北西)



基本層序 西側 3B-1G23・2G4 グリッド付近 (東→西)



基本層序 北側 3B-1G2・3・7 グリッド付近 (南→北)



基本層序 北側 2B-10H13 グリッド付近 (南→北)



基本層序 東側 2B-10I12・17 グリッド付近 (西→東)



SB55 完掘状況 (上が北西)



SB55-Pit25 断面 (南東→北西)



SB55-Pit25 完掘状況(南→北)



SB55-Pit28 断面(南→北)



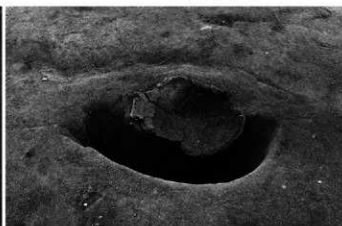
SB55-Pit28 完掘状況(南→北)



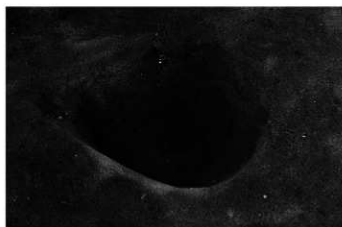
SB55-Pit32 断面(北東→南西)



SB55-Pit32 完掘状況(北東→南西)



SK2 土層断面・遺物出土状況(南→北)



SK2 完掘状況(南→北)



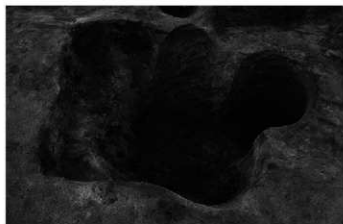
SK3 土層断面・遺物出土状況(北→南)



SK3 完掘状況(北→南)



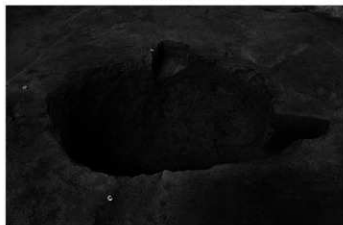
SK15 断面・完掘状況(北→南)



SK22 完掘状況(南→北)



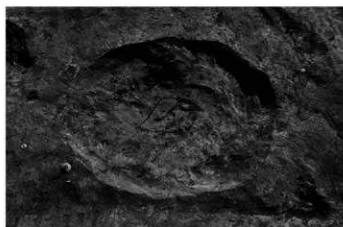
SK23(左)・Pit20(右) 断面(西→東)



SK23・Pit20 完掘状況(西→東)



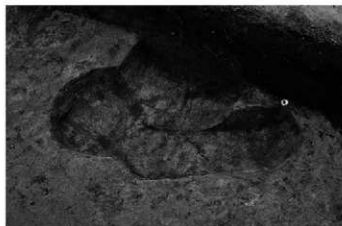
SK31 断面(西→東)



SK31 完掘状況(東→西)



Pit34(左)・SK35(右) 断面・遺物出土状況(北→南)



Pit34 (左)・SK35 (右) 完掘状況(北→南)



SK38 筒形土器出土状況(南→北)



SK38 遺物出土状況(西→東)



SK38 断面(南→北)



SK38 完掘状況(西→東)



SK39 断面(東→西)



SK39 完掘状況(東→西)



SK46 断面・遺物出土状況(東→西)



SK50 断面(南→北)



SK50 断面(西→東)



SK50 完掘(西→東)



SK52(左)・SK51(右) 断面(東→西)



SK52(左)・SK51(右) 完掘状況(東→西)



Pit5 断面(南→北)



Pit5 完掘状況(南東→北西)



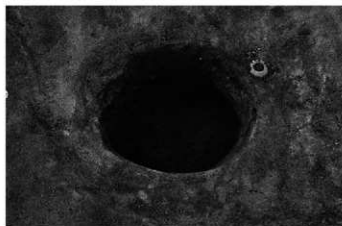
Pit7 断面(東→西)



Pit7 完掘状況(東→西)



Pit9 断面(南→北)



Pit9 完掘状況(南→北)



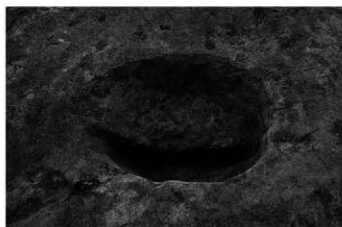
Pit20 断面(西→東)



Pit20 完掘状況(西→東)



Pit36 断面(南→北)

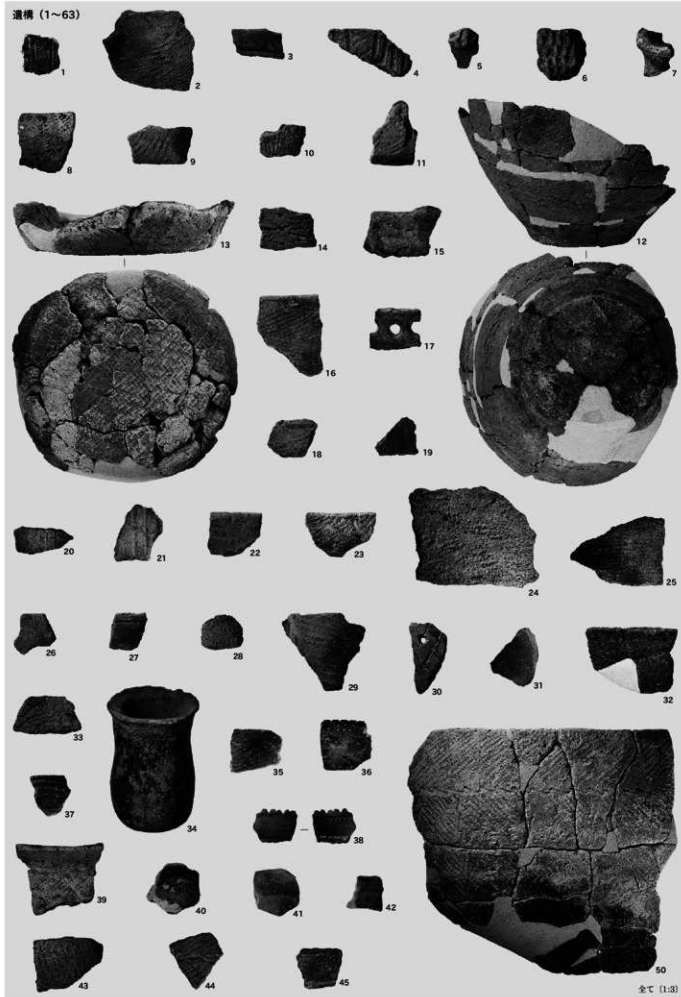


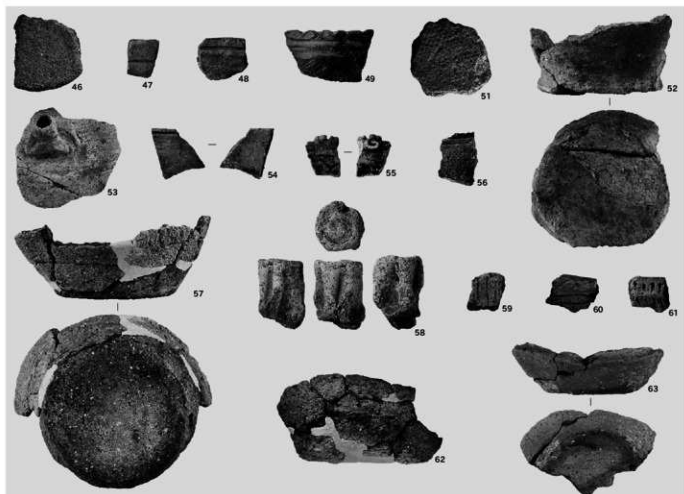
Pit36 完掘状況(南→北)



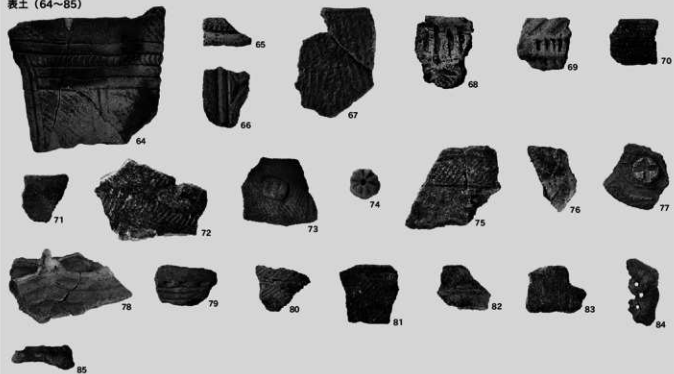
Pit45 断面・完掘状況(西→東)

遺構 (1~63)



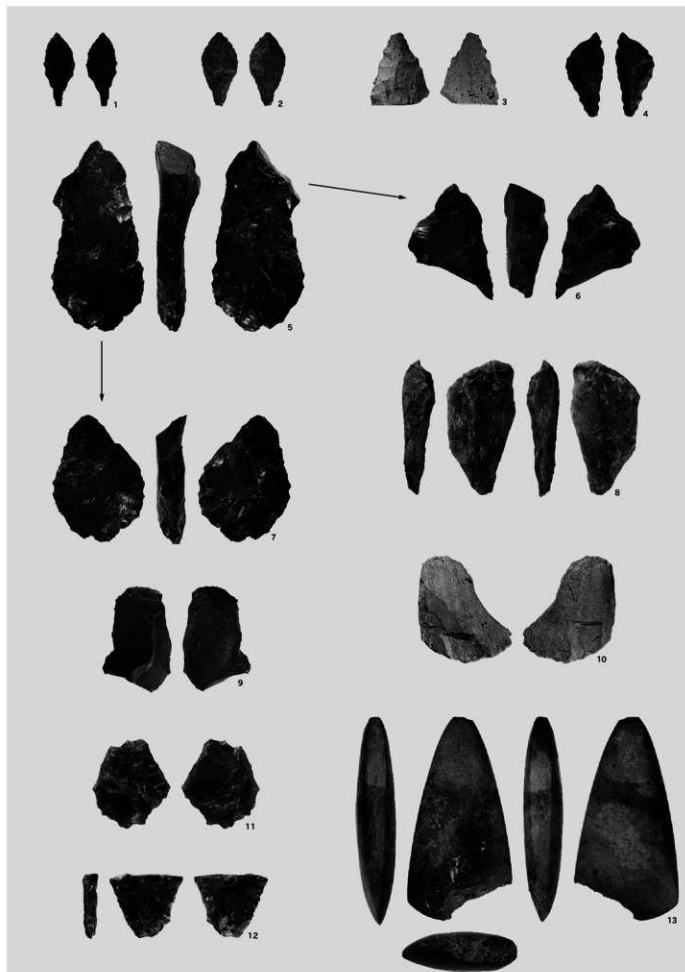


表土 (64~85)

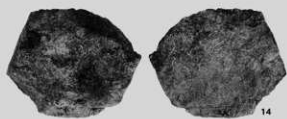


土製品 (1~3)





石鏃 (1・2)、石鏃未成品 (3)、石鏃 (4)、葉状石鏃 (5)、5の破片 (6・7)、削器 (8~11)、尖頭器 (12)、磨製石斧 (13)



14



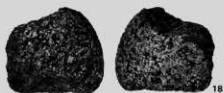
15



16



17



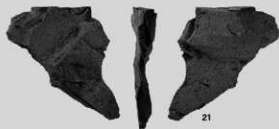
18



19



20



21



22



23

多面体原石 (14)、磨石類 (15~18)、台石類 (19)、削片 (20・21)、分類不明石製品 (22・23)

14 (1:20)
15~19 (1:30)
その他 (3:4)

報告書抄録

ふりがな	はらいせき だいじゅう・じゅういちじょうき							
書名	原遺跡 第10・11次調査							
副書名	2018年度個人住宅建設に伴う原遺跡第2次発掘調査報告書 2020年度個人住宅建設に伴う原遺跡第1次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	立本宏明(歴史文化課)・平山千尋・高橋保雄・遠藤恭雄(新潟市文化財センター)・ 杉山真二・金原正子・高橋 敦・金原美奈子・竹原弘展・松田隆二(株式会社古蹟地研究所)							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1 TEL.025-378-0480							
発行年月日	西暦2023年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
原遺跡	新潟県新潟市秋葉区 程島字原243番地 ほか	15105	126	37° 46' 55"	139° 07' 22"	20180601～20180731 20200525～20200730	177.43㎡ 213.31㎡	個人住宅建設に 伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
原遺跡	集落遺跡	縄文時代(中・後・晩期)・ 弥生時代(前期)		掘立柱建物・土坑・ 性格不明遺構・小 土坑		縄文土器・弥生土器・土製 品(土偶・土版)・石器・ 石製品(石棒)・藍胎漆器		縄文時代後期前半、 晩期中～後葉主体の 集落跡の一部
要約	<p>第10次調査：原遺跡は新井丘陵北西部に位置し、丘陵から張り出した北東側と南西側に谷が入る台地状の尾根に沿って、北西から南東に約400m×北東から南西に約200mの広がりがある。本発掘調査地点は、標高25m前後の遺跡中心の平坦面から傾斜変換する地点にあたる。出土遺物は縄文時代では、中期前半から晩期終末の土器が出土しているが、主体となる時期は晩期中葉から終末である。また、弥生時代前期の竪立式土器が出土している。石器は石鏃・石錐・楔形石器・石錠・不定形石器・剥片・石核などの剥片石器と磨製石斧・磨石・敲石・凹石・台石・石皿などの主に礫石器が出土している。石製品では石棒が、土製品では土版と土偶などの「第二の道具」が確認されている。遺構は土坑群を中心に構成され、土版が2点出土した土坑、貯蔵穴と考えられる袋状土坑など特殊な機能を有する土坑も確認されている。遺構の時期は後期の土坑1基を除き晩期中葉～終末に帰属し、調査地は縄文時代晩期の集落域の一部と考えられる。</p> <p>第11次調査：第10次調査の南隣接地に位置する。したがって、調査区の立地等は第10次調査区とほぼ同じである。遺構では縄文時代後期前半の亀甲形の掘立柱建物が1棟、袋状土坑を含む土坑14基、小土坑21基、性格不明遺構1基が見つかった。遺物では縄文土器・土偶・石器・石製品をはじめとする縄文時代の遺物が多数見つかかり、時期は後期前半と晩期前半に多く所属する。亀甲形の掘立柱建物が見つかったことにより、後期前半の集落跡の一部が明らかになった。遺構・遺物の多くは後期前半・晩期前半に所属し、中期や後期後半のものも認められることから、丘陵上の平坦地における各時期の遺跡の在り方は、複雑なものと思われる。</p>							

原遺跡 第10・11次調査

— 2018年度個人住宅建設に伴う原遺跡第2次発掘調査報告書 —
— 2020年度個人住宅建設に伴う原遺跡第1次発掘調査報告書 —

2023年3月17日印刷
2023年3月20日発行

編集 新潟市文化財センター

〒950-1122 新潟県新潟市西区木場2748番地1
TEL. 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会

〒951-8554 新潟県新潟市中央区古町通7番町1010番地
古町ルフル4階
TEL. 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ウィザップ

〒950-0963 新潟県新潟市中央区南出来島2丁目1番25号
TEL. 025 (285) 3311